公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第253集

大阪市

大　坂　城　跡　4

大阪府立成人病センター整備事業に伴う大坂城跡発掘調査報告書

2015年１月

公益財団法人　大阪府文化財センター

調査地遠景（南西から）

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第253集

大阪市

大　坂　城　跡　4

大阪府立成人病センター整備事業に伴う大坂城跡発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

序　　文

今回の調査地のある大阪市中央区大手前や法円坂一帯は、上町台地の北端に位置し、大阪府庁をはじめ多くの官公庁が立ち並ぶ大阪の中心地であります。台地の北側には大川が流れ、この地は記紀に「難波の堀江」の記述がみられますし、近年、発掘調査においても５世紀代の大型倉庫群がみつかるなど、難波津を中心に殷賑を極めていたことは想像に難くありません。しかし、この地が歴史の表舞台に立つようになったのは白雉元（650）年に孝徳天皇によって難波長柄豊碕宮へ遷都が行われたことによります。宮域の左右に八角建物を配する難波宮は当時日本に住んでいた人々のみならず、外国から訪れた人々の度肝を抜いたことでしょう。

時代は下って、織田信長の遺志を継いで天下統一を果たした豊臣秀吉が、石山本願寺のあった上町台地の北端部に巨大な大坂城を築き、大坂の街も繁栄していきます。当時ヨーロッパから布教のため日本に来ていた宣教師も、その規模に驚きを隠しきれない様子が赤裸々に本国への手紙に綴られております。

しかし、栄華を誇った豊臣家も慶長 19（1614）年に起きた大坂冬の陣に続き、翌年５月の大坂夏の陣によって滅亡してしまい、同時に大坂城も焼け落ちてしまいます。

その後、元和６（1620）年から徳川幕府によって命じられた西国大名が中心となって「天下普請」と呼ばれる大坂城再築工事が行われました。これは、豊臣秀吉が築き、大坂夏の陣で焼け落ちた大坂城の痕跡を膨大な量の盛土で覆い尽くし、さらに巨大な石垣を築いた上に建てられたものでした。今日、我々が目にする大阪城の容姿は、その時築かれた大坂城が基になっています。

今回の調査では、三の丸が築かれた豊臣後期に属する大名屋敷の北辺を示す柵列や、豊臣前期の土取り穴や導水施設などの遺構が検出されました。さらに、徳川幕府の命で行われた大坂城再築工事に際し、豊後国岡藩（現在の大分県竹田市）の中川久盛によって石垣材として集められた 26 点もの石垣材の残石が、18 世紀後半に埋められた堀から出土しました。これは、再築工事後も残石が大切に管理されていたことを示す重要な資料であるといえます。

最後になりましたが、発掘調査および遺物整理事業の実施にあたっては、地方独立行政法人　大阪府立病院機構　大阪府立成人病センター、大阪府教育委員会文化財保護課、公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪城天守閣・大阪歴史博物館・大阪文化財研究所、株式会社　竹中工務店　大阪本店をはじめ、関係各位に多大なるご指導とご協力を賜りました。記して深く感謝の意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご支援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成 27 年１月

公益財団法人　大阪府文化財センター

理事長　田邉　征夫

例　　言

1．本書は、大阪市中央区大手前３丁目地内に所在する大坂城跡・難波宮跡の発掘調査報告書である。調査名は、大坂城跡 13 －２である。

2．調査は、大阪府立成人病センター整備事業に伴い、株式会社竹中工務店大阪本店から委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。委託契約期間は平成 25 年７月１日から平成 27 年１月 30 日までである。現地での調査期間は平成 25 年７月１日から平成 26 年２月 28 日までで、引き続き中部調査事務所にて、平成 26 年３月１日から平成 26 年 10 月 31 日までの間整理作業を行い、平成 27 年１月 30 日に本書の刊行を以って完了した。

3．調査は以下の体制で実施した。

〔平成 25 年度〕

事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、調査第二課長補佐　市本芳三、主査　後藤信義、技師　新海正博（平成 25 年 11 月１日～同年 12 月 31 日）、

専門調査員　小野久隆（平成 25 年８月１日～平成 26 年２月 28 日）

〔平成 26 年度〕

事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、調査第一課長補佐　三好孝一、主査　後藤信義、専門員　片山彰一（写真室）、山口誠治（保存室）

4．遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行い、鉄製品の保存処理および木製品の保存処理・樹種鑑定は同所保存室が行った。

5．発掘調査および整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい（順不同・所属は当時のもの）。

安部みき子（公立大学法人　大阪市立大学）、先山　徹（公立大学法人　兵庫県立大学）、松尾信裕、跡部　信、瀬島宏計（公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪城天守閣）、積山　洋、大澤研一（公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪歴史博物館）、小倉徹也（公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）、東　信男（丸亀市教育委員会）、三宅正浩（大阪府教育委員会）、坂本　俊（奈良大学大学院）、大阪府教育委員会、築城史研究会

6．発掘調査･整理作業の過程で以下の諸機関にご協力を賜った。記して感謝の意を表したい(順不同)。

地方独立行政法人　大阪府立病院機構　大阪府立成人病センター、株式会社　竹中工務店　大阪本店

7．残石の石材産地同定については、兵庫県立大学大学院環境マネジメント科の先山　徹准教授に同定分析作業をお願いしたほか、玉稿を賜った（第８章　第１節）。

8．調査の実施にあたっては、以下の自然科学分析を委託した。

放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）　株式会社パレオ・ラボ

大型植物遺体（種実）同定　古代の森研究舎

9．本書の作成は、後藤が執筆、編集を担当し、第６・７章の笄と小刀柄については三好が執筆した。

10. 本書に関わる大坂城跡･難波宮跡の出土遺物および写真･実測図などの記録類については当センターにおいて保管している。今後、広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。

2．座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はｍである。

3．全体図および遺構実測図の方位は座標北を示す。

4．現地調査および整理作業に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。

5．土層断面図の土色および遺物実測図に記載した色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2007 年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所（現　一般財団法人日本色彩研究所）色票監修を用いた。

6．遺構名は、１区に関しては検出順に、通し番号の後ろに遺構の種類（例：１土坑・30 溝）をつけて表示している。

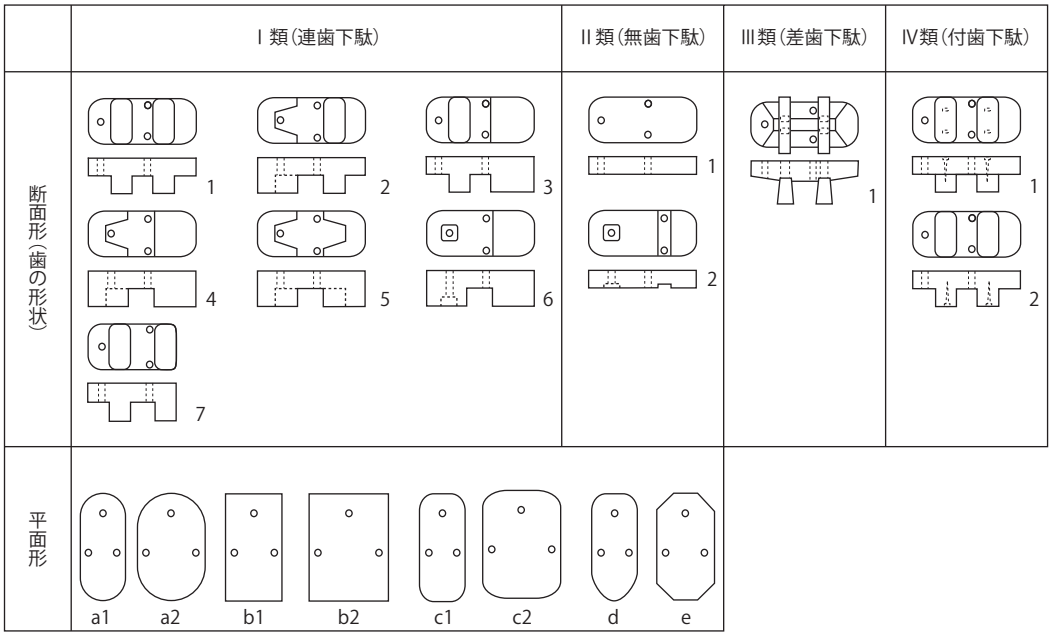
一方、２区に関しては１区と同時並行で調査を行った関係上、重複等の混乱を回避するため通し番号の頭に「10」を付加した（例：1001 土坑・1015 溝）。

7．本書では、遺構全体図の縮尺は４層上面が 300 分の１、それ以外の遺構面は 200 分の１、遺構立・平・断面図は 40 分の１を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。また、残石については、平面展開図は 30 分の１、刻印の拓本については４分の１で掲載した。

8．遺物実測図の縮尺は、土器は４分の１を基本として掲載しているが、一部８分の１で掲載したものもある。また、土製品、瓦、木製品、金属器、石製品についても４分の１、石器、銭貨は３分の２を基本として掲載しているが、一部の遺物については８分の１など縮尺を変更して掲載している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。

9．掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。

10．下駄の分類については『大坂城址Ⅱ』（江浦 2002）の分類に準じた。



目　　次

巻頭カラー図版　調査地遠景（南西から）
序　文
例　言
凡　例

第１章　調査に至る経緯と経過、調査・整理の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第２節　調査・整理の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第３章　基本層序・・8
第４章　江戸時代（４層上面）の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第５章　大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築前（6a・6b 層上面）の遺構・遺物 ・・・・・・・・・・29
第６章　豊臣後期（７層上面）の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第７章　豊臣前期（8a ～８h 層・９層・11 層上面）の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・59
第８章　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
　第１節　分析の目的と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
　第２節　大坂城跡出土の花崗岩片について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
　第３節　大坂城跡 69 土坑から出土した大型植物遺体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
　第４節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
第９章　46 堀出土残石について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
第 10 章　まとめ・・126

引用・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿　図　目　次

図１　調査地位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１
図２　今回の調査区と既往の調査区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２
図３　国土座標地区割り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
図４　調査区地区割り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
図５　調査区割り図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
図６　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
図７　Y =-44,030 ライン断面図・土層断面模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９・10
図８　４層上面　平面図（古）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
図９　４層上面　平面図（新）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図 10　４層上面　14・23・27 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
図 11　４層上面　42・1008・1011・1012 土坑、40 溝平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・14
図 12　４層上面　1004・1005 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
図 13　４層上面　14・23・27・42・1005・1008 土坑、40 溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・16
図 14　４層上面　30 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
図 15　４層上面　30 土坑出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
図 16　４層上面　30 土坑出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 17　４層上面　38 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
図 18　４層上面　39 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
図 19　４層上面　49 土坑出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
図 20　４層上面　49 土坑出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
図 21　４層上面　49 土坑出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
図 22　４層上面　22 堀平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 23　４層上面　22 堀出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
図 24　４層上面　46 堀断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図 25　４層上面　46 堀出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
図 26　４・５層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
図 27　6a 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
図 28　6a 層上面　53・59・60 溝、64 畦畔状高まり断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図 29　6a 層上面　53・59・60 溝、61 竹敷き出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
図 30　6a 層上面　61 竹敷き平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
図 31　6a 層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33
図 32　6b 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34
図 33　6b 層上面　93 ピット、69・94 土坑、85 井戸、
68 溝、64・102 畦畔状高まり、83 落込み平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
図 34　6b 層上面　93 ピット、85 井戸、68 溝、64・102 畦畔状高まり出土遺物・・・・・・・・36

図 35　6b 層出土遺物（1）・・・37
図 36　6b 層出土遺物（2）・・・38
図 37　7 層上面　平面図・・・41
図 38　7 層上面　柵列 1 ピット平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
図 39　7 層上面　116・117・153・165・170・177・186 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・43
図 40　7 層上面　116・117・153・165・177・186 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・44
図 41　7 層上面　148 埋甕平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
図 42　7 層上面　148 埋甕・・45
図 43　7 層上面　148 埋甕出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
図 44　7 層上面　106 土坑、89・105・172・210 井戸平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・47
図 45　7 層上面　89・105・172 井戸出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
図 46　7 層上面　171 井戸平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
図 47　7 層上面　171 井戸出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
図 48　7 層上面　126・138・166・173・184 溝、179 畦畔状高まり断面図・・・・・・・・・・・50
図 49　7 層上面　126・138・173・184 溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
図 50　7 層上面　137 溝断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
図 51　7 層上面　137 溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
図 52　7 層上面　168 溝断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
図 53　7 層上面　168 溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
図 54　7 層上面　104 炉平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図 55　7 層上面　169 石列・181 高まり平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
図 56　7 層上面　136 落込み平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
図 57　7 層上面　136 落込み出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
図 58　7 層出土遺物（1）・・55
図 59　7 層出土遺物（2）・・56
図 60　8a 層上面　平面図・・60
図 61　8a 層上面　211・325 ピット平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
図 62　8a 層上面　211・325 ピット出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
図 63　8a 層上面　192・226 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
図 64　8a 層上面　199・212・213・217・221 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・62
図 65　8a 層上面　192・199・212・226 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
図 66　8a 層上面　234・237・238・240・242 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・65
図 67　8a 層上面　239・246・247・249・256 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・67
図 68　8a 層上面　234・237 ～ 240・242・246・247・249・256 土坑出土遺物・・・・・・・・68
図 69　8a 層上面　214 土坑、292 暗渠平・立・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・69
図 70　8a 層上面　214 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
図 71　8a 層上面　273 土坑、254 井戸、195・216・220・232 溝、252 暗渠平・断面図・・・・71
図 72　8a 層上面　273 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72

図 73　8a 層上面　195・216・220・232 溝、252 暗渠出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・73
図 74　8a 層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73
図 75　8b 層上面　導水施設３出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74
図 76　8b 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
図 77　8b 層上面　導水施設３平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・75
図 78　8c 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
図 79　8c 層上面　298・315 土坑断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・76
図 80　8d 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・77
図 81　8d 層上面　309・310 ピット、311・312・313 溝平・断面図・・・・・・・・・・・・・・77
図 82　8e 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図 83　8e 層上面　321 ピット断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図 84　8e 層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・78
図 85　8f 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
図 86　8f 層上面　326 ピット、282・283・284・290・293・299 土坑平・断面図・・・・・・81
図 87　8f 層上面　282 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
図 88　8f 層上面　303・304・320・328 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
図 89　8f 層上面　326 ピット、290・293・299・303・304・320 土坑出土遺物・・・・・・・84
図 90　8f 層上面　300 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図 91　8f 層上面　300 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
図 92　8f 層上面　286 溝平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
図 93　8f 層上面　286 溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86
図 94　8f 層上面　327 溝平・立・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・88
図 95　8f 層上面　327 溝出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
図 96　8f 層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89
図 97　8g 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図 98　8g 層上面　332 ピット断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図 99　8g 層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90
図 100　8h 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図 101　8h 層上面　337・338 土坑断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図 102　8h 層上面　339 土坑断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図 103　8h 層上面　339 土坑出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・91
図 104　９層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
図 105　９層上面　地滑り痕断面図（Y=-44,050 ライン）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
図 106　９層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・92
図 107　11 層上面　平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・93
図 108　11 層上面　340 ピット、343・359・361・363・369 土坑、
331 井戸、372 板杭平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・95
図 109　11 層上面　340 ピット、343・359・361・363・369 土坑、

331 井戸、372 板杭出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
図 110　大坂城跡出土残石の帯磁率および色指数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
図 111　瀬戸内各地の花崗岩類の帯磁率および色指数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102
図 112　6b 層上面遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
図 113　69 土坑平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
図 114　９層上面サンプリング位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・108
図 115　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
図 116　残石１・２・３　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・118
図 117　残石４・５・６　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・119
図 118　残石７・８・９　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
図 119　残石 10・11・12　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
図 120　残石 13・14・15　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122
図 121　残石 16・17・18　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・123
図 122　残石 20・25・21・22　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124
図 123　残石 23・24・26　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125

表　目　次

表１　大坂城跡出土残石岩相一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101
表２　大坂城跡 69 土坑出土種実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
表３　大坂城跡 69 土坑出土メロン仲間種子計測値・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104
表４　測定試料および処理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
表５　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・109
表６　残石一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111
表７「△」刻印一覧表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・113
表８　矢穴・矢穴痕列測定表（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・116
表９　矢穴・矢穴痕列測定表（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・117

写　真　目　次

写真１　大坂城跡 69 土坑から出土した種実・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

写　真　図　版　目　次

巻頭カラー図版　1．調査地遠景（南西から）

図版１　1．4・5層断面（上層）　Y=-44,030 ライン（北東から）
2．4・5層断面（下層）　Y=-44,030 ライン（北東から）
3．4～7層断面　Y=-44,030 ライン（東から）
4．7～11層断面　Y=-44,030 ライン（北東から）
5．7～11層断面アップ1　Y=-44,030 ライン（東から）
6．7～11層断面アップ2　Y=-44,030 ライン（東から）

図版２　1．4層上面　1区全景（西から）
2．4層上面　1区全景（北東から）

図版３　1．4層上面　2区全景（北から）
2．4層上面　2区全景（西から）

図版４　1．4層上面　1区30土坑（南から）
2．4層上面　1区30土坑断面(西から)
3．4層上面　1区27土坑断面(西から)
4．4層上面　1区42土坑断面(南から)
5．4層上面　2区1004土坑（南から）
6．4層上面　2区1005土坑（東から）
7．4層上面　2区1008土坑（南から）
8．4層上面　2区1012土坑（南東から）

図版５　1．4層上面　1区46堀断面（東から）
2．4層上面　1区46堀出土残石1（北から）
3．4層上面　1区46堀出土残石2（東から）
4．4層上面　1区46堀出土残石3（南西から）
5．4層上面　1区46堀出土残石4（北西から）

図版６　1．6a層上面　全景（西から）
2．6a層上面　畠跡（北東から）

図版７　1．6a層上面　64畦畔状高まり（西から）
2．6a層上面　畠跡（南から）
3．6a層上面　調査区東半部(北東から)

図版８　1．6a層上面　61竹敷き（西から）
2．6a層上面　61竹敷き（北から）

図版９　1．6b層上面　全景（西から）
2．6b層上面　調査区西半部（南から）

図版10　1．6b層上面　調査区南西部（北西から）
2．6b層上面　調査区中央部(南西から)
3．6b層上面　68溝、64・102畦畔状高まり（西から）

図版11　1．6b層上面　69土坑（南西から）
2．6b層上面　85井戸（南から）
3．6b層上面　93ピット断面(北から)

図版12　1．7層上面　全景（西から）
2．7層上面　全景（東から）

図版13　1．7層上面　整地面（北西から）
2．7層上面　被熱した175礎石（南西から）
3．7層上面　148埋甕検出状況（北から）
4．7層上面　148埋甕口縁部アップ（東から）
5．7層上面　148埋甕（北から）

図版14　1．7層上面　柵列1（北西から）
2．7層上面　153土坑（西から）
3．7層上面　153土坑断面（南から）
4．7層上面　89井戸（南から）

図版15　1．7層上面　105井戸（南から）
2．7層上面　105井戸断面（北から）

３．７層上面　171 井戸（南西から）
４．７層上面　172 井戸（南から）
５．７層上面　172 井戸断面（北から）
図版 16　１．７層上面　104 炉（西から）
２．７層上面　166・178 溝、179・180 畦畔状高まり（東から）
３．７層上面　178 溝、179 畦畔状高まり断面（東から）
４．７層上面　169 石列（西から）
図版 17　１．７層上面　137 溝（南から）
２．７層上面　137 溝出土遺物（北西から）
３．７層上面　136 落込み（西から）
４．７層上面　136 落込み　331 舟形木製品出土状況（南から）
５．７層上面　168 溝断面（東から）
６．７層　344 笄出土状況（東から）
図版 18　１．8a 層上面　全景（西から）
２．8a 層上面　調査区南西部（西から）
３．8a 層上面　調査区西部（南から）
４．8a 層上面　216 溝（南から）
５．8a 層上面　214 土坑（南から）
図版 19　１．8a 層上面　調査区中央部（南から）
２．8a 層上面　調査区東部（南から）
３．8a 層上面　調査区東南部（北から）
図版 20　１．8a 層上面　239 土坑断面(北西から)
２．8a 層上面　240 土坑断面（東から）
３．8a 層上面　213 土坑断面（南から）
４．8a 層上面　237 土坑断面（西から）
５．8a 層上面　246 土坑断面（西から）
６．8a 層上面　256 土坑断面（東から）
７．8a 層上面　273 土坑（東から）
８．8a 層上面　234 土坑断面（北から）
図版 21　１．8a 層上面　214 土坑（南から）
２．8a 層上面　292 暗渠（導水施設２）（北から）
３．8a 層上面　238 土坑（南東から）
４．8a 層上面　221 土坑（南東から）
５．8a 層上面　212 土坑（北から）
６．8a 層上面　220 溝（西から）
７．8a 層上面　232 溝（南から）
８．8a 層上面　252 暗渠（導水施設１）（北西から）
図版 22　１．8b 層上面　全景（南から）
２．8b 層上面　274 埋桶（導水施設３）（西から）
３．8b 層上面　281 埋桶（導水施設３）（東から）
４．8b 層上面　291 埋桶（導水施設３）（北から）
５．8b 層上面　275 暗渠（導水施設３）（西から）
図版 23　１．8c 層上面　礎石群出土状況（南西から）
２．8c 層上面　全景（西から）
３．8d 層上面　全景（西から）
図版 24　１．8e 層上面　全景（西から）
２．8e 層上面　321 ピット断面(東から)
３．8f 層上面　全景（西から）
４．8f 層上面　調査区東半部（西から）
図版 25　１．8f 層上面　調査区東半部土坑群（南西から）
２．8f 層上面　327 溝（南から）
３．8f 層上面　327 溝遺物出土状況（東から）
４．8f 層上面　調査区西半部(南西から)
図版 26　１．8f 層上面　282 土坑（東から）
２．8f 層上面　282 土坑西半部遺物出土状況（南から）
３．8f 層上面　282 土坑東半部遺物出土状況（南から）
図版 27　１．8f 層上面　293 土坑（北から）
２．8f 層上面　304 土坑（東から）
３．8f 層上面　319 土坑（東から）
図版 28　１．8f 層上面　300 土坑（南西から）
２．8f 層上面　320・328 土坑断面

（東から）
3．8f 層上面　320 土坑　451 漆器椀
出土状況（北西から）
図版 29　1．8f 層上面　286 溝（西から）
2．8f 層上面　286 溝　470 舟形
木製品出土状況（南から）
3．8g 層上面　全景（南東から）
4．8h 層上面　全景（西から）
図版 30　1．9 層上面　全景（西から）
2．9 層上面　地滑り痕跡検出状況
（北から）
3．9 層上面　地滑り痕跡検出状況
アップ（北から）
4．9 層～ 11 層断面　調査区西壁
（西から）
5．9 ～ 11 層断面　Y=-44,050 ライン
（北東から）
図版 31　1．11 層上面　全景（西から）
2．11 層上面　調査区北西部（西から）
3．11 層上面　調査区南東部（西から）
4．11 層上面　372 板杭（北から）
図版 32　1．11 層上面　調査区南西部（東から）
2．11 層上面　359 土坑（西から）
3．11 層上面　363 土坑（北から）
4．11 層上面　363 土坑　481 皿
出土状況（北から）
図版 33　出土遺物　4 層上面
図版 34　出土遺物　4 層上面
図版 35　出土遺物　4 層・6a 層上面・6a 層・
6b 層上面
図版 36　出土遺物　6b 層・7 層上面
図版 37　出土遺物　7 層上面
図版 38　出土遺物　7 層上面
図版 39　出土遺物　7 層・8a 層上面
図版 40　出土遺物　8a 層上面・8b 層上面・
8f 層上面
図版 41　出土遺物　8f 層上面
図版 42　出土遺物　8f 層上面・8g 層・
11 層上面
図版 43　残石（1）
1．残石 1
2．刻印 1 －①
3．刻印 1 －②
4．残石 2
5．刻印 2 －①
6．残石 3
7．刻印 3 －①
8．残石 4
9．刻印 4 －①
図版 44　残石（2）
1．残石 5
2．刻印 5 －①
3．刻印 5 －②
4．残石 6 － 1
5．刻印 6 －①
6．残石 6 － 2
7．刻印 6 －②
8．残石 7
9．刻印 7 －①
10．墨書「口」
図版 45　残石（3）
1．残石 8
2．刻印 8 －①
3．残石 9
4．刻印 9 －①
5．刻印 9 －②
6．残石 10
7．刻印 10 －③・④
8．刻印 10 －①
9．刻印 10 －②
図版 46　残石（4）
1．残石 11
2．刻印 11 －①
3．残石 13
4．刻印 13 －①
5．残石 17

6．刻印 17 －①
7．残石 18
8．刻印 18 －①

図版 47　残石（5）

1．残石 21
2．刻印 21 －①
3．残石 22
4．刻印 22 －①
5．残石 23
6．刻印 23 －①
7．残石 20・25
8．刻印 20 －①

図版 48　残石（6）

1．残石 24 － 1
2．残石 24 － 2
3．刻印 24 －②
4．刻印 24 －①
5．刻印 24 －③
6．残石 24　鑿痕跡
7．残石 12
8．残石 14
9．残石 15
10．残石 16
11．残石 19
12．残石 26

第１章　調査に至る経緯と経過、調査・整理の方法

第１節　調査に至る経緯と経過

調査地は大阪市中央区大手前３丁目地内に所在し、大阪府庁舎周辺整備事業予定地内にあたる（図１）。現在の大阪府庁舎は、旧江之子島の府庁舎が手狭になったため、移転されたものである。移転は大正 10（1921）年に通常府会で決定され、大正 15（1926）年に開庁した。現在ある府庁本館の建物は、その時の建築によるものである。

この府庁本館は建築後 70 年余を経て老朽化が著しく、かつ、手狭になってきたため、別館や労働部庁舎などを増築して対応してきたが、庁舎の分散化による非効率が憂慮されるようになってきた。一方、政治・経済をはじめとする各分野のグローバル化やＯＡの進展に伴う高度情報化社会へ対応しなければ、府民サービスに影響をおよぼす事態となってきた。

そこで、大阪府は府庁舎の建て替えを計画し、昭和 62（1987）年に「庁舎・周辺整備計画」を発表し、平成元（1989）年 10 月に大阪府庁・周辺整備基本計画が策定され、庁舎周辺整備事業として府庁舎の建て替えが開始されることになった。この事業は府庁舎の機能を維持しながら同じ敷地に新庁舎の建て替えを行うという難工事で、既存建築の撤去と仮移転、庁舎建築と入居を繰り返す必要があった。そして、当初は新別館、行政棟、議会棟、警察棟の順序で建築が進められる予定となっていた。

しかし、歴史的にみた場合この府庁舎の敷地は豊臣大坂城の三の丸跡地にあたる。そして、新庁舎は大規模な地下施設の設置により地中深く掘削されることから、三の丸関連の遺構やその上に築城された徳川大坂城の遺構を破壊することになる。そこで、建て替え事業を遂行する大阪府総合部庁舎周辺整備室と大阪府教育委員会文化財保護課との間で協議が行われ、財団法人大阪文化財センター（現：公益財団法人大阪府文化財センター）が発掘調査を実施することとなった。そして、平成２（1990）年４月１日に庁舎周辺整備室とセンターの間で同年度までを工期とする第１次調査の委託契約が締結されて

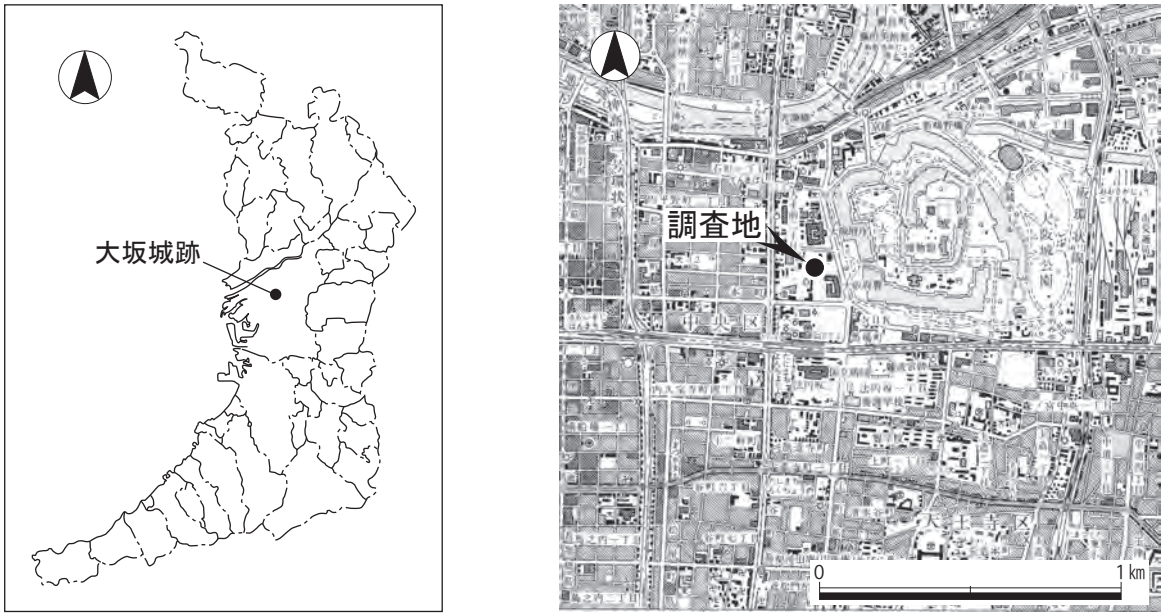


図１　調査地位置図

発掘調査が行われたのを皮切りに、同８（1996）年にかけて５次に亘って発掘調査を行った。ところが、大阪府の財政悪化に伴い、庁舎建設スケジュールが見直され、行政棟、議会棟の建設が見送られることとなった。そのため発掘調査も中断された。しかし、老朽化が著しい上に府民の安全を守るための最新施設の導入が強く求められた警察棟については建て替えが実施されることとなり、平成 11（1999）年にⅠ期工事に伴う発掘調査が、さらに平成 15（2003）年にⅡ期工事に伴う発掘調査が行われた（図２）。

一方、昭和 34（1959）年に大阪市東成区中道１丁目に建設された大阪府立成人病センターは、老朽化および狭隘化に伴い府民に安全かつ高度ながん医療の展開、先進的医療の専門化、情報化への対応、患者ニーズの多様化に堪えることが困難な状況となってきた。そのため安全で質の高い医療を提供していくため早期の建て替えが必要となり、行政棟および議会棟の建て替え予定地であった敷地が充てられることとなった。そこで、平成 22（2010）年に地方独立行政法人大阪府立病院機構から整備基本構想が発表され、平成 25（2013）年、ＰＦＩ方式によって建設工事を請け負った株式会社竹中工務店大阪本店と公益財団法人大阪府文化財センターが、同 25（2013）年７月から同 27（2015）年１月までの期間で発掘調査の委託契約を締結し、平成 25 年７月１日から平成 26 年２月 28 日まで現地調査を実施し、引き続き同年３月１日より 10 月 31 日まで遺物整理作業を行った。

なお、大坂城三の丸築造後で大坂夏の陣前にあたる豊臣後期の遺構面が良好な状態で検出されたこと、また 46 堀から出土した刻印石を含む残石群について周辺住民の皆様に情報公開を行うべく、平成 25 年 11 月 23 日に現地公開を開催した。その結果、467 名の参加者を得ることができた。

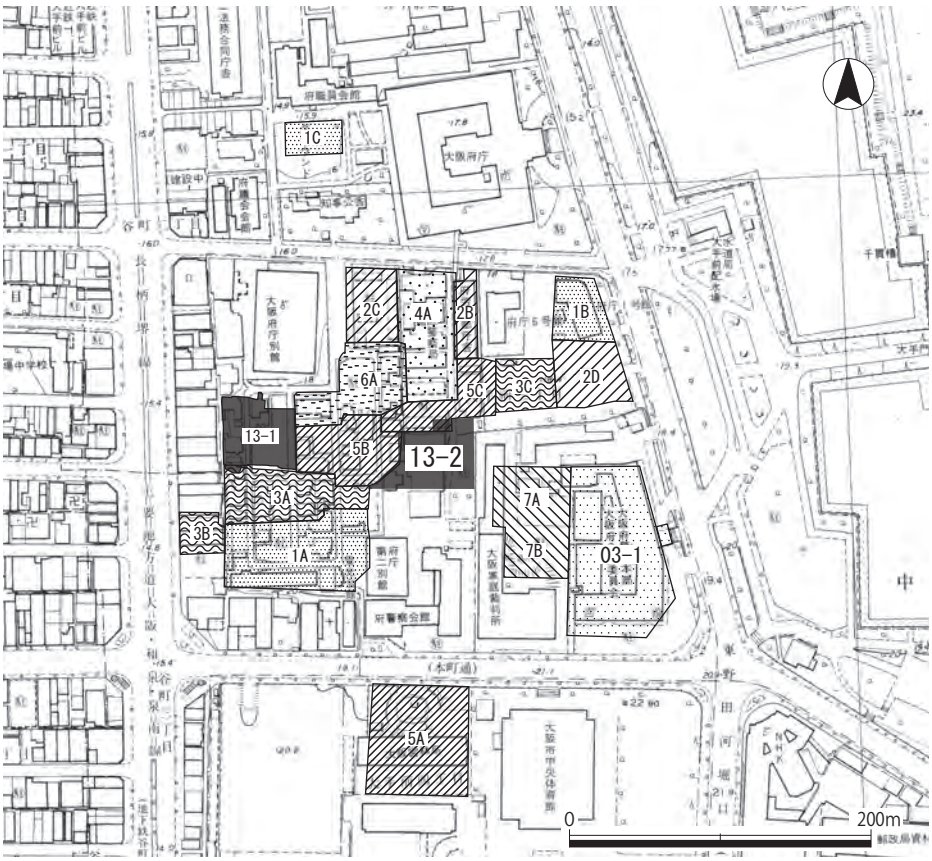


図２　今回の調査区と既往の調査区

第２節　調査・整理の方法

本調査の方法は、『遺跡調査基本マニュアル』2010 に沿って行った。まず、調査地名であるが、遺跡名に調査開始年度と年度内における調査数を付した「大坂城跡 13 －２」とした。

調査地は上町台地の台地上および東西方向にはしる開析谷の北辺部にあたることから、調査は谷部で工事による掘削深度が最終遺構面を超える部分は、鋼矢板を打設して切梁工法による土留めを行った。また、工事の関係上掘削深度が浅い部分は、調査地境にＨ鋼を打設した後、横矢板による土留めを行って調査を実施した。

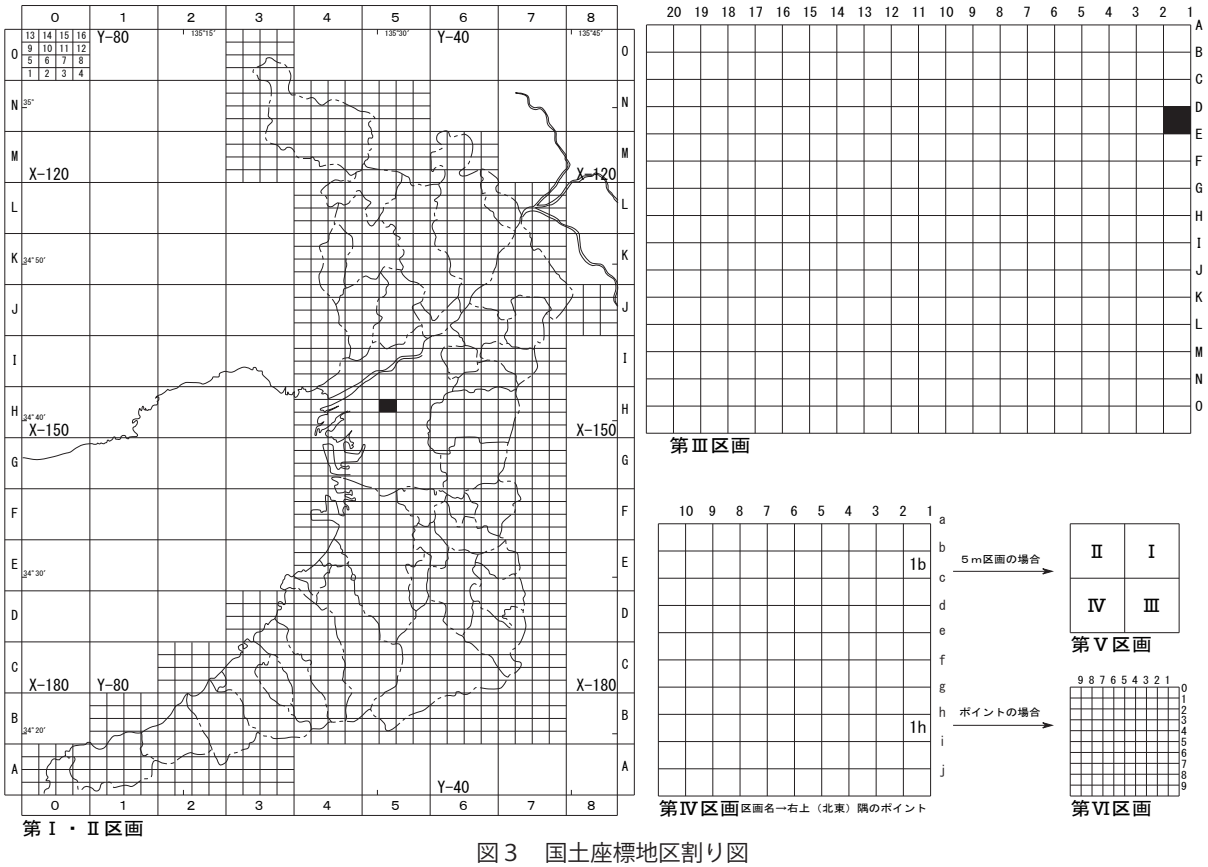


図３　国土座標地区割り図

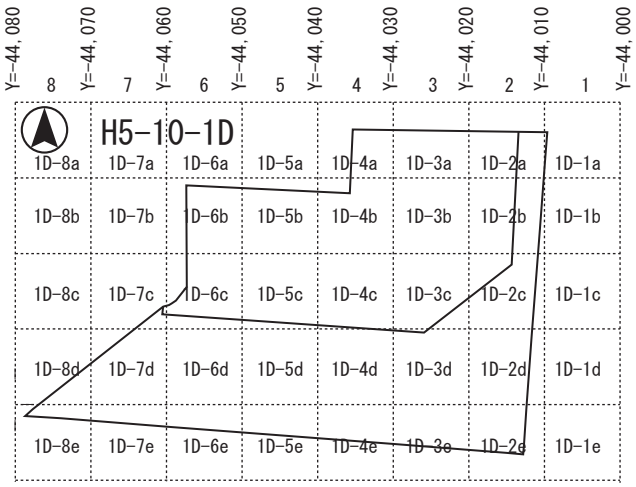


図４　調査区地区割り図

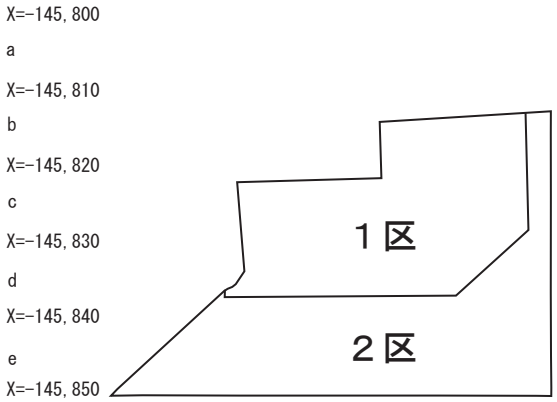


図５　調査区割り図

なお、調査区名については、鋼矢板で囲まれた912㎡を１区、１区の南および東側の掘削深度が浅い710㎡部分を２区と呼称して調査を行った（図５）。そして、１区は最終遺構面まで調査を行い、２区は近世の遺構面である４層上面の調査および大坂城再建時の盛土層（４層）の途中まで掘削を行って、調査を終了した。

調査は世界測地系に基づいた国土座標軸を使用しており、本報告においてもすべてその方式に従った。また、当センターでは大阪府内全域を共通の地区割りで統一し、国土座標軸を基準線として第Ⅰ～Ⅵ区画までの６段階の地区割りを設定しているが、今回の調査ではこのうちⅠ～Ⅳ区画までを用いた。さらに、調査地の座標は既知の３級基準点をもとに４級基準点を新設した後、調査地内に10ｍ間隔で基準杭を打設した。そして、設定された地区割りを平板測量や実測図作成時の基準、さらに遺物取り上げ単位として用いた（図３・４）。

現代盛土層および近代以降の盛土層、さらには既往の調査部分の埋め戻し土を重機によって取り除いた後、人力による掘削を行って調査を進めた。しかし、本調査地内にはしる開析谷は大坂城再建時に厚さ約3.2ｍの盛土層で完全に埋められている。この盛土層はほとんど遺物を含んでおらず、また、一気に埋められたことを考慮した結果、重機による掘削を行った後、下層は人力掘削による調査を実施した。

調査は作業効率や廃土置場を考慮し、まず１区の調査に着手した後、１区の調査途中で２区の調査を行った。遺構面は全部で14面検出したが、既往の調査成果や今回の調査上より重要であると判断した７面の遺構面については、トラッククレーンを用いて航空測量を実施した。また、Y=-44,018ライン、Y=-44,030ライン、Y=-44,050ラインにトレンチを設定し、地層の観察や記録に用いた。

遺構番号は、１区では１から通し番号を付したが、２区は１区と並行して調査を進めたことから、混乱を回避するために遺構番号の頭に「10」を冠した上で１から通し番号を付した。

遺物の取り上げは、地区割りに沿って10ｍ四方を単位とし、取り上げ番号は通し番号を付した。

現場での写真撮影は、６×７カメラ、35㎜カメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、リバーサルフィルムを用いて行った。さらに、台帳作成に使用するためデジタルカメラによる撮影も行った。

整理作業は、遺構面全体図については、現地で測量した平板測量や航空測量によって作成した平面図を編集して、主要遺構に関しても現地で作成した実測図や航空測量による平面図を編集してそれぞれ挿図を作成した。

出土遺物については、洗浄、注記、接合作業を行った後、選別し実測作業を実施した。近世陶磁器および漆器類を中心に必要に応じて個別にデジタル写真を撮影し、実測図に嵌め込んだ。また、必要に応じて一部の遺物は拓本を採った。これらの実測図は遺構面や層位毎に編集し、挿図を作成した。さらに、報告書掲載遺物と未掲載遺物に分けて収納作業を行った。

刻印石を含む残石については、現地で実測作業を行うことが困難であったことから、全くの自然石であった１点を除いて、FARO社製LASER SCANNER FOCUS3Dを用いて石の全方位のスキャニングを行った。このデータを合成して３Ｄ画像を作成した後、展開図を作成して編集し、トレースを行って実測図の代わりとした。

挿図の浄書はAdobe社製IllustratorCS2を用いてデジタルトレースを行った。

現地で撮影した遺構面や個別遺構の写真は報告書に掲載するものを選別し、焼付け作業を行った後、写真図版として編集した。また、出土遺物についても報告書掲載遺物の中から選別して撮影した後、現像、焼付け作業を行って、写真図版として編集した。

第２章　位置と環境

大坂城跡は、大阪平野を南から北へ延びる上町台地の北端部に立地する。上町台地は、南北長 10 ㎞余り、東西幅約２～３㎞の中･低位段丘で、調査地がある台地北端部付近での標高は 20 ～ 25 mを測る。台地は大阪城付近を北限とし、北は大川に面している。東は縄文海進以降、淀川と旧大和川の沖積作用によって形成された大阪平野が広がる。一方、台地の西側は台地西縁に沿って縄文海進時の波食崖が続き、その西側は天満砂堆や難波砂堆、大阪海岸低地を経て大阪湾に至る。また、台地上には大規模な侵食によってできた開析谷が発達しており、複雑な様相を呈する（市川 2011）。今回の調査地は、上町台地西側の中位段丘面上と、埋没谷となった西に開く開析谷の北壁部分にあたる（寺井 2004）。

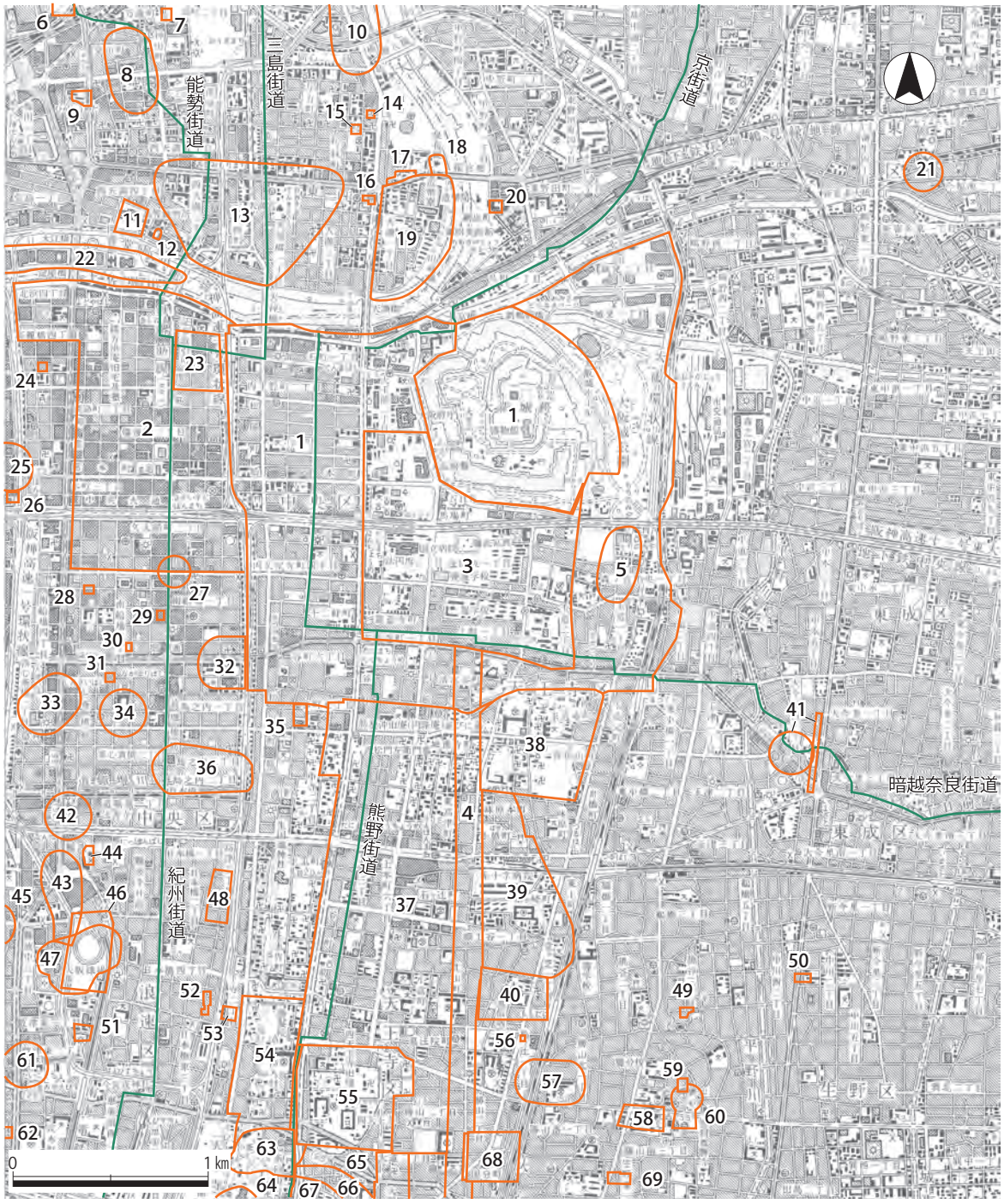
上町台地を中心とした歴史的環境は、縄文海進期に台地の東側に広がる河内湾に面した東斜面部で縄文時代中期に森の宮遺跡において人々の暮らしが始まったことが確認されている。その約１㎞南に立地する宰相山遺跡では縄文時代早期の高山寺式の土器をはじめ、前期や中期、さらに晩期や弥生時代前期の土器が出土している。また、近年では台地西側斜面の大坂城下町跡でも縄文時代後期・晩期の土器がみつかっており、前方の海や背後の台地を生活基盤として活動していたことが窺われる。弥生時代中期には、河内湾が陸地化した河内潟に向かって遺構・遺物の分布がより東へと広がる森の宮遺跡、上町台地西斜面の大坂城下町跡などで漁撈に係る集落などが明らかとなってきている。

古墳時代には活発な人間活動が認められるようになる。台地の上には御勝山古墳などをはじめとする古墳が多く造られたが、難波宮造営や後世の開発によって大半が消滅し、地名や遺物からその存在が想定されるのみである。古墳時代中期には、台地北部に法円坂倉庫群が、大川の対岸にある天神橋遺跡でも集落が出現する。さらに、近年、台地の谷斜面部で初期須恵器窯もみつかっているほか、韓式系土器の出土も増加していることから､上町台地の開発に渡来人が深く関わっていたことが推察される。また、存在は確認できていないが、台地上には応神天皇の大隈宮や仁徳天皇の高津宮があったと推定されているし、台地の北端部に難波の堀江が掘削され、難波津を中心に重要拠点として利用されてきたことが推定されている。

古代に入ると難波宮、難波京の造営が行われ、上町台地北端部は一躍歴史の表舞台に立つようになる。難波長柄豊碕宮（前期難波宮）は孝徳天皇によって白雉元（650）年から造営を開始し、同３（652）年に完成し、飛鳥から遷都された。その姿は言葉に尽くしがたいほど壮麗であったと『日本書紀』にも記されていたが、都として機能していた期間は短く、同５（656）年に孝徳天皇が亡くなると都は飛鳥に戻ってしまう。その後も宮殿は存在しており副都として機能していたが、朱鳥元（686）年に「大蔵省」からの失火によって焼失してしまう。

しかし、遺構の一部には火災の痕跡が認められないことから、宮は全焼したわけではなく、残った建物を利用して難波津を中心とする外交機能は有していたようであった。神亀３（726）年に聖武天皇によって再び難波宮（後期難波宮）が造営されたが、延暦３（784）年の長岡京遷都に伴い難波宮は解体されて、長岡宮に移築された。

再びこの地が歴史の表舞台として注目されるようになるのは、明応５（1496）年に蓮如によって大坂御坊が建立されてからである。天文元（1532）年の山科本願寺焼き討ち後、大坂石山に本願寺を移して一向宗の本拠として強大な勢力をもつようになった。その後、10 年にもおよぶ織田信長との間で



1.大坂城跡　2.大坂城下町遺跡　3.難波宮跡　4.難波京朱雀大路跡　5.森の宮遺跡　6.茶屋町遺跡B地点　7.扇町遺跡
8.安曇寺跡推定地　9.曽根崎遺跡　10.同心町遺跡　11.佐賀藩蔵屋敷跡　12.天満蔵屋敷跡　13.天神橋遺跡
14.同心町遺跡D地点　15.同心町遺跡E地点　16.東天満遺跡　17.天満橋1丁目所在遺跡B地点　18.天満橋1丁目所在遺跡
19.天満本願寺跡　20.網島町遺跡　21.今福遺跡　22.中之島蔵屋敷跡　23.大坂魚市場跡　24.大坂城下町跡B地点
25.靭本町１丁目所在遺跡　26.靭本町1丁目所在遺跡B地点　27.馬喰町遺跡　28.大坂城下町跡C地点
29.南船場２丁目所在遺跡B地点　30. 南船場2丁目所在遺跡　31.東心斎橋1丁目所在遺跡B地点　32.島之内１丁目所在遺跡
33.西心斎橋１丁目所在遺跡　34.東心斎橋１丁目所在遺跡　35.瓦屋町遺跡　36.島之内２丁目所在遺跡　37.上本町遺跡
38.宰相山遺跡　39.細工谷遺跡　40.堂ヶ芝廃寺　41.大今里遺跡　42.難波１丁目所在遺跡　43.難波貝層遺跡
44.難波1丁目所在遺跡B地点　45.浪速元町遺跡　46.難波御蔵跡　47.船出遺跡　48.高津御蔵跡　49.桃谷遺跡　50.中川遺跡
51.敷津遺跡B地点　52.日本橋東遺跡　53.下寺遺跡　54.伶人町遺跡　55.四天王寺旧境内遺跡　56.堂ヶ芝廃寺C地点
57.勝山北遺跡　58.勝山南遺跡　59.勝山遺跡　60.御勝山古墳　61.敷津遺跡　62.大国遺跡　63.茶臼山古墳
64.天王寺公園遺跡　65.大道１丁目所在遺跡　66.河内川堀江推定地　67.北河堀町所在遺跡　68.摂津国分寺跡
69.生野東遺跡

図６　周辺遺跡分布図

繰り広げられた石山合戦は、天正８（1580）年に第 11 世宗主顕如が大坂を明け渡して紀州へ移ることで終結する。

織田信長が本能寺の変で倒れた後、天下統一を目指した羽柴秀吉は天正 11（1583）年９月に大坂城の築城に着手した。ポルトガル人の宣教師ルイス・フロイスは、工事に従事する人数が月に２、３万人、のちには５万人にも達したと記している。そして、着工からわずか２年足らずの天正 13（1585）年４月には本丸が完成した。本丸はいくつもの曲輪からなり、５層からなる天守閣は本瓦葺きで鯱瓦や軒瓦、飾り瓦には金箔が貼られた荘厳なものであった。同年７月関白の地位に上り詰めた秀吉は、本丸を囲む二の丸の工事に着手した。この工事は本丸のおよそ５倍の規模に拡張する大規模なものであった。また、大坂城の築城と並行して城下町の建設も進められていった。関東・東北を平定して名実ともに天下統一を成し遂げると、天正 19（1591）年に関白職を甥の秀次に譲り太閤となる。文禄３（1594）年に城郭を強化するために惣構の建設を命じる。これにより、北は大川、南は空堀、東を猫間川、西は新たに掘削した東横堀によって画された広大な大坂城下町が完成する。さらに、慶長３（1598）年に幼少の秀頼の身を案じた病床の秀吉は、新たに三の丸築造を命じた。この工事は惣構内にあった町屋を新たに整備した船場に移した後、大名屋敷を伏見から移転させる大規模なものであったが、秀吉はその完成を見ることなく同年８月にこの世を去った。その後、慶長 19（1614）年に方広寺鐘銘事件を発端とし、大坂冬の陣が勃発するが、徳川方は惣構を突破することができないまま、和睦が成立して冬の陣は終結する。この和睦によって本丸以外の堀は全て埋められ、三の丸も消滅する。さらに、その翌年の慶長 20（1615）年に大坂夏の陣が起き、秀頼、淀殿自刃により豊臣氏は滅亡、大坂城も落城焼失してしまう。

廃墟と化した大坂城は、幕府の直轄地として元和６（1620）年から寛永６（1629）年まで 10 年の歳月をかけて本丸と二の丸の再興がなされたが、これは膨大な量の盛土に象徴されるように豊臣期の面影を完全に払拭したもので、豊臣期の遺構は地下深くに埋没してしまうこととなる。また、この工事は「天下普請」と呼ばれるもので、西国の外様大名を中心に一族、譜代各１家を加えた 31 か国 47 家の手によって再築されたものである。この工事では賀茂、生駒、六甲山麓、瀬戸内、九州の各地から約 50 万個もの石が集められ、現在我々が目にすることができる雄大な石垣が築かれた。その後、大坂城の復興と共に城下町も発展し、「天下の台所」と称されるように 18 世紀中頃の最盛期には人口 40 万人を誇る商都して繁栄する。

その後、寛文５（1665）年に大坂城天守閣が落雷により焼失し、慶応４（1868）年、幕末の動乱の最中、本丸から出火した火は城中大火となって大坂城は再び落城する。明治維新後、大坂城域とその一帯は大阪鎮台や大阪砲兵工場など軍施設が立ち並ぶ官営地として利用され、三の丸跡には第三高等学校（後の京都大学）の前身である舎密局が設置される。また、大正 15（1926）年には江之子島にあった大阪府庁舎が移転された。さらに、昭和６（1931）年には市民の全額浄財によって大阪城天守閣が再建されたが、第二次世界大戦時に米軍による無差別爆撃を受け、多くの尊い人命と共に、徳川期の建築物も多く焼失した。

終戦後、焼失を免れた天守閣と中部軍区司令部は、大阪城天守閣博物館と大阪市立博物館として生まれ変わり、また、大阪城一帯は史跡公園として整備された。大阪市立博物館は平成 13（2001）年に閉館してしまったが、現在、大阪城天守閣や史跡公園は国内外を問わず多くの観光客が訪れる都心のオアシスとなっている。

第３章　基本層序

今回の調査地は上町台地の西側に位置する。調査地の北側３分の１は台地上にあたり、南側３分の２は東西方向にはしる埋没した開析谷の北壁および段丘状の平坦面にあたる。調査地内の現地盤は北から南に緩やかに傾斜しており、現地表面の標高はT.P.+20.1 ～ 19.2 mを測る。現地表面直下には層厚約１～ 1.5 mの近・現代盛土層が堆積する。近・現代盛土層の下層は台地上部では削平が著しく、包含層の堆積は認められず基盤層を検出した。一方、調査地内における開析谷部は、現地表面から深さ約７mで基盤層に達した。従って、層序の堆積が認められたのは開析谷内で、近世から豊臣前期まで大別すれば５層の包含層の堆積が認められた。

今回の調査は、調査区の西辺および北辺が平成６（1994）年度に調査された５Ｂ・５Ｃ区に接する場所にあたることから、基本層序の層位名の呼称については５Ｂ・５Ｃ区調査時の呼称に準拠したが、細分については必ずしも同じではない。

以下、主な層序について記す（図７）。

１～３層　幕末から現代の包含層および盛土層である。

４・５層　近・現代盛土層の直下にある徳川期の盛土層である。層厚は約 3.1 mを測り、これによって谷は一気に埋め立てられて台地部と平坦面を成す。人頭大の偽礫を含むシルト層～細礫層が堆積する。これは大坂冬の陣後に埋められた外堀の埋土が、徳川の大坂城再築時に拡張しながら掘り返された際に発生した土砂によって谷が埋め立てられたものであると考えられる。

６層　大坂夏の陣後の堆積層で、２層に大別できた。上層の６ａ層は黄灰色粗砂・シルト混極細砂層で、夏の陣による火災によってできた焼土層を攪拌した畠の耕作土層である。下層の６ｂ層も暗灰粗砂・極細砂混細砂層の畠の耕作土層である。

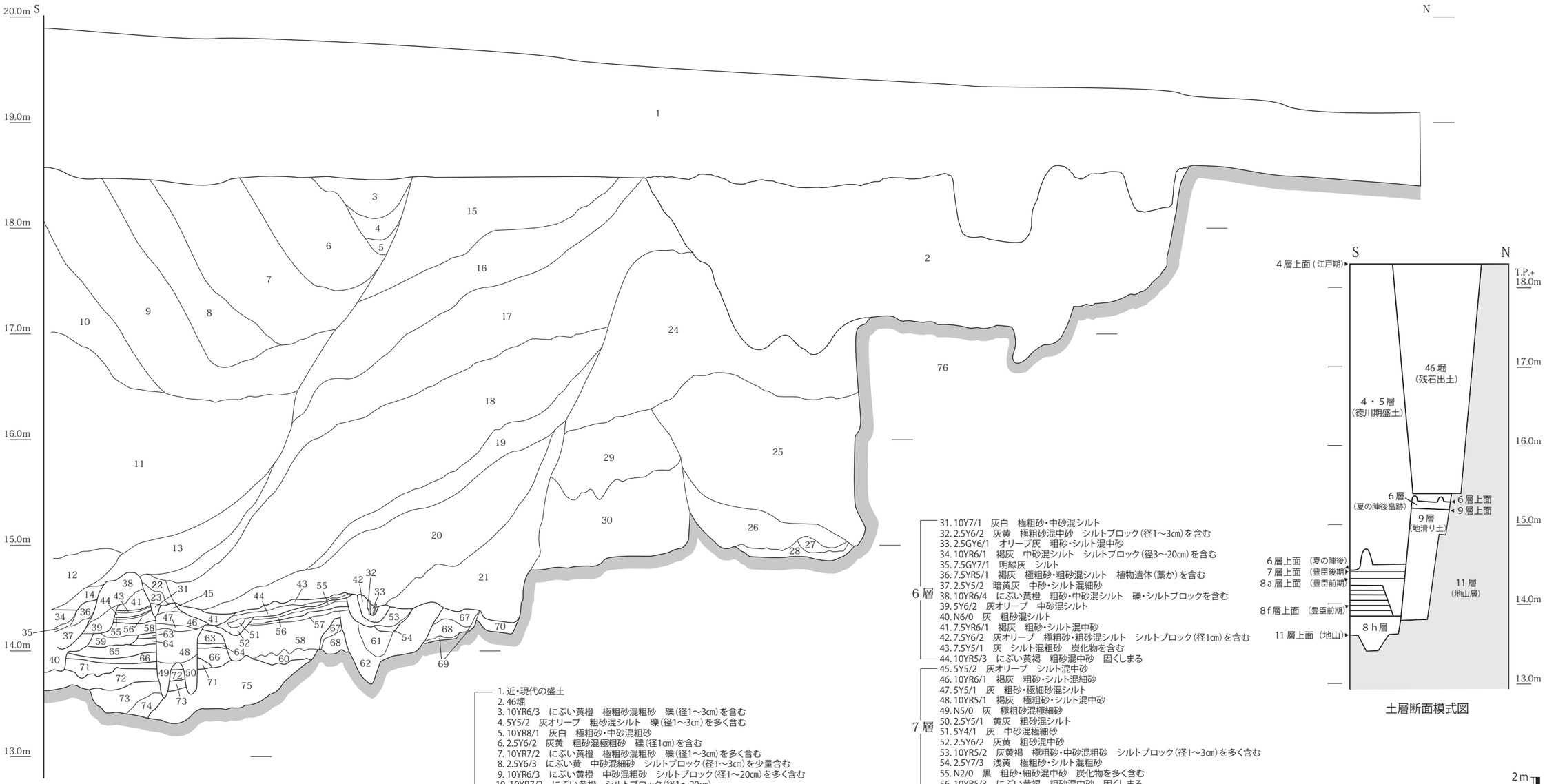
７層　大坂城三の丸構築後から大坂夏の陣前の豊臣後期の包含層および整地土層である。整地土層については調査区の南東部で東西約 10 m、南北約５mの範囲に認められた。この整地土層が認められた箇所は、豊臣前期にあたる８層上面時においても整地が行われた場所にあたる。

８層　大坂城築城時から三の丸構築以前の豊臣前期の包含層および整地土層である。包含層は２層で、主として調査区南西部から南東部にかけて認められた。整地土層は全部で６層確認できた。

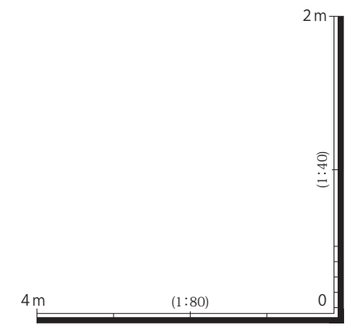
９層　谷壁に起きた地滑り痕跡である。調査区南西部に認められる。断面観察の結果などから円弧状に複数回地滑りが起きたことが看取できた。地滑りを起こした地層は基盤層である上町層であるが、地滑りによってできた空隙に暗灰色粗砂混細砂層が堆積しており、その中から漆器椀片や古代の土器片が出土しており、地滑りが起きた時期を示すものと考えられる。

11 層　基盤層である。台地上における基盤層は粗砂層であるが、下層は細砂～シルト層の互層で、海成堆積層で生物擾乱や波による擾乱が認められる上町層である。また、さらに下層では大阪層群と考えられる極粗砂～細礫層が堆積する。

なお、今回の調査地は台地と開析谷の斜面部にあたるため、古代や古墳時代の堆積層は確認できなかったが、当該時期の遺物の小片が数点出土したことや既往の調査成果から、当該時期の堆積が調査区の南側にあたる谷の中心部にあることを示唆している。



土層断面模式図



4・5層
1. 近・現代の盛土
2. 46堀
3. 10YR6/3　にぶい黄橙　極粗砂混粗砂　礫（径1～3㎝）を含む
4. 5Y5/2　灰オリーブ　粗砂混シルト　礫（径1～3㎝）を多く含む
5. 10YR8/1　灰白　極粗砂・中砂混粗砂
6. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂混極粗砂　礫（径1㎝）を含む
7. 10YR7/2　にぶい黄橙　極粗砂混粗砂　礫（径1～3㎝）を多く含む
8. 2.5Y6/3　にぶい黄　中砂混細砂　シルトブロック（径1～3㎝）を少量含む
9. 10YR6/3　にぶい黄橙　中砂混粗砂　シルトブロック（径1～20㎝）を多く含む
10. 10YR7/2　にぶい黄橙　シルトブロック（径1～20㎝）
11. N5/0　灰　極細砂混シルトブロックと10BG7/1　明青灰　極細砂ブロックの互層
12. 7.5Y6/1　灰　細砂混シルト　シルトブロック（径3～10㎝）を含む
13. 10YR5/1　褐灰　中砂混シルト
14. 2.5Y5/1　黄灰　極粗砂混シルト
15. 5Y5/2　灰オリーブ　粗砂混中砂　シルトブロック（径1～3㎝）を含む
16. 5G6/1　暗緑灰　粗砂・シルト混中砂　シルトブロック（径1～20㎝）を多く含む
17. 5Y6/3　オリーブ黄　粗砂・中砂混細砂　シルトブロック（径1～5㎝）を層状に含む
18. 10Y4/1　灰　極粗砂・粗砂混中砂　シルトブロック（径1～3㎝）を含む
19. N6/0　灰　極粗砂混極細砂　シルトブロック（径5～10㎝）を多く含む
20. 2.5GY5/1　オリーブ灰　シルト混極粗砂　シルトブロック（径1～3㎝）を含む
21. N6/0　灰　粗砂
22. 7.5GY8/1　明緑灰　極粗砂混極細砂
23. 10YR5/2　灰黄褐　細砂混シルト
24. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂混中砂　シルトブロック（径1～10㎝）を多く含む
25. 10YR5/2　灰黄褐　極粗砂・極細砂混粗砂　中砂ブロック（地山由来・径1～5㎝）を含む
26. 10YR5/3　にぶい黄褐　細砂混極粗砂　シルトブロック（径3～10㎝）を含む（5層）
27. 10YR5/1　褐灰　シルトブロック（径1～5㎝）
28. 7.5GY6/1　緑灰　シルト混細砂　シルトブロック（径3～5㎝）を含む
29. 10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂混極粗砂　下層に10YR4/1　褐灰　粗砂混シルトブロック（径20㎝）を含む
30. 10YR6/3　にぶい黄橙　極粗砂混中砂

6層
31. 10Y7/1　灰白　極粗砂・中砂混シルト
32. 2.5Y6/2　灰黄　極粗砂混中砂　シルトブロック（径1～3㎝）を含む
33. 2.5GY6/1　オリーブ灰　粗砂・シルト混中砂
34. 10YR6/1　褐灰　中砂混シルト　シルトブロック（径3～20㎝）を含む
35. 7.5GY7/1　明緑灰　シルト
36. 7.5YR5/1　褐灰　極粗砂・粗砂混シルト　植物遺体（藻か）を含む
37. 2.5Y5/2　暗黄灰　中砂・シルト混細砂
38. 10YR6/4　にぶい黄橙　粗砂・中砂混シルト　礫・シルトブロックを含む
39. 5Y6/2　灰オリーブ　中砂混シルト
40. N6/0　灰　粗砂混シルト
41. 7.5YR6/1　褐灰　粗砂・シルト混中砂
42. 7.5Y6/2　灰オリーブ　極粗砂・粗砂混シルト　シルトブロック（径1㎝）を含む
43. 7.5Y5/1　灰　シルト混粗砂　炭化物を含む
44. 10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂混中砂　固くしまる

7層
45. 5Y5/2　灰オリーブ　シルト混中砂
46. 10YR6/1　褐灰　粗砂・シルト混細砂
47. 5Y5/1　灰　粗砂・極細砂混シルト
48. 10YR5/1　褐灰　極粗砂・シルト混中砂
49. N5/0　灰　極粗砂混極細砂
50. 2.5Y5/1　黄灰　粗砂混シルト
51. 5Y4/1　灰　中砂混極細砂
52. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂混中砂
53. 10YR5/2　灰黄褐　極粗砂・中砂混粗砂　シルトブロック（径1～3㎝）を多く含む
54. 2.5Y7/3　浅黄　極粗砂・シルト混粗砂
55. N2/0　黒　粗砂・細砂混中砂　炭化物を多く含む
56. 10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂混中砂　固くしまる

8層
57. N5/0　灰　粗砂混極細砂　炭化物を含む
58. 2.5Y5/2　暗灰黄　粗砂・極細砂混中砂　シルトブロック（径1㎝）を含む
59. 10YR6/3　にぶい黄橙　粗砂・極細砂混中砂　固くしまる
60. 7.5Y5/1　灰　粗砂・シルト混細砂　シルトブロック（径1～5㎝）を多く含む
61. 5Y4/1　灰　粗砂・中砂混シルト　シルトブロック（径1～3㎝）を多く含む
62. 10YR6/3　にぶい黄橙　粗砂・シルト混中砂　シルトブロック（径1～3㎝）を多く含む
63. 2.5Y6/3　にぶい黄　極粗砂混細砂　固くしまる　上面に層厚2㎜の黒色シルト層あり
64. 2.5Y5/2　暗灰黄　極粗砂・中砂混シルト　固くしまる　上面に層厚3㎜の黒色シルト層あり
65. 5Y5/1　灰　粗砂・中砂混極細砂
66. 5Y7/2　灰白　極粗砂・細砂混中砂
67. 10YR5/3　にぶい黄褐　極粗砂・細砂混シルトにシルトブロックを含む
68. 10YR4/1　褐灰　極粗砂・極細砂混中砂
69. 5Y7/3　浅黄　極細砂　シルトブロック（径1㎝）を含む
70. 5Y6/1　灰　細砂混極細砂　シルトブロック（径1～3㎝）を含む
71. 10Y5/1　灰　極粗砂混細砂　シルトブロック（径1～5㎝）を含む
72. 10YR5/3　にぶい黄褐　極粗砂・中砂混粗砂　シルトブロック（径1～3㎝）を含む
73. 10YR4/2　灰黄褐　極粗砂・シルト混粗砂
74. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂・中砂混シルト
75. 7.5Y5/1　灰　粗砂混シルト　シルトブロック（ 1～5㎝）を多く含む
76. 10YR7/2　にぶい黄橙　極粗砂混シルト（地山）

図７　Y=-44,030 ライン断面図・土層断面模式図

第４章　江戸時代（４層上面）の遺構と遺物

４層上面（図８・９、図版２）　当該面は重機で近代以降の盛土層を除去して検出した。徳川期の大坂城再築時に谷部を盛土層で埋め立てた後の平坦面上で検出した。基本層序でも述べたが、既往の調査で確認された２・３層は、当調査区においては近代以降の開発によって削平を受けており残存しなかった。

４層上面は徳川期の大坂城再築後の遺構面である。検出した遺構は土坑、井戸、溝、堀、掘立柱建物などである。土坑の中には廃棄土坑も認められ、大量の陶磁器類が出土した。堀は２条検出した。22 堀は攪乱を受けていたため詳細は不明であるが、46 堀は調査区の北半部を東西方向に横断する堀で、大坂城再築時に集められた石垣材の残石が出土した。なお、当遺構面で井戸２基、花崗岩の切石を根石にした柱間１間×１間の掘立柱建物を１棟、さらに煉瓦積みの建物基礎などを検出したが、いずれも近代以降の遺構であった。遺構面の標高は 18.3 ～ 18.7 mを測る。

14 土坑（図 10・13）　1D-4b 区に位置する。46 堀が埋め戻された後に掘り込まれた遺構で、平面は不整な楕円形を呈し、規模は長径 1.3 m、短径 1.1 m、深さ 0.1 mを測る。遺構の南西側は削平を受ける。埋土は極粗砂混極細砂の単層で、地山ブロックを含む。遺物は陶磁器（９・11）などが出土した。９は瀬戸・美濃系の香炉底部である。体部外面に長石釉を施す。11 は肥前系色絵磁器碗である。内面に梅花文、底部外面に「太朋成化年製」の年款が入る。18 世紀後半の所産と考えられる。

23 土坑（図８・10・13）　1D-6c 区に位置する。規模は平面が 1.0 × 0.8 mの不整円形で、深さは 0.3 mを測る。埋土は２層に分かれ、上層から陶磁器や瓦などが出土した。３は肥前系陶器皿である。見込み部に胎土目が残る。

27 土坑（図８・10・13、図版４）　1D-6c 区に位置する。規模は短径 1.2 m、長径 1.5 m以上、深さ 0.5 mを測り、土坑の東半部は 40 溝に切られる。埋土は単層である。白磁・陶器が出土した。４は白磁皿である。底部は碁笥底で、見込み部に草花文を線刻する。13 は瀬戸・美濃焼の壺もしくは瓶である。

30 土坑（図８・14 ～ 16、図版４・33）　1D-4c 区に位置する。平面形は不整隅丸方形状を呈する。規模は長辺 4.6、短辺 3.0 m、深さ 0.8 mを測る。埋土は黒色の極細砂層を基本とする。総重量 22.0 kgと多くの陶磁器類が出土しており、後述する 38・39・49 土坑などと共に廃棄土坑と考えられる。遺物は土師器、陶磁器、十能、焼塩壺、ミニチュア土製品、瓦などが出土した（19 ～ 56）。19 ～ 21 は土師皿である。19 は口径 6.0 ㎝、器高 1.3 ㎝を測る。22 は軟質施釉陶器の灯明皿である。内面に柿釉を施し、口縁端部は煤が付着する。23 は京・信楽系陶器の灯明皿である。底部は糸切痕が残る。口縁外面端部に浮文状の耳がつく。口縁内外面に煤が付着する。口径 11.8 ㎝、器高 2.5 ㎝である。24 ～ 26 は肥前系磁器染付の皿である。25 は復元口径 13.6 ㎝、器高 3.3 ㎝を測る。26 は端反りの皿で外面に唐草文を施す。また、全体に被熱を受ける。27 ～ 33 は肥前系陶器の呉器手碗である。口径が 10 ㎝前後で器高が７㎝前後のものと、口径が 12 ㎝前後で器高が８㎝前後のものの２種に分けられ、類似性が高いことから揃いの碗であったと考えられる。34・35 は肥前系陶器の京焼風碗である。共に高台内に刻印をもつ。36・37 は肥前系磁器染付の丸碗である。37 は外面に桐文を施す。38 は肥前系磁器染付碗である。内外面共に刷毛目を施す。口径 12.4 ㎝、器高 7.8 ㎝を測る。39 は肥前系磁器鉢である。外面に沢瀉図を描く。40・41 は京・信楽系陶器の筒形碗とその蓋である。蓋には舟二艘と橋の銹絵を施す。42・43 は肥前系磁器染付の小杯である。43 は端反りの口縁をもつ。口縁部付近に溶着が認め

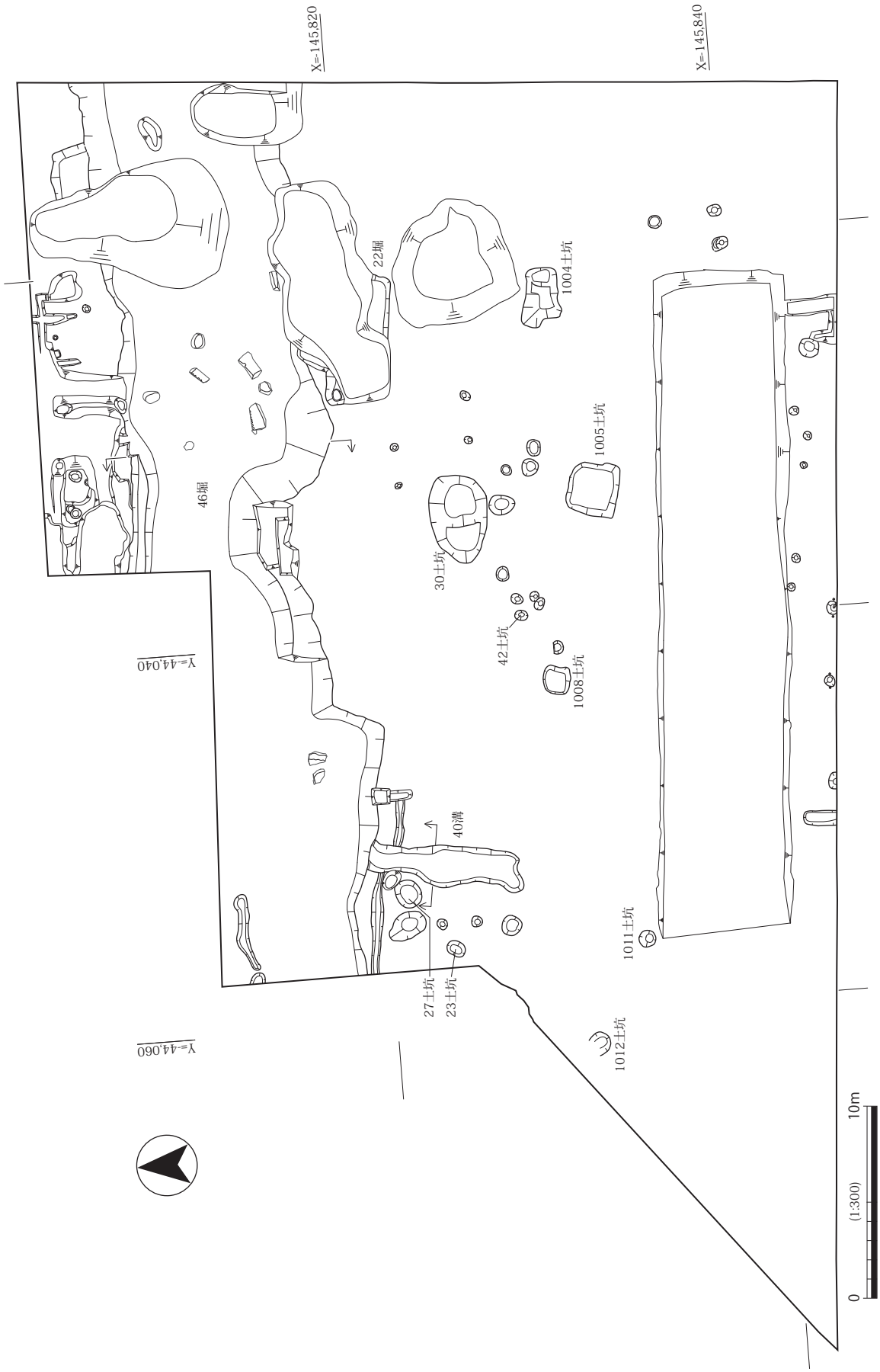

X=-145,820
X=-145,840
Y=-44,040
Y=-44,060
46堀
22堀
1004土坑
1005土坑
30土坑
42土坑
1008土坑
40溝
27土坑
23土坑
1011土坑
1012土坑
0
(1:300)
10m

図８　４層上面　平面図（古）

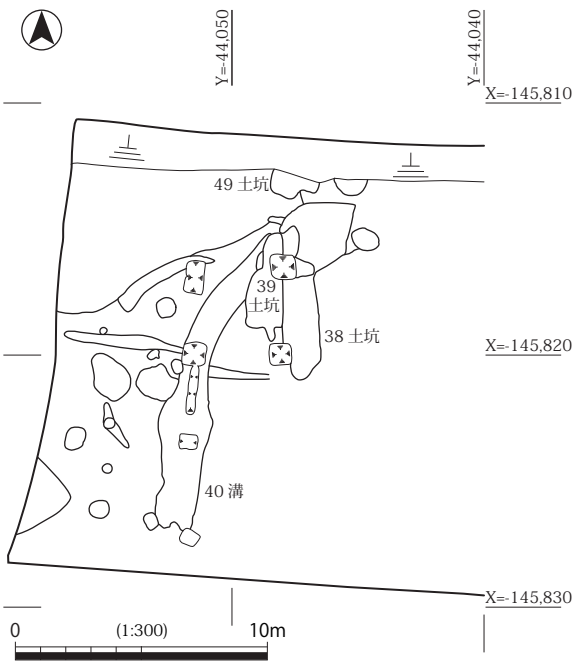


図９　４層上面　平面図（新）

られる。44 は肥前系磁器染付の仏餉具である。体部外面に笹図を施す。45・46 は肥前系陶器三島手の鉢である。45 は刷毛目を施す。片口の可能性もある。46 はいわゆる彫三島で白泥象嵌を施す。47 ～ 49 は丹波焼擂鉢である。50 は土師質土器の十能である。51・52 は土師質土器の焼塩壺の蓋と身である。51 蓋の内面には布目が残る。口径 7.7 ㎝、器高 2.3 ㎝を測る。52 身は口径 6.4 ㎝、最大径 7.9 ㎝、器高 9.2 ㎝を測る。53 は瀬戸・美濃焼鉄釉の溲瓶である。口縁部を欠損する。体部最大径 19.8 ㎝、器高 15.0 ㎝を測る。江浦　洋氏の分類（江浦 2009）に依るところのＢ類に属する。54 は瀬戸・美濃焼鉄釉のミニチュア片口鉢である。55 は土人形である。相撲を取る猿である。56 は軒平瓦である。唐草文を施す。遺物はいずれも 18 世紀後半の所産

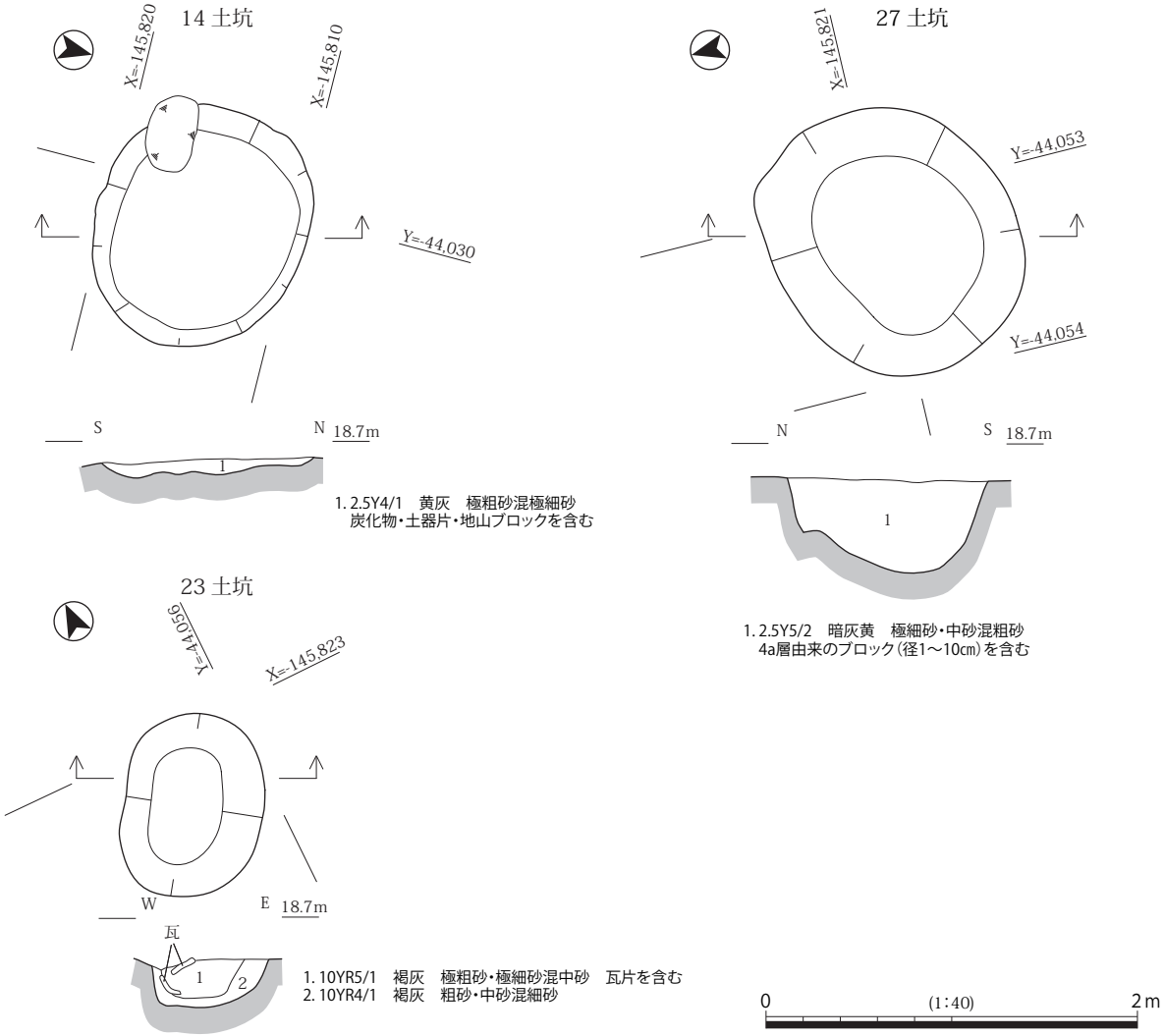


図 10　４層上面　14・23・27 土坑平・断面図

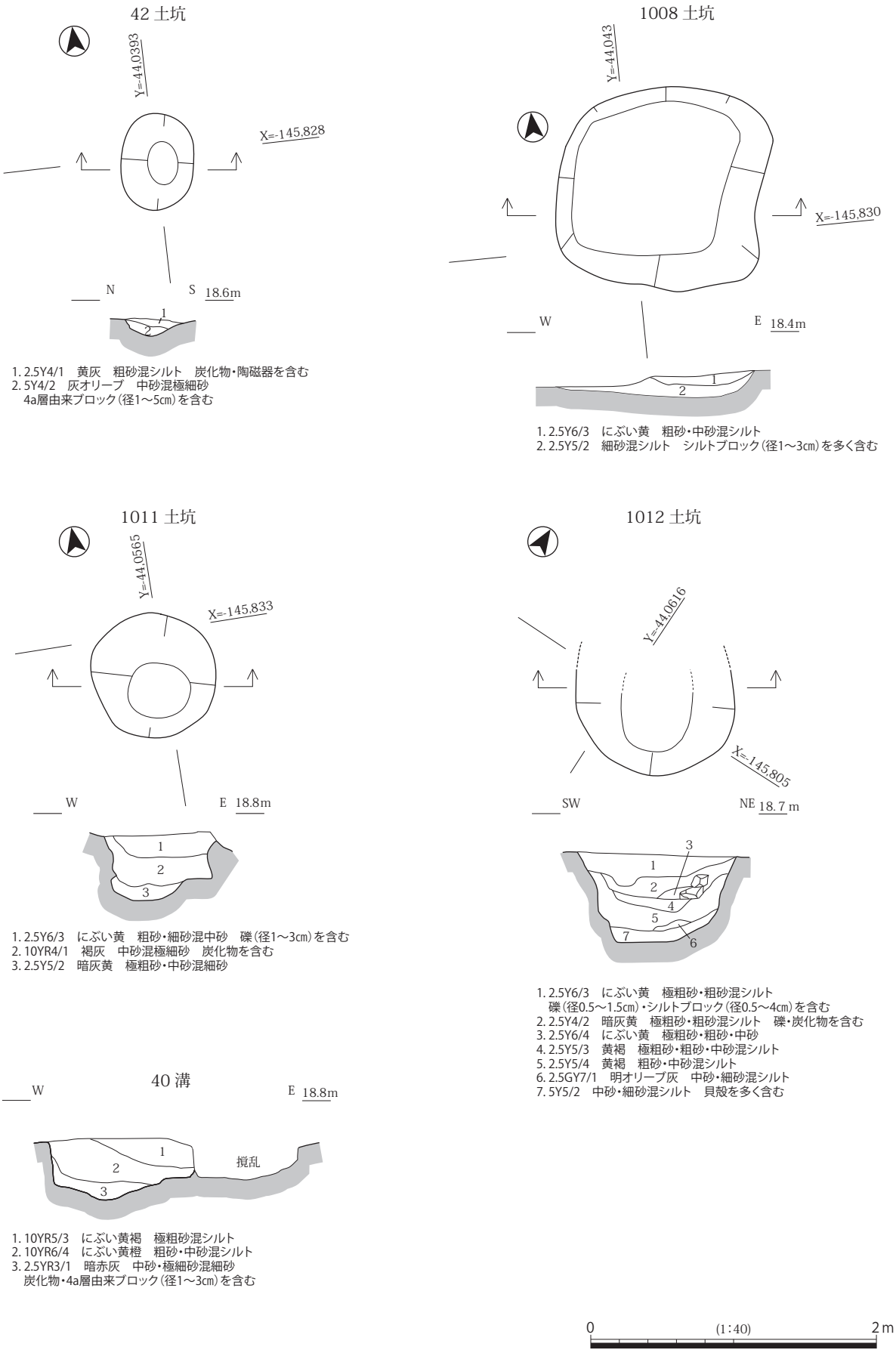
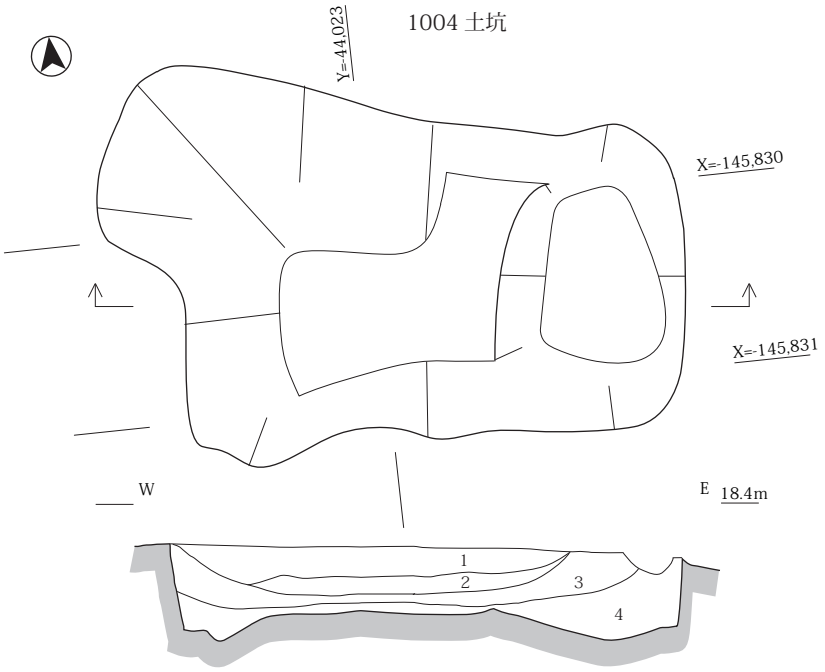
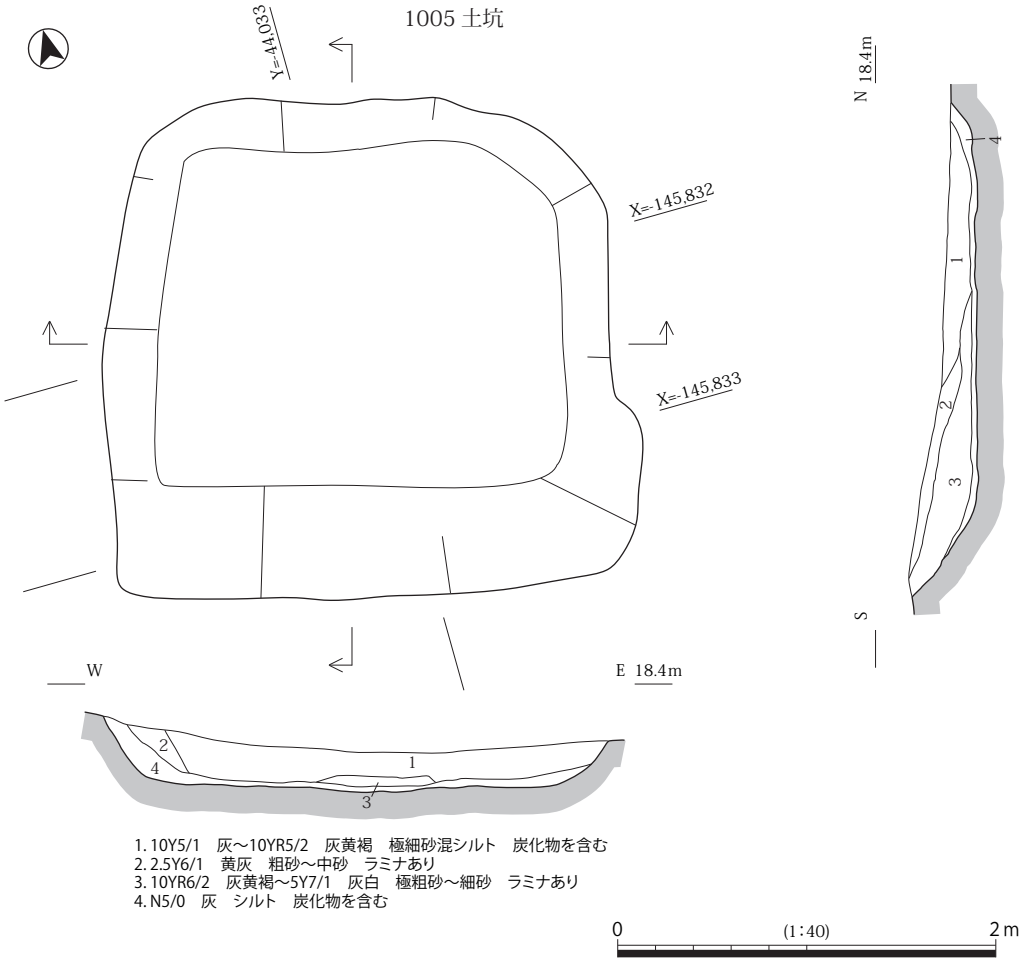


図 11　4 層上面　42・1008・1011・1012 土坑、40 溝平・断面図



1. 10YR4/2　灰黄褐　極粗砂・極細砂混粗砂
2. 2.5Y3/1　黒褐　小礫（径1～3㎝）混極細砂
3. 10YR5/2　灰黄褐　極粗砂・細砂混中砂4. 10YR4/1　褐灰　極粗砂・シルト混細砂



1. 10Y5/1　灰～10YR5/2　灰黄褐　極細砂混シルト　炭化物を含む
2. 2.5Y6/1　黄灰　粗砂～中砂　ラミナあり
3. 10YR6/2　灰黄褐～5Y7/1　灰白　極粗砂～細砂　ラミナあり
4. N5/0　灰　シルト　炭化物を含む

0　(1:40)　2m

図 12　4 層上面　1004・1005 土坑平・断面図

と考えられる。

38 土坑（図９・17）　1D-5b・5c 区に位置し、40 溝の南、39 土坑の東に接する。平面形は溝状に南北方向に長く延び、40 溝に後出する。40 溝や 39 土坑と共に 46 堀が埋め戻された後に掘削された遺構である。規模は幅 1.5 m、長さ 6.0 mを測る。攪乱と認識してしまったため、記録を取らずに遺物のみを取り上げた。遺物は陶磁器（57 ～ 60）が出土した。57 は瀬戸・美濃焼土瓶の蓋である。ツマミは半球形で放射状に線刻が施される。最大径 5.8 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。58・59 は肥前系磁器染付の蓋と碗である。58 はツマミ内に年款とは別に「キミバー」と焼継印が残る。59 は金襴手染錦の小碗で

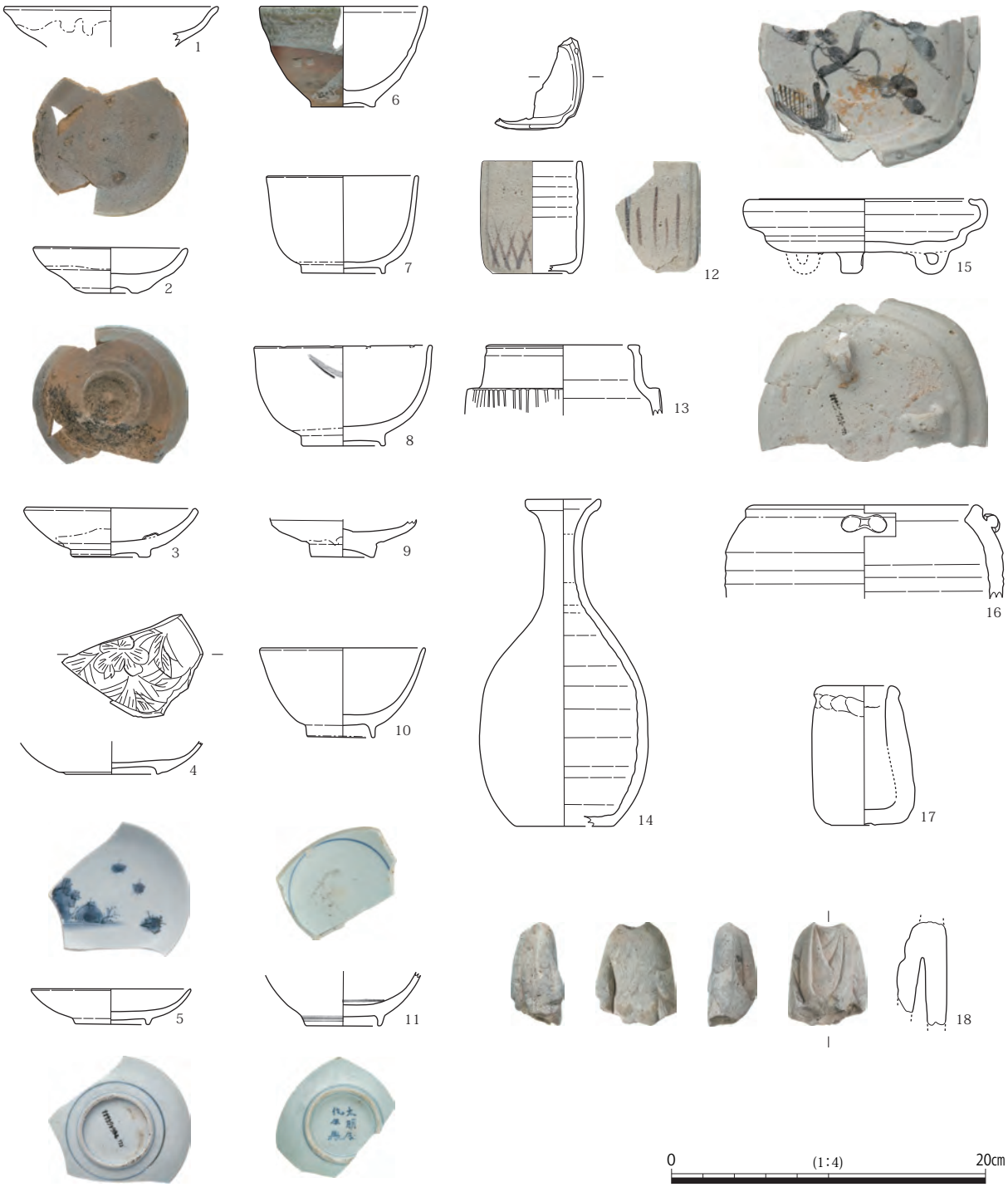
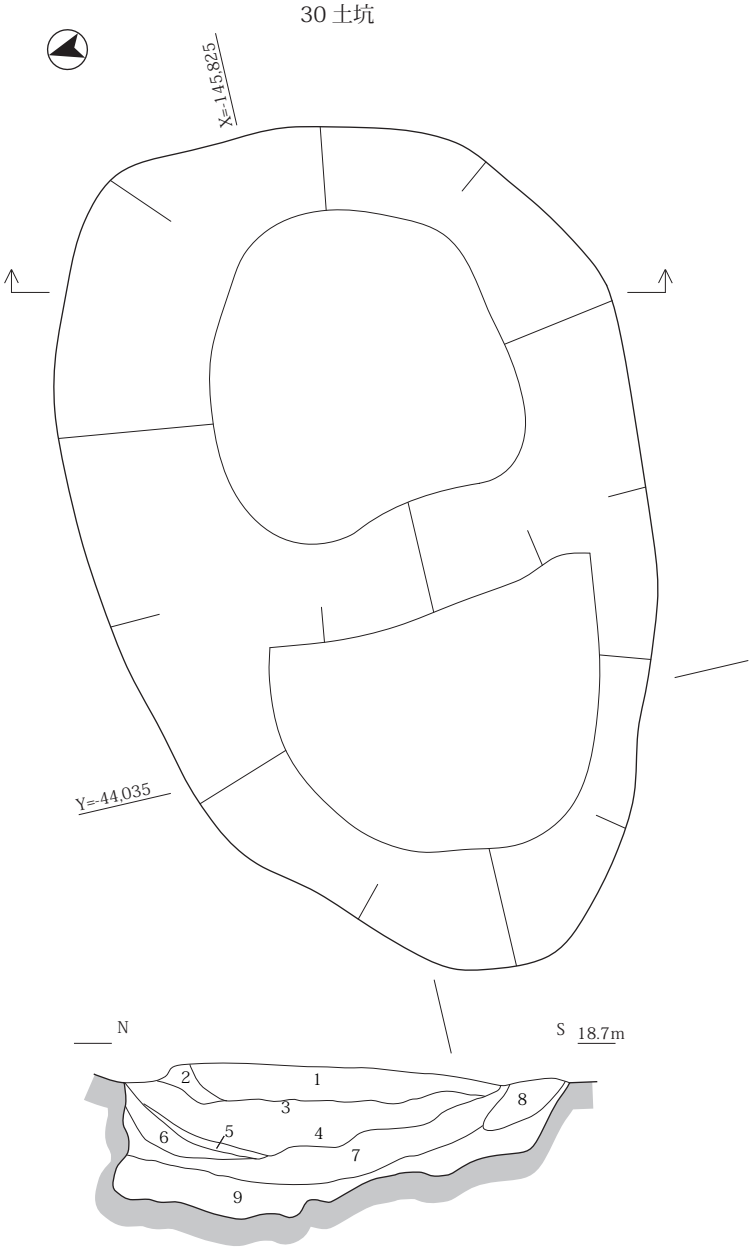


図 13　４層上面　14・23・27・42・1005・1008 土坑、40 溝出土遺物

ある。焼継の痕が認められる。18 世紀中～後葉の所産である。60 は堺焼の擂鉢である。

39 土坑（図 9・18） 1D-5b 区に位置し、38 土坑に西接して検出した。規模は幅 1.5 m以上、長さ 4.2 mを測る。38 土坑同様、溝状に南北方向に延びる土坑であったが、攪乱と認識してしまったため記録を取らずに遺物のみを取り上げた。遺物は多量の近世瓦および陶磁器類である。61 は肥前系磁器染付の皿である。内面に牡丹唐草文を施す。また、焼継の痕跡が残る。62 は丹波焼の甕である。内外面に鉄釉を施す。63 は関西系陶器の土瓶である。口径 11.0 ㎝、器高 14.3 ㎝を測る。18 世紀後半に属する。64 ～ 67 は瓦である。64 ～ 66 は桟瓦である。64 は方形の釘穴が残る。65・66 はそれぞれ小口部に「大坂瓦工川井甚兵衛」「大坂瓦師乾伊右・・・」のスタンプ文が残る。



1. N6/0　灰　粗砂・中砂混シルト　炭化物・陶磁器を多く含む
2. 10Y6/2　灰オリーブ　粗砂混シルト
3. 10GY5/1　緑灰　中砂混シルト　炭化物を多く含む
4. 10Y5/2　オリーブ灰　極粗砂・細砂混シルト
5. N4/0　灰　粗砂混極細砂　炭化物を含む
6. 2.5GY6/1　オリーブ灰　粗砂・極細砂混中砂　細礫（径1㎝）を含む
7. 7.5Y5/1　灰・細砂混シルト　炭化物・陶磁器を多く含む
8. 5GY6/1　オリーブ灰　粗砂混極粗砂
9. N5/0 灰　中砂混シルト　炭化物を多く含む
10. 2.5GY5/1　オリーブ灰　極粗砂混粗砂　炭化物を含む

0　(1:40)　2 m

図 14　4 層上面　30 土坑平・断面図

図 15　4 層上面　30 土坑出土遺物（1）

図 16　4 層上面　30 土坑出土遺物（2）

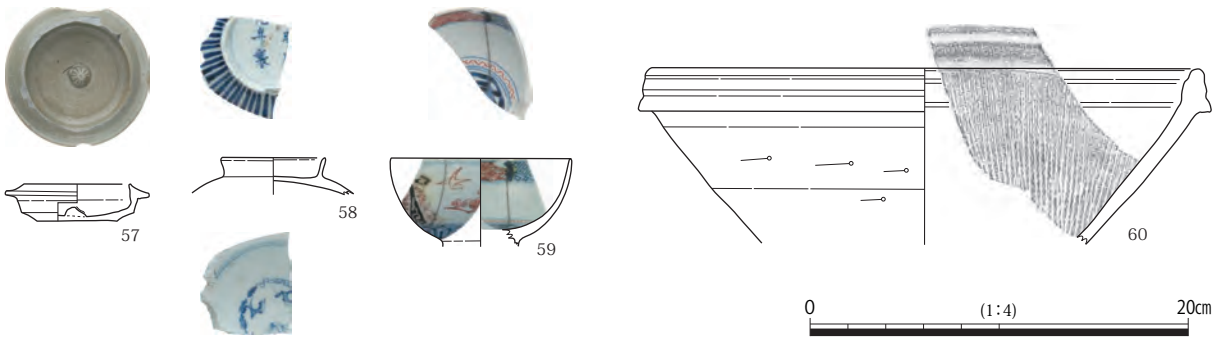


図 17　4 層上面　38 土坑出土遺物

42 土坑（図８・11・13、図版４）　1D-4c 区に位置し、30 土坑の南西約４ｍで検出した。平面不整楕円形の土坑である。規模は短径 0.5 ｍ、長径 0.7 ｍ、深さ 0.1 ｍを測る。遺物は２の肥前系陶器皿が出土した。見込み部に胎土目が４カ所残る。口径 9.8 ㎝、器高 2.9 ㎝を測る。

49 土坑（図９・19 ～ 21、図版 33）　1D-5b 区に位置する。遺構の北半部は攪乱によって失われていた。平面規模は一辺 2.0 ｍを測る。46 堀が埋め戻された後に掘り込まれた土坑で、攪乱と認識してしまったため記録を取らずに遺物のみを取り上げた。出土した遺物は、総重量 33.5 ㎏を量る多量の陶磁器類と土製品などで、廃棄土坑である。68 ～ 73 は皿である。68 ～ 70 は京・信楽系陶器である。68 は内面および外面口縁下部まで施釉する。また、内面口縁下に円形の浮文をもつ。69 は内面および外面口縁下部まで施釉する。また、内面口縁下に菊文の浮文を有する。70 は灯明皿である。内面および外面

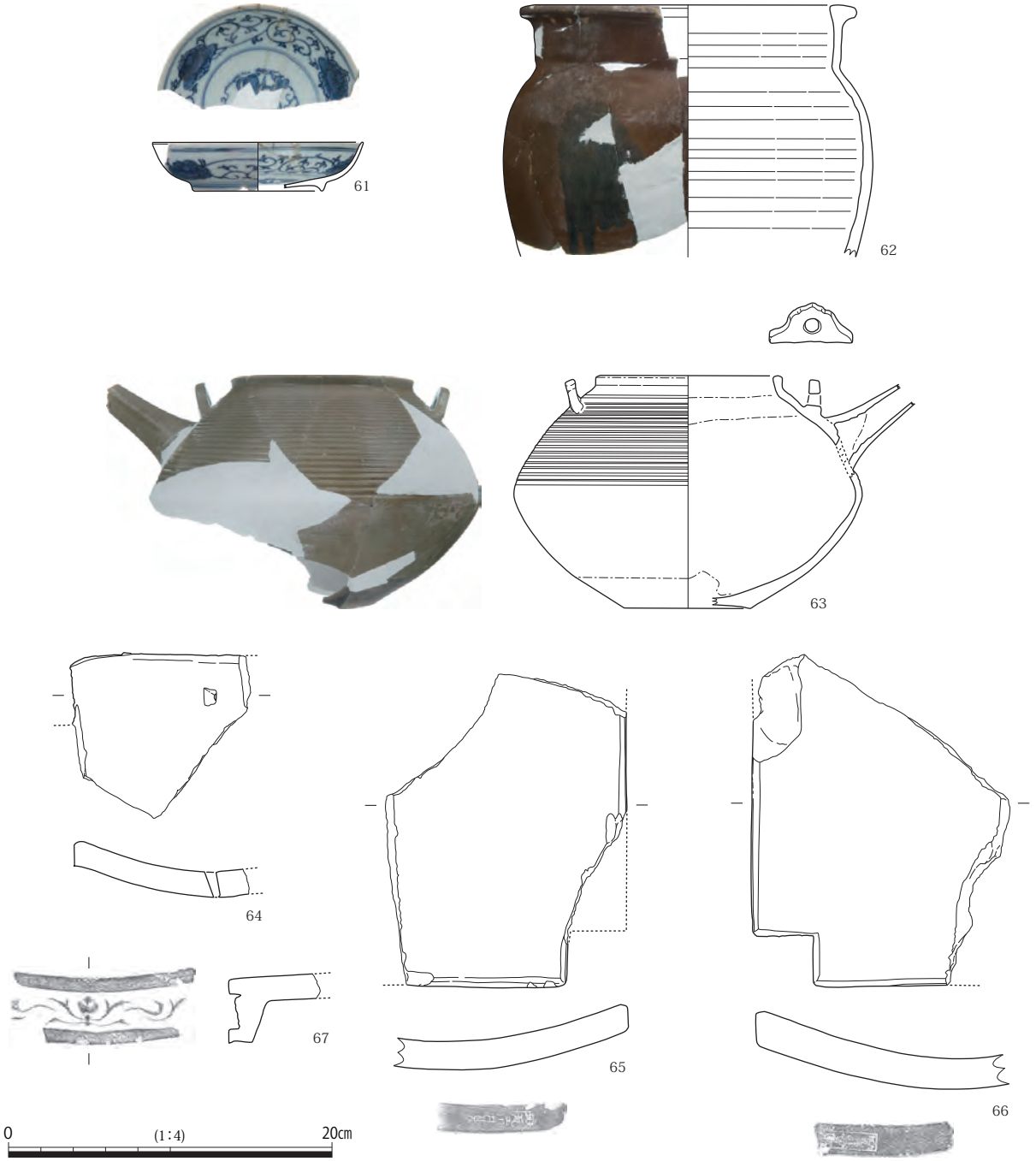


図 18　４層上面　39 土坑出土遺物

図 19　4 層上面　49 土坑出土遺物（1）

口縁下部まで施釉する。内面に櫛目文を施す。また、見込み部にハリが残る。さらに、口縁部内外面には煤が付着する。口径 12.6 ㎝、器高 2.4 ㎝を測る。71 ～ 73 は肥前系磁器である。71 は見込み部に蛇の目釉剥ぎが残る。口径 11.7 ㎝、器高 3.4 ㎝を測る。72 は蛇の目高台をもつ。外面は唐草文、内面には雪輪文、見込み部には三方割銀杏文が施される。口径 13.9 ㎝、器高 3.7 ㎝を測る。73 は輪花状口縁をもつ。底部外面に胎土目が残る。口径 21.8 ㎝、器高 4.1 ㎝を測る。74 ～ 76 は肥前系磁器染付の碗蓋である。74 と 75 は端反りの端部をもつ。74 は口径 9.3 ㎝、器高 2.7 ㎝を測る。77 ～ 94 は碗である。77 ～ 83 は京・信楽系陶器の碗である。77・78 はいわゆる小杉碗である。79 は内面白化粧である。80 ～ 82 は端反りの口縁をもつ。80 は口径 9.2 ㎝、器高 5.1 ㎝を測る。83 は外面に銹絵を施す。84 ～ 86 は瀬戸・美濃焼の碗である。84 は銅緑釉を施す。85 は体部外面に削り出しによる亀甲文を、

図 20　4 層上面　49 土坑出土遺物（2）

体部裾部に放射状の沈線が認められる。86 は内外面ともに霊芝文を描く。ガラス継がみられ、高台内に焼継印が残る。口径 9.55 ㎝、器高 4.9 ㎝を測る。87 ～ 93 は肥前系磁器である。87・88 は共に口縁部内面に墨弾き技法による如意頭文が施文される。さらに、被熱が確認できた。87 は外面に霊芝文、高台内に角「福」の落款がある。口径 10.2 ㎝、器高 5.7 ㎝を測る。88 は口径 11.3 ㎝、器高 6.3 ㎝を測る。89 は赤絵の碗である。外面に花鳥図、見込み部に草花図を描く。口径 8.8 ㎝、器高 4.8 ㎝を測る。90・91 は丸碗である。90 は見込み部に麒麟図と雷文、口縁部内外面には菊の帯文を施す。92・93 は広東碗である。92 は口縁端部を端反りに仕上げる。復元口径 13.9 ㎝、器高 6.8 ㎝を測る。93 はやや内彎しながら上外方に立ち上がる体部をもつ。口径 11.1 ㎝、器高 5.95 ㎝を測る。94 は白磁の碗であ

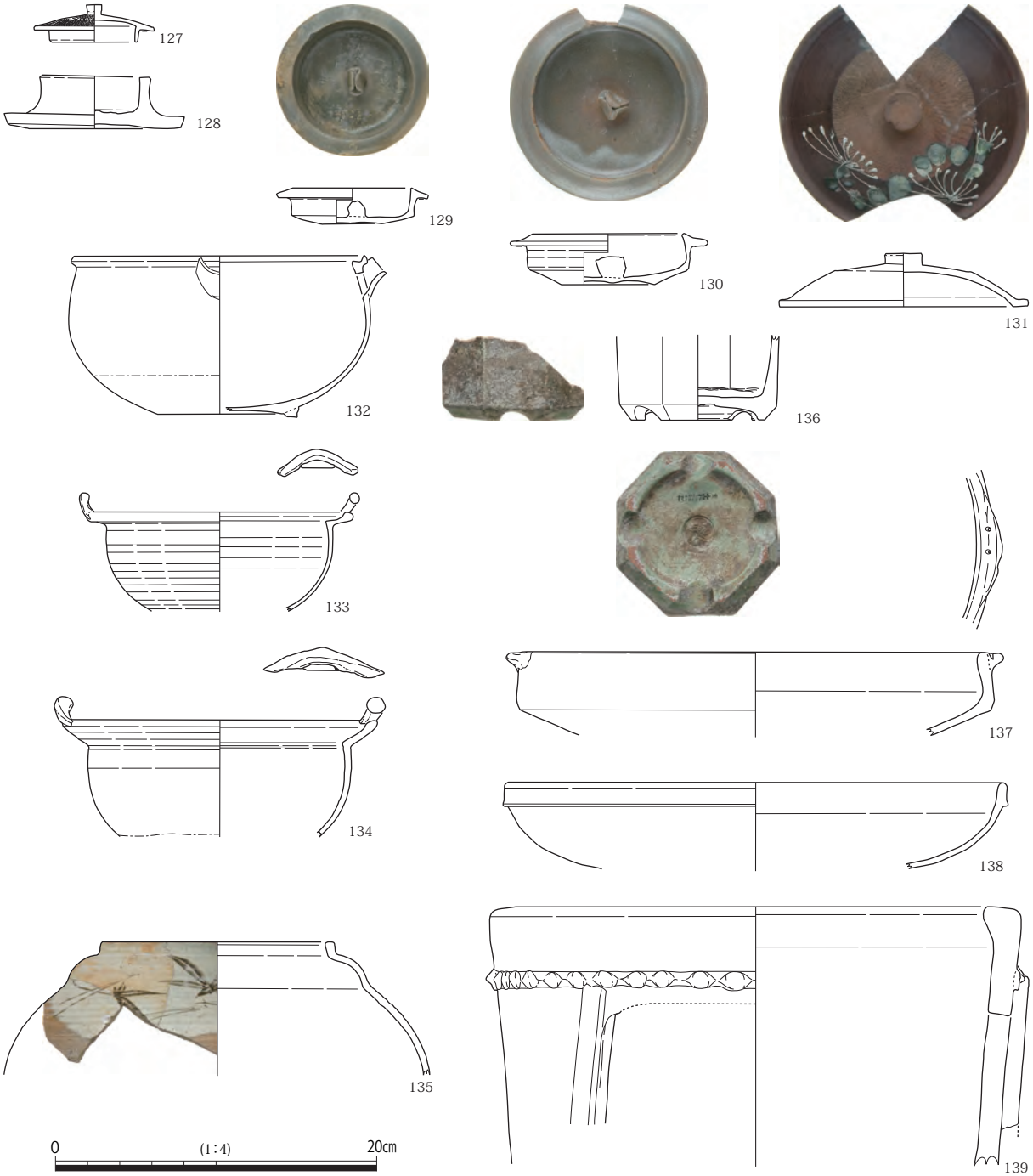


図 21　4 層上面　49 土坑出土遺物（3）

る。外面は龍や宝珠文様を型抜きで表す。出石産か。口径 10.2 ㎝、器高 6.6 ㎝を測る。95 ～ 97 は小杯である。95 は京・信楽系陶器である。96・97 は肥前系磁器の小杯である。97 は口径 6.3 ㎝、器高 5.2 ㎝を測る。98 ～ 101・103 は鉢である。98 は萬古焼朱泥の急須である。99・100 は京・信楽系陶器である。99 は筒形で、口縁端部は内側につまみ出して面をもつ。100 は碗形で、体部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部は内側に折り曲げて面をつくる。内外面とも錆釉を施す。101・102 は瀬戸・美濃焼で 101 は碗形の鉢で内外面共に錆釉の地に飴釉を施す。102 は鉄釉の袴腰香炉である。口径 11.5 ㎝、器高 5.7 ㎝を測る。103 は堺焼の鉢で底部内面中央に窪みを設けており、植木鉢として転用できるようになっている。104 は堺焼の擂鉢である。見込み部にいわゆるウールマーク状の擂目が残る。105 ～ 107 は丹波焼の徳利である。106・107 は鉄釉を施した貧乏徳利である。108・109 は瀬戸・美濃焼で 108 は鉄釉の仏花瓶である。109 は緑釉瓶掛の体部と考えられる。110・111 は肥前系磁器染付の油壺と壺体部である。110 は口径 2.2 ㎝、体部最大径 7.8 ㎝、器高 7.4 ㎝を測る。112 ～ 116 は京・信楽系の土師質土器でいずれも柿釉を施す。112・113 は灯明皿である。112 は口径 5.7 ㎝、113 は口径 7.3 ㎝を測る。114 ～ 116 は油受皿である。114 は復元口径 5.6 ㎝、115 は口径 7.2 ㎝、116 は復元口径 9.4 ㎝を測る。117 は瀬戸・美濃焼の灯明台である。口径 6.4 ㎝、器高 4.0 ㎝を測る。118 は肥前系磁器のお神酒徳利である。口径 1.7 ㎝、器高 7.8 ㎝を測る。119 は瀬戸・美濃焼のミニチュアの鍋である。把手はヘラ描きの木の葉文を施す。120 ～ 123 は土人形である。120 は犬の頭部、121 は狛犬もしくは獅子の体部、122 はキツネ面、123 は力士である。124 は箱庭道具の城である。125・126 は泥面子で 125 は鯛、126 は花菱の家紋をもつ提灯である。127 ～ 131 は土瓶や鍋の蓋でいずれも京・信楽系陶器である。127 は外面に櫛描きの放射状文を施す。口径 5.2 ㎝を測る。132 ～ 134 は鍋である。132 は伊賀焼丸柱の行平鍋である。133 は瀬戸・美濃焼、134 は関西系陶器である。135 は京・信楽焼系陶器の茶釜である。136 は軟質施釉陶器の香炉もしくは火入れである。平面八角形を呈し、底部は碁笥底で半月形の切り込みを 4 カ所入れる。また、高台内に「樂」字印がある。137・138 は土師器の焙烙である。137 は難波洋三氏の編年（難波 1992）の Da2 類、138 は G 類である。また、138 は胎土中に金雲母を多く含む。139 は土師質の焜炉である。49 土坑から出土した遺物は、18 世紀後葉から 19 世紀前半に属する。

1004 土坑（図 8・12、図版 4） 1D-3c・3d 区に位置する。平面長方形の土坑である。規模は長辺 3.1 m、短辺 2.1 m、深さ 0.5 mを測る。遺物は須恵器や近世陶磁器の細片が出土した。

1005 土坑（図 8・12・13、図版 4・34） 1D-4d 区に位置し、30 土坑の南約 2 mで検出した。一辺 2.7 ～ 2.5 m、深さ 0.4 mの方形の土坑で、底を平坦に仕上げる。遺物は陶磁器類（5・7・8・10・14）が出土した。5 は肥前系磁器の皿である。7・8 は京・信楽系陶器の碗である。7 は「小松吉」、8 は「寶」の刻印がある。10 は肥前系磁器の碗である。14 は備前焼の鶴首徳利である。18 は土人形である。仏像もしくは僧侶像と考えられるが頭部および下半身を欠く。遺物は 18 世紀後半の所産である。

1008 土坑（図 8・11・13、図版 4） 1D-5c・5d 区に位置する。平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は一辺 1.4 m、深さ 0.2 mを測る。遺物は 15 の瀬戸・美濃焼（志野）の向付が出土した。半環足をもつ。器高は 4.8 ㎝である。

1011 土坑（図 8・11） 1D-6d 区に位置する。平面円形で、規模は直径 0.9 m、深さ 0.45 mを測る。遺物は近世陶磁器や瓦の細片が出土した。

1012 土坑（図 8・11、図版 4） 調査区の最西端で、1D-7c・7d 区に位置する。1011 土坑の西北西

５mにあたる。遺構の西半部は後世の攪乱によって失われていた。規模は直径 1.1 m、深さ 0.6 mを測る。埋土中から近世陶磁器類の細片と共に 140 g分のヤマトシジミの貝殻が出土した。

40 溝（図８・11・13、図版 34） 1D-6b・6c 区に位置し、39 土坑に西接する。南北方向にはしり、溝の北端部は東へ屈曲する。46 堀に切られる。規模は残存する幅 1.0 m、深さ 0.4 mを測る。遺物は近世陶磁器が出土した。１は瀬戸・美濃焼の皿である。６は瀬戸・美濃焼の丸碗である。内面および外面上半部に施釉する。12 は瀬戸・美濃焼（志野）の入隅四方向付である。底部は碁笥底を呈する。16 は備前焼の種壺である。２カ所に耳がつく。17 は土師質の焼塩壺である。全体的に粗い造りである。口縁部直下にユビオサエによる紐掛け用の括れを造り出す。口径 4.3 ㎝、器高 8.9 ㎝を測る。

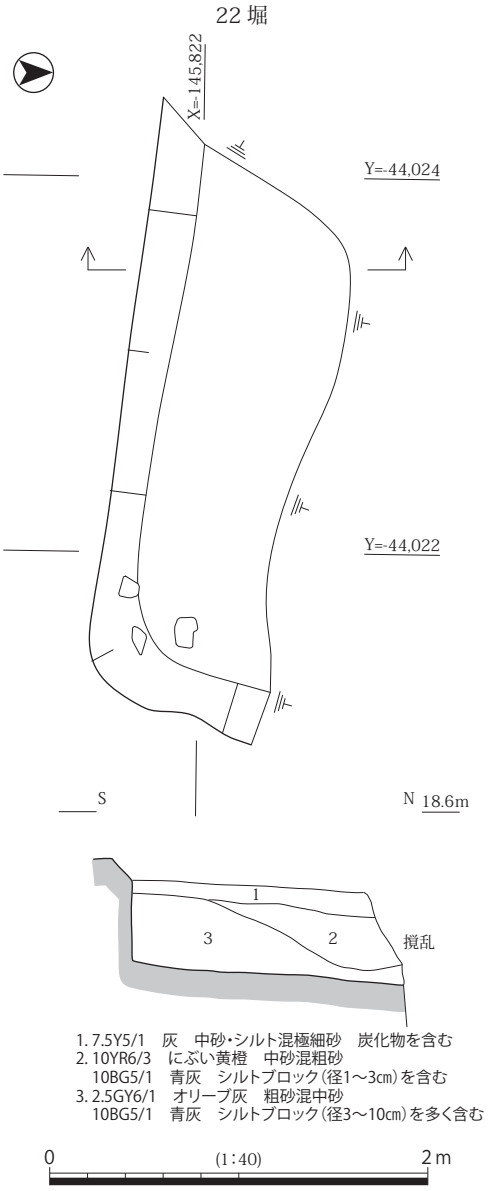


図 22　４層上面　22 堀平・断面図

22 堀（図８・22・23） 1D-3c 区に位置する。後述する 46 堀の南に位置する。遺構の大半を攪乱で失う。東西方向に軸をもち、全長 8.2 m、幅 3.1 m、深さ 0.6 mを測る。46 堀にほぼ平行する形で掘り込まれていたことから堀としたが、深さが 0.6 mと浅いことや全長が 8.2 mと短いことなどから土坑の可能性も残る。遺物は桟瓦を含む瓦片と共に近世陶磁器などが出土した。140 は前野山系肥前系陶器の碗である。外面に銅緑釉を施す。141 は肥前系陶器の呉器手碗底部である。142 は肥前系磁器染付の丸碗である。143 は肥前系青磁の筒形碗である。144 は土人形の天神像である。遺物は 18 世紀後半の所産である。

46 堀（図８・24・25、図版５・43 ～ 48） 堀は調査区中央部にあたる地山と谷を埋積する盛土層の境目に築かれており、東西方向に調査区を横断する。堀は西に向かって深くなって調査区外に延びる。堀の東は調査区の東端部で浅くなっており、収束が近いと考えられる。規模は最大上幅 10.8 m、深さ 0.8 ～ 2.6 mを測る。断面形状は逆台形を呈し、底部は平坦である。地層断面観察の結果、堀の底部には水性堆積層がほとんど確認できず、また、堀埋土はブロック土が多く混じっていたことなどから、堀が掘削された後、短期間で一気に埋め戻されたものと考えられる。遺物は少なく、近世陶磁器や桟瓦を含む瓦片など（145 ～ 152）であっ

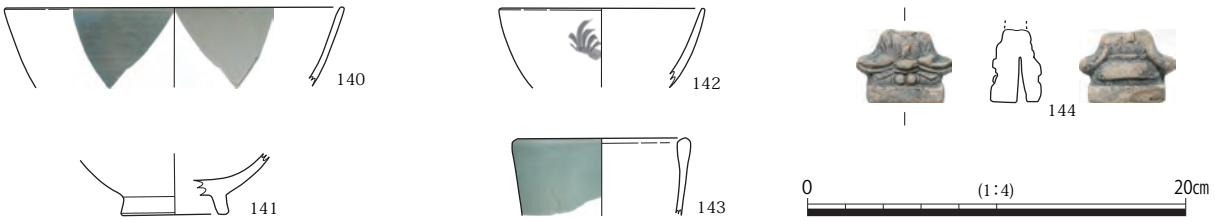


図 23　４層上面　22 堀出土遺物

た。145 は萩焼の皿で、19 世紀初頭の所産である。146 は肥前系磁器染付の皿である。口縁内面に四方襷文を施す。147 は肥前系磁器の外青磁染付の筒形碗である。18 世紀後半に比定される。148 は陶器の火鉢であるが産地は不明である。149・150 は備前焼の擂鉢である。151 は水波文軒平瓦である。豊臣期の遺物の混入と考えられる。152 は桟瓦で、小口部に「○」の刻印を有する。

特筆すべき点として、堀の底や南斜面部から 26 点の花崗岩が出土したことが挙げられる。これらの花崗岩は、大坂夏の陣で焼失してしまった大坂城が徳川氏によって再築された際に石垣材として集められた残石と考えられ、刻印が刻まれたものや、矢穴および矢穴痕列が残るものが見受けられた。これら

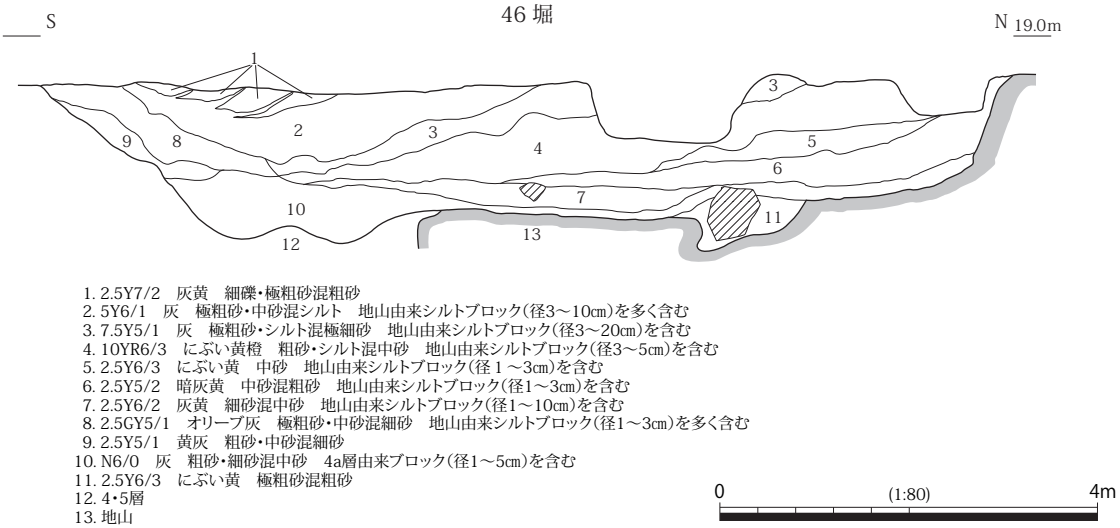


図 24　４層上面　46 堀断面図

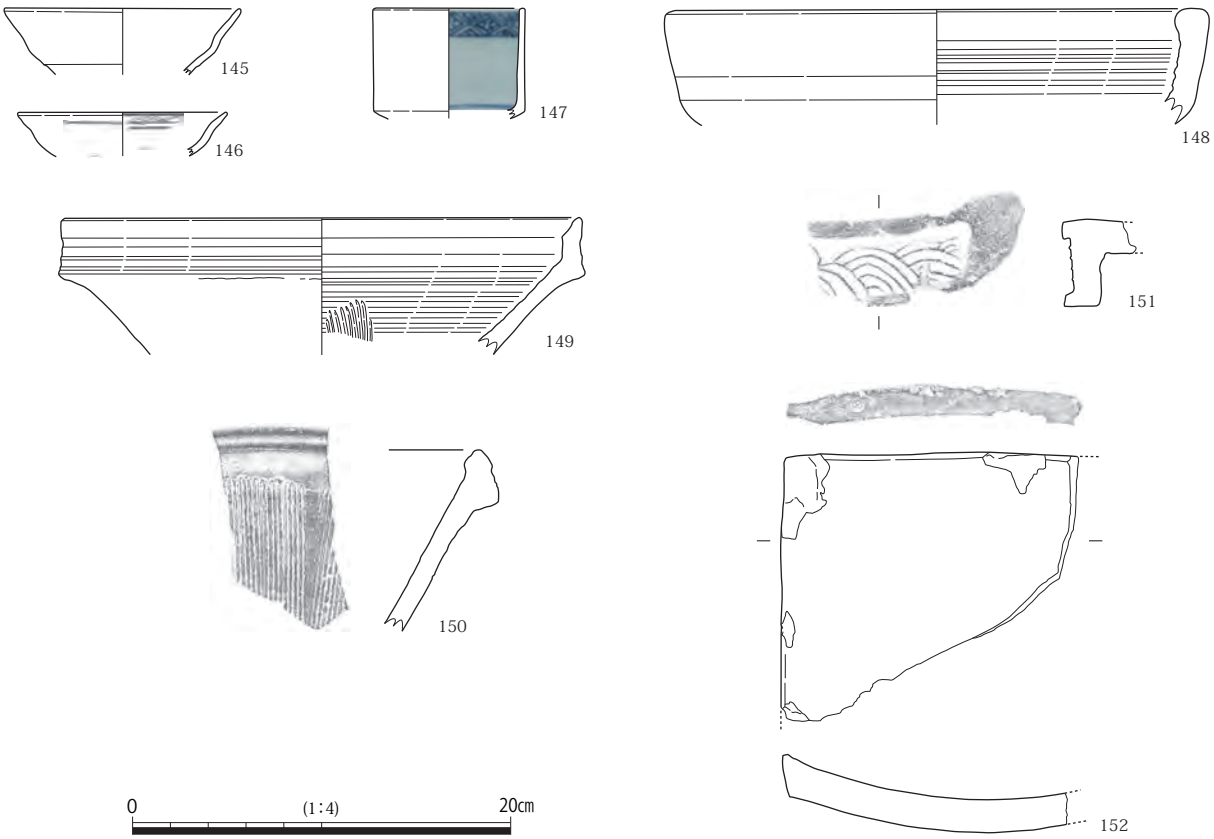


図 25　４層上面　46 堀出土遺物

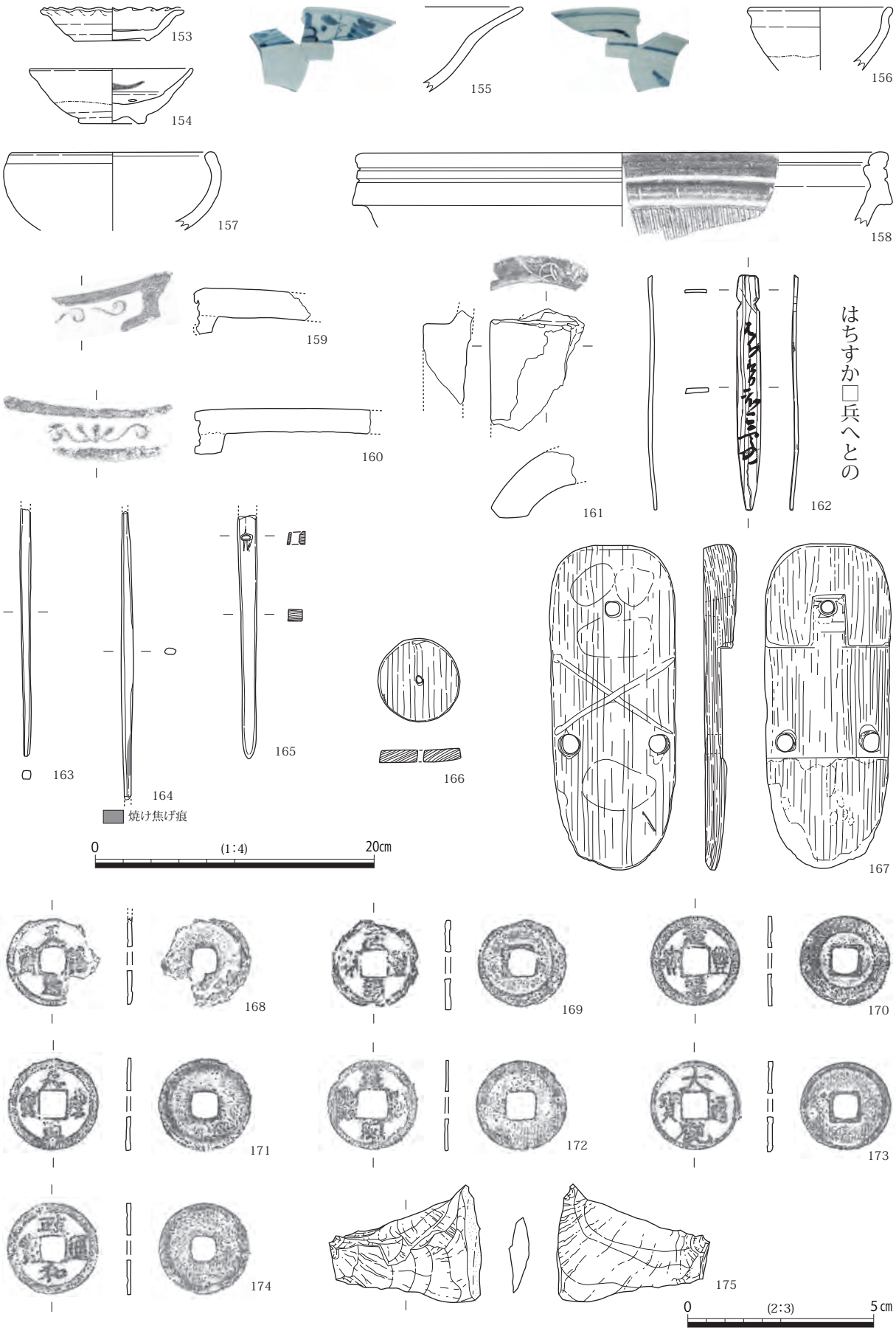

153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
はちすか□兵へとの
163
164
165
166
167
焼け焦げ痕
0
(1:4)
20cm
168
169
170
171
172
173
174
175
0
(2:3)
5cm

図 26　4・5 層出土遺物

の残石については第９章で詳しく述べるが、出土した 26 点のうち刻印が刻まれた残石は 19 点で、刻まれた刻印の種類は５種類確認できた。最も多かったのは「 ⊿ 」で 19 点中 17 点あり、次は「 ⊖ 」が３点である。今回最も多くみられる「 ⊿ 」の文様は豊後国岡藩中川久盛の家臣で石割奉行であった三宅平右衛門所縁の文様といわれている。

一方、矢穴もしくは矢穴痕列が残るものは 23 点で、矢穴・矢穴痕や刻印がみられない全くの自然石は１点のみであった。そして、矢穴痕列については森岡秀人・藤川祐作両氏の分類（森岡・藤川 2008）によるＡタイプが多く、一部に古ＡタイプとＣタイプが認められた。Ａタイプは徳川氏による大坂城再築時に普及したタイプとされており、これらの残石が大坂城再築時にもたらされたものであったという証左となろう。また、古Ａタイプの矢穴の存在は、豊臣期に切り出された石材が転用された可能性を示すが確証を得るまでには至らなかった。さらに、近世中頃以降に出現するＣタイプの矢穴は、保管されていた残石が再加工されて、その一部が転用された際の痕跡と考えられる。

元和６（1620）年から寛政６（1629）年にかけて徳川氏の命によって実施された大坂城再築はいわゆる天下普請で、西国の外様大名を中心に普請に携わったものである。今回、46 堀から出土した残石は、大坂城再築に際して豊後国岡藩中川久盛によって集めてこられた石垣材の残石が、当調査地の周辺で保管されていたが、18 世紀後半になって 46 堀が埋め戻される際に廃棄されたものと考えられる。

４・５層出土遺物（図 26、図版 34・35） 基本層序でも述べたが、４・５層は徳川氏による大坂城再築時に調査区内をはしる開析谷を埋積させた盛土層である。その性格上、一気に埋められており、包含する遺物は極めて少ない。ここで挙げた遺物の多くは 6a 層上面に近い４・５層の下層部分から出土したものであるが、162 木簡は層の中層部分から、168 ～ 174 の銭貨は層の最上層から出土した。153 は瀬戸・美濃焼の折縁ヒダ皿である。見込み部を釉剥ぎする。また、高台内に重ね焼きの痕跡が残る。復元口径 10.2 ㎝、器高 2.45 ㎝を測る。154 は肥前系陶器の皿である。内面４カ所に胎土目が残る。また、内面に鉄絵を施す。復元口径 11.6 ㎝、器高 5.0 ㎝を測る。155 は肥前系磁器染付の大皿である。156 は瀬戸・美濃焼の天目碗である。157 は備前焼の鉢である。158 は堺焼の擂鉢の口縁部である。159・160 は軒平瓦である。共に唐草文を有する。161 は丸瓦である。尻部に「 ㋓ 」のスタンプ文をもつ。162 は木簡である。層の中ほどから出土した。木簡は付札木簡で頂部から 2.0 ㎝下に切込みを入れ、先端は細く加工する。全長 16.8 ㎝、幅 1.7 ㎝、厚さ 0.3 ㎝を測る。材質はヒノキで、木取りは板目である。墨書は表面にのみ書かれており、裏面に墨痕はなかった。墨書については公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪城天守閣の跡部　信・瀬島宏計両氏に釈読していただいた結果、文字は９文字あり、５文字目の判読は困難であったものの、「はちすか□兵へとの」と釈読できた。しかし、蜂須賀家の家臣等の中に記載された人物名はないとのことであった。163・164 は箸である。164 は一部焼け焦げ痕が認められる。165 は木針と考えられるが、頭端部を欠く。断面方形を呈し、頭部付近には長方形の孔を１カ所穿つ。先端は削って尖らせる。166 は円形の蓋である。中心部にツマミを取り付けるための孔を有する。167 は連歯下駄である。『大坂城址Ⅱ』(江浦 2002)における分類によるとⅠ 2d 類である。台表に「×」状の線刻がある。全長 23.3 ㎝、幅 9.0 ㎝を測る。168 ～ 174 は北宋銭で、まとまって出土した。168 は天禧通寶（1017 年初鋳）、169 ～ 171 は元豊通寶（1078 年初鋳）、172 ～ 174 はそれぞれ皇宋通寶（1038 年初鋳）、大観通寶（1107 年初鋳）、政和通寶（1111 年初鋳）である。175 はサヌカイト製の剥片である。

第５章　大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築前（6a・6b 層上面）の遺構・遺物

6a 層上面（図 27、図版６）　当該遺構面は、徳川期の大坂城再築時に開析谷を埋積させた盛土層を除去して検出した、大坂夏の陣終結後の遺構面である。遺構面は、東から西方向に向かって開く開析谷の北壁および地震による地滑りや侵食作用によって形成された二段の平坦面部からなり、北から南方向に向かって低くなる。平坦面は段丘上面から 2.5 ～ 3.6 m下がったところで一段目を検出した。この一段目の平坦面は地滑りによって形成されたもので、直径 10 m程度の円弧状を呈する地滑り痕が連なった形状をとる。一段目の平坦面は南北幅約５～８ mをもつ。一方、二段目の平坦面は X=-145,820 ライン付近をはしる 0.5 ～ 1.0 mの比高をもつ崖の南側に展開する。二段目の平坦面は南北幅約 10 mをもつ。検出した遺構面の標高は一段目で 14.9 m～ 15.9 mで、1D-4c・5b 区では 14.6 mを測る。二段目の標高は 14.2 m～ 15.3 mで、概ね東から西へと傾斜する。

当該遺構面で検出した主な遺構は畠跡、溝、畦畔、畦畔状高まり、竹敷きなどである。大坂夏の陣の後から大坂城再築までの間、畠として利用されており、畠跡は一段目の平坦面で検出した。二段目は調査区南端部で東西方向にはしる 64 畦畔状高まりと 59・66 溝を検出した。

畠跡・53 溝（図 27・28・29、図版６・７）　畠跡を検出したのは、調査区北西端の一段目の平坦面部分である。畠跡は東西二筆分検出した。畠跡の標高は 15.2 mであった。西側の畠跡では畝立ては検出されなかったが、東隣りの畠跡との境界に畦畔が設けられていた。東側の畠跡の平面形は半月状を呈する。畠跡の四周は溝（53・54）を巡らせ、その中を東西方向に主軸をもつ畝立てがなされていた。また、畠跡の南端部には畦畔が設けられていたが、西半部は攪乱により失われていた。このことから、東側の畠跡の南端部にも畦畔が形成されていたと推察される。畠跡の耕作土層は炭化物を多く含む粗砂混極細砂層であるが、これは大坂夏の陣によって生じた焼土層が捲き込まれたためである。53 溝は畠跡の西側をはしる溝で、幅 0.6 ～ 1.0 m、深さ 0.1 mを測る。溝内から陶磁器や漆器椀が出土した。178 は瀬戸・美濃焼の天目碗である。182 は漆器椀底部である。内面は赤漆、外面には黒漆を塗った上に赤漆で銀杏の文様を描く。

64 畦畔状高まり（図 27・28、図版７）　調査区南端付近で検出した、東西方向にはしる畦畔状高まりである。規模は幅 0.6 ～ 1.1 m、高さ 0.1 ～ 0.5 mを測る。この畦畔状高まりの北側には 59 溝や 66 溝が取りつき、南側では 61 竹敷きを検出した。

59 溝（図 27・28・29）　調査区の南西部に位置する。64 畦畔状高まりに北接し、溝の西端部では２条に分岐する。溝の北東部では畠跡の東端部から流下した 54 溝が取りつく。規模は幅 1.1 ～ 2.6 m、深さ 0.1 ～ 0.3 mを測る。溝内から土器、陶磁器や瓦などが出土した。177 は土師器の灯明皿である。口縁内外面に灯心による煤の付着が認められる。180 は丹波焼の擂鉢である。181 は軒丸瓦である。瓦当面に「福」字を配する。16 世紀後葉から 17 世紀初頭の所産と考えられる。

60 溝（図 27・28・29、図版 35）　調査区の南西端、1D-6c 区で検出した。59 溝の南 0.5 mに位置し、溝の西側は調査区外に延びる。規模は幅 0.7 m、深さ 0.15 mである。溝内から 184 木製楔が出土した。楔は台形状を呈し、上辺長 4.8 ㎝、下辺長 14.3 ㎝、幅 2.0 ㎝、厚さ 2.6 ㎝を測る。

61 竹敷き（図 27・29・30、図版８）　竹敷きは調査区の南辺部、64 畦畔状高まりの南に位置し、6b

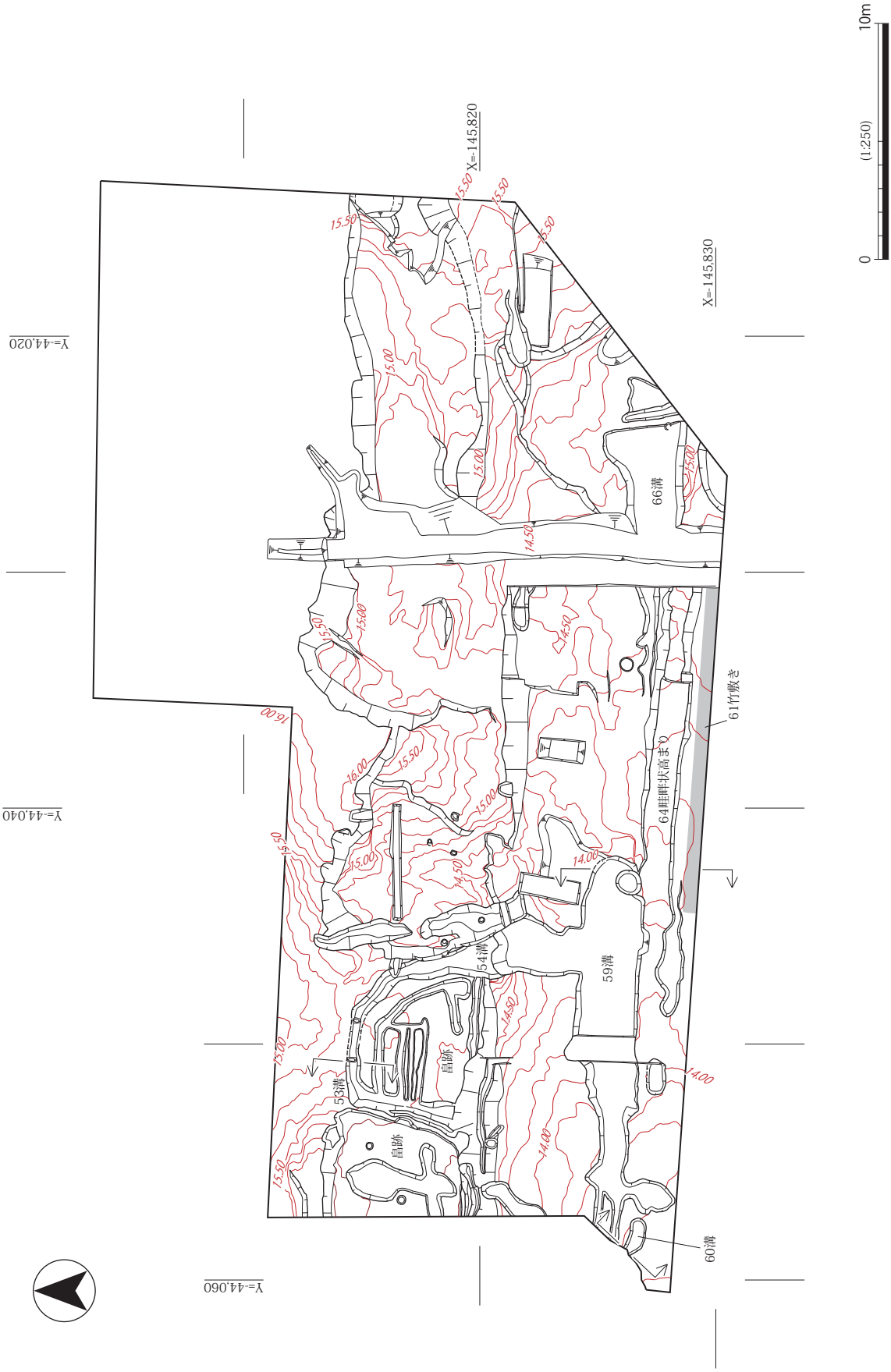


図 27　6a 層上面　平面図

層上面検出 68 溝の埋め戻し土である中砂混シルト層（直径３～ 20 ㎝のシルトブロックを含む）を除去して検出した。このことから、この竹敷きは、溝を埋め戻した際に地盤沈下を防ぐため、敷粗朶工法を行った結果と考えられる。竹敷きは長さ１～２ｍ、直径約２㎝の竹を３～５㎝間隔に東西方向に敷き並べた後、長さ約 0.8 ｍ、直径約２㎝の竹をやはり３～５㎝間隔に南北方向に敷き並べる。竹同士の結束は認められず、敷き並べただけであった。この敷粗朶工法による竹敷きは、残りが悪く図化できなかった箇所も含めて長さ 15 ｍにわたって認められた。竹敷き検出時に出土した遺物は、土器、陶磁器や漆器椀などである。176 は土師器皿である。179 は唐津焼の碗底部である。183 は漆器椀底部である。内面は赤漆、外面には黒漆を塗った上に赤漆で紅葉の文様を描く。

6a 層出土遺物（図 31、図版 35） 6a 層からは土器、陶磁器、土製品、瓦、漆器、木製品、鉄製品などが出土した。185 ～ 189 は土師器皿である。185 と 189 は畠跡の耕作土中より出土した。190 は瀬戸・美濃焼の灰釉内禿皿で被熱する。191 は瀬戸･美濃焼の天目碗である。192 は漳州窯青花碗である。

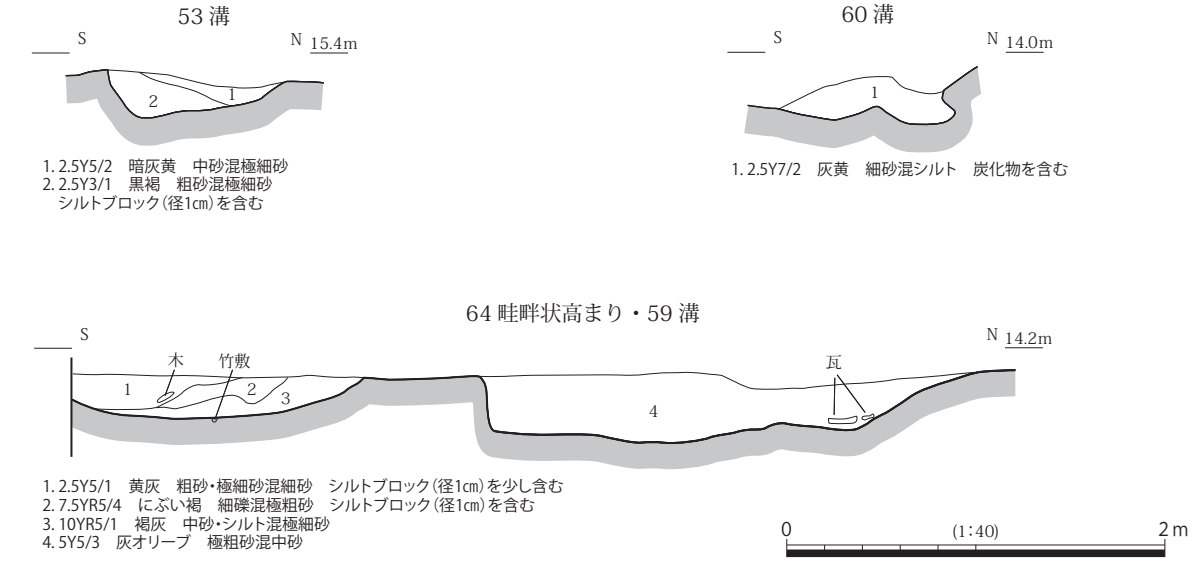


図 28　6a 層上面　53・59・60 溝、64 畦畔状高まり断面図

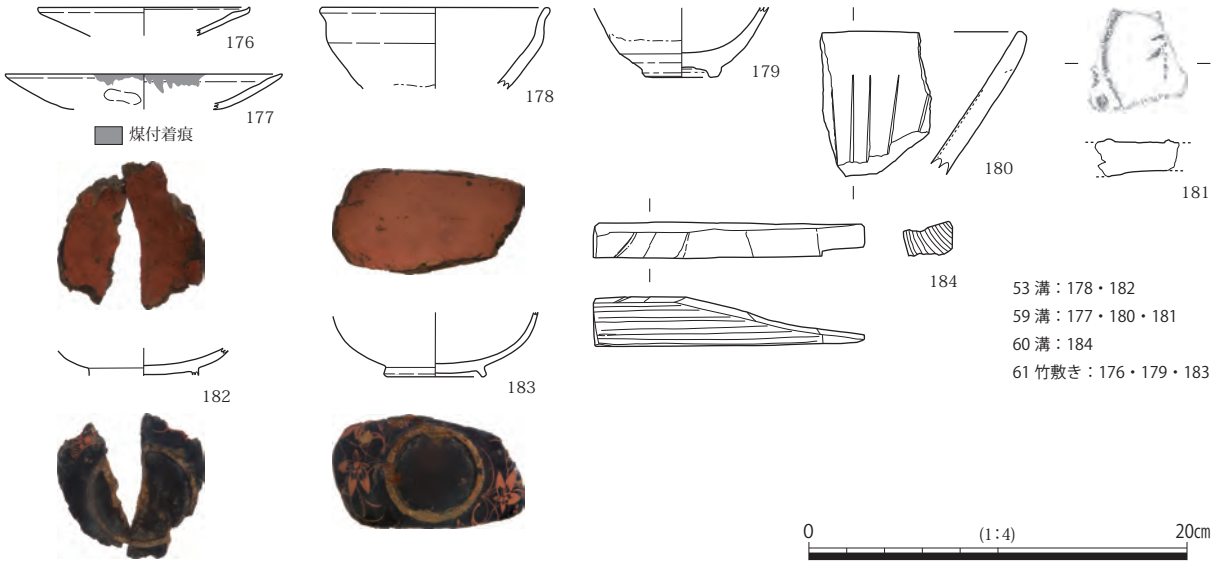


図 29　6a 層上面　53・59・60 溝、61 竹敷き出土遺物

図 30　6a 層上面　61 竹敷き平面図

193 は瀬戸・美濃焼もしくは唐津焼と考えられる擂鉢である。194 は土師質土器の十能である。195 は土師器のミニチュア蓋である。最大径 2.4 ㎝、器高 1.2 ㎝を測る。196 はトリベである。内面には金の細粒の付着が認められた。197・198 は軒平瓦である。197 は 3 転以上の唐草文をもつ。198 は内区に 3 転の唐草文を配し、中心飾は桐葉もしくは蔦葉である。199・200 は漆器椀で、いずれも低い高台をもつ。199 は内面に赤漆、外面には黒漆を施す。高台見付に赤漆で「上」と書かれている。200 は内外面とも黒漆を塗り、見込み部に赤漆で花文を描く。また、高台見付に「一文字に一星」の線刻がある。201 は鑓の鞘である。根元は半楕円形に削り込んで呑口を造る。残存長 33.5 ㎝、最大幅 3.8 ㎝、身幅 2.8 ㎝を測る。202 は鉄製の釘である。全長 8.2 ㎝を測る。

6b 層上面（図 32、図版 9・10） 6a 層を除去して検出した。当該面は 6a 層上面と同様、大坂夏の陣直後の遺構面である。調査区西端部にあたる一段目の平坦面の土層を観察したところ、大坂夏の陣で生じた焼土層が攪拌された状態が確認できた。畝立てなどの遺構は検出できなかったが、これは 6a 層上

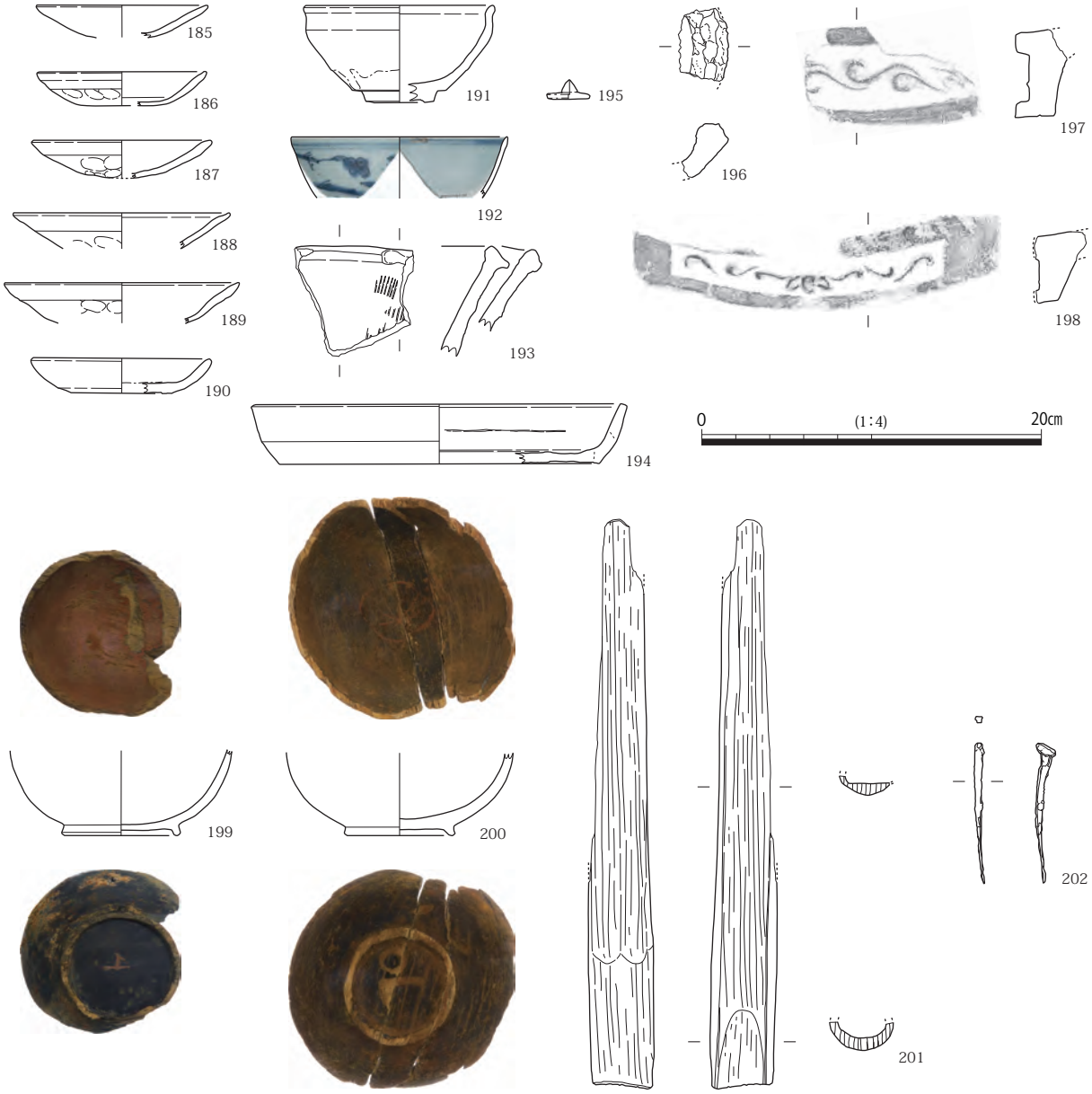


図 31　6a 層出土遺物

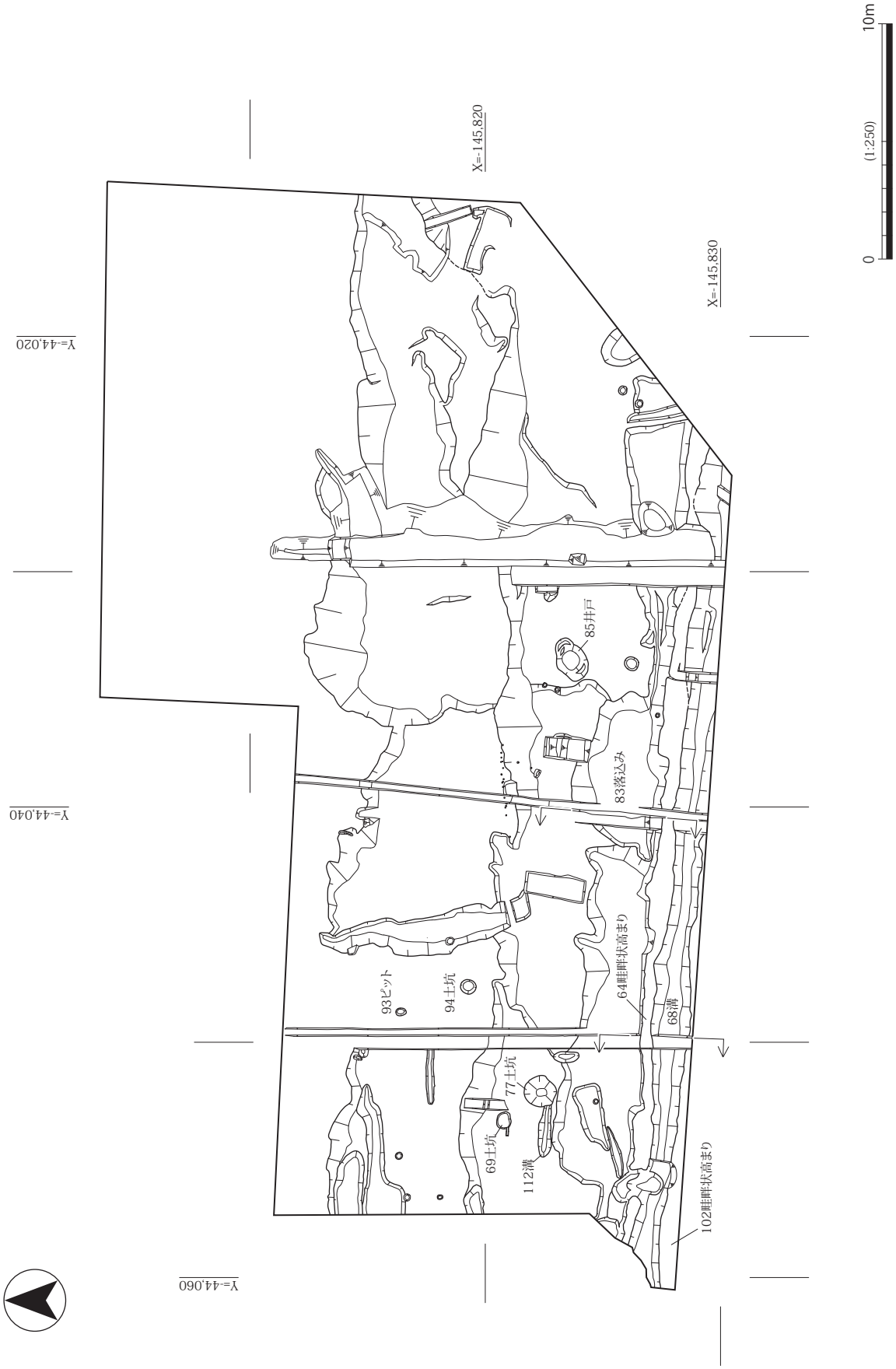


図 32　6b 層上面　平面図

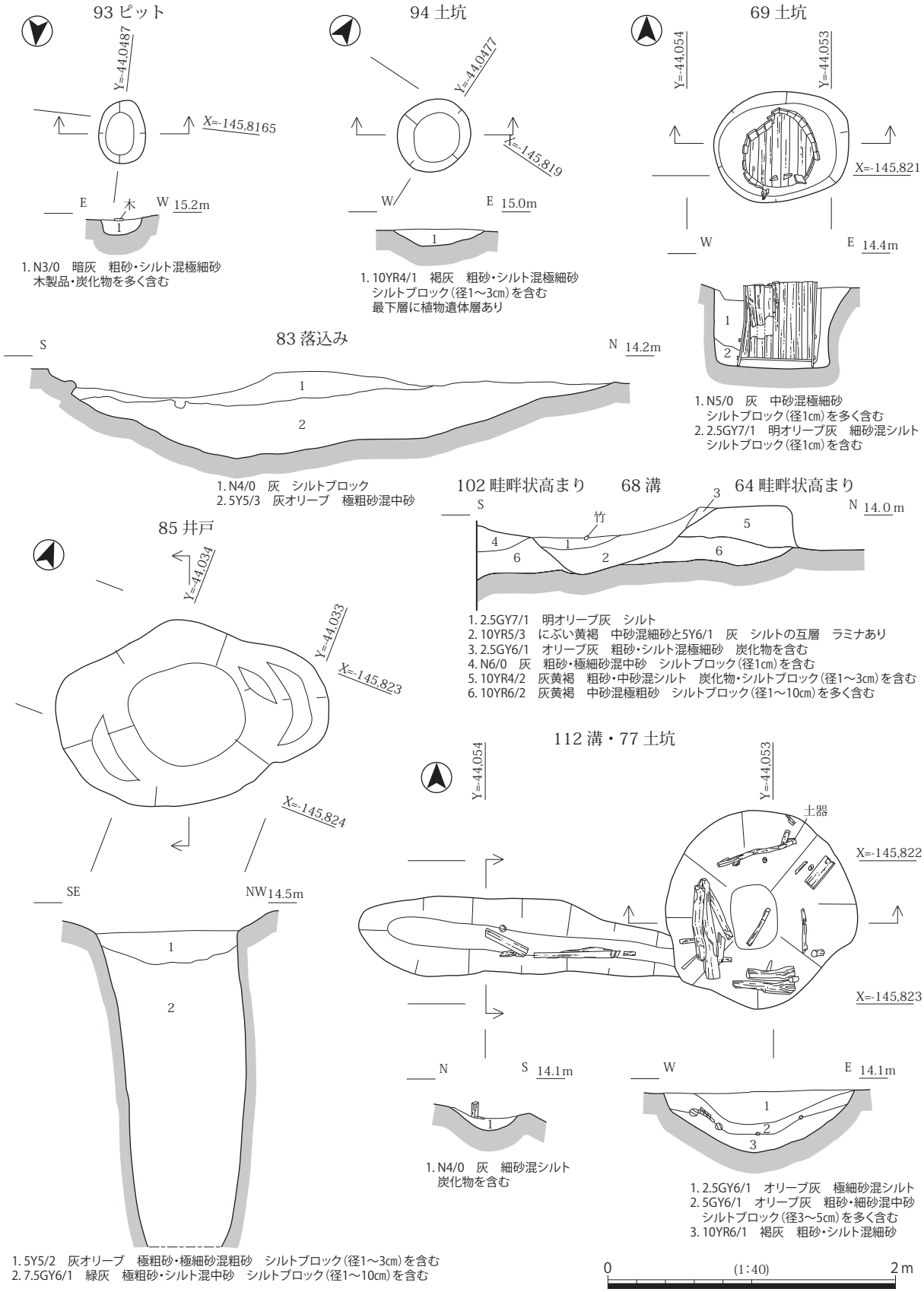


図 33 6b 層上面

93 ピット、69・94 土坑、85 井戸、68 溝、64・102 畦畔状高まり、83 落込み平・断面図

面の耕作時に失われたものと考えられる。一方、二段目の平坦面では畦畔状高まりを伴う溝や井戸、土坑などを検出した。

93 ピット（図 32・33・34、図版 11・35） 1D-5b 区で検出した。長径 0.45 m、短径 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。土師器、陶磁器、木製品などが出土した。204 は土師器皿の口縁部である。206 は瀬戸・美濃焼の天目碗で底部を欠損する。口径 11.2 ㎝を測る。212・213 は箸である。どちらも一端が欠損する。

69 土坑（図 32・33、図版 11） 二段目平坦面で崖裾部にあたる 1D-6c 区で検出した。土坑は長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さ 0.6 mで、中に直径 0.5 m、残存高 0.6 mの木製桶が設置されていた。桶内から 300 粒を超えるメロン仲間の種子をはじめとする大型植物遺体が出土した。詳細については第 8 章第 2 節で述べるが、出土した主な大型植物遺体はメロン仲間種子の他に、ヒユ属種子、ナス近似種種子、イネ穎、ヤマモモ核、スモモ核など 23 種におよぶ。最も多く出土したメロン仲間については種子ごと食用することが多いことや、停滞水に起因する水生植物由来の種子、胞子や葉が出土しなかったこと、さらに 6a 層上面では土坑北側の一段目が畠として利用されていたことなどから、この 69 土坑は排泄物貯蔵目的の土坑であった可能性が高い。

77 土坑（図 32・33） 77 土坑は 69 土坑の南東 1.1 mにあたる 1D-6c 区で検出した。また、112 溝が 77 土坑の西に接する。77 土坑の規模は直径 1.3 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は 3 層に分かれるが、中層の下面で桶材や自然木片などが出土した。

85 井戸（図 32・33・34、図版 11） 1D-4c 区で検出した。平面形は不整楕円形を呈し、長径 1.9 m、短径 1.3 mを測る。深さは掘削限界である標高 12.3 mまで掘り下げたが、底を検出することはできな

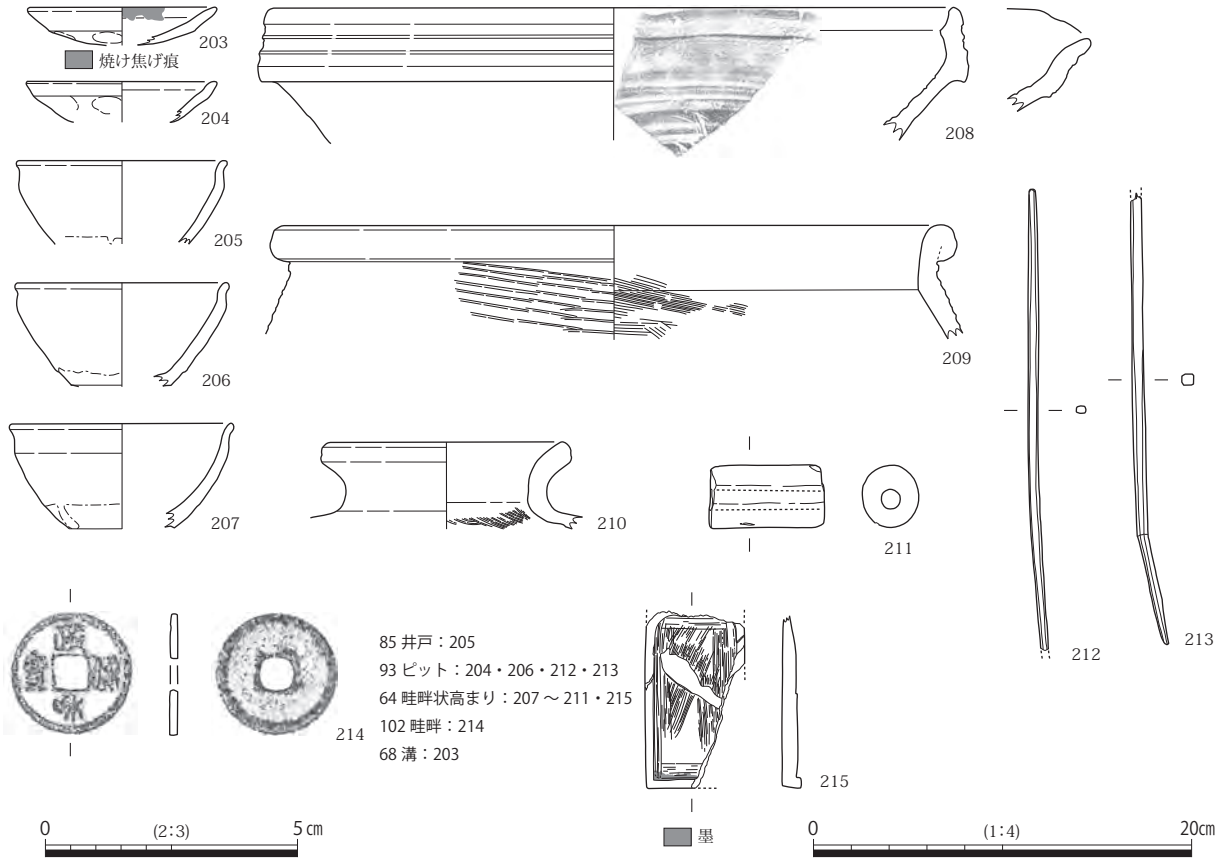


図 34　6b 層上面　93 ピット、85 井戸、68 溝、64・102 畦畔状高まり出土遺物

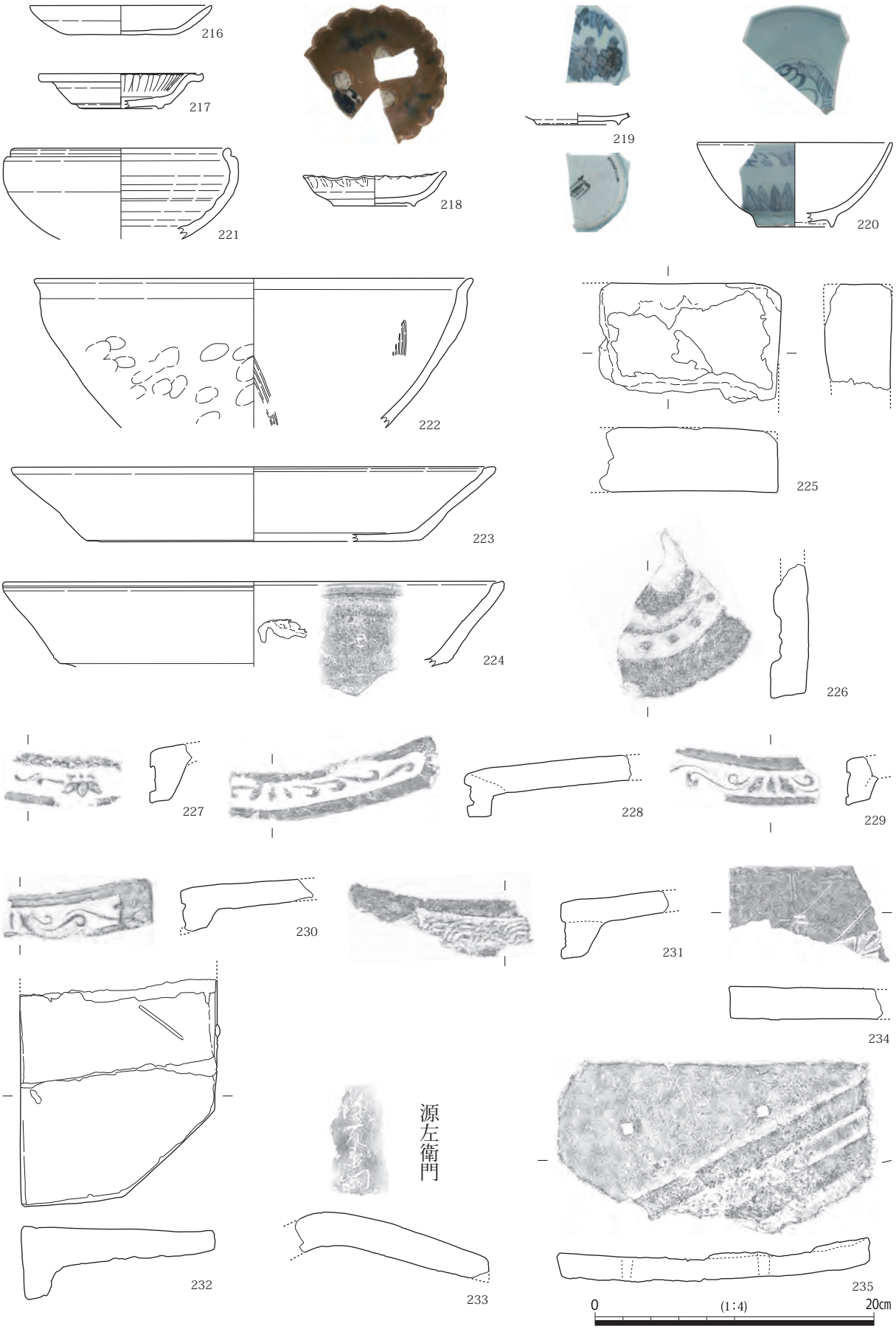


図 35　6b 層出土遺物（1）

かった。遺物の出土は少なかったが、205 の瀬戸・美濃焼の天目碗が出土した。

68 溝、64・102 畦畔状高まり（図 32・33・34、図版 10・35） 68 溝は調査区の南辺部を東西方向にはしる。溝の北側には 64 畦畔状高まり、南側に 102 畦畔状高まりを伴う。溝の規模は幅 1.1 ～ 1.5 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は中砂混細砂とシルトの互層でラミナが認められる。102 畦畔状高まりは調査区外に広がるため規模は不明であるが、64 畦畔状高まりは上幅 0.5 m、高さ 0.3 mを測る。6a 層上面で検出した 61 竹敷きは、68 溝を埋め戻す際に敷設されたものである。溝内から 203 土師器灯明皿が出土した。また、64 畦畔状高まりの盛土中から弥生土器、須恵器、陶器、土製品、石製品、人骨などが出土したが、弥生土器は細片で時期等は不明である。207 は瀬戸・美濃焼鉄釉天目碗である。208 は備前焼擂鉢の口縁部である。209 は湊焼甕口縁部である。口縁部は玉縁状に折り曲げる。外面はタタキ、内面はハケ目調整を行う。210 は須恵器壺口縁部である。盛土を行った際の混入と考えられる。211 は管状土錘である。全長 6.1 ㎝、幅 3.3 ㎝、穿孔径 0.9 ㎝を測る。85.6 g を量る。215 は石製硯である。海部を欠く。陸の端部に墨が残る。石材は高島石を使用する。102 畦畔状高まり盛土中から宋銭が出土した。214 は北宋銭の政和通寶（1111 年初鋳）である。494 人骨は下顎骨で Y=-44,050 ラインのセクション取り外した時に出土した。公立大学法人　大阪市立大学の安倍みき子氏より、30 歳代の男性のものであるとの知見を得た。

112 溝（図 32・33） 1D-6c 区で検出し、77 土坑に西接する。全長 2.2 m、幅 0.5 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は単層だったが上面で自然木片が出土した。

83 落込み（図 32・56） 1D-4c・5c 区で検出した。64 畦畔状高まりに北接する。規模は東西 7.0 m、南北 3.0 m、深さ 1.0 mを測る。8 層上面の 214・215 土坑、7 層上面の 136 落込みの名残と考えられる。遺物の出土はなかった。

6b 層出土遺物（図 35・36、図版 35・36） 216 ～ 219 は皿である。216 は土師器皿である。217 は瀬戸・美濃焼の灰釉折縁ソギ皿である。見込み部に釉剥ぎを行う。218 は瀬戸・美濃焼鉄釉の菊皿である。見込み部に 3 カ所胎土目が残る。口径 10.2 ㎝、器高 2.5 ㎝を測る。219 は青花皿で、見込み部には菊図、高台内に字款がある。漳州窯の所産である。220 は青花染付蓮子碗である。外面口縁部下

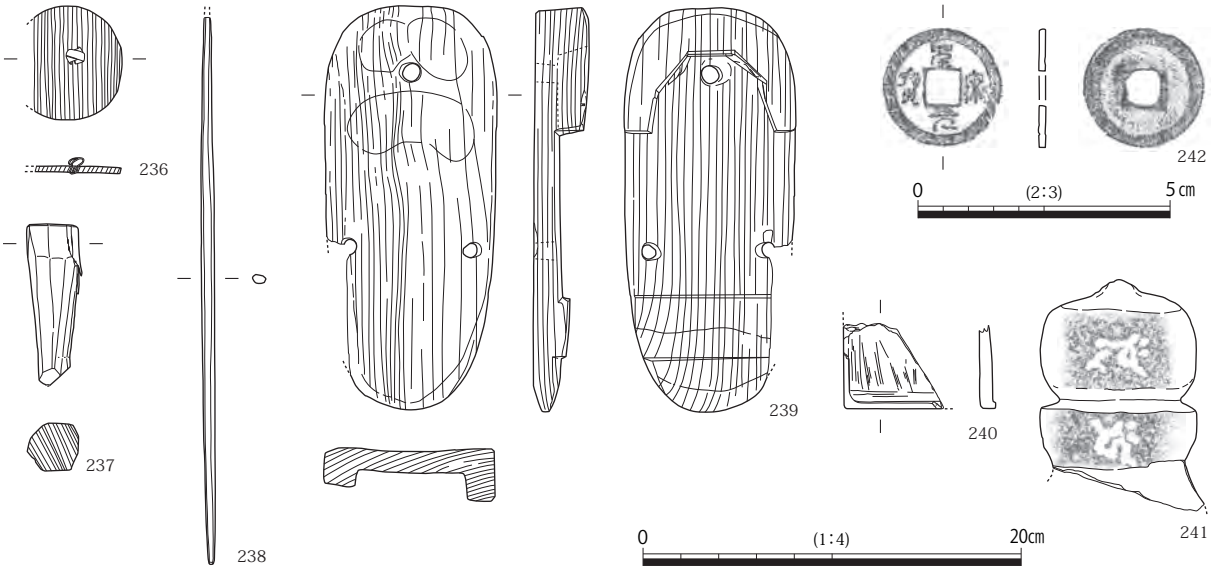


図 36　6b 層出土遺物（2）

に波濤文帯、体部下半に芭蕉葉文を、見込み部に法珠文をそれぞれ配す。器高 6.5 ㎝を測る。16 世紀後半の所産である。221 は備前焼鉢である。口縁端部は外側に折り返して玉縁状に仕上げる。222 は瓦質土器の擂鉢で、内面下半部は摩耗が顕著である。223・224 は丹波焼の大平鉢である。後者は内面にヘラ記号を付す。225 は瓦質の塼である。226 ～ 235 は瓦である。226 は軒丸瓦である。内区に巴文を配す。また、瓦当面には離れ砂が残る。227 ～ 231 は軒平瓦である。227 は中心飾に桐文を配す。唐草文は 2 転以上である。228 ～ 230 は中心飾に三葉を配す。228 は唐草文が 4 転、229 は 3 転以上、230 は 3 転である。231 は内区に水波文を配す。232 は道具瓦である。233 は鳥衾瓦か。表面に線刻で「源左衛門」と記す。豊臣氏からも瓦の用命を弁じられた御用瓦師寺島三郎左衛門の養子に源左衛門の名があるが、記された名が当人にあたるかどうかは不明である。234・235 は飾瓦である。234 は花菱文のスタンプ文と、「二」字を線刻する。235 は帯状突帯が 2 条斜めに並行してはしる。236 は木製蓋である。直径 6.0 ㎝を測る。樹皮紐を結んでツマミをつくる。237 は木栓である。先端を欠損する。残存長 8.5 ㎝、最大幅 2.7 ㎝を測る。238 は箸である。一端を欠損する。239 は連歯下駄である。全長 21.4 ㎝を測る。Ⅰ 2d 類に属する。後歯と後顎は磨滅が顕著である。240 は石製硯である。石材は高島石で虎斑が認められる。241 は花崗岩製の一石五輪塔である。火輪より下は欠損する。空輪と風輪にはそれぞれ北を表す「ནོ」「ནཱ」が刻まれる。242 は北宋銭の聖宋元寶（1101 年初鋳）である。

第６章　豊臣後期（７層上面）の遺構と遺物

７層上面（図 37、図版 12）　大坂夏の陣後の包含層である 6b 層を除去して検出した。当該遺構面は大坂城三の丸築造以降、大坂夏の陣直前までの時期にあたる。遺構は谷の中で検出した。地形は東から西、北から南に傾斜しており、標高は上段部で 15.0 ～ 15.8 mを測るが、一部中央部では 14.6 mを測る。下段部は 13.2 ～ 15.1 mを測る。既往の調査成果などから考えて、当該遺構面は南に展開すると推察される大名屋敷と谷壁の間にあたる。

検出した主な遺構は、柵列、ピット、土坑、井戸、炉跡、溝、落込みなどであったが、調査区の中央南端部で整地面を検出した。

整地面１（図 42、図版 13・37）　1D-4c 区に位置する。整地面は 8a 層の上に層厚 0.05 mの固く締まった粗砂混中砂が敷かれていた。整地面の範囲は東側を土層観察用のトレンチにより失われてしまったため不明であるが、南北約５m、東西約７mの約 35 ㎡で、北は谷壁に、西は 136 落込みに、南は 179 畦畔状高まりにそれぞれ規制される。整地面上では西端部で礎石を１点検出した。礎石は不整形な平石で一辺 0.2 × 0.3 mを測るものであった。礎石は被熱の痕跡が残っていたことから、整地面上に建てられていた建物が大坂夏の陣で火災にあったものと推察される。礎石の南東 0.8 mで湊焼の甕を利用した 148 埋甕を検出した。詳細については後述するが、この 148 埋甕は糞尿溜として利用されていたと考えられる。この整地面の標高は 14.3 mを測る。

柵列１（図 37・38、図版 14）　柵列１は調査区の南辺部を東西方向に延びる 179 畦畔状高まり上にはしる。検出した柵列の全長は 34 mにおよぶ。柵列は概ね１～ 1.5 m間隔に柱穴を掘る。柱穴の規模は直径 0.3 ～ 0.6 m、深さは最深のもので 0.6 mを測る。既往の調査でも大名屋敷の北辺部をはしる柵列を検出しており、今回検出した柵列１はそれに続くものと考えられる。

116 土坑（図 37・39・40、図版 36）　1D-6b 区に位置する。116 土坑と 117 土坑は先後関係にある。平面形は不整楕円形で長径 1.5 m、短径 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。遺物は 247 唐津焼の碗である。内外面とも灰釉を施すものの剥離が顕著である。

117 土坑（図 37・39・40）　1D-6b 区に位置し、117 土坑は 116 土坑に東接する。平面形は不整楕円形を呈す。規模は長径 1.6 m、短径 0.9 m、深さ 0.3 mである。埋土は単層で、中から陶磁器とともに石臼が出土した。243 は土師器皿である。248・249 は青花の碗である。248 は口縁部下内外面に圏線が巡る。249 は見込み部及び底部外面にそれぞれ２条の圏線が巡る。256 は花崗岩製挽き臼の上臼である。

148 土坑（埋甕）（図 37・41 ～ 43、図版 13・37）　1D-4c 区で、整地層西端付近で検出した。直径 0.85 m、深さ 0.9 mの土坑に湊焼の甕を据える。７層上面検出時に掘方が認められなかったことから、甕を据えた後に整地層を敷設したものと考えられる。検出状況などから、糞尿溜として利用された後に遺物が廃棄されたものと考えられる。なお、土坑の掘方北端で 20 ㎝程度の扁平な円礫を検出したが、これは 148 土坑を掘削した際、8b 層上面で検出した竹製導水管を切断してしまったことから、導水管からの出水を止めるため円礫によって塞いだものである。258 湊焼甕は、土師質で口縁部の断面形態は逆台形の帯状を呈し、口縁部内面は内彎しない。また、底部は型造りと考えられ凸レンズ状に突出する。

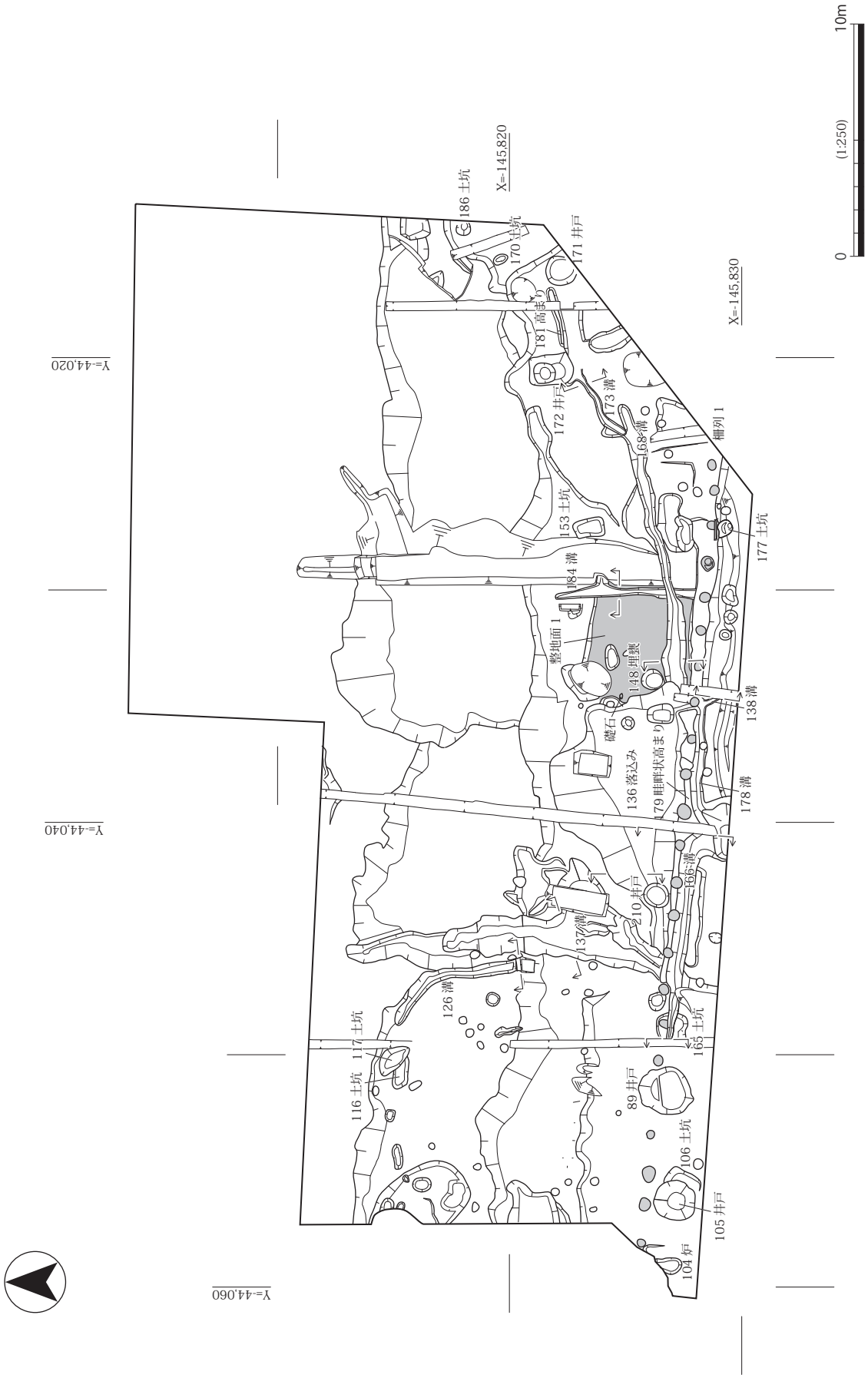

0
(1:250)
10m
X=-145,820
X=-145,830
Y=-44,020
Y=-44,040
Y=-44,060
186 土坑
170 土坑
171 井戸
181 高まり
172 井戸
173 溝
168 溝
柵列 1
153 土坑
184 溝
177 土坑
整地面 1
148 理製
138 溝
礎石
136 落込み
179 畦畔状高まり
178 溝
166 溝
210 井戸
137 溝
126 溝
117 土坑
116 土坑
165 土坑
89 井戸
106 土坑
105 井戸
104 炉

図 37　7 層上面　平面図

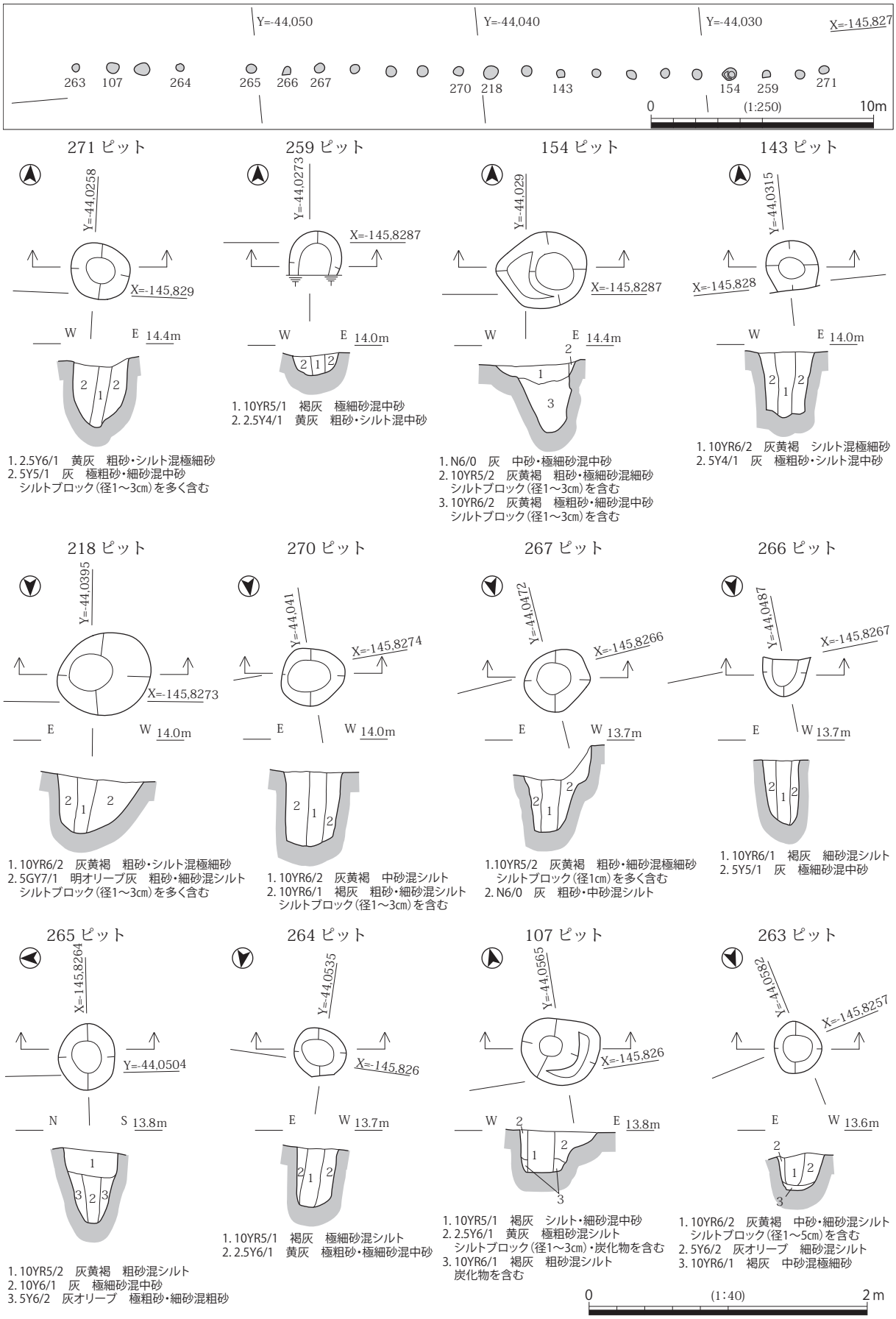


図 38　7 層上面　柵列 1 ピット平・断面図

外面下半部はタタキをナデ消し、内面はハケ目調整が残る。さらに外面には黒斑がみられる。野田芳正氏の分類（野田 1984）によると９段階に属する。口径 61.8 ㎝、体部最大径 70.6 ㎝、器高 83.0 ㎝を測る。

甕の中からは陶磁器類の他に箸、下駄、桶などの木製品が出土した。259 は瀬戸・美濃焼の灰釉内

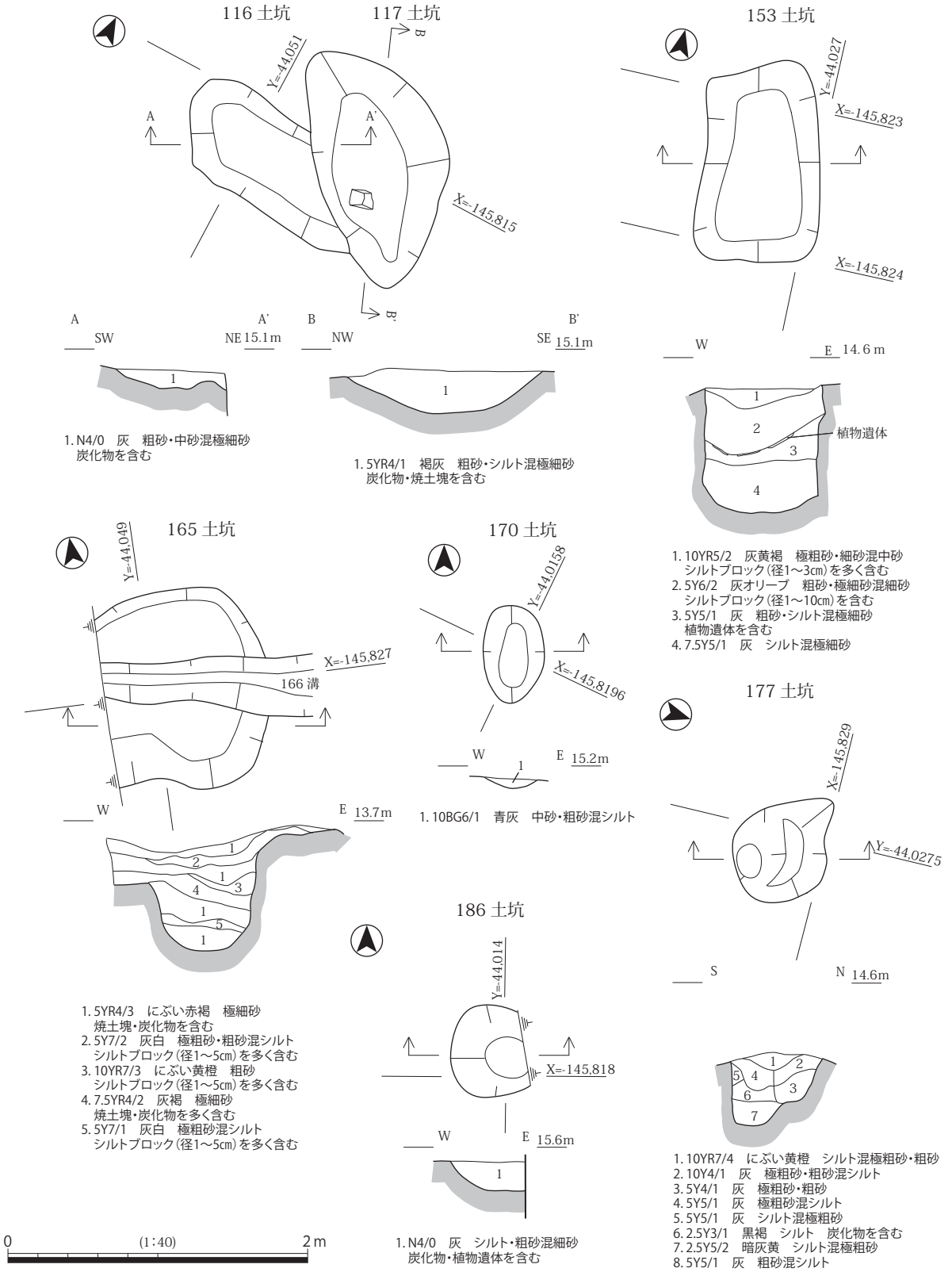


図 39　７層上面　116・117・153・165・170・177・186 土坑平・断面図

禿丸皿である。底部は碁笥底を呈する。見込み部は釉剥ぎがみられ露胎する。260 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗である。261 は肥前系磁器染付碗で、体部外面に草花文を施す。262 は備前焼鶴首徳利である。肩部と底部にヘラ記号を施す。263 は丹波焼大平鉢である。体部内面にヘラ記号を付す。264 は漆器椀である。内外面とも赤漆を塗り、外面には黒漆で花文を描く。265 は蓋、266 は曲物の底と考えられる。267 ～ 279 は箸である。長さは 22.8 ～ 28.2 ㎝以上のものがある。280 は桶の側板である。全長 20.1 ㎝、幅 5.9 ㎝、厚さ 0.9 ㎝を測る。281 は桶の底板の一部である。板は 2 カ所ずつ断面長方形の木釘で接合する。280 側板と同一個体かどうかは不明である。282 は連歯下駄である。台尻部を欠損する。平面長方形の壺孔をもつ。残存長 21.6 ㎝、幅 8.2 ㎝である。Ⅰ 2d 類に属する。

153 土坑（図 37・39・40、図版 14） 1D-3c 区に位置する。平面長方形を呈し、規模は長辺 1.35m、短辺 0.8m、深さ 0.8m を測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれる。埋土は 4 層に分けられたが、下層の 2 層が堆積した段階で植物遺体の堆積が認められ、その後シルトブロックを含む土で埋め戻される。遺物

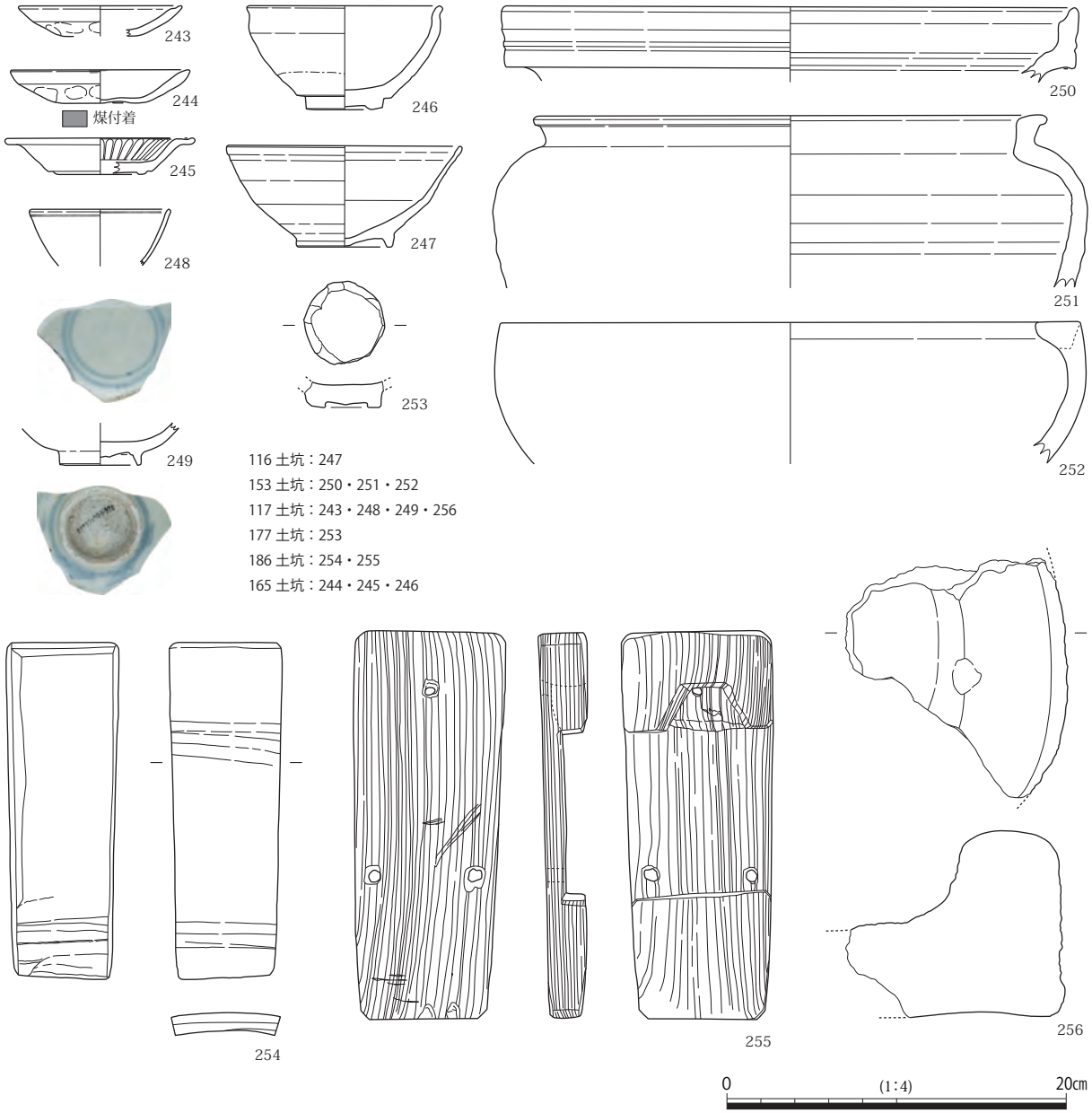


図 40　7 層上面　116・117・153・165・177・186 土坑出土遺物

は陶器などが出土した。250 は備前焼擂鉢の口縁部である。251 は備前焼の水指である。252 は瓦質の火鉢である。口縁端部は内側に肥厚させ面をつくる。

165 土坑（図 37・39・40） 1D-5c 区に位置し、166 溝に切られる。また、土層観察用溝によって東側の一部を失う。平面形は不整円形で、断面は U 字状を呈する。埋土は焼土や炭化物を多く含む極細砂層やシルト層が堆積する。遺物は土師器や陶器などが出土した。244 は土師器灯明皿である。口縁端部内外面に煤が付着する。245 は瀬戸・美濃焼の灰釉折縁ソギ皿である。見込み部に釉剥ぎが認められ、高台内に重ね焼きの痕跡が残る。246 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗である。16 世紀後半の所産である。

170 土坑（図 37・39、図版 39） 1D-2b 区に位置する楕円形の土坑である。規模は長径 0.65m、短径 0.4m、深さ 0.1m を測る。遺物は 257 籤状木製品が出土した。写真のみ掲載したが、籤状の木製品である。一端もしくは両端を欠く。断面は方形で一辺 0.15 ～ 0.2 ㎝、残存長 14.6 ～ 21.3 ㎝を測る。曲げ物など一枚の薄い板を割いたものか、壊れたものなのかは不明である。

177 土坑（図 37・39・40） 1D-3c 区に位置する不整な円形の土坑である。直径 0.65m、深さ 0.45m を測る。遺構内からは陶器の細片の他に面子が出土した。253 は陶製の面子である。瀬戸・美濃焼鉄釉の天目碗の転用で、底部を打ち欠いた後、側面を研磨して仕上げる。径 4.75 ㎝、高さ 1.5 ㎝を測る。

186 土坑（図 37・39・40） 1D-2b 区に位置する。遺構の東半部は調査区外に延びる。直径 0.6m、深さ 0.2m を測る。土器の細片の他に木製品が出土した。254 は桶の側板である。外面には箍締めの痕跡が 2 カ所残る。全長 19.9 ㎝、幅 6.6 ㎝、厚さ 1.0 ㎝を測る。255 は連歯下駄である。台表に線刻が

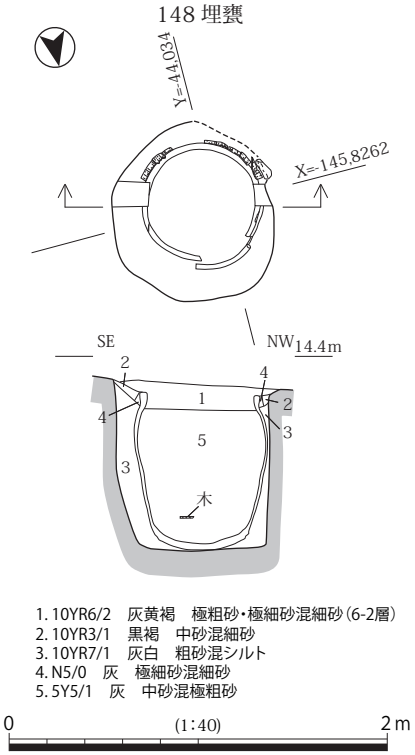


図 41　7 層上面　148 埋甕平・断面図

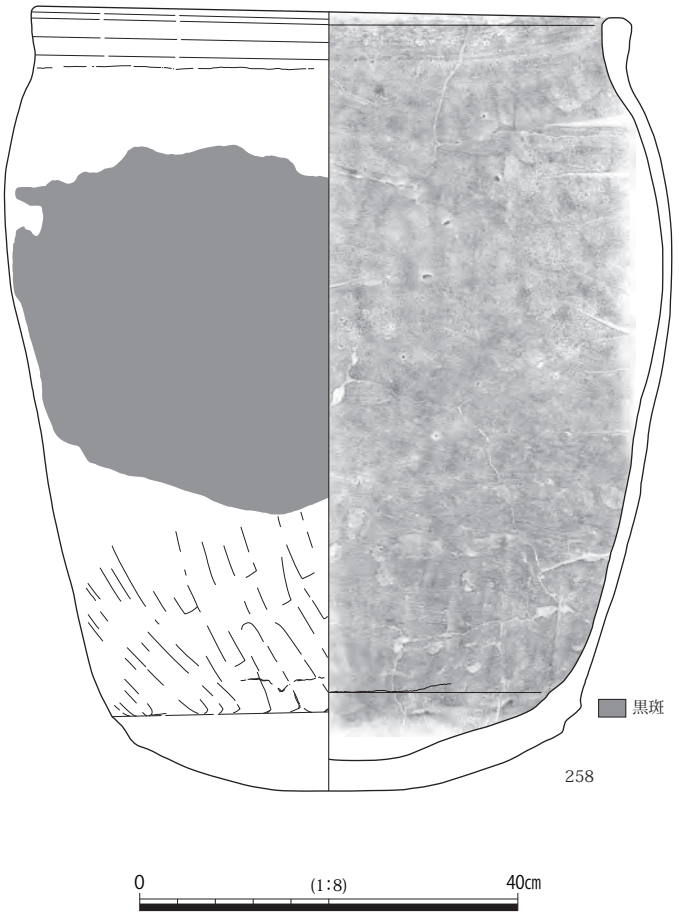


図 42　7 層上面　148 埋甕

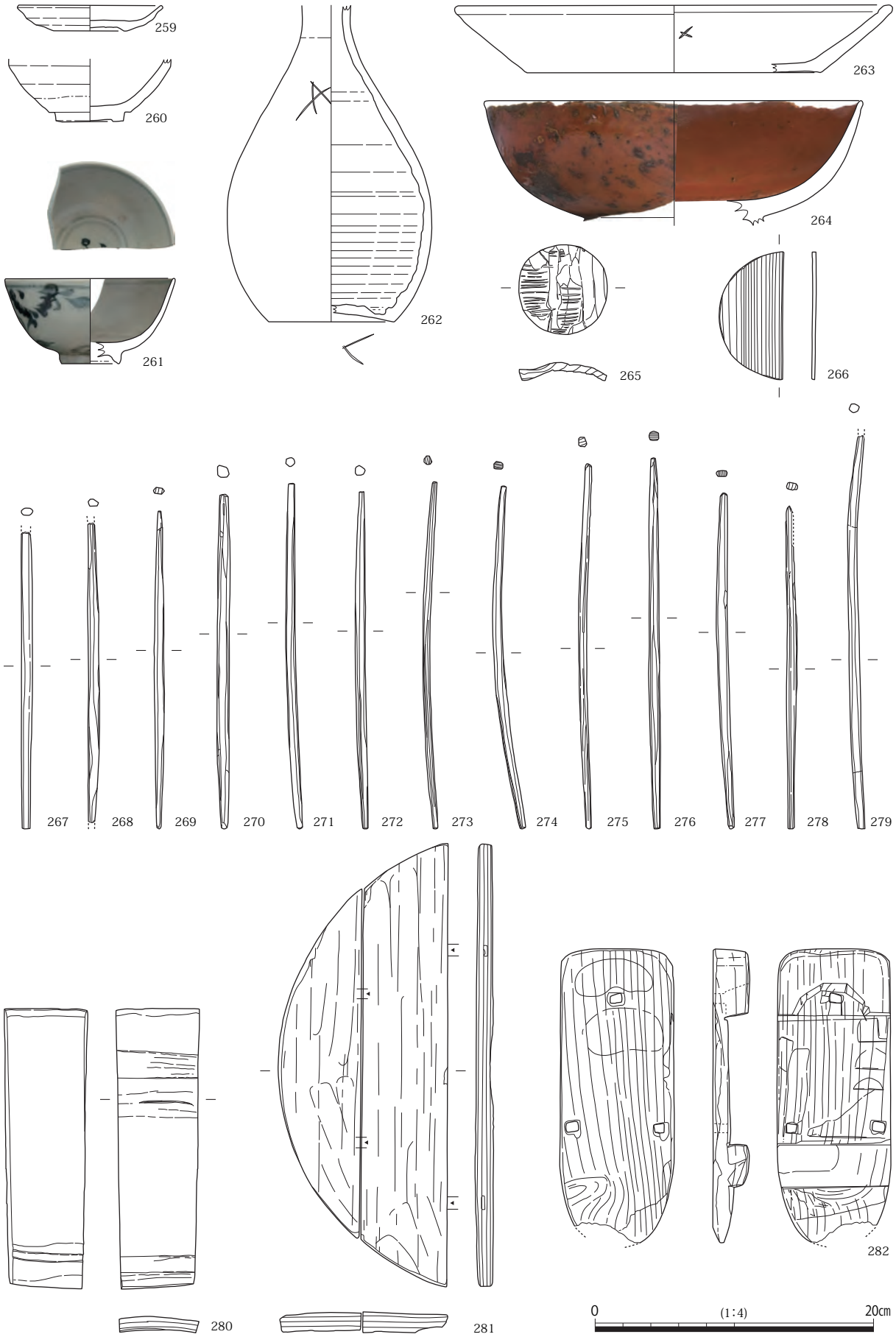
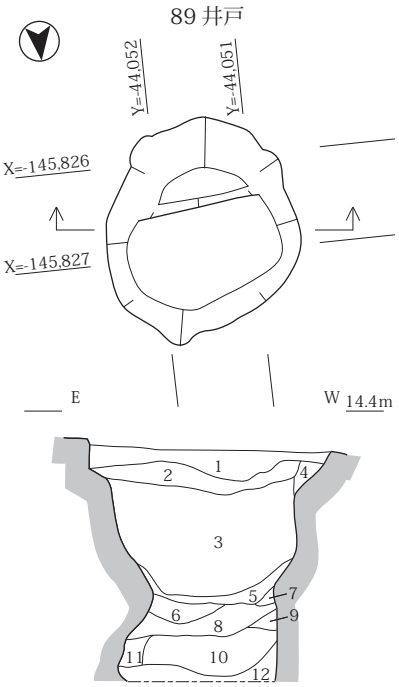
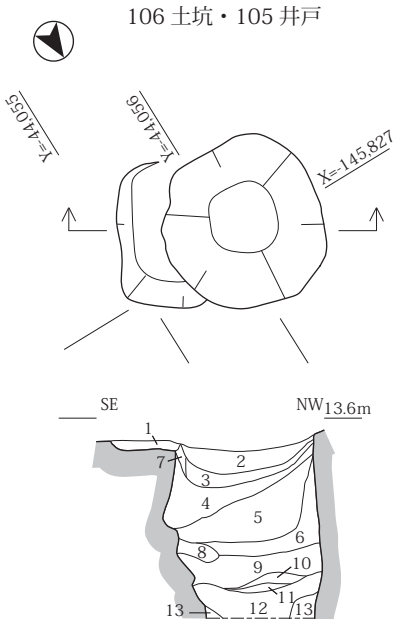


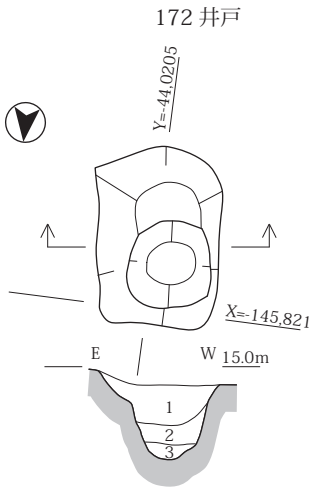
図 43　7 層上面　148 埋甕出土遺物



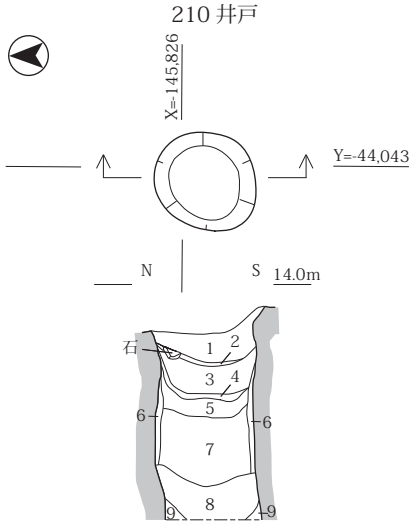
1. 10YR5/3 にぶい黄褐　極粗砂・粗砂混シルト
　10YR7/6　明黄褐　細砂混シルトブロック
　(径1～20㎝)・炭化物を含む
2. 7.5YR5/3　にぶい褐　細礫・極粗砂・中砂混粗砂
3. 10BG6/1　青灰　細礫・粗砂混シルト
4. 5BG7/1　明青灰　シルト
5. 7.5Y5/2　灰オリーブ　シルト
6. 5B6/1　青灰　極粗砂・シルト混中砂
7. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂混極粗砂
8. 10YR6/6　明黄褐　極細砂混シルト
9. 10YR5/1　褐灰　極粗砂・極細砂混粗砂
10. 7.5Y6/2　灰オリーブ　シルト・極細砂混中砂
11. 7.5YR5/6　明褐　極粗砂混粗砂
12. 7.5YR6/4　にぶい橙　小礫・粗砂混極粗砂



1. 10YR5/2　灰黄褐　シルト混中砂　炭化物・焼土塊を含む
2. 5Y6/1　灰　極細砂混中砂
3. 5GY7/1　明オリーブ灰　極粗砂・細砂混粗砂
4. 2.5Y6/6　明黄褐　粗砂・中砂混シルト
　シルトブロック(径1～3㎝)を含む
5. 7.5Y6/1　灰　極細砂・粗砂混中砂
　シルトブロック(径1～3㎝)を含む
6. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混極細砂　土器片・炭化物を含む
7. 2.5Y7/1　灰白　シルト
8. 10YR4/1　褐灰　粗砂・中砂混極細砂　焼土塊・炭化物を多く含む
9. 10YR1.7/1　黒　極細砂(炭層)　焼土塊を含む
10. 2.5Y6/2　灰黄　粗砂・シルト混中砂
11. 10YR1.7/1　黒　極細砂(炭層)　焼土塊を含む
12. 10YR5/3　にぶい黄褐　極粗砂・中砂混粗砂
13. 10YR6/3　にぶい黄橙　粗砂・中砂混シルト
　シルトブロック(径1～5㎝)を含む



1. 2.5Y5/1　黄灰　極粗砂・シルト混中砂
　シルトブロック(径1～10㎝)を多く含む
2. 10Y5/1　灰　中砂・シルト混細砂
　シルトブロック(径1～5㎝)を含む
3. 2.5Y5/2　暗灰黄　極細砂混粗砂



1. 5Y5/1　灰　粗砂混シルト
　シルトブロック(径1～20㎝)を多く含む
2. 2.5Y4/1　黄灰　シルト
3. N6/0　灰　シルト混粗砂
　シルトブロック(径1～10㎝)を多く含む
4. 2.5GY3/1　暗オリーブ灰　シルト
5. 2.5Y6/2　灰黄　中砂混シルト
　シルトブロック(径1～20㎝)を多く含む
6. N4/0　灰　粗砂・中砂混シルト
7. 7.5Y5/1　灰　シルト混中砂
　シルトブロック(径1～10㎝)を多く含む
8. 10YR1.7/1　黒　極細砂　炭層
9. 10YR5/1　褐灰　極細砂混中砂

0　(1:80)　4m

図 44　7 層上面　106 土坑、89・105・172・210 井戸平・断面図

残るが傷の可能性もある。後顎部はやや磨滅が認められる。Ⅰ 4b1 類である。全長 22.9 ㎝、幅 8.9 ㎝を測る。

89 井戸（図 37・44・45、図版 14） 1D-6c 区に位置する。直径 2.0 ～ 2.3m を測る。深さは標高 11.5m まで掘り下げたが、底を検出するに至らなかった。遺物は 285 備前焼の擂鉢である。内面は摩耗が顕著である。

105 井戸（図 37・44・45、図版 15・36） 1D-6c 区で、89 井戸の西約 3 mに位置する。直径 1.7m を測る。深さは標高 11.4m まで掘り下げたが、底まで到達しなかった。埋土内には焼土や炭化物を多く含む層が認められることから、埋積した時期は 165 土坑と同じかもしれない。遺物は土器や白磁などが出土した。283 は土師器灯明皿である。口縁部の内外面には煤の付着が顕著である。口径 11.2 ㎝、器高 2.15 ㎝を測る。284 は李朝白磁の皿底部である。見込み部および畳付に胎土目の離れ砂が残る。

171 井戸（図 37・46・47、図版 15・36） 1D-2c 区に位置する。遺構の南東隅を欠く。規模は直径 1.4m、深さ 0.4m を測る。断面は擂鉢状を呈する。井戸の底から少し上に 297 桶を据える。遺物は土器、陶磁器、木製品、鉄製品、石製品が出土した。287 は土師器皿である。288 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗である。289 は青花碗である。見込み部に鷺図を、高台部には 2 条の圏線内に渦文を描く。畳付は露胎する。290 ～ 295 は箸である。292 は長さ 23.1 ㎝、295 は長さ 26.4 ㎝を測る。296 は小児用の連歯下駄と考えられ、全長 16.9 ㎝、幅 8.2 ㎝を測る。両歯とも右側の片減りが認められる。Ⅰ 1a1 類である。297 は桶底である。10 枚の板材を 2 ～ 3 カ所木釘を用いて繋ぎ合わせる。直径 56.5 ㎝を測る。298 は小刀柄である。法量は、長さ 8.1cm（二寸七分強）、幅 1.4cm（五分弱）、厚さ 0.4cm（一分強）、重量 13.6 g（三匁六分強）を測る。形状は戸尻が半円形、小口が直線状をなし、戸尻に近づくほど厚みを減じる。材質は山金と思しき銅合金だが、表面観察では銅成分が高いことを推測させる。成形法は一枚板を刃方で折り曲げ、戸尻の裏板寄りと棟方のほぼ中央部で蝋付し、その断面形は棟方がやや肥厚した長楕円形をなす。表面の仕上げは磨地ともみなされるが錆化により判然とせず、一部に縦方向の線状痕も観察されるため、鑢地である可能性も残る。

なお、小口には鉄錆が観察されるため、小刀の茎が折損したまま残存していることをうかがわせる。299 は粘板岩製の砥石である。鳴滝石か。

172 井戸（図 37・44・45、図版 15） 1D-3c 区に位置し、171 井戸の北西約 3 mで検出した。方形

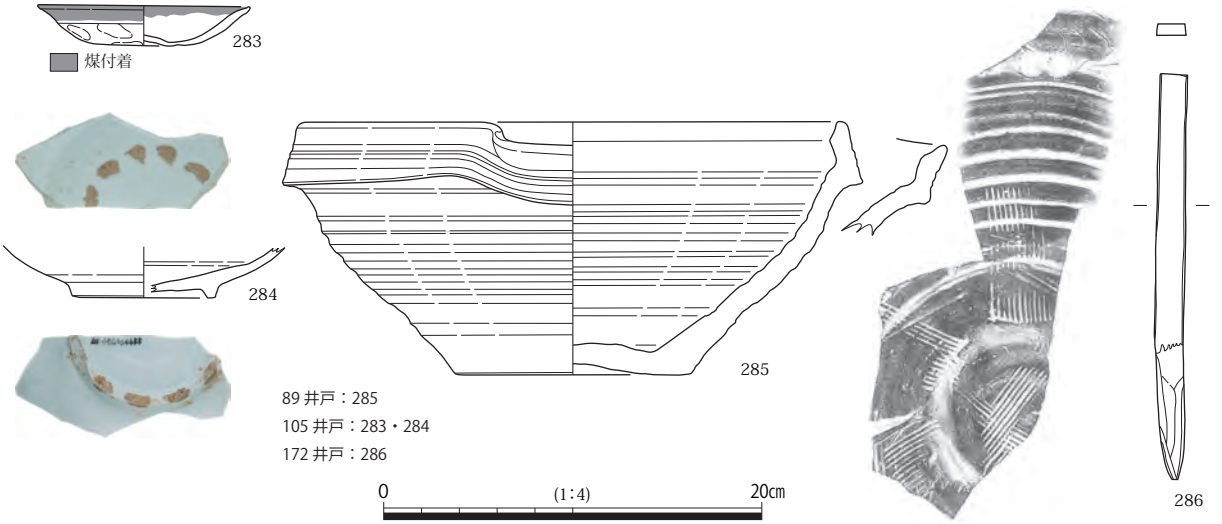


図 45　7 層上面　89・105・172 井戸出土遺物

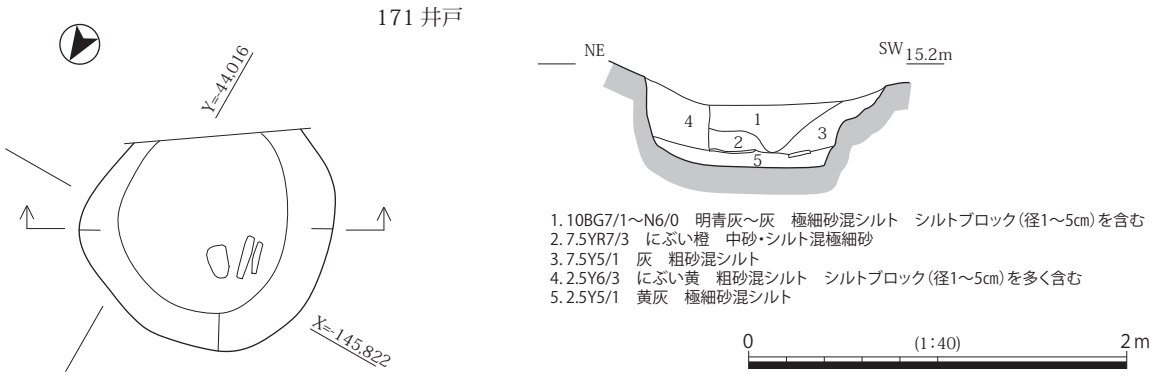


図 46　7 層上面　171 井戸平・断面図

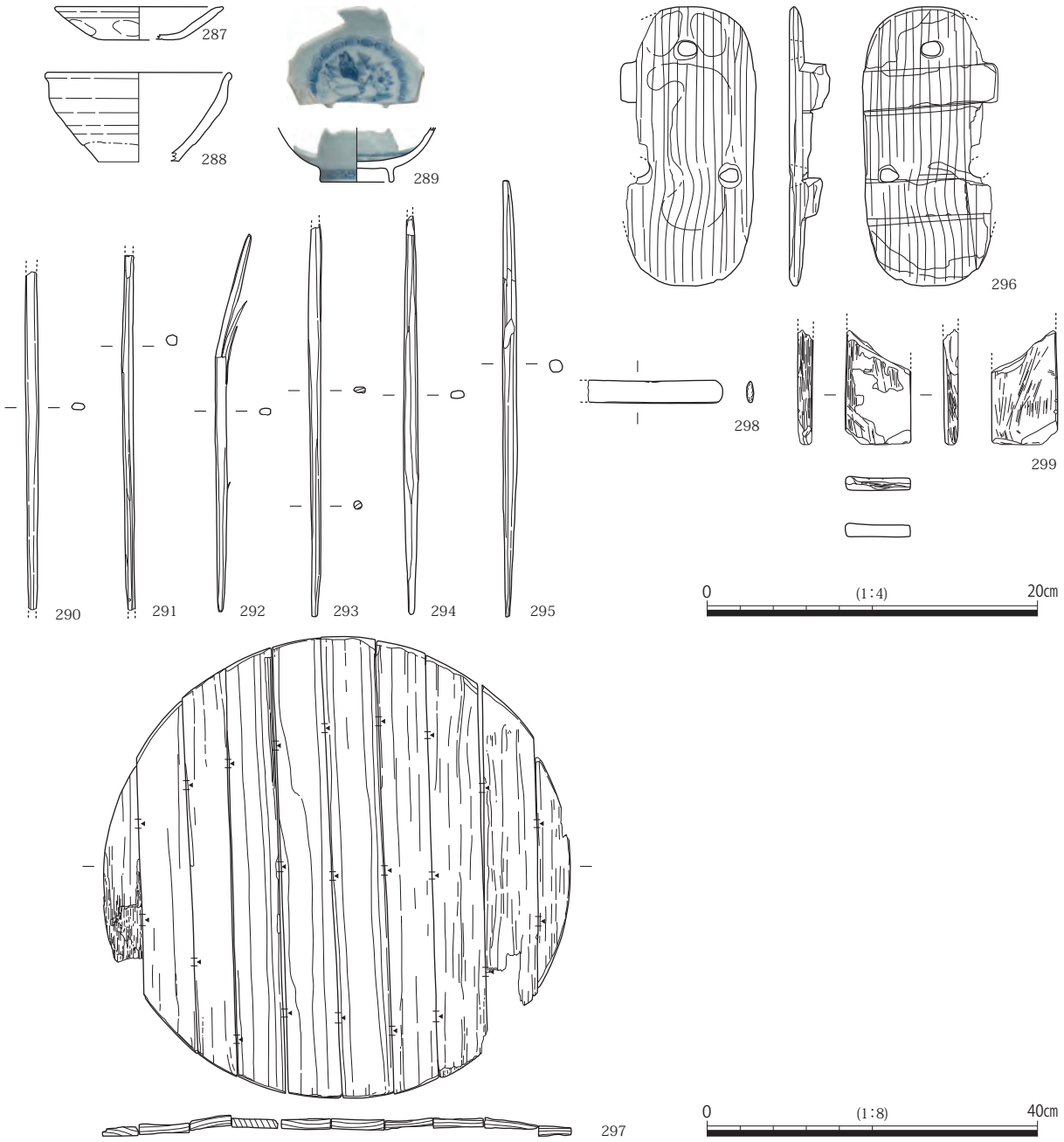


図 47　7 層上面　171 井戸出土遺物

の掘方の中に円形の掘方をもつ二段落ちの構造をもつ。長辺 1.9m、短辺 1.3m、円形掘方の直径は 0.9m、深さ 0.8m を測る。遺物は土器の細片の他に木製品が出土した。286 は柄杓などの柄もしくは箆と考えられる。全長 21.5 ㎝、幅 1.6 ㎝、厚さ 0.6 ㎝を測る。断面は長方形を呈し、先端は削って尖らせる。

210 井戸（図 37・44） 1D-5c 区で、89 井戸の東約 7 mに位置する。136 落込みの底で検出したことから、8a 層上面に属する遺構である可能性も考えられる。規模は直径 1.1m、深さは標高 11.4m まで掘り下げたが底まで到達しなかった。

126 溝（図 37・48・49） 1D-5b・5c 区に位置する。一段目の平坦面上をはしる。規模は幅 0.55m、深さ 0.2m を測る。遺物は 301 の瀬戸・美濃焼の灰釉内禿皿が出土した。底部は碁笥底で、見込み部は釉剥ぎを行う。

138 溝（図 37・48・49） 1D-4c 区に位置する。整地面の西側裾部を北西－南東方向にはしり、溝の北端は 136 落込みに繋がり、途中 178 溝が取りつく。溝の南端は攪乱によって不明であるが、調査区外へ延びると推察される。規模は幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。溝内から 302 瀬戸・美濃焼の鉄釉天目

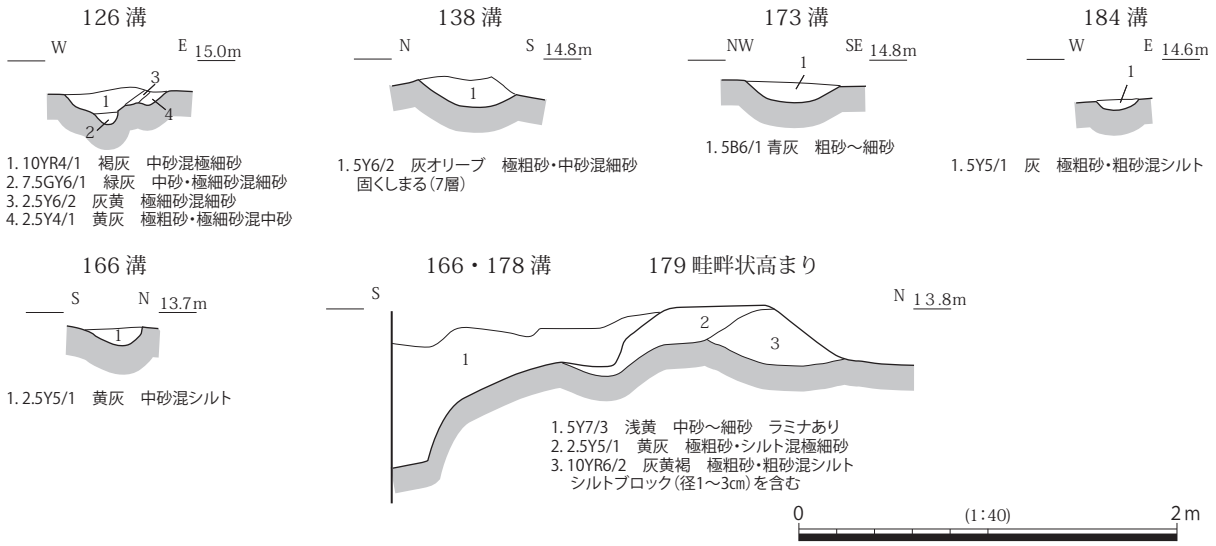


図 48 7 層上面 126・138・166・173・184 溝、179 畦畔状高まり断面図

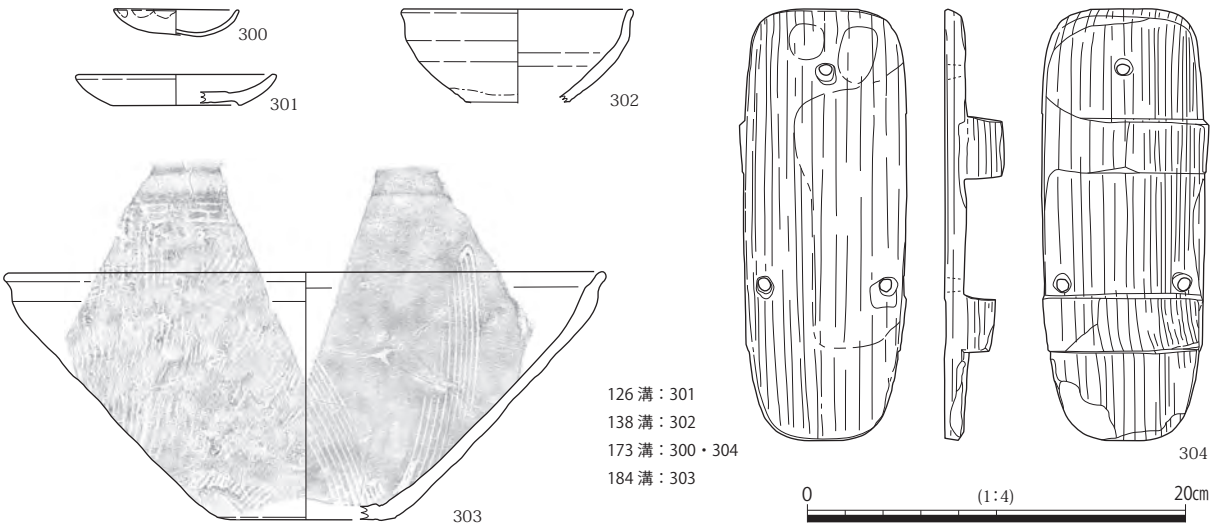


図 49 7 層上面 126・138・173・184 溝出土遺物

碗が出土した。16 世紀後半の所産と考えられる。

173 溝（図 37・48・49・55、図版 16） 1D-2c・3c 区に位置する。溝は東から西方向に指向するが、途中南西方向に屈曲した後 168 溝に接する部分で収束する。現地調査段階では 168 溝との先後関係を確認したが、埋土の堆積状況の違いを誤認した可能性も残る。この 173 溝の南肩部には 181 高まりが土手状に取りついており、さらに南側に 169 石列が展開することから、この 173 溝は区画溝としての機能も考えられる。溝の規模は、幅 0.5m、深さ 0.1m を測る。遺物は土器や木製品が出土した。300 は土師器皿である。口径 6.6 ㎝、器高 1.45 ㎝を測る。304 は連歯下駄で、後歯部に磨滅が認められる。全長 22.8 ㎝、幅 8.7 ㎝を測る。Ⅰ 1d 類である。

184 溝（図 37・48・49） 調査区の中央東寄りのほぼ Y=-44,030 ライン付近を南北方向にはしる。規模は幅 0.2m、深さ 0.05m を測る。溝の途中で、東方向に平瓦片を立てた水口状の施設が取りつく。303 は瓦質土器の擂鉢である。外面はハケ調整を、内面はヨコナデを行う。卸目は 9 条 1 単位である。

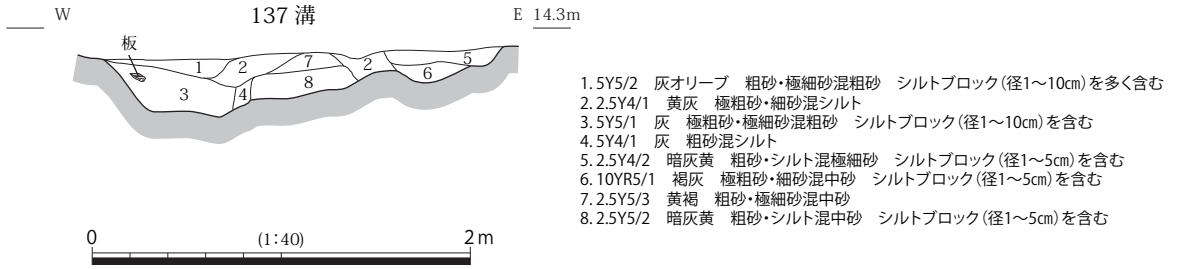


図 50　7 層上面　137 溝断面図

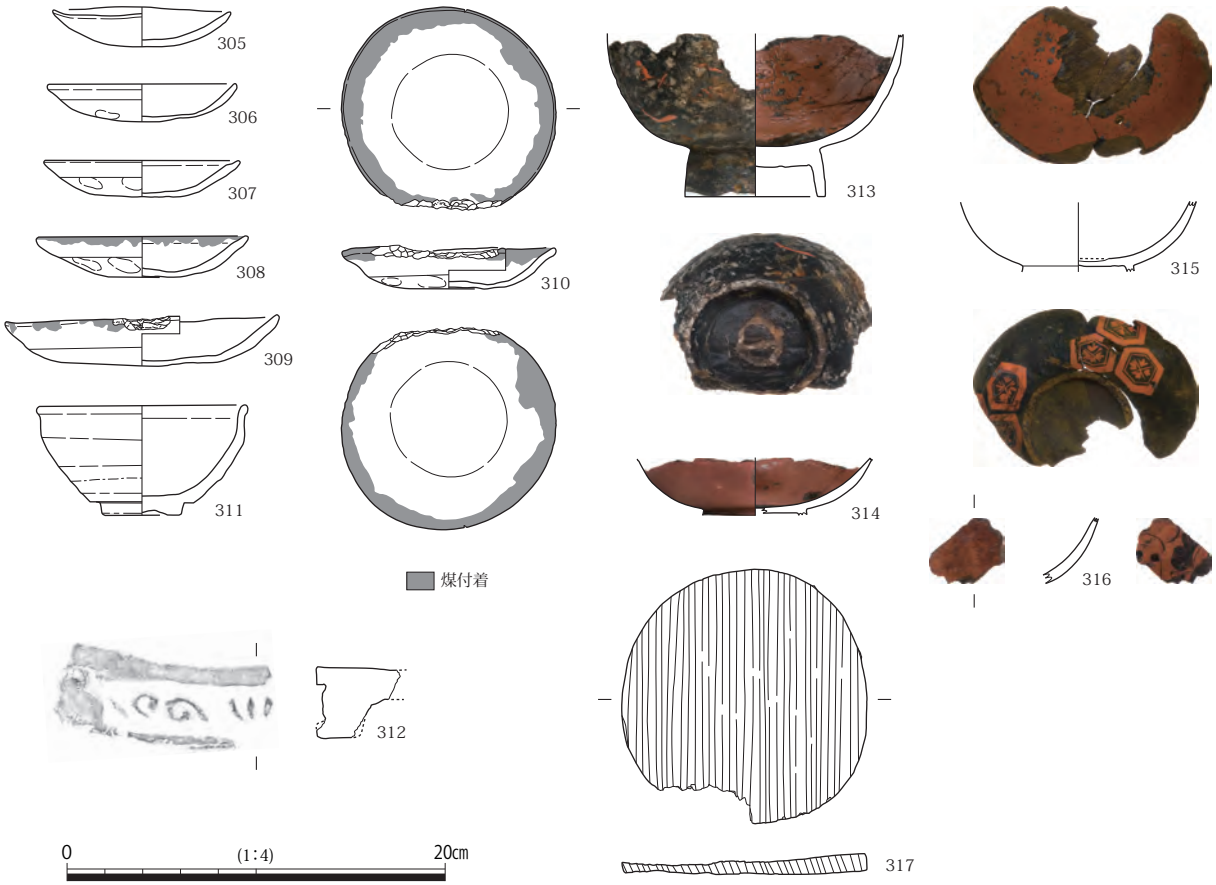


図 51　7 層上面　137 溝出土遺物

166・178 溝、179 畦畔状高まり（図 37・48、図版 16） 166 溝および 178 溝は柵列 1 がはしる 179 畦畔状高まりの南辺部を東西方向に指向する。２条の溝は Y=-44,040、X=-145,829 地点で合流し、南へと落ちる。規模は 166 溝が幅 0.7m、深さ 0.2m、178 溝は幅 0.5m、深さ 0.1m である。一方、179 畦畔状高まりは上幅 0.3 ～ 0.5m、高さ 0.3m を測る。２層の盛土からなる。166 溝と 178 溝の合流地点にはラミナのみられる中砂～細砂層が厚さ 0.7m に亘って堆積しており、２条の溝を流れる水は合流した後、調査区外となる谷底方向に向かって流れ落ちる構造になっている。166 溝から瓦片が、179 畦畔状高まり盛土内からは土師器灯明皿、須恵器、瓦質土器、瓦などの細片が出土したが図示し得なかった。

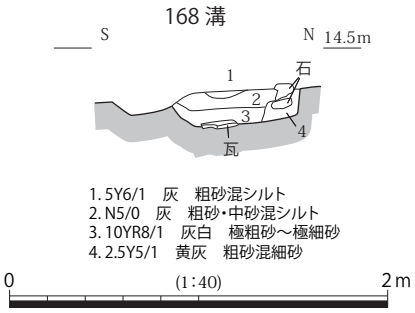


図 52　７層上面　168 溝断面図

137 溝（図 37・50・51、図版 17・38） 1D-5b・5c 区に位置する。一段目の平坦面に端を発し南方向へはしり、二段目平坦面上はやや西に振りながら調査区外へ延びる。166 溝や 179 畦畔

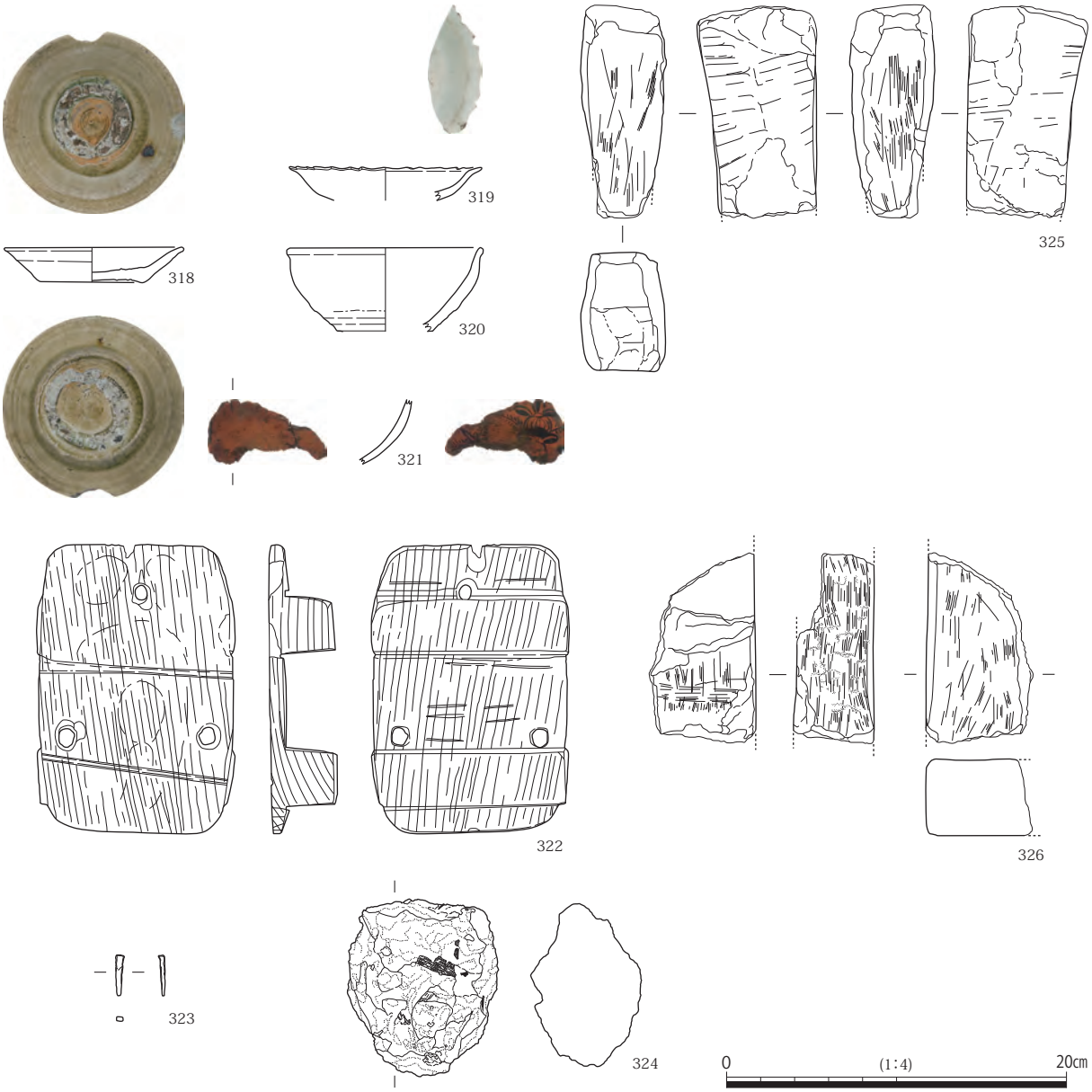


図 53　７層上面　168 溝出土遺物

状高まりに先行する。規模は幅 1.1m、深さ 0.3m であるが、土層堆積状況を観察した結果、少なくとも 4 回の流れが確認できた。遺物は二段目部分を中心に土師器、陶器、瓦、漆器、木製品などが出土した。305 ～ 307 は土師器皿である。305 は口径 9.4 ㎝、器高 2.1 ㎝、306 は口径 10.0 ㎝、器高 2.0 ㎝、307 は口径 10.4 ㎝、器高 1.95 ㎝を測る。308 ～ 310 は土師器灯明皿である。308 は 11.2 ㎝、器高 2.2 ㎝を測る。309 と 310 は口縁部の一部を打ち欠く。309 は口径 14.3 ㎝、器高 2.7 ㎝を測る。310 は口径 11.3 ㎝、器高 2.3 ㎝を測る。311 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗である。畳付には摩耗が認められる。口径 11.15 ㎝、器高 5.8 ㎝を測る。312 は軒平瓦である。中心飾は三葉である。内区の唐草文は 3 転する。313 ～ 316 は漆器椀である。313 は高い高台をもつ。外面は黒漆を塗った後、赤漆で文様を描く。内面は赤漆を塗る。また、高台見付には「丸の内に一引き」の線刻が残る。314 は高台と体部上半部を欠く。内外面とも赤漆を塗る。315 も高台と体部上半部を欠く。外面は黒漆を塗った後、「三つ盛り亀甲の内に花菱」もしくは「三つ盛り亀甲の内に竪剣花菱」の変形と考えられる文様を 2 カ所以上に配する。内面は赤漆を塗る。316 は体部である。内外面ともに赤漆を塗り、外面は黒漆で草花文を描く。317 は桶の底板である。直径 13.5 ㎝を測る。

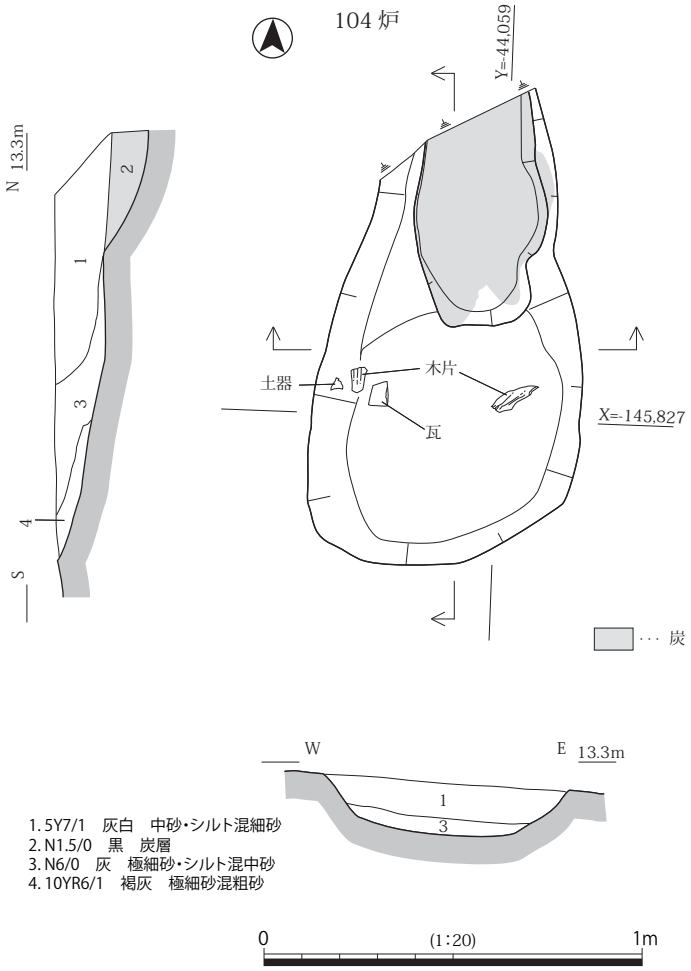


図 54　7 層上面　104 炉平・断面図

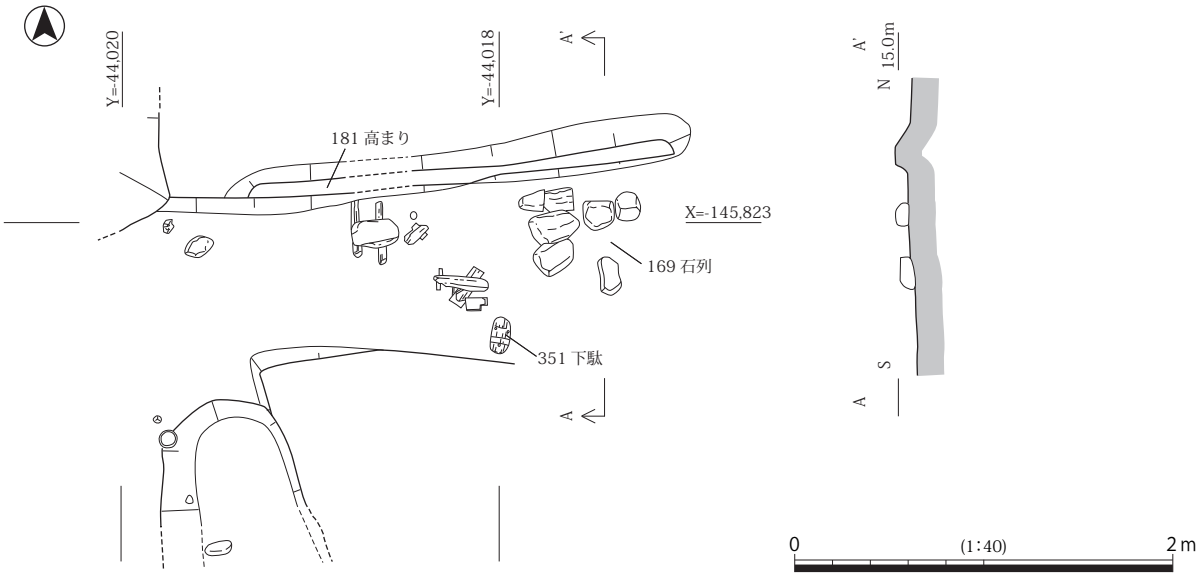


図 55　7 層上面　169 石列・181 高まり平・断面図

168 溝（図 37・52・53、図版 17・38） 1D-3c・4c 区に位置する。溝は当初北東－南西方向を指向し、途中から緩やかに西方向に屈曲しながら整地面の間をはしり、136 落込みに取りつく。規模は幅 0.4 ～ 1.1m、深さ 0.05 ～ 0.3m を測る。溝内より陶磁器、陶器、木製品、石製品、鉄製品などが出土した。318 は瀬戸・美濃焼の灰釉折縁皿である。碁笥底を呈し、見込み部には釉剥ぎおよび重ね焼きの痕跡が残る。さらに体部外面にも重ね焼きの痕跡が残る。口径 10.6 ㎝、器高 2.05 ㎝を測る。319 は白磁の稜花皿である。外面にはピンホールがわずかに残る。復元口径 11.3 ㎝を測る。320 は瀬戸・美

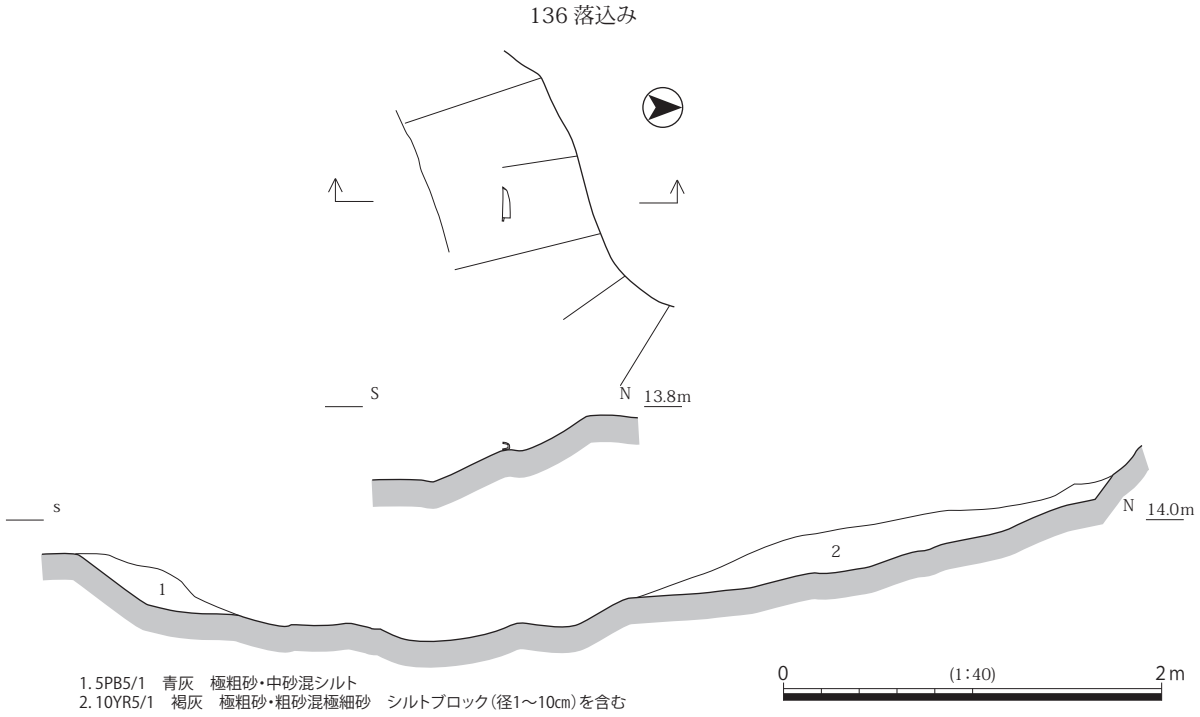


図 56　7 層上面　136 落込み平・断面図

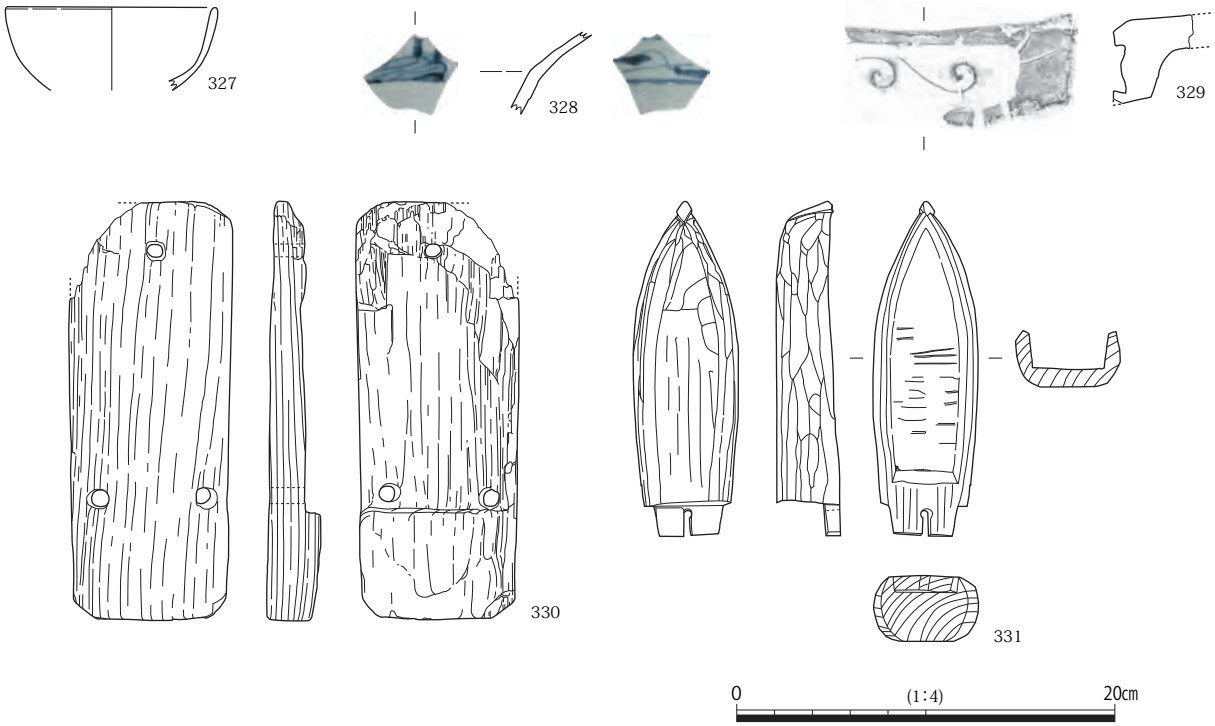


図 57　7 層上面　136 落込み出土遺物

濃焼の鉄釉天目碗である。321 は漆器椀の体部である。内外面ともに赤漆を塗り、外面には黒漆で橘文を描く。322 は幅広の連歯下駄で全長 17.0 ㎝、幅 11.6 ㎝を測る。台表に焼き鏝で２条の線刻を施す。Ⅰ 1b2 類である。323 は釘である。全長 2.4 ㎝､最大幅 0.5 ㎝を測る。324 椀形滓に付着していた。324 椀形滓は残存長 10.5 ㎝、残存幅 8.9 ㎝、厚さ 6.5 ㎝、重さ 715.9 g を測る。表面には 323 釘の他に炭化物が付着する。磁着度は６で、埋蔵文化財用特殊金属探知機で測定した結果、メタル度はＬであった。325・326 は砥石である。325 は凝灰岩質砂岩で粗砥であろう。５面に使用痕が残る。326 は砂岩で３面に使用痕が残り、うち１面には敲打痕が残る。

104 炉（図 37・54、図版 16） 1D-6c 区で、調査区南西端部で検出した。遺構の北側は調査区外に延びていたが、雨天時に調査区境の壁面が崩落したことにより、遺構の北側が 0.2 m程度失われてしまった。残存長 1.25 m、最大幅 0.7 m、深さ 0.15 mを測る。北半部は一段低くなっており、そこに炭層が堆積する。なお、遺構内の炭層および床面付近の土を持ち帰って洗浄し、メタルチェックを行ったが、鍛造剥片等の鍛冶炉であることを証明する遺物は出土しなかった。したがって、この炉の性格については鍛冶炉ではなく、竈の可能性も残る。遺物は土師器灯明皿と瓦の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

169 石列・181 高まり（図 37・55・59、図版 16） 1D-2c 区に位置する。まず、173 溝の南側を削って高さ 0.1 mの 181 高まりとその南側に平坦面をつくり、181 高まりの裾部に 0.15 ～ 0.2 m程度の大きさの石が不整列な状態に並べられていた。平坦面の上に堆積する埋土から 351 下駄などの木製品が出土した。この石列の性格については不明であるが、南側の調査区外に屋敷地が広がっており、それに付属する施設であろうと推測される。ちなみに 169 石列を検出した平坦面の標高は 14.9 mと、整地面に比べて 0.6 m高い。

136 落込み（図 37・56・57、図版 17・38） 1D-4c・5c 区に位置し、整地面の西辺および 179 畦畔状高まりの北側で接する。平面形は滴状を呈し、西に向かって細くなる。規模は全長 11.8 m、幅 5.8 m、深さは整地面上から 1.0 m、179 畦畔状高まりから 0.7 mを測る。上半部は６ｂ層上面の 83 落込

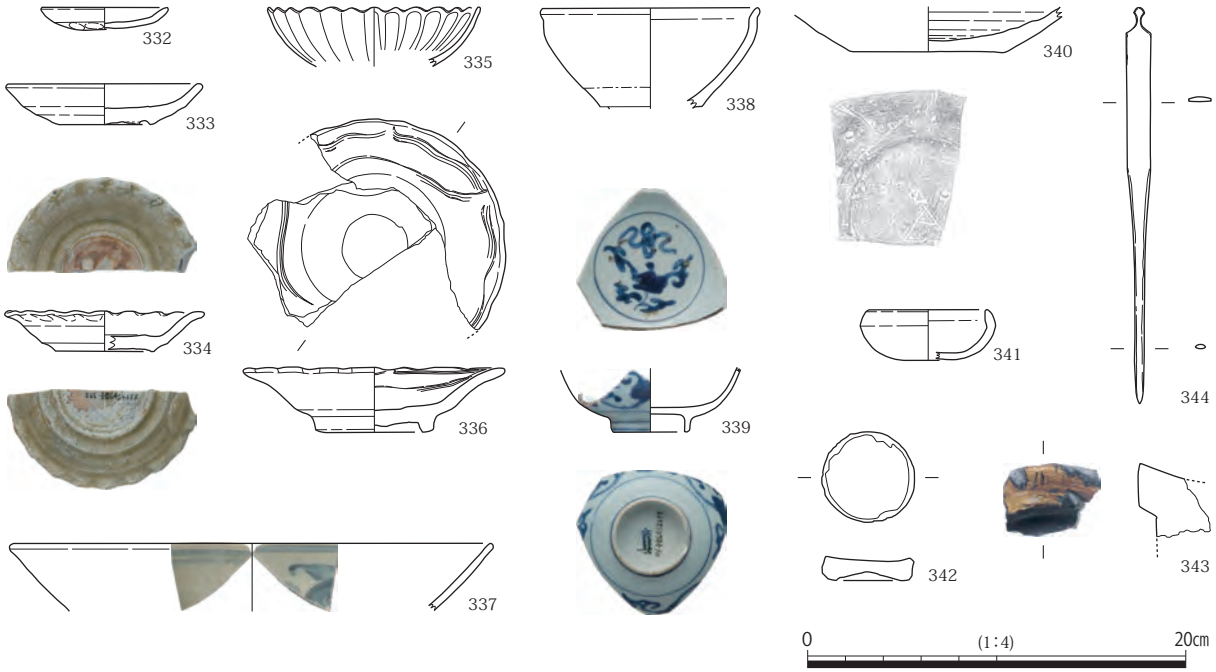


図 58　７層出土遺物（１）

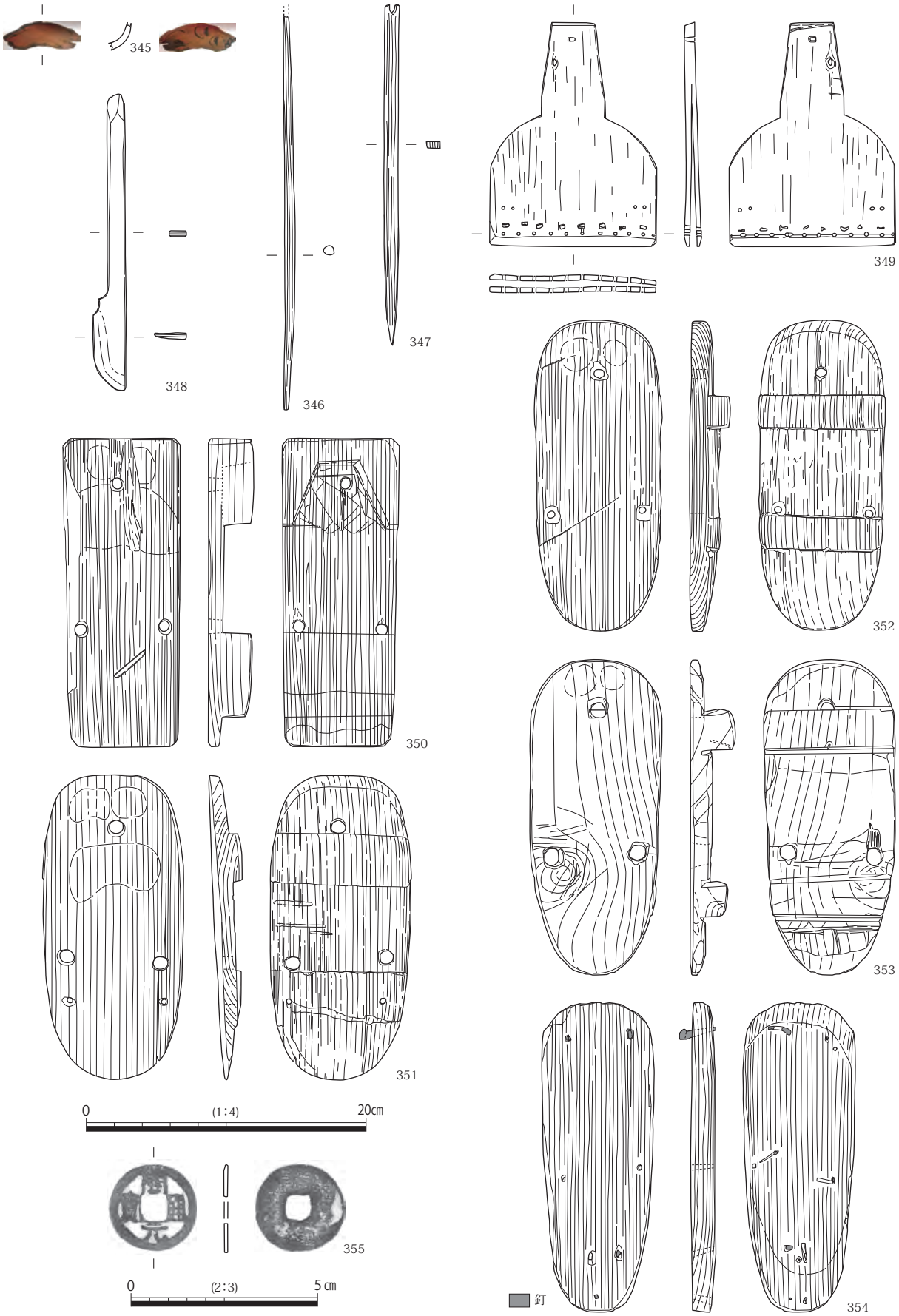


図 59　7 層出土遺物（2）

みの埋土が堆積する。埋土は極粗砂・中砂混シルト層や極粗砂・粗砂混極細砂層である。落込みの北斜面部で舟形木製品が１点出土した。その他にも磁器や瓦、木製品などが出土した。327 は青磁碗である。内彎しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収める。被熱していた。328 は青花の鉢である。外面にはピンホールが顕著である。329 は軒平瓦で、２転する唐草文のみが残る。330 は連歯下駄で、前歯の一部を欠損する。全長 22.2 ㎝、幅 8.6 ㎝を測る。形式分類はⅠ 4c1 類としたが、後歯の磨滅が顕著なためⅠ 2c1 類の可能性も残る。331 は舟形木製品である。一木を刳り抜いて造られるが、全体的に精巧な仕上がりである。舷側は内彎しながら立ち上がり、底部は平らに仕上げる。舳先も丁寧に削り出し、艫は舵を装着するための抉りが表現されている。水に浮かべた際、舳先部分で 1.5 ㎝が喫水線となる。規模は全長 17.7 ㎝、幅 5.55 ㎝、高さ 3.35 ㎝を測る。

７層出土遺物（図 58・59、図版 36 ～ 39）　７層からは土器、陶磁器、瓦、金属器、木製品などが出土した。332 は土師器皿である。口径 6.7 ㎝、器高 1.2 ㎝を測る。333 は瀬戸・美濃焼の灰釉内禿皿である。見込み部は釉剥ぎされて露胎する。底部は碁笥底で、重ね焼きの痕跡が残る。334 は瀬戸・美濃焼の灰釉内禿稜皿である。見込み部は釉剥ぎされて露胎し、底部には重ね焼きの痕跡が残る。復元口径 10.6 ㎝、器高 2.1 ㎝を測る。335 は白磁の菊皿で底部を欠く。体部は内彎しながら立ち上がる。漆継ぎの痕跡が残る。336 は龍泉窯系青磁稜皿である。見込み部に蛇の目釉剥ぎが残る。体部内面に櫛状工具による施文を施す。口径 13.8 ㎝、器高 3.6 ㎝を測る。337 は青花の皿である。断面に漆継ぎの痕跡が残る。338 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗である。339 は青花碗である。高台内はカンナ削りの痕がみられる。断面には漆継ぎの痕跡が残る。見込み部には草花文、高台内には字款を施す。景徳鎮窯の所産である。340 は備前焼の捏ね鉢である。底部に線刻によるヘラ記号を記す。内面は摩耗が著しい。341 は土師器のミニチュア鉢である。内外面ともナデ調整で仕上げる。342 は面子である。瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗の底部を転用する。直径 4.35 ㎝、厚さ 1.3 ㎝を測る。343 は金箔軒丸瓦である。内区の文様構成は不明である。金箔の下から赤漆が覗く。344 は笄である。法量は、長さ 20.9cm（六寸九分弱）、幅 1.3cm（四分強）、厚さ 0.3cm（一分）、重さ 31.4 ｇ（八匁四分弱）を測る。断面形は、両端を切除した扁平な蒲鉾形状を呈し、竿の部分は紡錘形をなす。材質は銅合金であるが、錆化の軽微な部分では銅そのものの色調が観察されるため、その純度は比較的高いとみなされる。特筆されることは、表面は磨地のままで通有の眉形や木瓜形などの紋様が一切施されず、かつ、耳掻の頸から肩そして貝の内、さらに、竿から穂先にかけては通有の形状に仕立てられているにもかかわらず、胴の両側面から雉子股は鋭い稜を残したままとされている点で、これらの諸様相から鑑みた場合、未完成品の可能性が非常に高いと考えたい。なお、裏板が扁平となるのは、安土・桃山時代の特徴の一つともされ、この特徴からこの製品も本例の一つとみなされる。

345 は漆器椀の体部である。内外面とも赤漆を塗り、外面には黒漆で施文する。346 は箸である。一端を欠損する。347 は串状木製品である。断面長方形を呈する。頭部に「V」字状の切欠きを入れる。先端部は削って尖らせる。全長 24.3 ㎝、幅 1.0 ㎝、厚さ 0.5 ㎝を測る。348 は箆である。柄をもち、箆部は弧状に加工し、先端をやや薄くして刃状に仕上げる。先端部は磨滅が認められる。全長 21.15 ㎝、身幅 2.3 ㎝、柄幅 1.3 ㎝、厚さ 0.4 ㎝を測る。349 は刷毛である。板材を刷毛先から切込みを入れて毛を挟む構造をもつ平刷毛である。先端部に毛を糸で締めるための溝を片側に１条巡らせ、さらに小孔を２列に空ける。それとは別に両端付近に２対の綴じ孔をもつ。一方、柄部には吊るし紐を通すための小

孔を設ける。全長 16.0 ㎝、幅 11.9 ㎝、厚さ 0.8 ㎝を測る。350 ～ 354 は下駄で、350 ～ 353 は連歯下駄である。350 は後歯に磨滅が認められる。台表に焼き鏝による施文が残る。全長 22.0 ㎝、幅 8.4 ㎝を測る。Ⅰ 2b1 類に属する。351 は前・後歯および後顎の磨滅が著しい。また、後壺は当初空けられた孔より 2.9 ㎝後ろに直径 0.3 ㎝の補修孔が空けられていた。全長 21.85 ㎝、幅 10.1 ㎝を測る。Ⅰ 1a1 類である。352 は後歯と前・後顎に磨滅が認められる。全長 22.2 ㎝、幅 9.1 ㎝を測る。Ⅰ 1a1 類である。353 は前歯・後歯ともに歯成形時の溝状の加工痕が顕著に残る。後歯・後顎の磨滅が顕著である。全長 22.5 ㎝、幅 9.3 ㎝を測る。Ⅰ 1a1 類に属する。354 は無歯下駄である。台裏は全体的に磨滅する。11 か所の釘孔が認められ、うち 7 カ所には釘が打ち込まれたままになっていた。最も残りの良かった釘の大きさは縦 0.6 ㎝、横 0.4 ㎝、長さ 2.6 ㎝であったが、釘の先端は磨滅する。全長 22.15 ㎝、幅 8.1 ㎝を測る。Ⅱ 3d 類に属する。355 は開元通寶（845 年初鋳）である。

第７章　豊臣前期
（8a~8h 層・９層・11 層上面）の遺構と遺物

豊臣前期は大坂城築城から三の丸構築直前までの時期の遺構面である。

調査区中央南寄りの水溜遺構が西接する場所には整地面がみられるが、土層断面を観察した結果６面確認できたため、それぞれ 8b ～ 8f 層上面と呼称して調査を進めた。したがって、既往の調査で呼称された 8b ～ 8d 層とは合致しない。なお、この整地面は前述した７層上面の整地面とほぼ同じ場所に位置する。

8a 層上面（図 60・69、図版 18・19・21）　当該遺構面は、谷内の二段の平坦面部にあたる。検出した主な遺構はピット、土坑、井戸、溝、暗渠などである。当該遺構面の特徴は、調査区の東半部で検出した土坑群と、中央部で検出した水溜遺構にある。土坑の詳細については後述するが、直径１～ 1.5 m前後、深さ１m程の土坑で、その多くがブロック土で埋め戻されていたことや、土坑の底が湧水層まで達しておらずシルト層で止まっていたことなどを考え合わせると、土坑群の性格は土取り穴であった可能性が考えられる。また、水溜遺構は平面「Ｌ」字状に掘削された 214 土坑で、護岸施設を備えた上に土坑内に溜めた水の上澄み水を 292 暗渠によって南へ送水する機能を兼ね備えていた。暗渠の先は調査区外に延びていたことから、目的については不明であるが、上水道としての機能を果たしていたことが推測される。遺構面の標高は 15.9 ～ 13.4 mである。

211 ピット（図 60・61・62）　1D-5c 区に位置する。二段目平坦面の斜面裾部にあたる。規模は直径 0.25 m、深さ 0.3 mを測る。柱根が遺存しており、柱根は 0.2 mほど沈み込みが認められた。356 柱根は芯持材の角柱で一辺 9.1 × 9.7 ㎝、長さ 53.2 ㎝を測る。柱根の根元部分は加工され、やや尖り気味に仕上げる。

325 ピット（図 60・61・62）　1D-5c 区で 211 ピットの南東約２mに位置する。直径 0.5 m､深さ 0.4 mを測り、柱根が遺存していた。357 柱根は芯持材の角柱で一辺 8.0 × 9.3 ㎝、長さ 46.8 ㎝を測る。柱の根元部分は平らに加工する。

192 土坑（図 60・63・65、図版 40）　1D-6c 区に位置する。遺構の西半部は調査区外に延びる。平面形は不整楕円形を呈し、規模は残存長 2.5m、最大幅 2.4m、深さ 0.2m を測る。埋土は３層に分かれ、上から２層にはシルトブロックが入る。366 漆塗りの不明木製品が出土した。木製品は全長 10.0 ㎝、一辺 1.4 × 1.5 ㎝である。頂端部は平坦で、頂部から 1.3 ㎝下に刳り込みを入れて、円柱状に仕上げた頭部を作り出す。一方、基部下半は欠損する一辺を除いた３方向に漆の塗布が認められる。基部上半部は括れを作り出すために削り込まれる。底部は真っ直ぐに切り落とされる。この木製品は塗り物の板を割って再加工したものであろう。

199 土坑（図 60・64・65、図版 39）　1D-6c 区に位置する。不整楕円形を呈し、径 1.0 × 1.1 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は２層であるが、黒色中砂・シルト混細砂が主に堆積する。遺物は陶器、瓦、下駄などが出土した。359 は備前焼捏ね鉢である。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内側に屈曲させて端部は面をもつ。体部外面には縦方向に線刻が認められる。内面は摩耗が顕著である。復元口径 16.6 ㎝、器高 7.1 ㎝を測る。362 は三巴文軒丸瓦で、下半部を欠損する。巴尾は他の巴胴と接する。372 は連歯下駄である。後歯は右側が片減りする。全長 19.7 ㎝､幅 9.7 ㎝を測る。Ⅰ 1a1 類に属する。

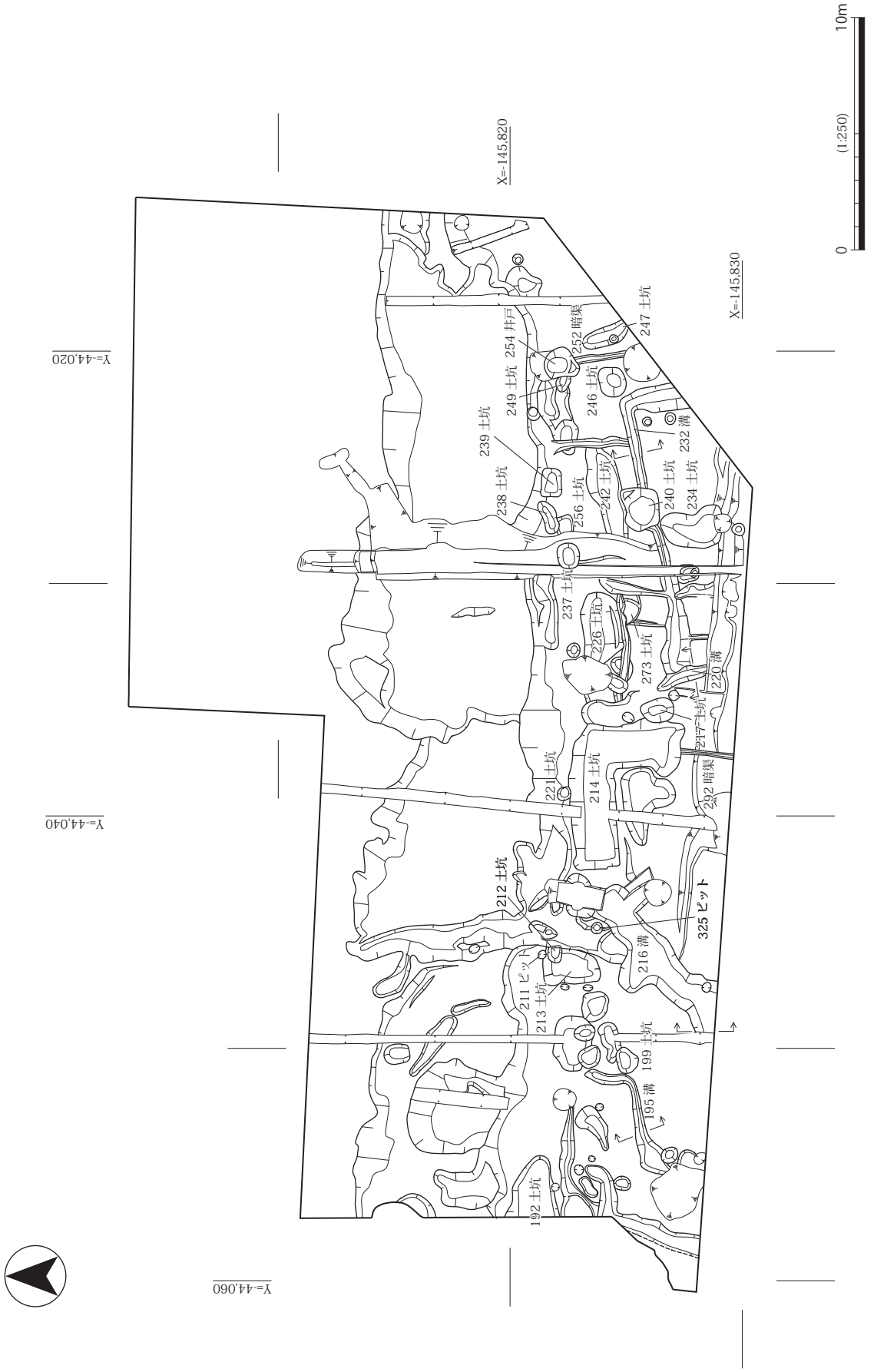


図 60　8a 層上面　平面図

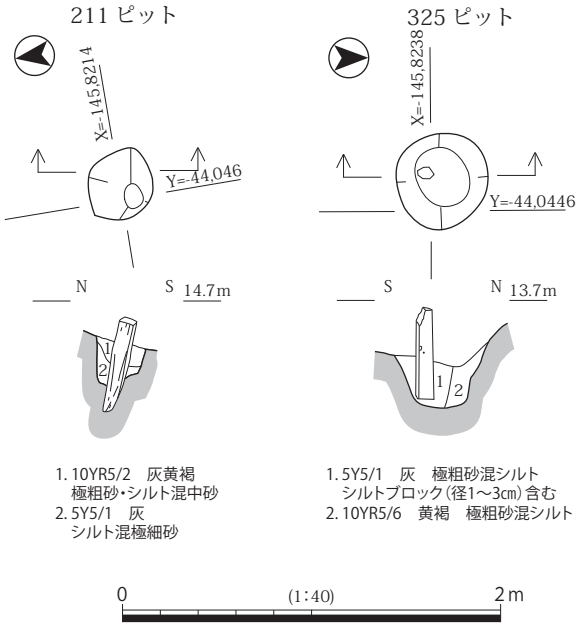


図 61　8a 層上面　211・325 ピット平・断面図

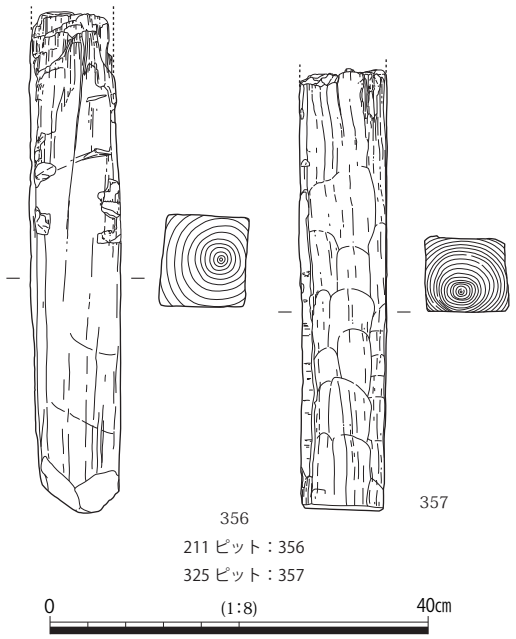


図 62　8a 層上面　211・325 ピット出土遺物

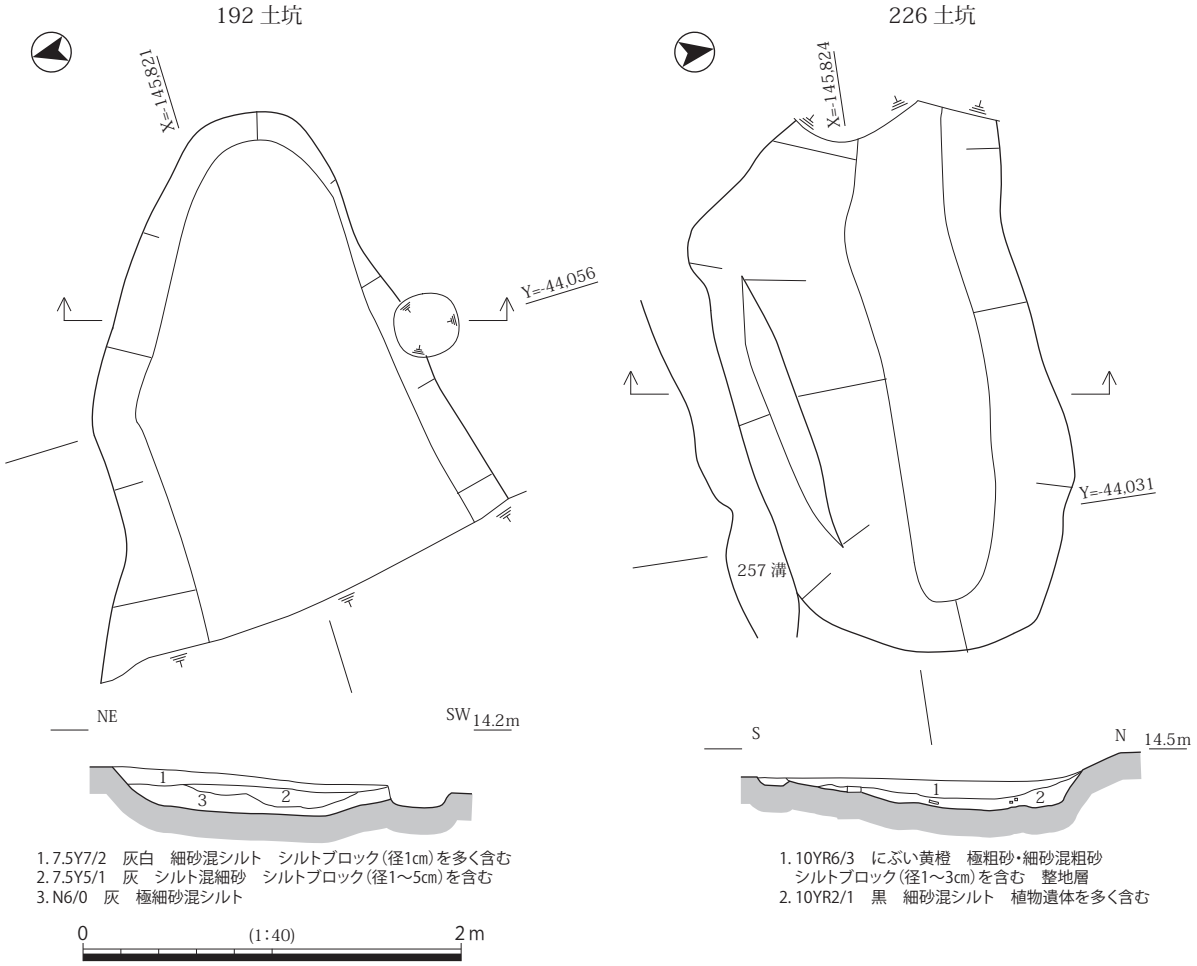


図 63　8a 層上面　192・226 土坑平・断面図

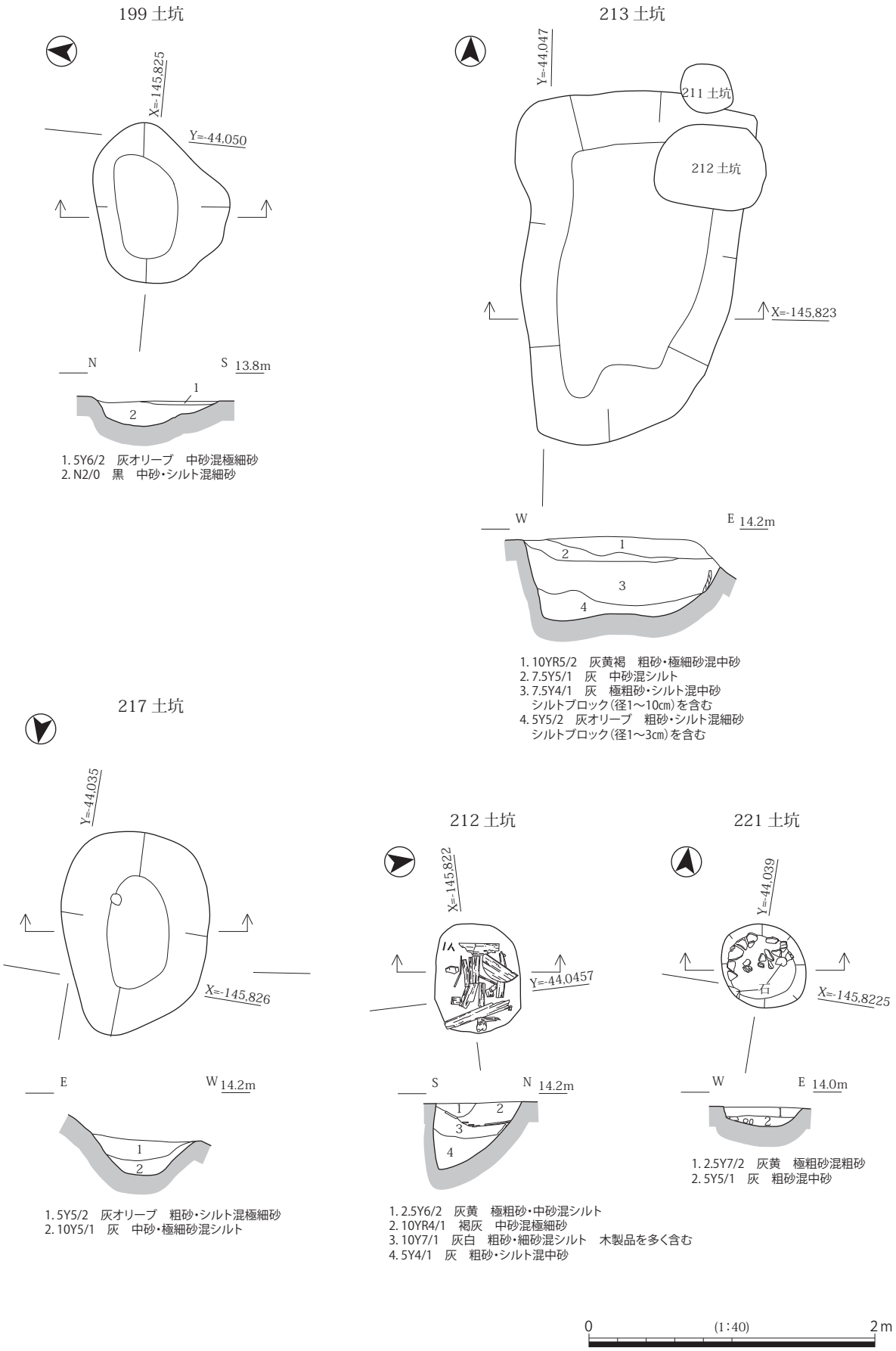


図 64　8a 層上面　199・212・213・217・221 土坑平・断面図

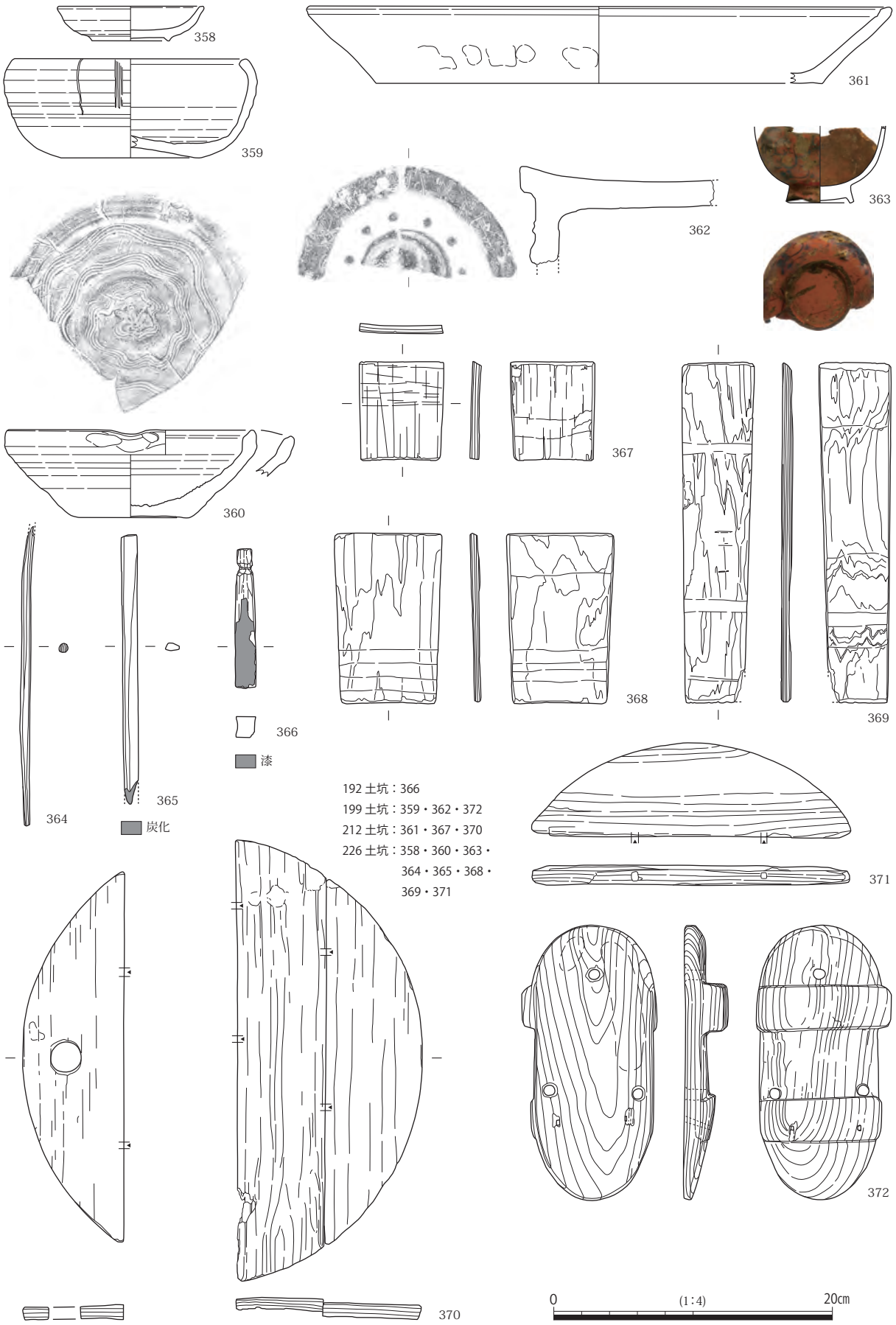


図 65　8a 層上面　192・199・212・226 土坑出土遺物

212 土坑（図 60・64・65、図版 21） 1D-5c 区に位置する。211 ピットの南に位置する。平面形は不整な隅丸長方形を呈する。一辺 0.6 × 0.75m、深さ 0.45m を測る。灰白色粗砂・細砂混シルト層の上面で木製品や植物遺体が集積する。遺物は木製品の他に陶器が出土した。361 は丹波焼の大平鉢である。外面に僅かに指頭圧痕が残る。367 は桶もしくは盥の側板である。外面には箍締めの、内面には底板との接合部分の痕跡が残る。全長 7.1 ㎝、最大幅 6.1 ㎝、最大厚 0.7 ㎝を測る。370 は樽の蓋部である。 4 枚の板で構成されるが 1 枚を欠く。それぞれの板は 2 ～ 3 カ所ずつ直径 0.4 ㎝の木釘でもって埋め釘し接ぎ合わせる。また、直径 2.2 ㎝の木栓差込孔が穿たれる。

213 土坑（図 60・64、図版 20） 1D-5c 区に位置する。不整隅丸長方形を呈す。規模は全長 2.5m、幅 1.7m、深さ 0.55m を測る。埋土は 4 層に分層できたが、下層の 2 層には直径 1 ～ 10 ㎝のシルトブロックが入る。遺物の出土はなかった。

217 土坑（図 60・64） 1D-4c 区に位置する。整地面の西端部から 0.3m 下がったテラス状の平坦面で、なおかつ 214 土坑の東側で検出した。平面形は不整楕円形を呈する。長径 1.4m、短径 1.0m 深さ 0.3m を測る。埋土は 2 層で遺物の出土はなかった。

221 土坑（図 60・64、図版 21） 1D-4c 区に位置する。一段目の平坦面から下がる斜面裾部で、なおかつ 214 土坑の北側で検出した。土坑は円形で、直径 0.6m、深さ 0.2m を測る。埋土は 2 層で、下層に瓦片や拳大の石を敷く。8b 層上面で検出した導水施設の下部構造と類似することから一連の遺構と推測できるが、当該遺構の上層に 8a 層の堆積がなく 7 層を除去して検出したこと、位置関係など導水施設 3 との有機的な繋がりを捉えることができなかったことなどから、8a 層上面での遺構として扱った。遺物は瓦片や石が出土したが、図示し得るものはなかった。

226 土坑（図 60・63・65、図版 39） 1D-4c 区で、整地面の北側に位置する。隅丸長方形を呈する。長辺 3.0m、短辺 1.7m、深さ 0.2m を測る。埋土は 2 層で、下層は黒色細砂混シルト層で木製品や植物遺体を多く含む。遺物は木製品の他に陶器が出土した。358 は瀬戸・美濃焼の灰釉皿である。高台内に重ね焼きの痕跡が残る。復元口径 10.4 ㎝、器高 2.5 ㎝を測る。360 は備前焼の擂鉢である。器高の浅いタイプで、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は上方に屈曲させ、口縁端部は内面に面をもつ。片口の両端には成形時のユビオサエの痕が残る。内面は螺旋状に一筆描きされた擂目が入る。復元口径 17.5 ㎝、器高 6.3 ㎝を測る。363 は漆器椀である。内外面ともに赤漆を塗り、外面には黒漆で萩文もしくは葡萄文を描く。364 は箸である。一端を欠損する。365 は付け木である。368 は桶側板である。外面下半部には箍締めの痕跡が、内面には底板接着面の痕跡が残る。全長 12.2 ㎝、幅 7.7 ㎝、厚さ 0.6 ㎝を測る。369 は桶もしくは樽の側板である。外面には 3 条の箍締めの痕跡が、内面には底板接着面の痕跡が残る。全長 24.4 ㎝、幅 5.2 ㎝、厚さ 0.8 ㎝を測る。371 は桶の底板である。断面隅丸方形の木釘が 2 カ所残る。

234 土坑（図 60・66・68、図版 20・40） 1D-3c 区に位置する。平面は不整楕円形で、断面形状は逆台形を呈する。埋土は 3 層ですべてシルトブロックを含み、人為的に埋め戻されたことが看取できる。規模は長径 2.7 m、短径 1.4 ～ 1.8 m、深さ 0.8 mを測る。土器、陶器、瓦、石器などが出土した。373 は土師器皿である。復元口径 8.5 ㎝を測る。384 は瀬戸・美濃焼の碗である。体部は内彎しながら立ち上がり、端部は丸く収める。復元口径 11.8 ㎝を測る。401 は石製硯である。被熱のため剥離が著しい。かなり使い込まれており、陸から波止部にかけての磨滅が著しい。材質は粘板岩で、高島石と考えられる。法量は全長 17.0 ㎝、幅 8.1 ㎝、高さ 1.8 ㎝を測る。

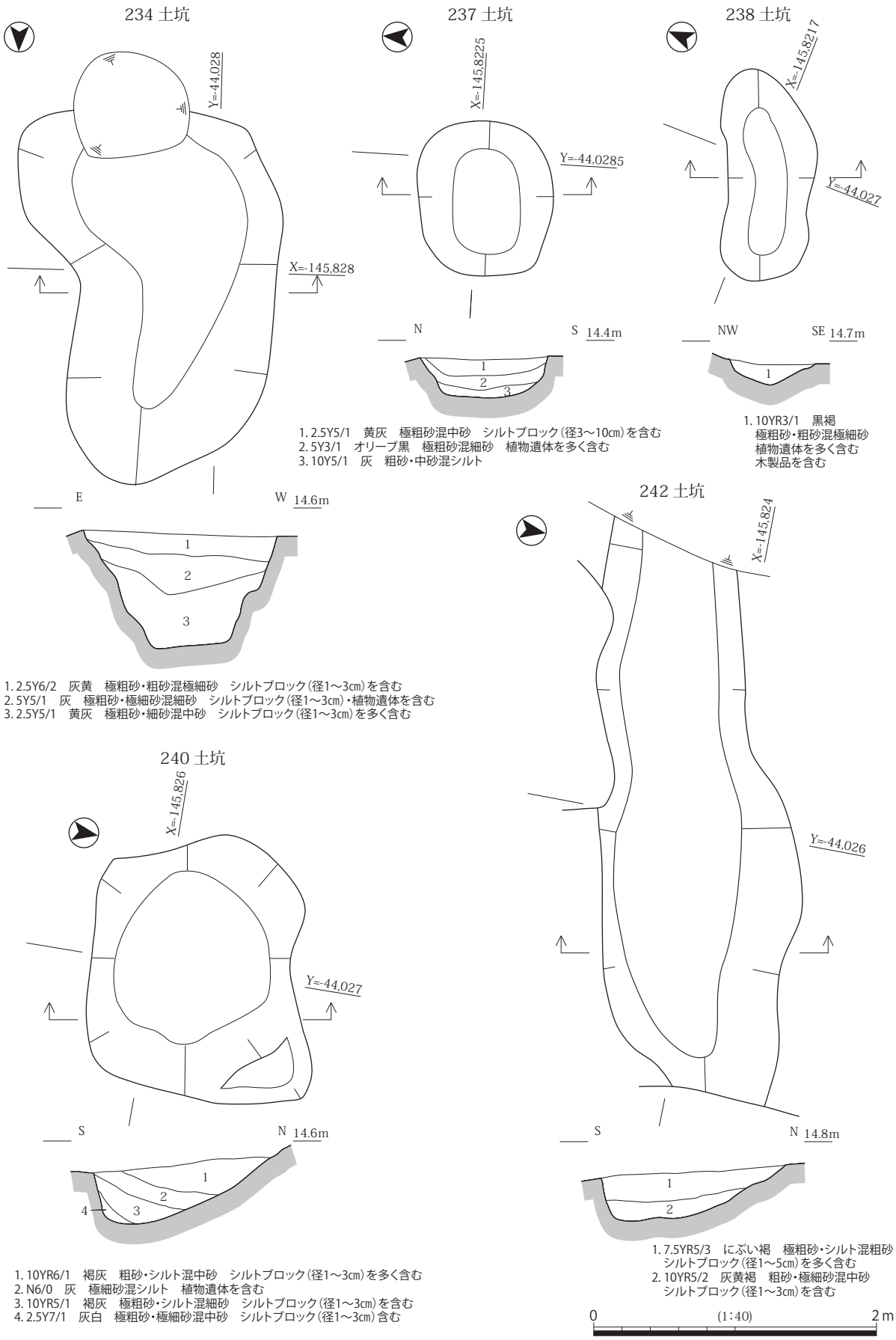


図 66　8a 層上面　234・237・238・240・242 土坑平・断面図

237 土坑（図 60・66・68、図版 20） 1D-3c 区に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長辺 1.1 m、短辺 0.9 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は３層であるが、中間層に木製品をはじめ植物遺体が多く含まれていた。出土した遺物は陶器、瓦質土器、瓦、木製品などである。386 は瀬戸・美濃焼の鉄釉丸碗である。腰が張るタイプで、体部は内彎気味に上外方へ立ち上がる。復元口径は 11.0 ㎝、器高は 5.25 ㎝を測る。389 ～ 393 は箸である。393 は頭部付近に直径 0.3 ㎝と 0.1 ㎝の２カ所の穿孔をもつ。

238 土坑（図 60・66・68、図版 21・39） 1D-3c 区に位置する。不整楕円形を呈し、規模は全長 1.5 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は木製品や植物遺体を含む極粗砂・粗砂混極細砂の単層である。遺物は土器細片、青白磁、瓦、木製品である。379 は青磁の菊花皿片である。380 は白磁皿片である。破断面に漆継の痕跡が残る。388 は丹波焼の大平鉢である。内面に自然釉が付着する。また、破断面には漆継の痕跡が残る。394 は箸である。全長 26.9 ㎝、最大幅 0.7 ㎝を測る。397 は折敷の縁で、赤漆を塗る。底板と他の側板は木釘で留める。長さ 19.0 ㎝以上、高さ 2.2 ㎝、厚さ 0.9 ㎝を測る。

239 土坑（図 60・67・68、図版 20） 1D-3c 区に位置する。隅丸長方形を呈す。長辺 1.1 m、短辺 0.9 m、深さ 0.3 mを測る。遺物は陶器、木製品が出土した。381 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗で、復元口径 6.0 ㎝、器高 6.2 ㎝を測る。399 は木栓である。台形状を呈し、全長 14.8 ㎝、幅 2.6 ㎝、厚さ 1.8 ㎝を測る。

240 土坑（図 60・66・68、図版 20・40） 1D-3c 区に位置する。不整隅丸長方形を呈する。長辺 1.9 m、短辺 1.6 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は４層に分層でき、上から２層目は木製品や植物遺体を含む層だが、それ以外はシルトブロックを含む層が堆積する。遺物は陶器片の他に木製品が出土した。395 は柄杓の柄である。柄先を細く削り、先端から 14.4 ㎝の位置に掬部と接合するための木釘が残る。全長 69.4 ㎝、最大幅 3.2 ㎝、厚さ 0.9 ㎝を測る。396 は短刀の鞘である。小刀が装着できるよう二重構造をもつ。内面は丁寧に刳り込み、鏹袋も造り出す。剥離が著しいが全体に黒漆が塗布される。鞘の法量は全長 18.6 ㎝、幅 3.9 ㎝、厚さ 1.8 ㎝を測る。刃幅 2.7 ㎝、刃渡り 15 ㎝（５寸）程度の短刀を納めることができる。また、小刀を装着するための溝は幅 1.4 ㎝を測り、刃渡り 10 ㎝程度の小刀を装着することができる。材質はカツラである。398 は不明木製品であるが組み合わせの箱の部材か。矩形相欠接ぎをし、木釘で留める構造をもつ。

242 土坑（図 60・66・68、図版 40） 1D-3c 区に位置する。溝状に細長く延びる土坑で、両端は撹乱および他の遺構によって切られる。残存長 4.1 m、幅 1.4 m、深さ 0.3 mを測る。土器細片、陶器、青花片、瓦片などが出土した。382 は瀬戸・美濃焼の鉄釉天目碗である。383 は備前焼碗である。体部はやや内彎気味に上外方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。外面はヨコナデ、内面は工具によるナデを施す。口径 11.2 ㎝、器高 7.8 ㎝を測る。

246 土坑（図 60・67・68、図版 20） 1D-3c 区に位置する。不整隅丸長方形を呈する。長辺 1.3 m、短辺 1.1 m、深さ 0.65 mを測る。埋土は２層でどちらもシルトブロックを含む。遺物は陶器や瓦片が出土した。その中に 376 唐津焼の稜花皿や 377 志野焼の稜花皿がみられたが、混入もしくは７層上面の遺構の見落としの可能性もある。

247 土坑（図 60・67・68） 1D-2c 区に位置する。溝状の土坑で、遺構の一端を撹乱で失う。残存長 2.1 m、幅 0.9 m、深さ 0.2 mを測る。遺物は土器、磁器、漆器片などである。374 は土師器皿である。口径 9.6 ㎝、器高 2.1 ㎝を測る。375 は土師器灯明皿である。口縁端部に煤が付着する。復元口径 11.5 ㎝、器高 2.2 ㎝を測る。387 は染付碗である。混入と考えられる。

249 土坑（図 60・67・68、図版 40） 1D-3c 区に位置する。不整楕円形の土坑で、遺構の東半部を欠

く。長径 0.7 m以上、短径 0.6 m、深さ 0.2 mを測る。遺物は土器細片、瓦片の他に木製品が出土した。400 は木簡状に切欠きをもつ板状木製品である。下半部は欠損する。残存長 5.8 ㎝、幅 1.3 ㎝、厚さ 0.2 ㎝を測る。

256 土坑（図 60・67・68、図版 20） 1D-3c 区に位置する。不整隅丸方形の土坑で、西半部を欠く。一辺 0.7 ～ 0.8 m以上、深さ 0.2 mを測る。遺物は青花や陶器などが出土した。378 は青花皿である。復元口径 10.4 ㎝、器高 2.9 ㎝を測る。見込み部には蛇の目釉剥ぎが残る。385 は瀬戸・美濃焼の鉄釉丸碗である。

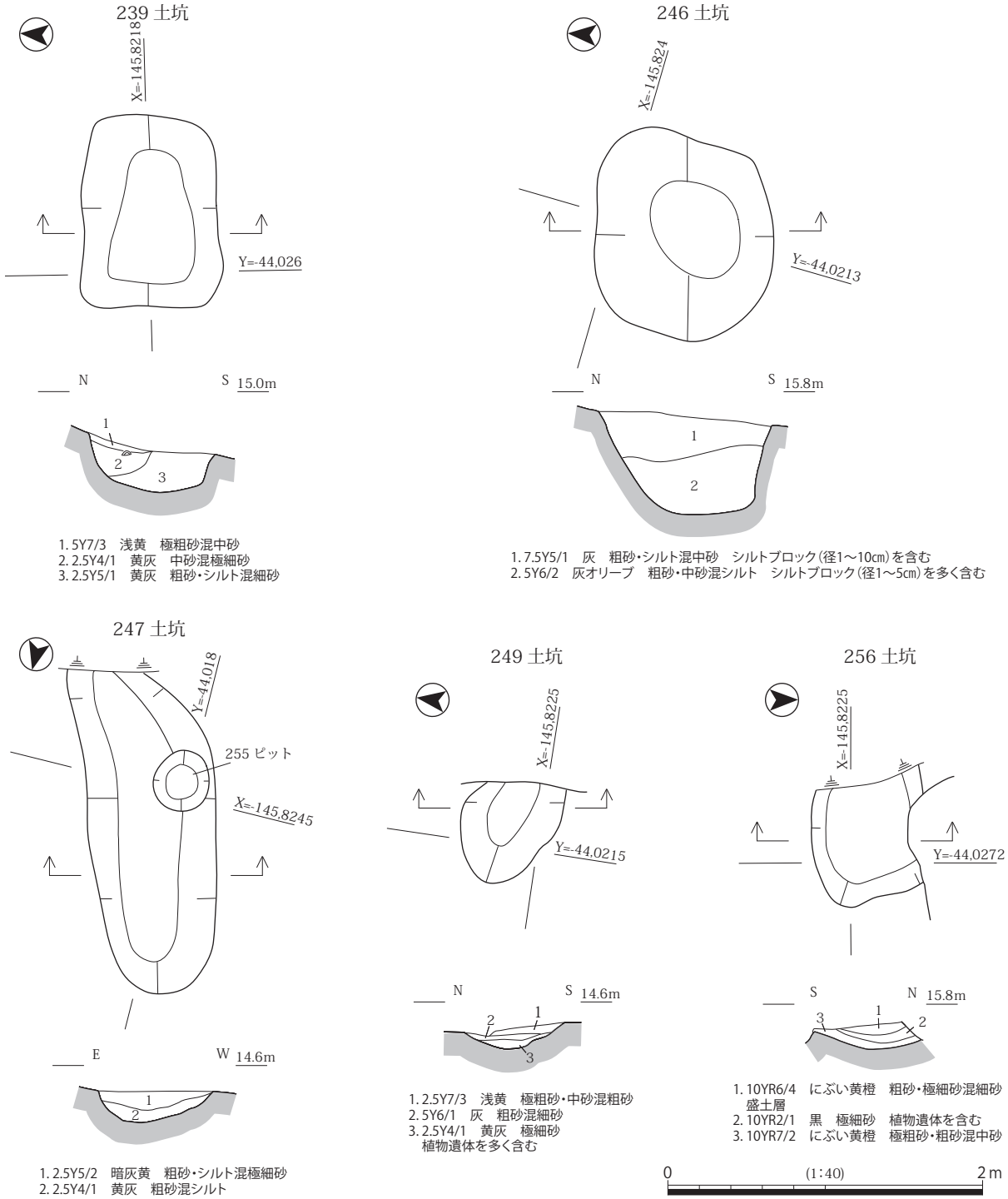


図 67　8a 層上面　239・246・247・249・256 土坑平・断面図

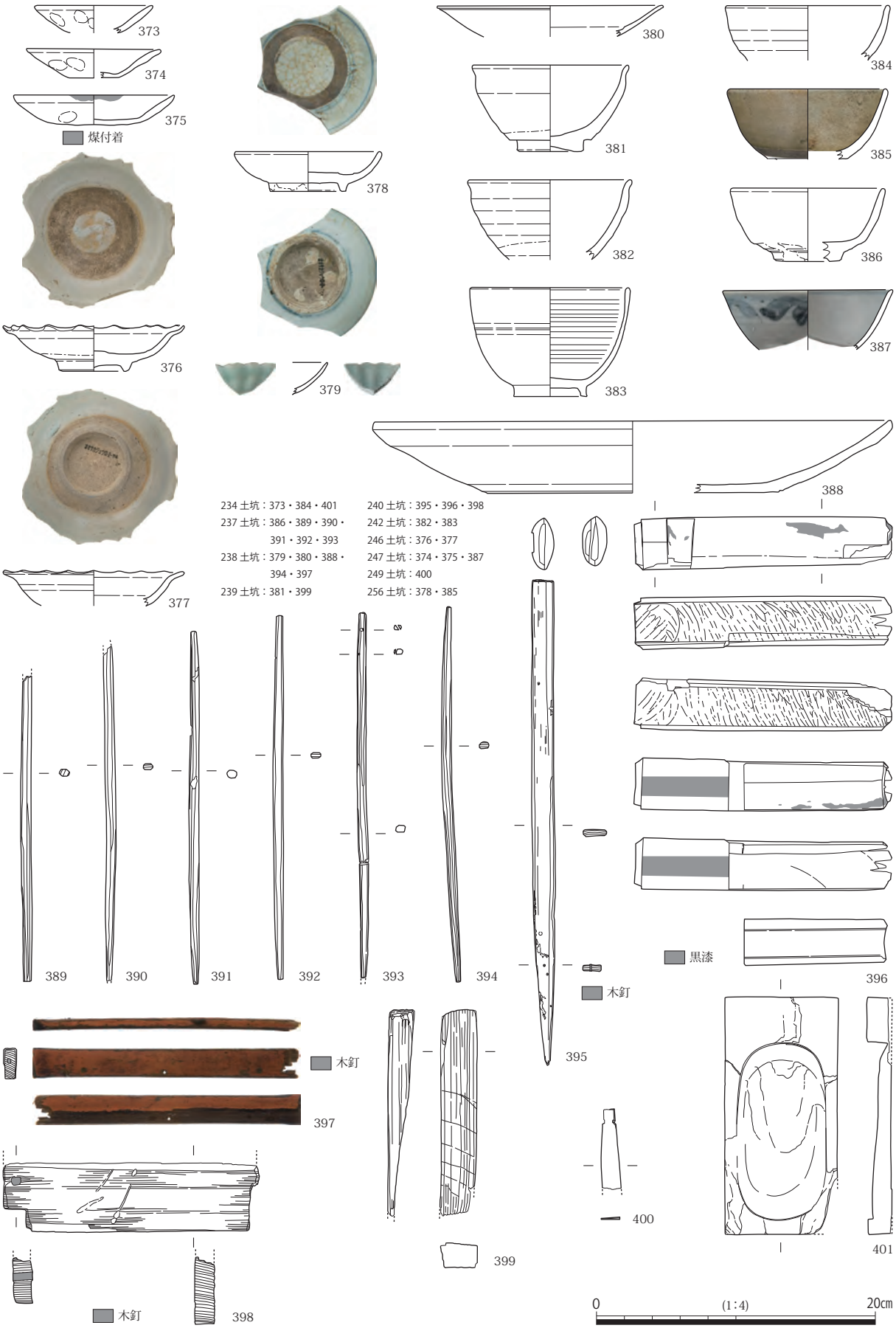
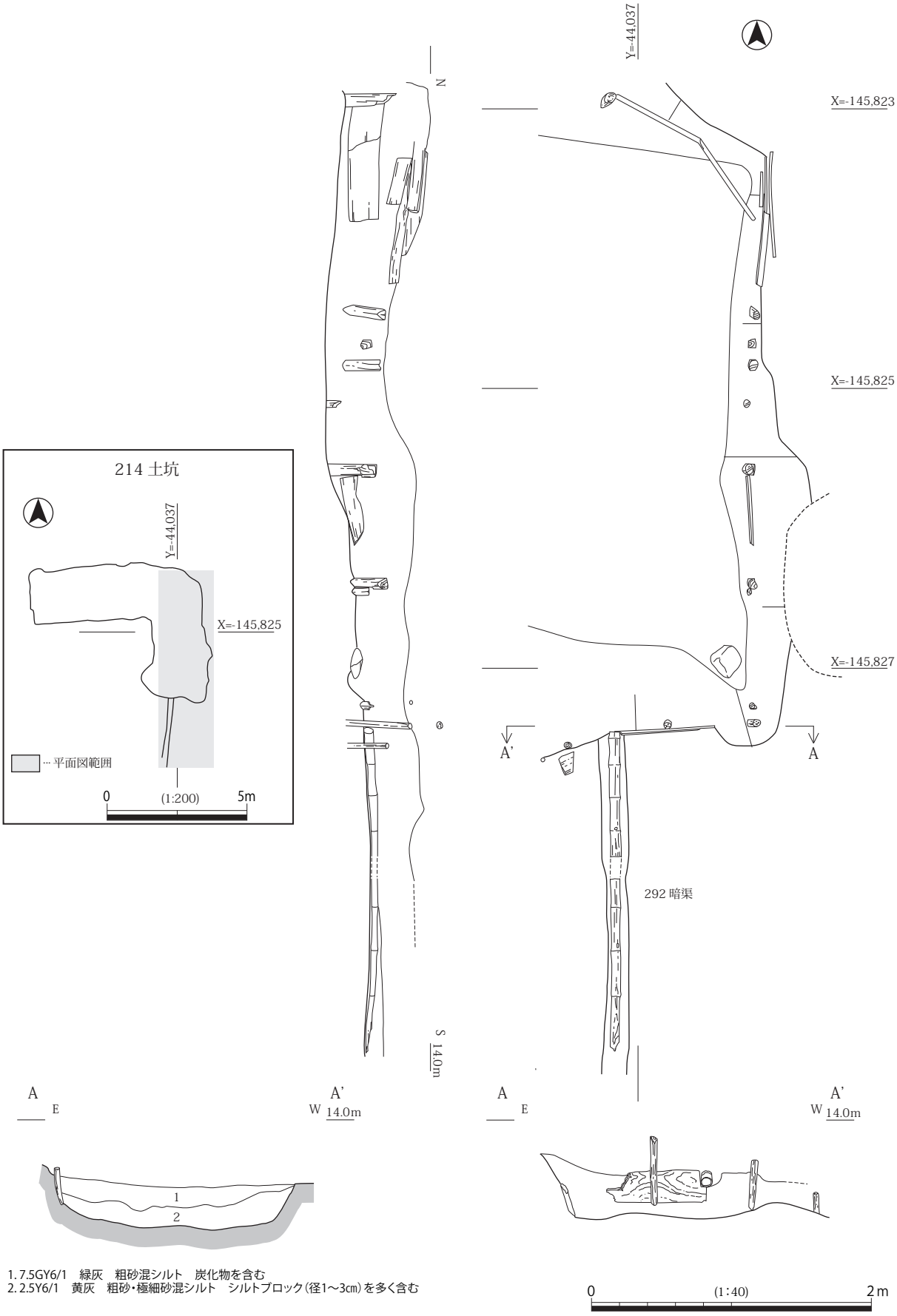


図 68　8a 層上面　234・237 ～ 240・242・246・247・249・256 土坑出土遺物



1. 7.5GY6/1　緑灰　粗砂混シルト　炭化物を含む
2. 2.5Y6/1　黄灰　粗砂・極細砂混シルト　シルトブロック（径1～3㎝）を多く含む

図 69　8a 層上面　214 土坑、292 暗渠平・立・断面図

214 土坑・292 暗渠（導水施設２）（図 60・69・70、図版 18・21・39）　1D-4c・5c 区に位置する。214 土坑は東西長 6.2 m、南北長 4.7 m、幅 1.9 ～ 2.0 m、深さ 0.4 mを測る逆「L」字状の土坑である。土坑の南辺部には 292 暗渠が取りつく。292 暗渠は 214 土坑の底から 0.3 m上に取りついており、214 土坑に溜めた上澄み水を南へ送る構造をもつ。また、土坑の東側にある整地面と土坑底面の比高は 1.1 mを測ることから、土坑の東壁は杭および横矢板で土留めを行う。さらに、取水口となる土坑南壁についても、壁面の崩落を防ぐため杭と横矢板による土留めを行っていた。遺物は土器、陶磁器、瓦、木製品、石製品などが出土した。402 は瀬戸・美濃焼の皿底部である。見込み部に菊文の陰刻を施す。高台内には重ね焼きの痕跡が残る。403 は白磁の皿底部である。高台内に放射状のカンナ削りの痕跡が残る。畳付は露胎する。404 は丹波焼擂鉢である。一本引きの擂目をもつ。405 は湊焼の甕である。土師質で、内外面ともにヨコナデ調整を行う。内面に白色の物質が付着しており、糞尿溜として利用されていたと考えられる。406・407 は軒平瓦である。406 は唐草文が３転する。407 は三葉の中心飾と、３転する唐草文をもつ。408 は木製鞘である。剣先状の切先をもつ工具のものか。409 は桶底板である。断面長方形の木釘を埋め釘にして板材を接ぎ合わせる。410 は鉄滓で椀形滓の一部と考えられる。磁着度は３、メタル度は０であった。

なお、下層の 8b 層上面では井戸から取水した水を送ったと考えられる導水施設３を検出しており、この 214 土坑と 292 暗渠についても雨水など土坑に溜めた水の上澄みを上水道として利用するための施設と考えられる。

273 土坑（図 60・71・72、図版 20・40）　1D-4c 区に位置する。不整楕円形で長径 1.8 m、短径 1.1

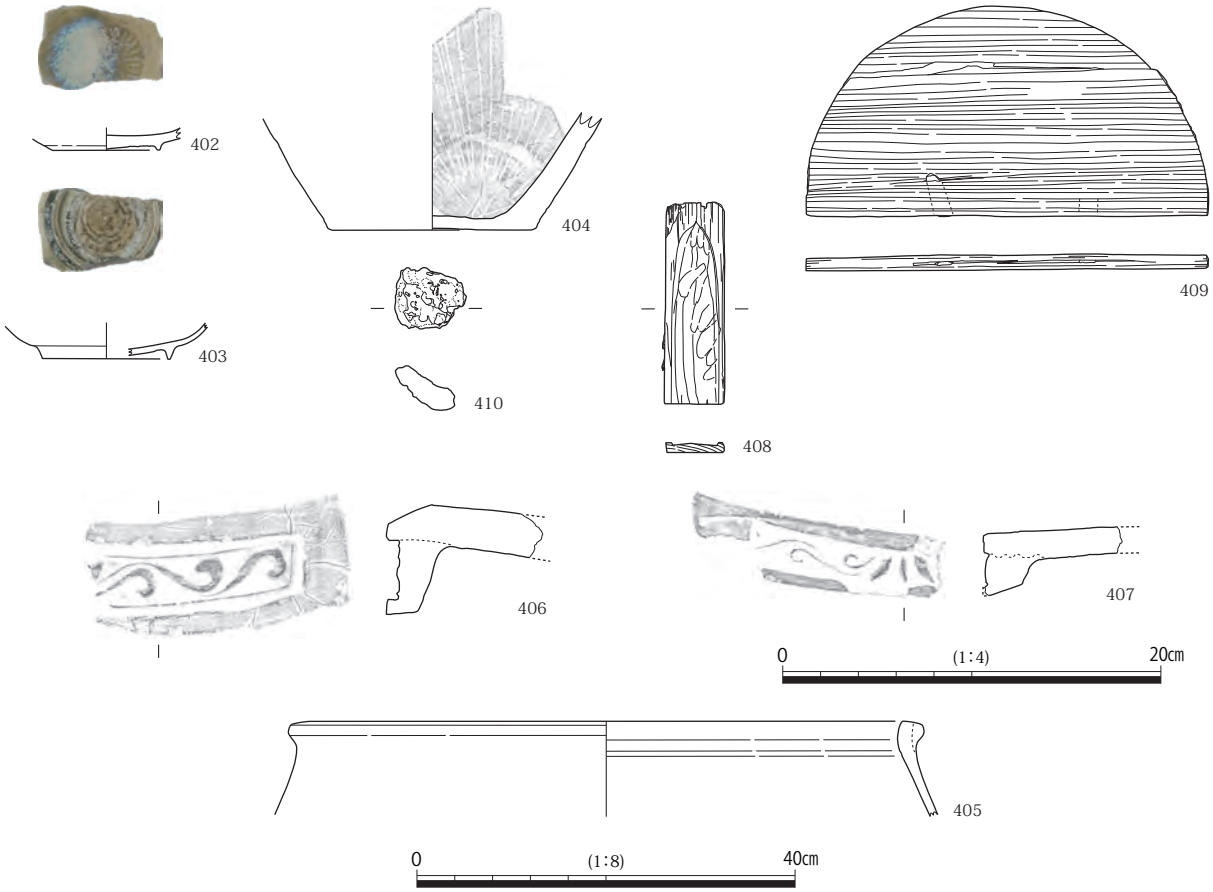


図 70　8a 層上面　214 土坑出土遺物

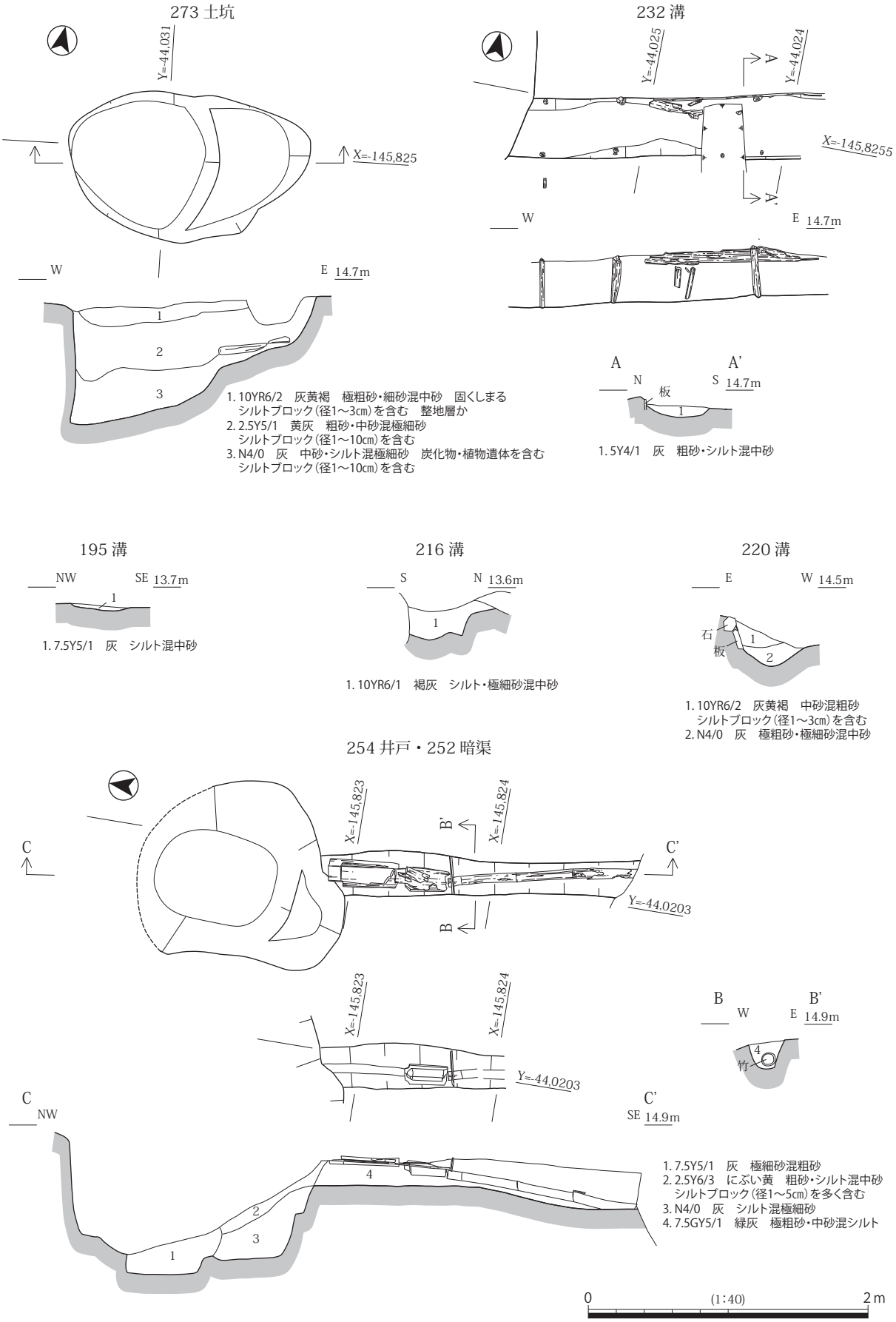


図 71　8a 層上面　273 土坑、254 井戸、195・216・220・232 溝、252 暗渠平・断面図

m、深さ 0.9 mを測る。土坑は東側から二段落ちを呈し、西壁はほぼ直に落ちる。埋土は３層で、下２層はシルトブロックを含む層で、上層は 8a 層上面の整地層であるが、8b 層上面の遺構より新しいため、当該遺構面に帰属させて記載した。土坑内から陶器、瓦片、木製品が出土した。411 は備前焼擂鉢である。器高の浅いタイプで、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は内側に大きく屈曲させ、口縁端部は内面に面をもつ。外面体部下半はヘラケズリ調整を行い、重ね焼きの痕跡が残る。内面は螺旋状に一筆描きされた擂目が入り、摩耗が顕著である。復元口径 19.2 ㎝、器高 5.7 ㎝を測る。412 ～ 422 は木製品である。412 ～ 421 は箸で、長さは 21.7 ～ 31.1 ㎝を測る。422 は小形の羽子板で、柄部を欠損する。板部の規模は残存長 12.9 ㎝、最大幅 5.8 ㎝、厚さ 0.5 ㎝を測る。柄部との境には二段の弧状の切欠きを入れる。

195 溝（図 60・71・73） 1D-6c 区に位置する。二段目の平坦面上を北から南へはしった後、西へと屈曲して収束する。溝の幅は 0.3 ～ 0.5 mだが屈曲部では 1.1 mを測る。深さは 0.1 ～ 0.2 mであった。遺物は土器や陶器の細片､および瓦が出土した。425 は軒平瓦である。三葉と推測される中心飾と、３転の唐草文をもつ。

216 溝（図 60・71・73、図版 18） 1D-5c 区に位置する。二段目の平坦面上を北東－南西方向に指向して南は調査区外に延びる。規模は幅 1.3 ～ 1.7 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は単層でシルト・極細砂混中砂である。土器、陶器、瓦、木製品が出土した。423 は土師器灯明皿である。口縁内外面に煤が付着する。復元口径 9.5 ㎝、器高 1.9 ㎝を測る。424 は土師器皿である。復元口径 16.9 ㎝、器高 2.3 ㎝を測る。427 は漆器椀である。足の高い高台をもつ。内外面とも黒漆を塗るが、剥離が著しく木地が露胎する。

220 溝（図 60・71・73、図版 21・40） 1D-4c 区に位置する。整地面の西側を北西－南東方向に指

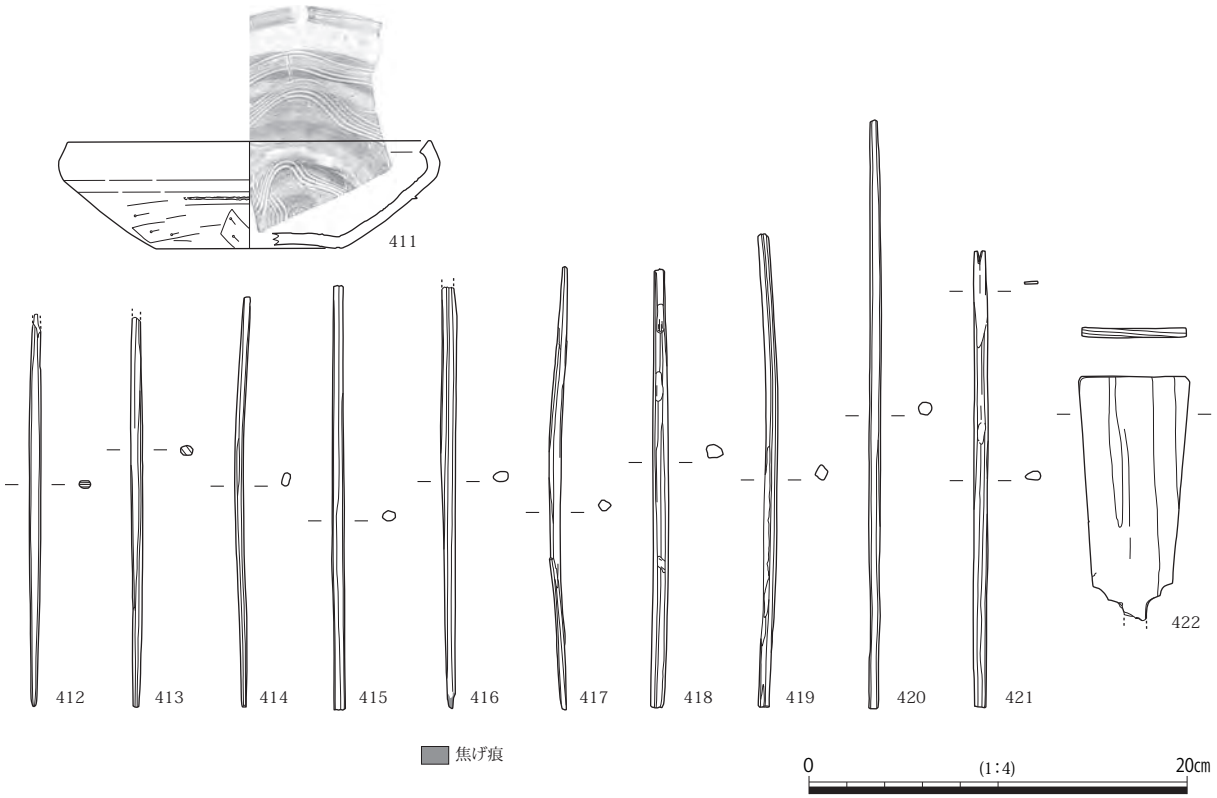


図 72　8a 層上面　273 土坑出土遺物

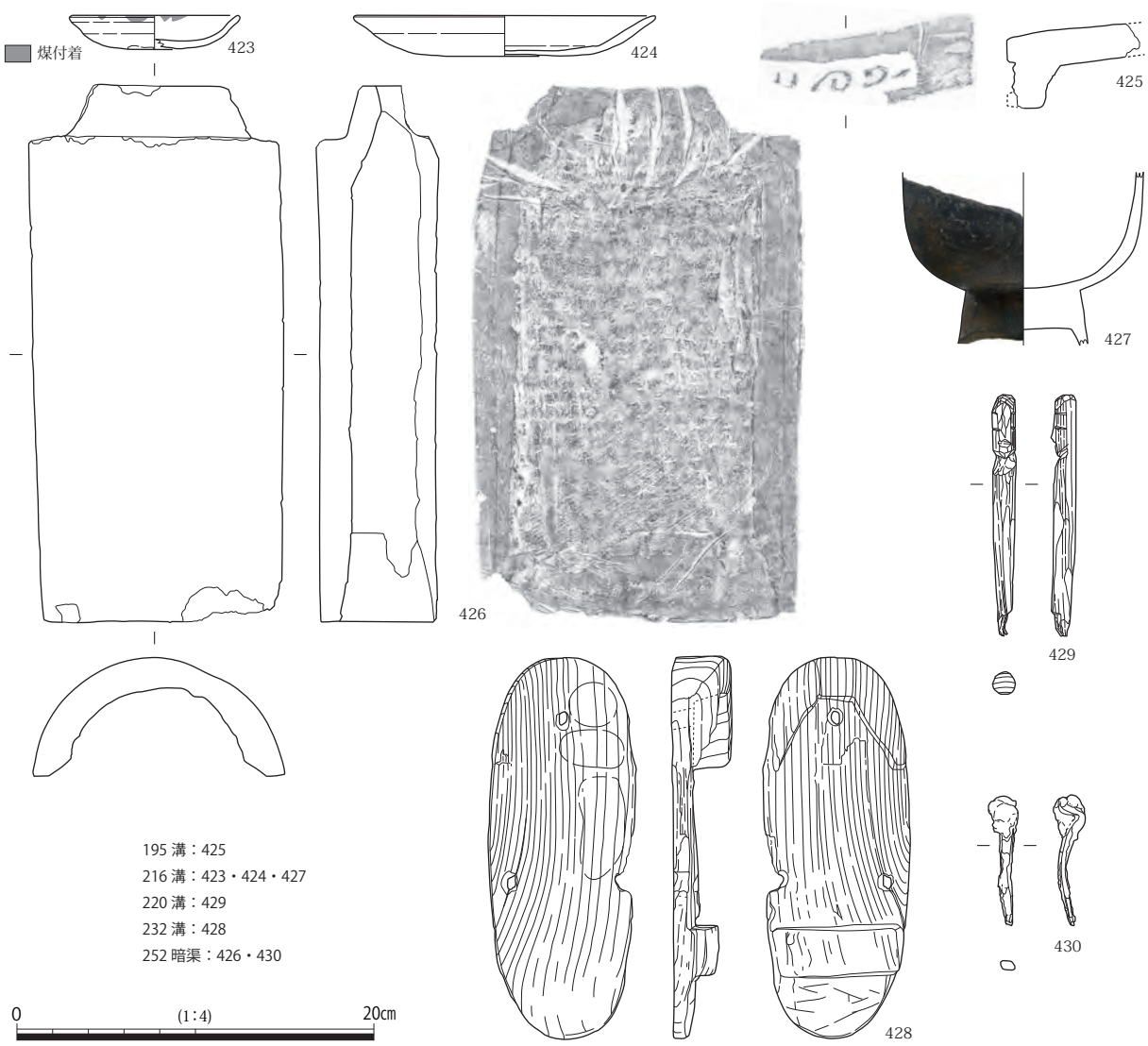


図 73　8a 層上面　195・216・220・232 溝、252 暗渠出土遺物

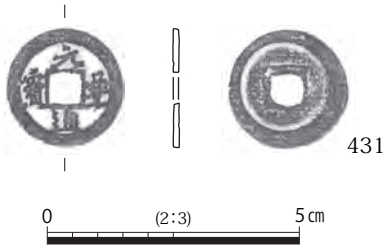


図 74　8a 層出土遺物

向して、幅 0.5 m、深さ 0.1 mを測る。埋土は 2 層で下層には極粗砂・極細砂混中砂が、上層にはシルトブロックを含む中砂混粗砂が堆積する。遺物は土器、陶器、瓦、木製品の細片が出土した。429 は木製人形である。基部は欠損する。円柱状の材に切込みを入れて頸部を作り出す。頭部は眉・目・鼻・口を表現する。頭頂部は前頭部を斜めに削って仕上げる。残存長 13.5 ㎝、直径 1.3 ㎝を測る。

232 溝（図 60・71・73、図版 21）　1D-3c・4c 区に位置する。溝は概ね南から北へ S － 12°W－N 方向へ指向した後、90°屈曲して西南西方向にはしり、220 溝に切られる。溝の両岸は杭と横矢板を打設して壁の崩落を防ぐ構造をもつ。溝の規模は幅 0.4 ～ 1.2 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mを測る。埋土は単層で粗砂・シルト混中砂が堆積する。遺物は土器、陶器、須恵器、瓦質土器、瓦、木製品が出土したが、図示し得たのは 428 下駄のみであった。428 は連歯下駄である。全長 21.3 ㎝、幅 8.2 ㎝を測る。右側後壺の一部を欠損する。右側後歯が片減りする。Ⅰ 2a1 類である。

254 井戸・252 暗渠（導水施設 1 ）（図 60・71・73、図版 21・40）　1D-3c 区に位置する。254 井戸は不整円形で直径 1.3 ～ 1.5 m以上、深さ 0.85 mを測るが、7 層上面で検出した 172 井戸に切られる。

一方、252 暗渠は 254 井戸の南端を起点として南に延びる。254 井戸と接する取水口から南へ 0.9 mまでは開口した溝で、板材で蓋をしていた。また、暗渠部の手前では丸瓦の凹面を上にして樋状に設置し、暗渠の竹製導水管内へ水を送り込み易い構造をとる。丸瓦から南は節を抜いた竹の暗渠を設置するが、開口部と暗渠の境には板を立てて土留めを行う。なお、暗渠は南側を 7 層上面の 171 井戸に切られるが、調査区外に延びると考えられる。426 は樋として利用された丸瓦である。ほぼ完形で全長 30.2 ㎝、幅 10.3 ㎝、高さ 6.6 ㎝を測る。外面は縦方向のナデ、内面は布目痕が残りコビキ A 技法で仕上げる。430 は断面長方形の板状の釘である。全長 7.3 ㎝、幅 0.8 ㎝を測る。

8a 層出土遺物（図 74） 8a 層からは土器、陶器、瓦の細片が出土したが図示し得なかった。431 は北宋銭の元豊通寶（1078 年初鋳）である。

8b 層上面（図 76、図版 22） 1D-4c 区に位置する 8a 層上面で検出した整地面を形成する整地層およびその下層に堆積する包含層を除去して検出した。したがって 8b 層上面が展開するのは 8a 層上面で検出した整地面の下層部分の範囲である。検出した遺構はピット、土坑、導水施設であったが、ピットや土坑からは遺物の出土はなかった。

導水施設 3（図 75・77、図版 22・40） 導水施設 3 は、竹製導水管を使用した暗渠と桶を利用した枡とで構成される。274 埋桶を起点として 275 暗渠を通って西に延びて 281 埋桶に達し、分岐して西と南に延びる。南へは 280 暗渠を通って 291 埋桶へ繋がるがその先は不明である。また、281 埋桶から

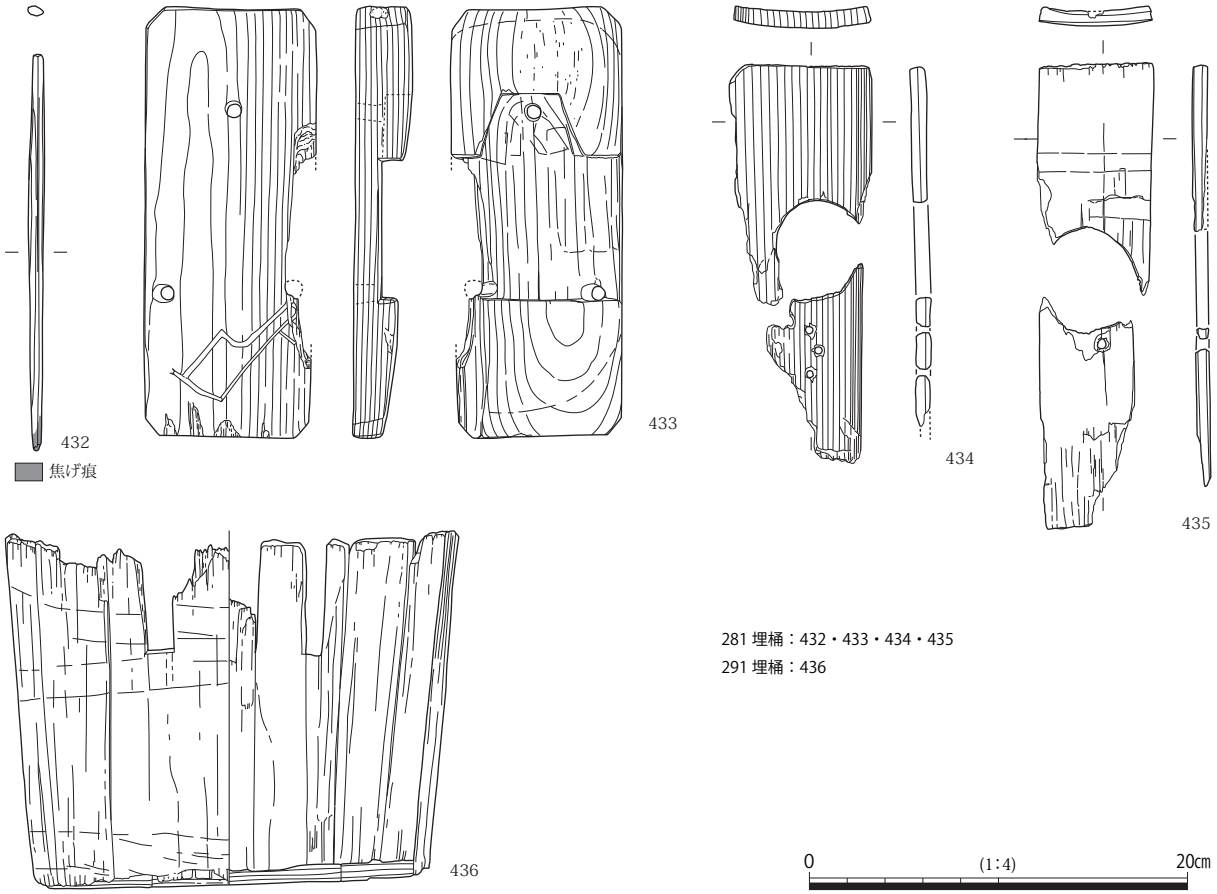


図 75　8b 層上面　導水施設 3 出土遺物

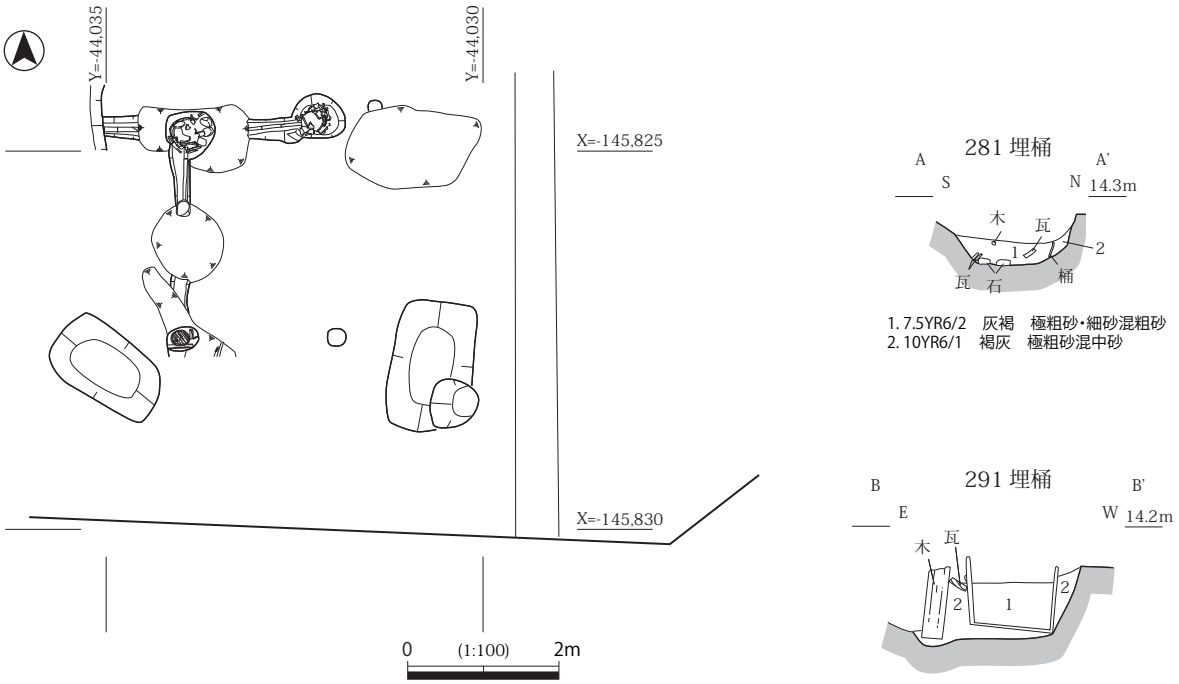


図 76　8b 層上面　平面図

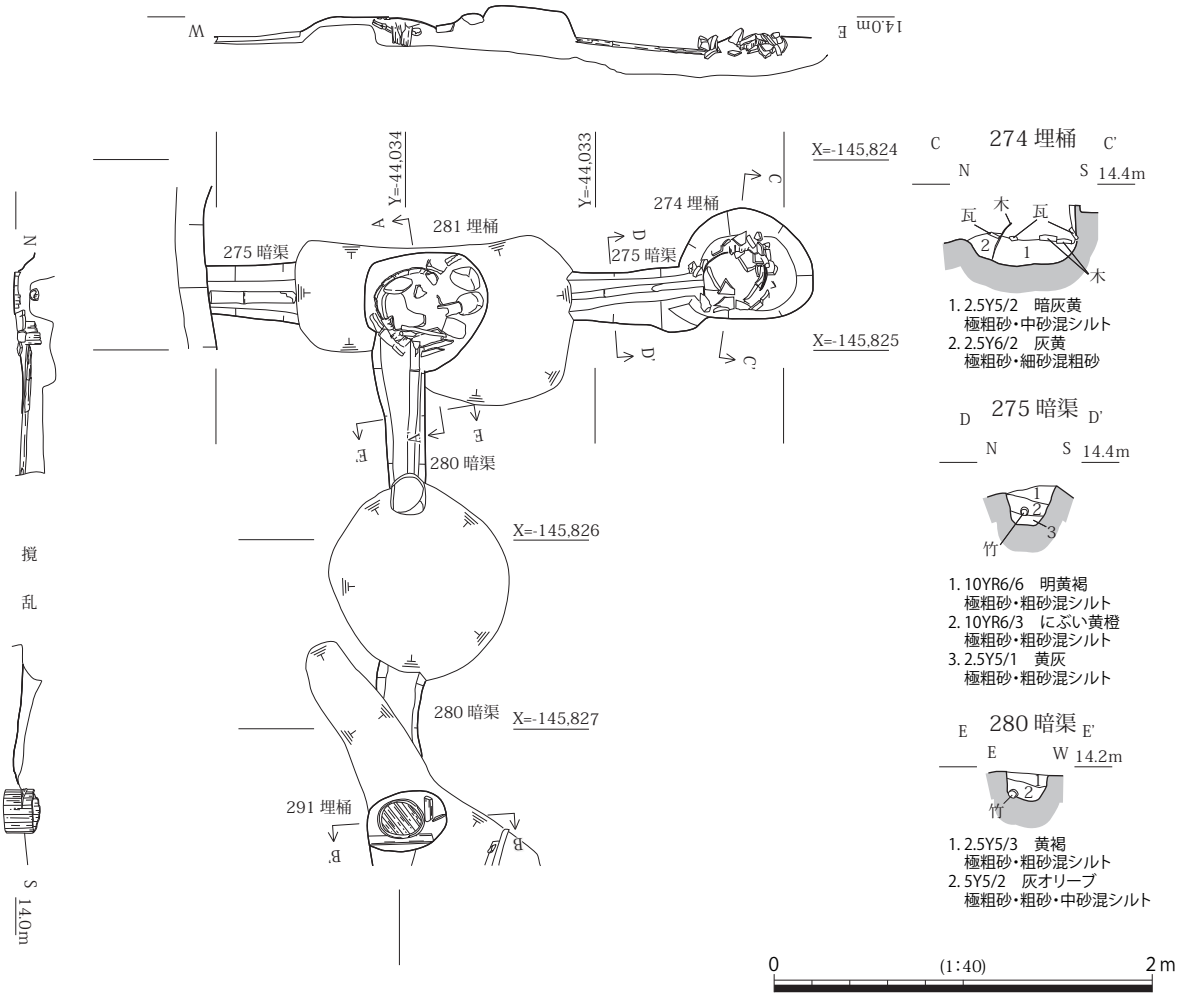


図 77　8b 層上面　導水施設 3 平・断面図

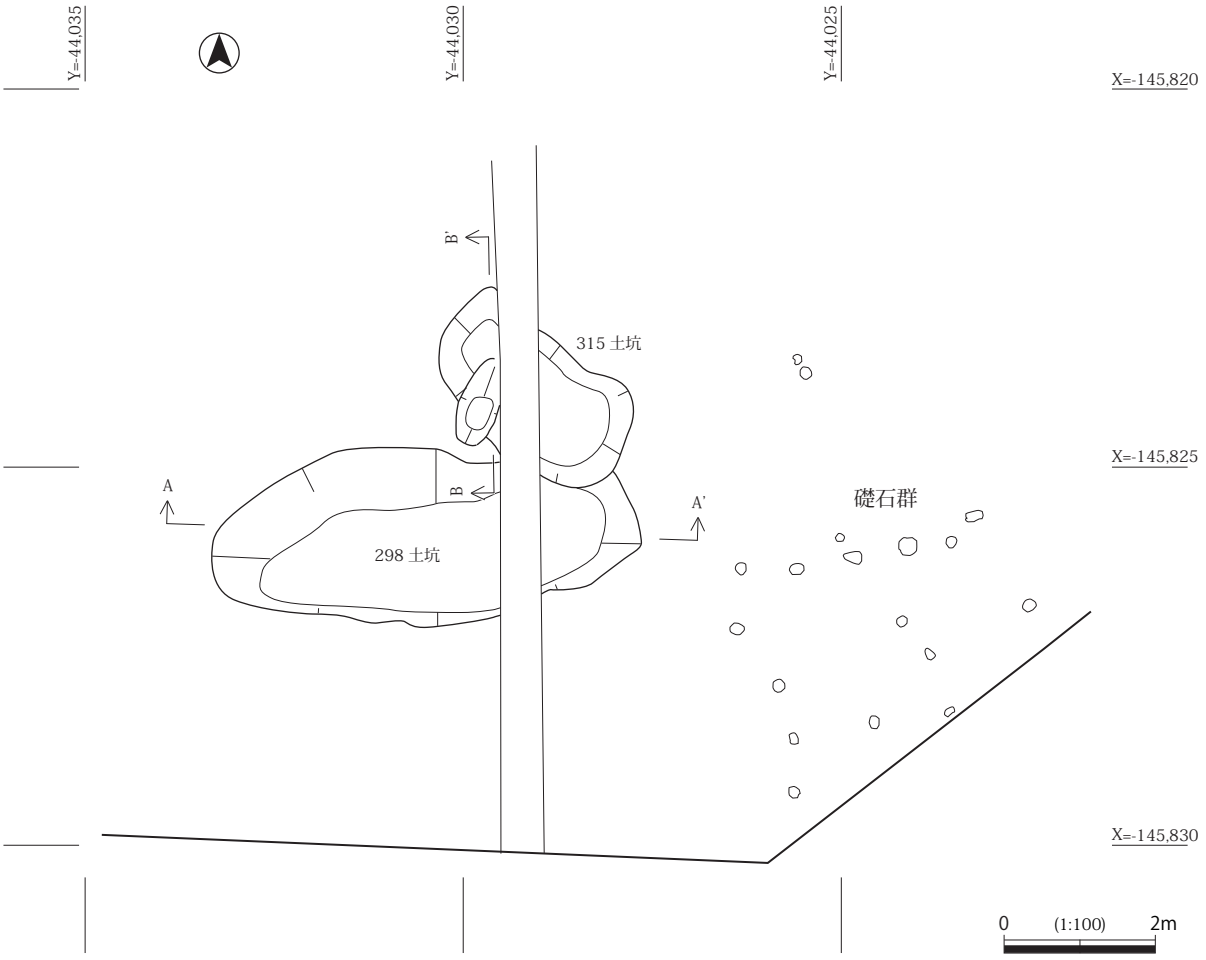


図 78　8c 層上面　平面図

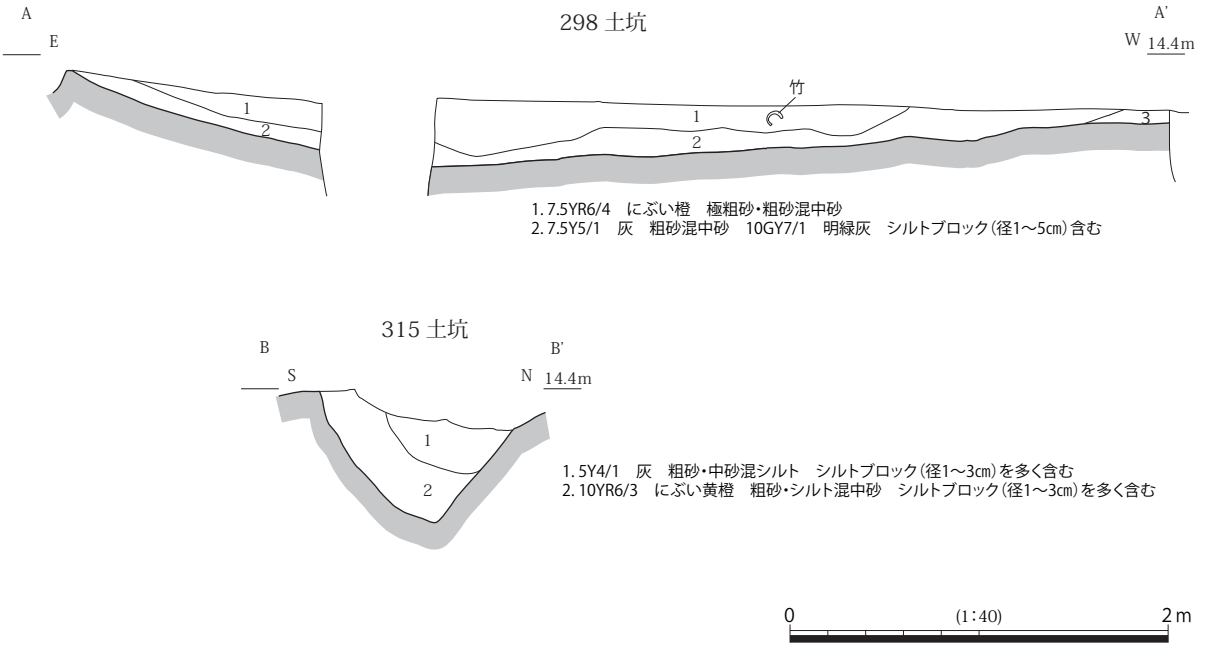


図 79　8c 層上面　298・315 土坑断面図

西へと延びた 275 暗渠は後世の攪乱によって失われる。

埋桶はいずれも土坑の底に拳大の礫や瓦片を敷いた上に、直径 5 ㎝程度の孔を 1 ～ 3 カ所開けた直径 25 ～ 40 ㎝、高さ 15 ㎝以上の桶を据える。

この導水施設 3 については水の供給源である親井戸を特定することはできなかった。そのため、8a 層上面で検出した導水施設 1（254 井戸・252 暗渠）や導水施設 2（214 土坑・292 暗渠）とは性格が異なるかもしれない。281 埋桶から陶器辺、瓦片の他に箸や下駄などの木製品が出土した。432 は箸である。一端に焼け焦げが認められる。残存長 21.0 ㎝、直径 0.8 ㎝を測る。433 は連歯下駄である。側面の一部を欠損する。表面には鉈状の模様が線刻される。後歯は磨滅が顕著である。全長 22.6 ㎝、幅 9.0 ㎝を測る。Ⅰ 4c1 類に属する。434・435 は桶側板である。434 は上端から 7.2 ㎝、435 は上端から 8.6 ㎝の位置に直径 5 ㎝程度の孔を穿つ。また、434 には直径 0.5 ㎝の小孔が円弧状に 5 カ所開けられていたが、これは桶に導水管を通す孔を開ける際、まず円弧状の小孔を穿った後、小孔間を切り

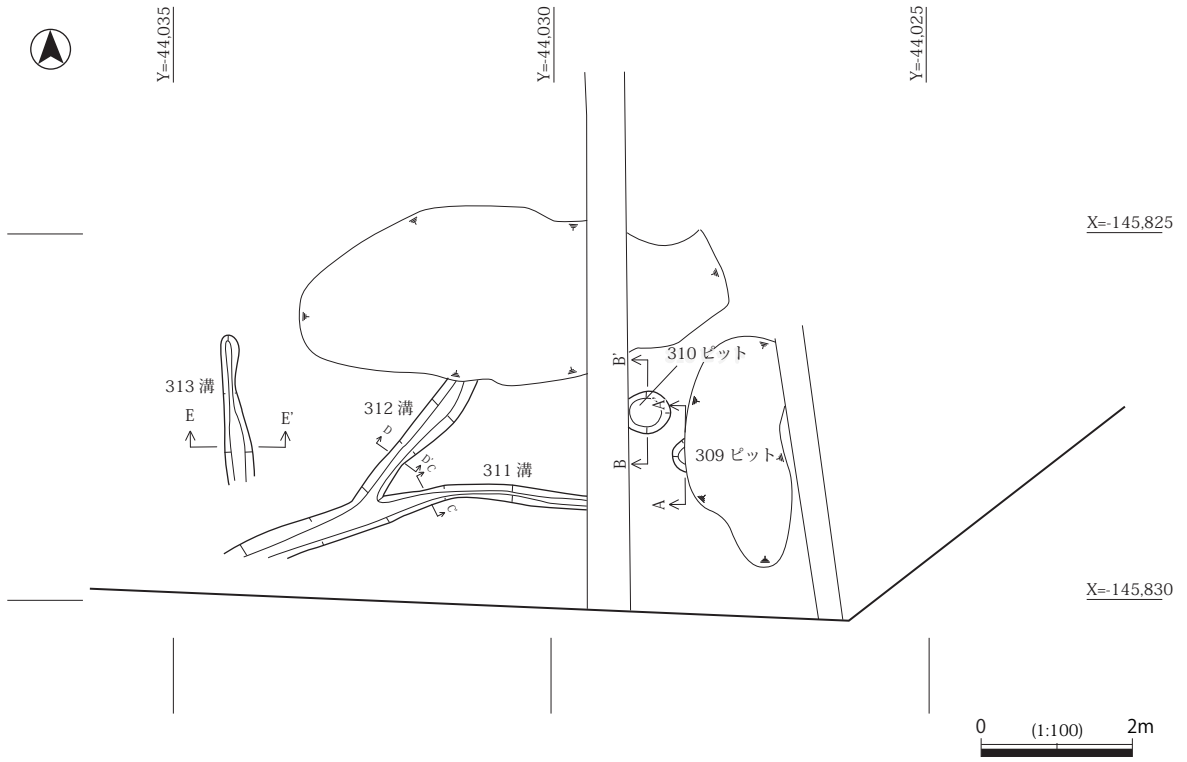


図 80　8d 層上面　平面図

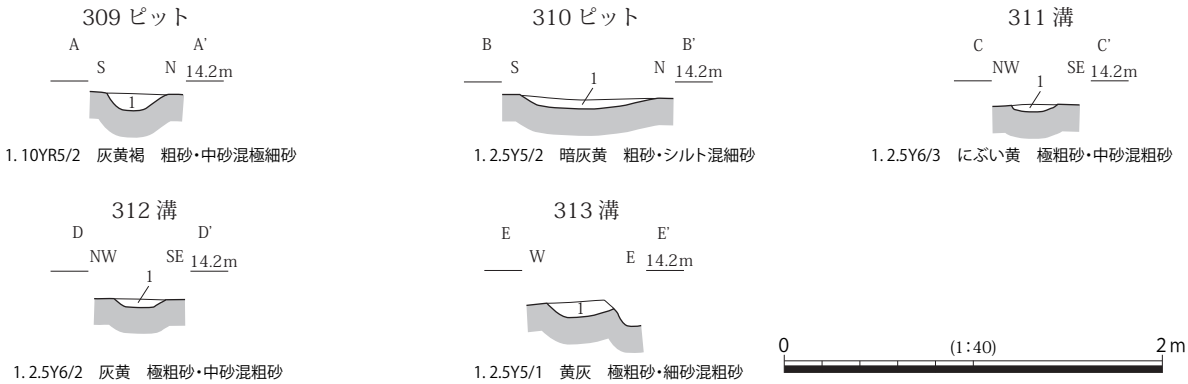


図 81　8d 層上面　309・310 ピット、311・312・313 溝平・断面図

抜いて大きな円形の孔に仕上げる過程で失敗した痕跡である。なお、435 にも 1 カ所小孔が残る。436 は 291 埋桶に使用した桶である。 4 枚の板を接ぎ合わせた底板と 14 枚の側板を組み合わせる。口径 24.0 ㎝、底径 20.8 ㎝、高さ 18.9 ㎝を測る。導水管を通す孔は穿たれていなかったが、対角線上に 2 カ所幅 1.5 ㎝、深さ 6.2 ㎝の長方形の切込みが入れられており、何らかの部材が取りつくものと考えられる。

8c 層上面（図 78、図版 23） 整地層である 8b 層を除去して検出した。検出した遺構は土坑 2 基と礎石群である。礎石群は 1D-2c 区で検出したが、建物を復元するまでには至らなかった。

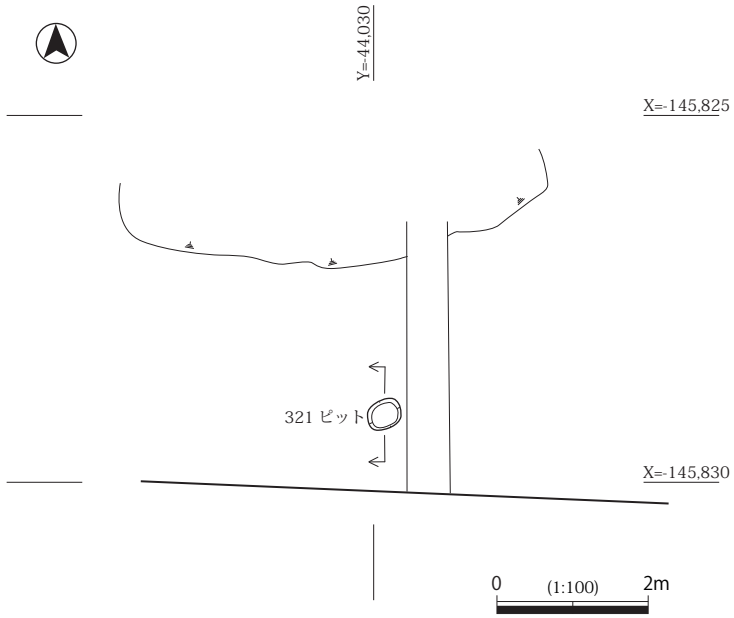


図 82　8e 層上面　平面図

図 83　8e 層上面　321 ピット断面図

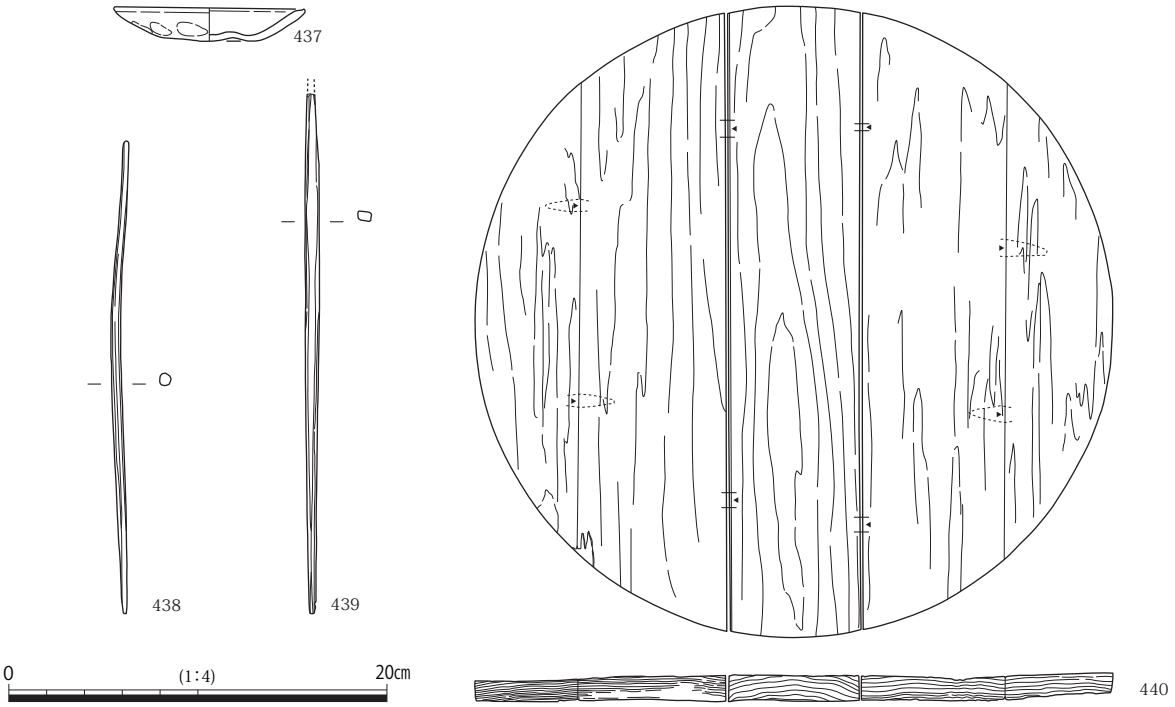


図 84　8e 層出土遺物

298 土坑（図 78・79） 1D-3c・4c 区に位置する。東西方向に長軸をもつ不整楕円形の土坑で、長径 5.6 m、短径 2.3 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は２層で下層はシルトブロックを含む粗砂混中砂、上層は極粗砂・中砂混粗砂が堆積する。須恵器、青花、桶底板、漆器椀の細片が出土したが、図示できるものはなかった。

315 土坑（図 78・79） 1D-3c・4c 区に位置し、平面形は不整楕円形を呈する。遺構の東側は側溝により上半部を失う。遺構の南東端は 298 土坑と切り合うが 298 が先行する。長径 2.8 m、短径 1.6 m、深さ 0.7 mを測る。埋土は２層でいずれもシルトブロックを含むシルトおよび中砂で埋め戻される。板片が出土したが、図示し得なかった。

8d 層上面（図 80、図版 23） 8C 層のシルトブロックを含む中砂層とその下層に堆積する層厚 0.3 ㎝の黒色シルト層を除去して検出した。検出した遺構はピット２基と溝３条である。

309 ピット（図 80・81） 1D-3c 区に位置する。ピットの東半部は 8a 層上面の 234 土坑によって失われる。直径 0.3 m以上、深さ 0.1 mを測る。遺物の出土はなかった

310 ピット（図 80・81）1D-3c 区で、309 ピットの北西に位置する。直径 0.8 m、深さ 0.1 mを測る。遺物の出土はなかった。

311 溝（図 80・81） 1D-4c 区に位置する。東西方向にはしり、西側でやや南に振る。途中で北から 312 溝が取りつく。幅 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。遺物の出土はなかった。

312 溝（図 80・81） 1D-4c 区に位置し、北東－南西方向にはしり、311 溝に取りつく。幅 0.3 m、深さ 0.1 mを測る。遺物は風化したサヌカイトの剥片が１点出土したが混入と考えられる。

313 溝（図 80・81） 1D-4c 区に位置し、南北方向にはしる。幅 0.4 m、深さ 0.1 mを測る。遺物の出土はなかった。

8e 層上面（図 82、図版 24） 極粗砂・中砂混シルトの 8d 層を除去して検出した。8d 層が残存する範囲は Y=-44,027 ～ Y=-44,035、X=-145,826 ～ X=-145,830 間の約 30 ㎡である。検出した遺構はピット１基である。

321 ピット（図 82・83、図版 24） 1D-3c 区に位置する。直径 0.2 m、深さ 0.4 mを測る。遺物の出土はなかった。

8e 層出土遺物（図 84） 8e 層から土器、陶器片、白磁片、瓦質土器片、瓦片、木製品などが出土した。437 は土師器皿である。口径 10.1 ㎝、器高 1.9 ㎝を測る。438・439 は箸である。438 は全長 24.9 ㎝、直径 0.6 ㎝、439 は残存長 27.6 ㎝、直径 0.7 ㎝を測る。440 は桶底板で、直径 33.4 ～ 33.8 ㎝、厚さ 1.4 ㎝を測る。幅 6.5 ～ 7.7 ㎝の５枚の板を木釘を埋め釘にして接ぎ合わせる。

8f 層上面（図 85、図版 24・25） 当該遺構面は 8a 層および 8e 層を除去して検出した。土層断面観察の結果、当該遺構面は調査区全域に広がっていたため、8f 層上面として調査を行った。検出した遺構はピット、土坑、溝などである。遺構は調査区東半部に集中しており、西半部は希薄であった。土坑は埋土にシルトブロックを含むものが多く、かつ湧水層にまで達するものが少なかったことなどから土取りのために掘削されたものが多いと考えられる。

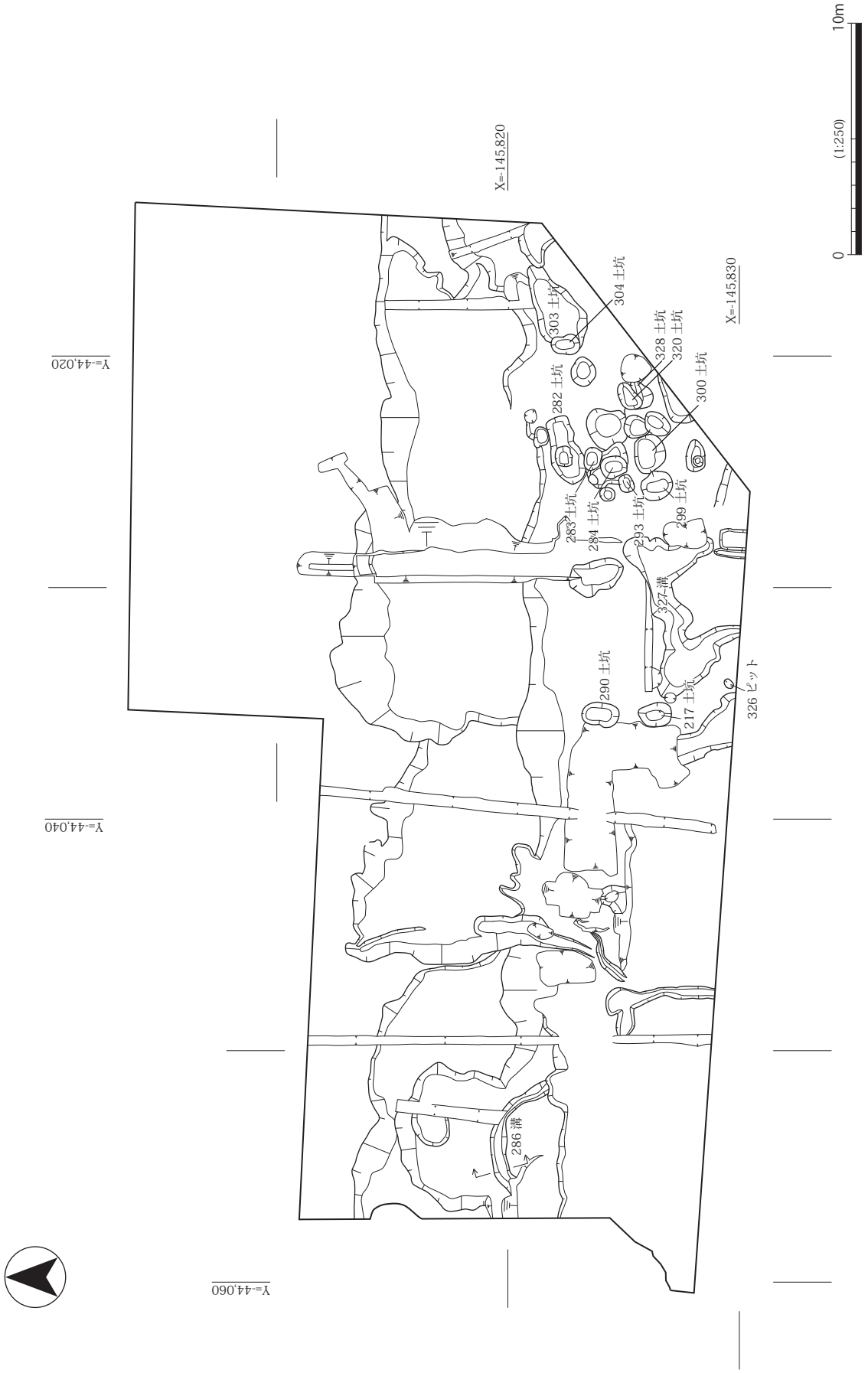


図 85　8f 層上面　平面図

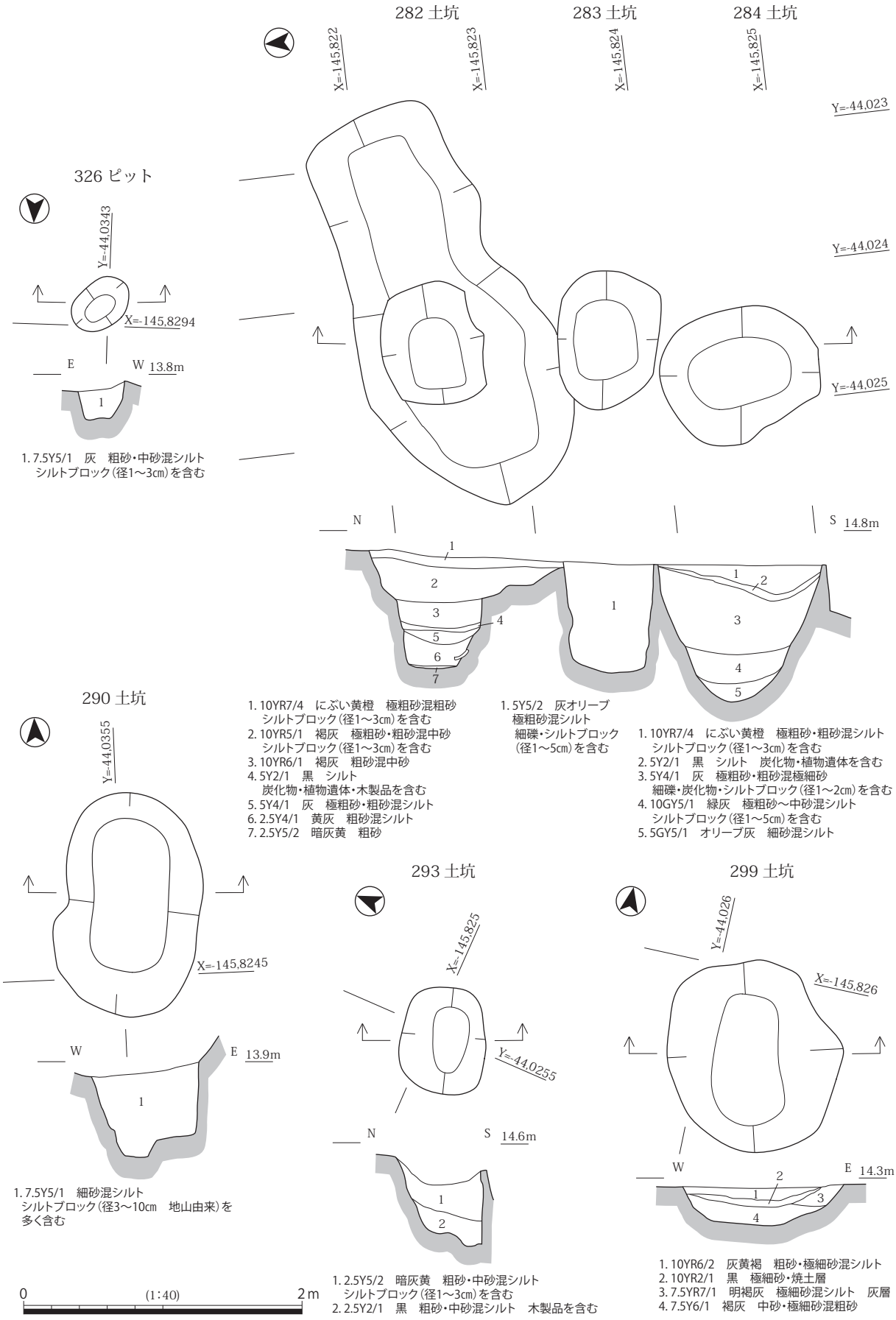


図 86　8f 層上面　326 ピット、282・283・284・290・293・299 土坑平・断面図

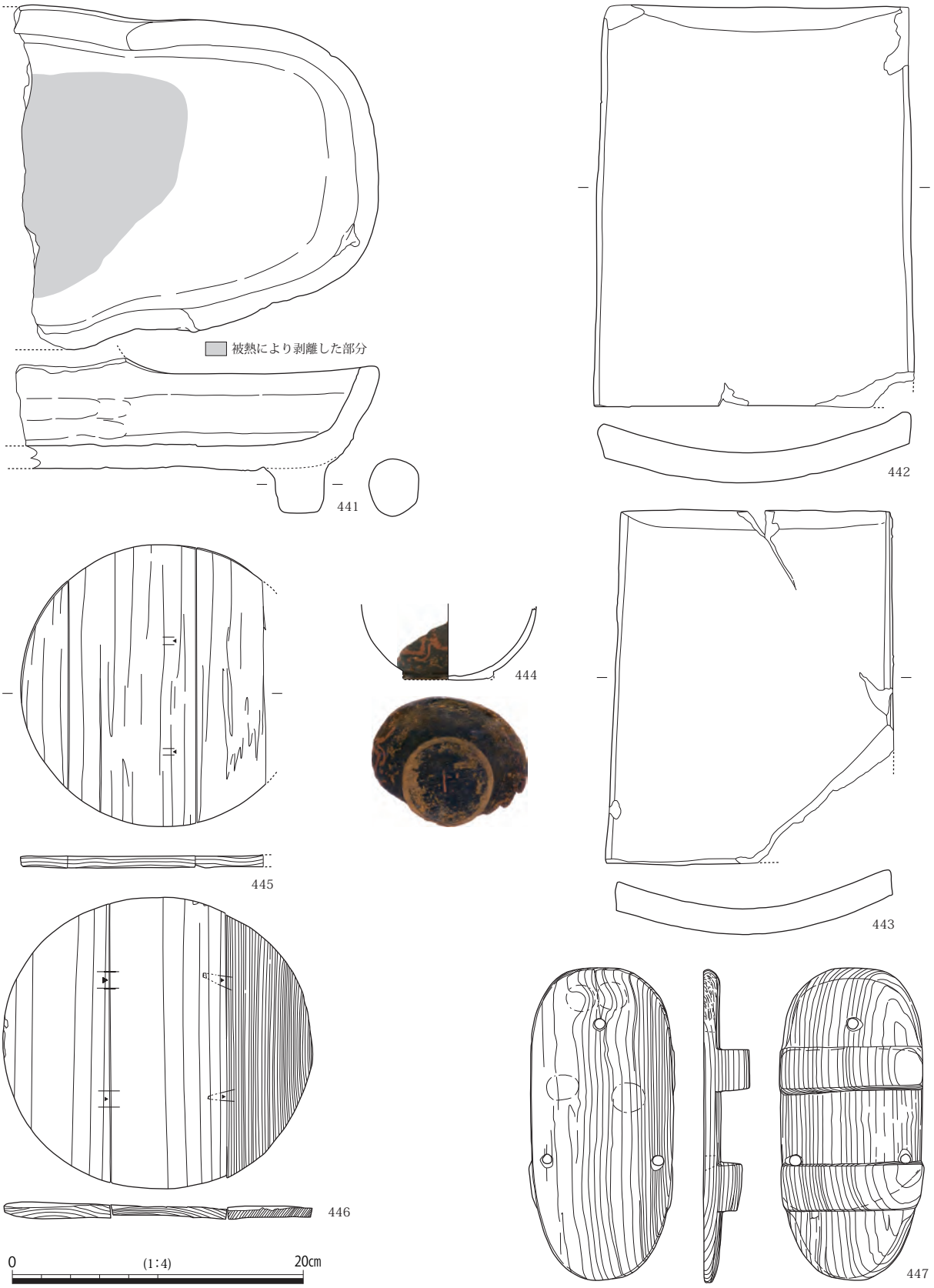
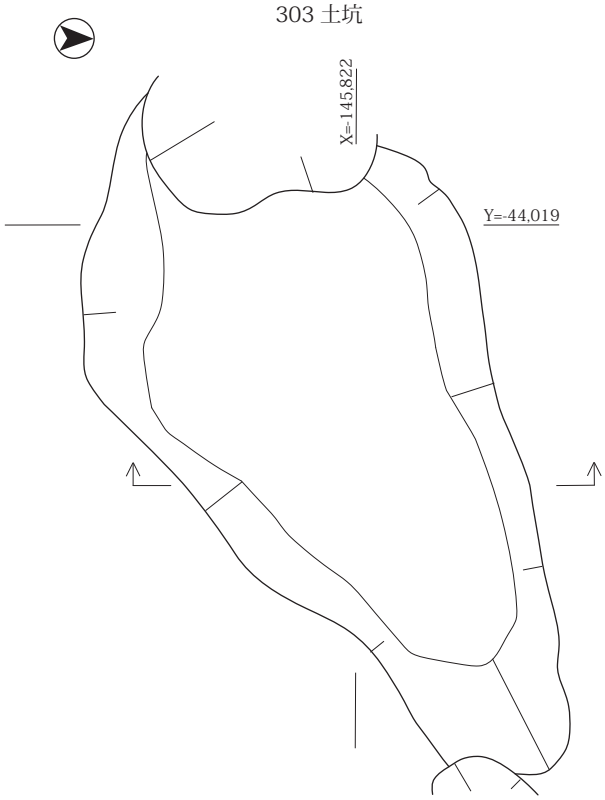
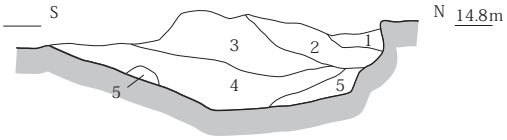


図 87　8f 層上面　282 土坑出土遺物

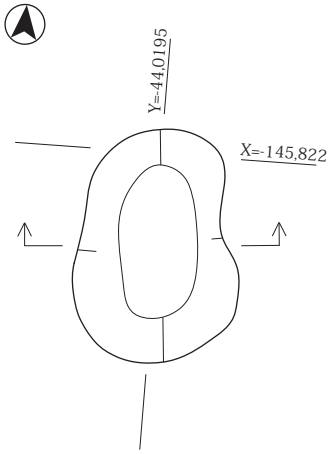
303 土坑

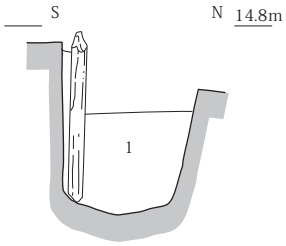




1. 10YR6/2　灰黄褐　粗砂・細砂混極粗砂
2. 5Y5/1　灰　極細砂混シルト　シルトブロック（径1～5㎝）を含む
3. 2.5Y6/1　黄灰　粗砂混中砂　シルトブロック（径1㎝）を多く含む
4. 7.5YR5/3　にぶい褐　極粗砂・シルト混中砂　シルトブロック（径1㎝）を含む
5. 5Y7/1　灰白　粗砂混中砂6. N5/0　灰　シルト（地山のブロック土）

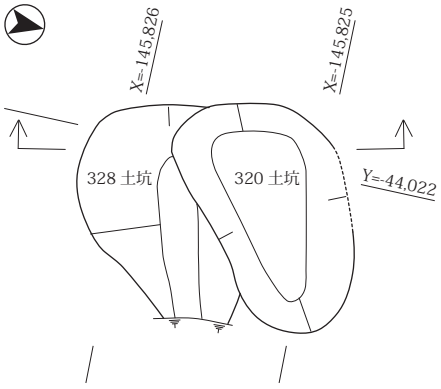
304 土坑

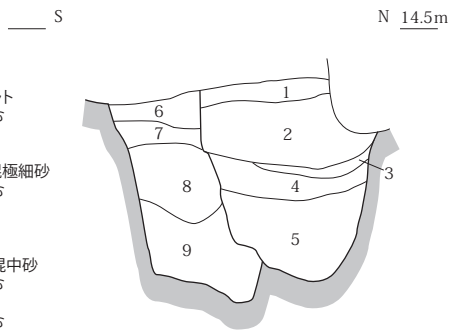




1. 5BG6/1　青灰　極粗砂混シルト
シルトブロック（径1～10㎝）を多く含む

320・328 土坑





1. 7.5YR6/2　灰褐　粗砂混シルト
シルトブロック（径1～3㎝）を多く含む
2. 7.5YR7/2　明褐灰　粗砂・中砂混シルト
シルトブロック（径1～10㎝）を多く含む
3. 5YR6/1　褐灰　シルト
4. N6/0　灰　極細砂混シルト
5. 7.5YR6/3　にぶい褐　極粗砂・粗砂混極細砂
シルトブロック（径1～20㎝）を多く含む
6. 5Y5/1　灰　極細砂混粗砂
7. 5Y6/1　灰　粗砂混中砂
シルトブロック（径1～3㎝）を多く含む
8. 5YR6/3　にぶい橙　極粗砂・極細砂混中砂
シルトブロック（径1～10㎝）を多く含む
9. 5YR6/2　灰褐　細砂・シルト混粗砂
シルトブロック（径1～10㎝）を多く含む

0　(1:40)　2m

図 88　8f 層上面　303・304・320・328 土坑平・断面図

326 ピット（図 85・86・89、図版 41） 1D-4c 区に位置し、平面形は楕円形を呈する。直径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.25 mを測る。埋土は粗砂・中砂混シルトの単層でシルトブロックを含む。遺物は 454 の小刀柄が出土した。法量は長さ 8.0cm（二寸六分強）、幅 1.4cm（五分弱）、厚さ 0.4cm（一分強）、重さ 20.5 g（五匁五分弱）を測る。形状は戸尻が半円形、小口が直線状をなし、戸尻に向かうに従い厚みを減じる。断面形は棟方がやや肥厚し、裏板に肉のつかない狭長な台形状をなす。材質は山金と思しき銅合金で、成形法は錆に覆われ確認できない。表面の仕上げは磨地で、その中央からやや小口側の刃方に寄った位置には、錆化により判然としないが、木瓜あるいは木瓜に四つ目紋を高彫にて作出する。

282 土坑（図 85・86・87、図版 26・41） 1D-3c 区に位置する。305 土坑と先後関係にあり、305 土坑を切って掘り込まれる。不整楕円形で規模は長径 0.9 m、短径 0.7 m、深さ 0.9 mを測る。埋土は７層確認できた。中層にあたる４層は黒色シルトで木製品や植物遺体、さらに炭化物を含む。また、上層２層に関してはシルトブロックを含んでおり、人為的に埋め戻されたと考えられる。土器、瓦、木製品が出土した。441 は土師質土器の焜炉の一部で、炭の出し入れや灰掻き出し部分にあたる。平面「U」

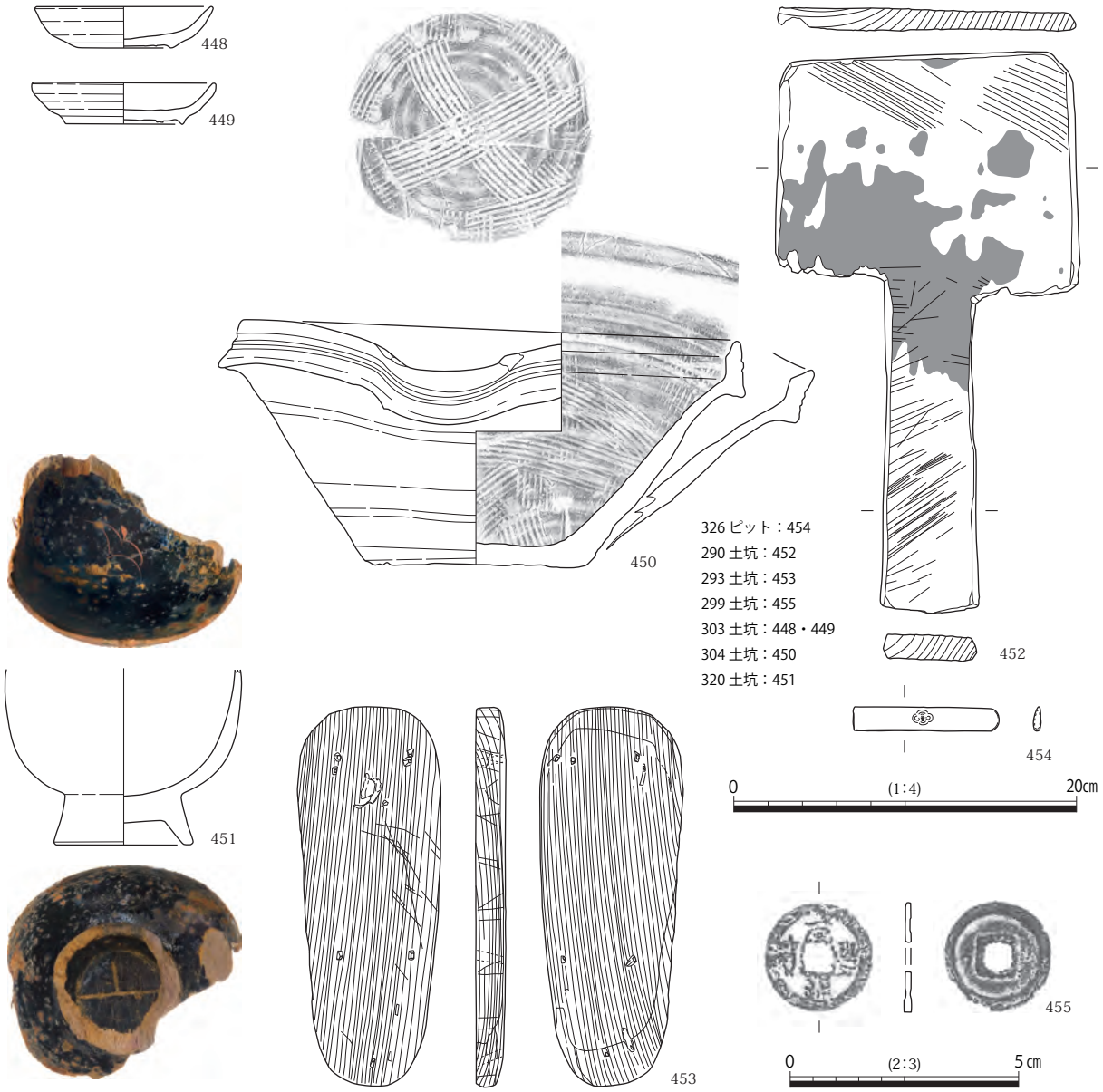


図 89　8f 層上面　326 ピット、290・293・299・303・304・320 土坑出土遺物

字形を呈し、下部に円柱形の脚がつく。調整は内面および外面体部はナデであるが、底部外面は板状工具によるナデを施す。なお、内面の焜炉部に近い部分には被熱による剥離が認められる。残存長 24.9 ㎝、残存幅 23.7 ㎝、残存高 10.7 ㎝を測る。442・443 は平瓦で、ともに内外面とも板ナデによる調整を、側面はヘラ切り後面取りを施す。また、凹面狭端縁は面取りを行う。442 は全長 27.7 ㎝、狭幅 20.6 ㎝、

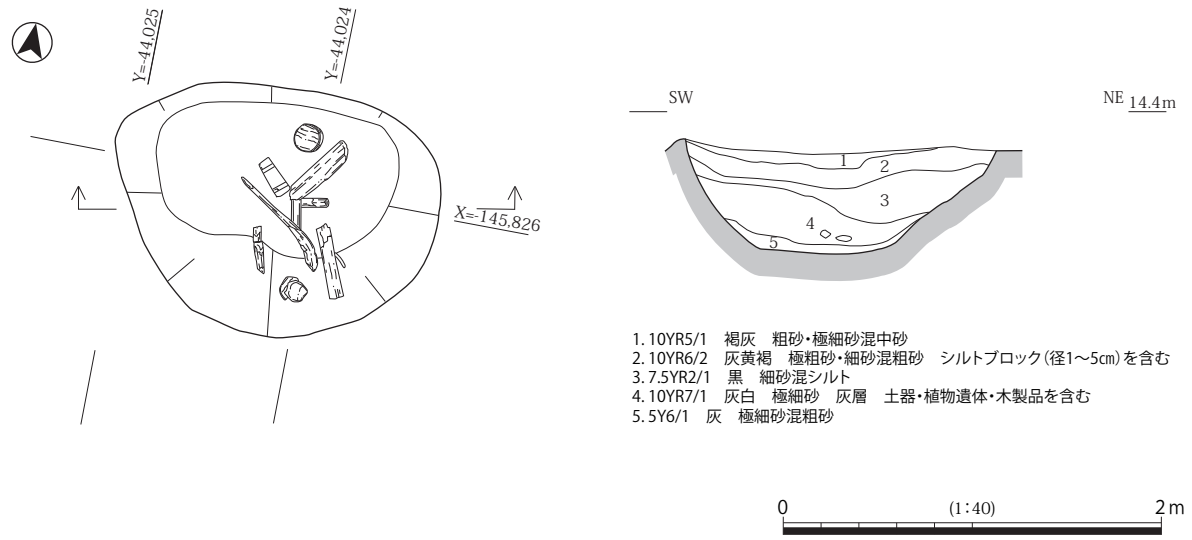


図 90　8f 層上面　300 土坑平・断面図

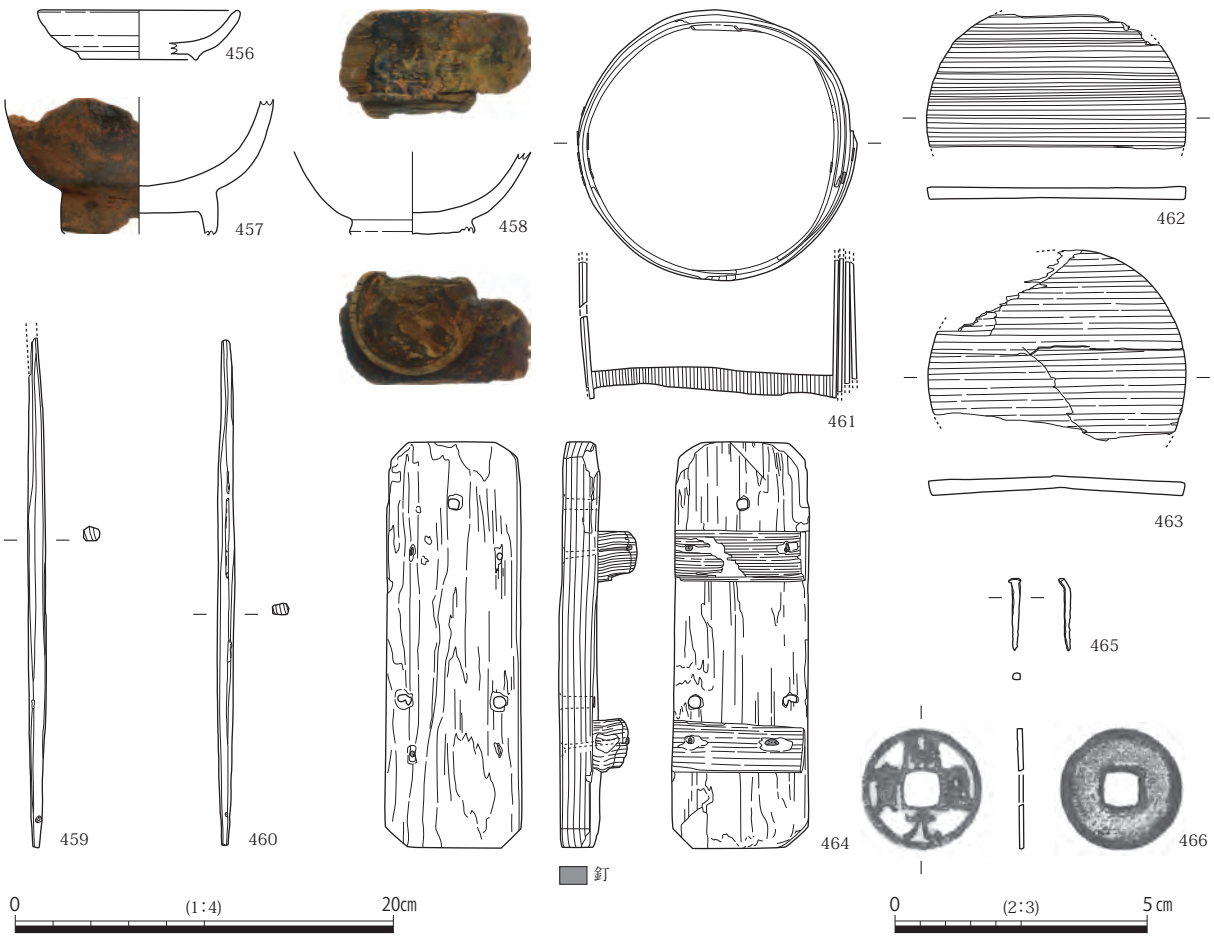


図 91　8f 層上面　300 土坑出土遺物

広幅 21.0 ㎝以上で、443 は全長 24.5 ㎝、狭幅 18.5 ㎝、広幅 19.7 ㎝以上を測る。444 は漆器椀である。内外面ともに黒漆を塗る。外面および高台見付には赤漆で文様を描く。445・446 は桶底である。445 は一部欠損するが、3 ～ 4 枚の板をそれぞれ 2 カ所木釘の埋め釘によって接ぎ合わす。直径 19.5 ㎝、厚さ 0.8 ㎝を測る。446 は 3 枚の板を各 2 カ所で木釘を埋め釘にして接ぎ合わせる。直径 20.0 ～ 21.3 ㎝、厚さ 0.9 ㎝を測る。447 は連歯下駄で、前顎および後歯の磨滅が著しい。全長 21.5 ㎝、幅 9.7 ㎝を測る。Ⅰ 1a1 類である。

283 土坑（図 85・86） 1D-3c 区に位置し、282 土坑の南に接する。楕円形で長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 0.8 mを測る。埋土は単層でシルトブロックを含む極粗砂混シルト層である。遺物は瓦の細片が出土した。

284 土坑（図 85・86） 1D-3c 区に位置する。283 土坑の南に接する。楕円形で長径 1.2 m、短径 1.0 m、深さ 1.0 mを測る。埋土は 5 層で炭化物や植物遺体含む 2 層目と最下層以外はシルトブロックを含むシルトや極細砂層であった。遺物の出土はなかった。

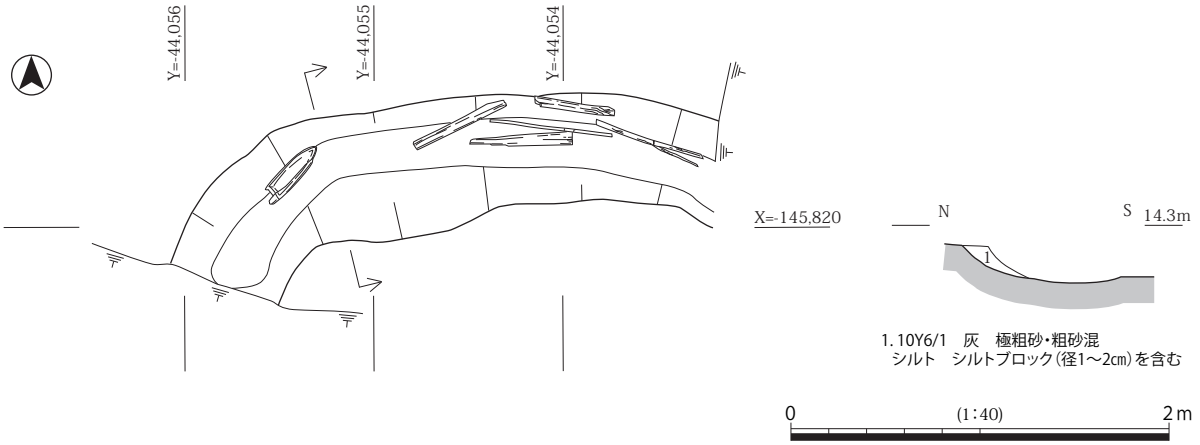


図 92 8f 層上面 286 溝平・断面図

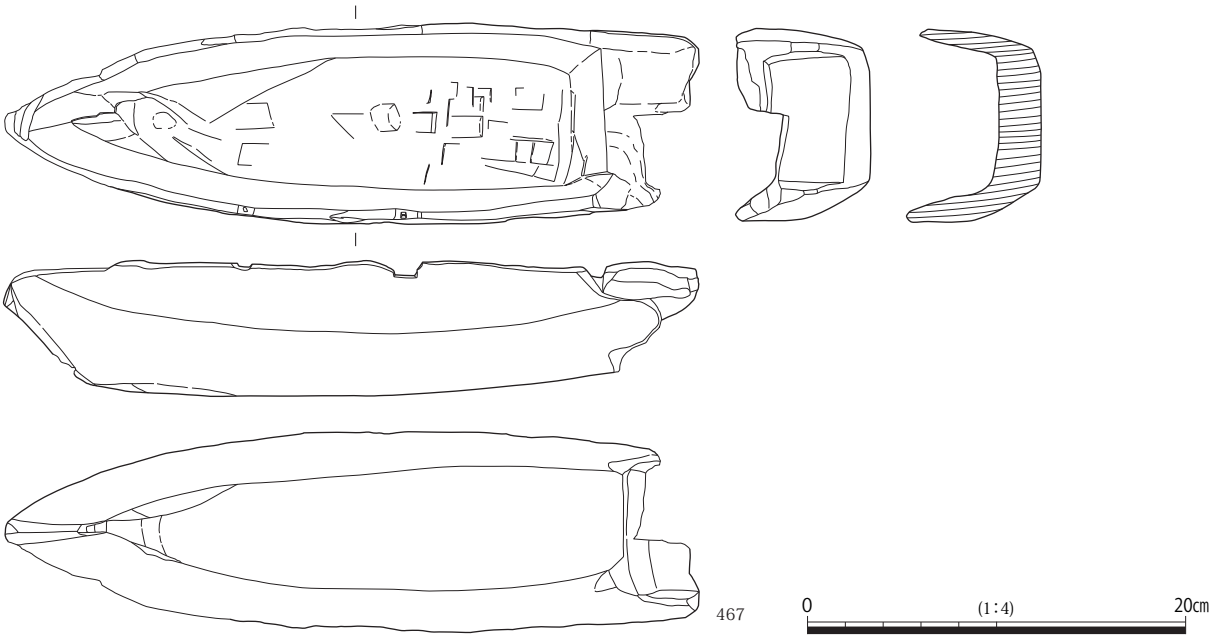


図 93 8f 層上面 286 溝出土遺物

290 土坑（図 85・86・89、図版 40） 1D-4c 区に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長径 1.6 m、短径 1.0 m、深さ 0.6 mを測る。埋土は単層でシルトブロックを多く含む細砂混シルト層であった。遺物は須恵器、瓦質土器、陶器、瓦の細片と木製品が出土した。452 は羽子板状木製品である。板部および柄部には斜め方向に刃物傷が入る。また、片面が一部炭化する。全長 32.8 ㎝、板部幅 12.8 ㎝、柄部幅 5.5 ㎝、厚さ 1.4 ㎝を測る。

293 土坑（図 85・86・89、図版 27） 1D-3c 区に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し、長辺 0.8 m、短辺 0.6 m、深さ 0.6 mを測る。埋土は２層で下層は植物遺体を含む粗砂・中砂混シルト層で、上層はシルトブロックを含む粗砂・中砂混シルト層であった。遺物は須恵器の細片や下駄が出土した。453 は無歯下駄である。５カ所に釘孔が残る。また、前後顎部は磨滅が著しい。全長 22.2 ㎝、幅 8.4 ㎝を測る。Ⅱ 3d 類である。

299 土坑（図 85・86・89） 1D-3c 区に位置する。長径 1.3 m、短径 0.9 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は４層である。上から２層目には焼土塊を含む極細砂層で銭貨が出土した。須恵器、瓦、木製品の細片や銭貨が出土した。455 は北宋銭の元豊通寶（1078 年初鋳）である。

300 土坑（図 85・90・91、図版 28・41） 1D-3c 区に位置する。不整楕円形を呈し、長径 1.8 m、短径 1.3 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は５層で上から４層目の灰を多く含む極細砂層から陶器、瓦、木製品、金属器などが出土した。456 は瀬戸・美濃焼の皿である。高台内に重ね焼きの痕跡が残る。457・458 は漆器椀である。457 は高い高台をもつ。外面は剥離が顕著ではあるが、黒漆を塗り赤漆で文様を描く。内面は赤漆を塗る。458 は内外面とも黒漆を塗り、見込み部には赤漆で文様を描く。459・460 は箸である。459 は一端に釘痕があることから転用品と考えられる。長さ 26.9 ㎝以上、直径 0.9 ㎝を測る。460 は長さ 26.7 ㎝、直径 0.9 ㎝を測る。461 は曲物柄杓の身である。側板の内面に縦平行線にケビキを入れて２～４重に重ねた板を樹皮紐で綴じる。上半部は欠損する。柄を装着するため、下から 4.5 ㎝の位置に直径 0.6 ～ 0.8 ㎝の孔を斜め方向に穿つ。内径 12.6 ～ 12.8 ㎝、残存高 7.4 ㎝、底板の最大厚 1.2 ㎝を測る。462・463 は曲物の底板である。462 は直径 13.7 ㎝、厚さ 0.7 ㎝を測る。463 は直径 13.6 ㎝、厚さ 0.8 ㎝を測る。464 は連歯下駄である。前後歯とも別材を釘で接合する。また、前後壺は一辺 0.7 ㎝の方形の孔を穿つ。全長 21.5 ㎝、幅 7.3 ㎝を測る。Ⅰ 1e 類である。465 は釘である。頂部を左右に広げ、頭部はやや屈曲させる。断面は 0.4 ㎝角の方形で長さは 3.7 ㎝を測る。466 は開元通寶（845 年初鋳）である。

303 土坑（図 85・88・89、図版 42） 1D-2c 区に位置し、遺構の西端部は 304 土坑に切られる。不整楕円形を呈し、長径 4.2 m、短径 2.2 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は５層で、そのうち２～４層にはシルトブロックを含むシルトおよび中砂層であった。遺物は土器、瓦、木製品の細片と陶器が出土した。448・449 は瀬戸・美濃焼の皿でともに高台内に重ね焼きの痕跡が残る。448 は内禿皿で、蛇の目釉剥ぎを施し、口径 10.4 ㎝、器高 2.4 ㎝を測る。449 は口径 10.7 ㎝、器高 2.4 ㎝を測る。

304 土坑（図 85・88・89、図版 27・41） 1D-2c 区に位置する。不整楕円形を呈し、長径 1.3 m、短径 0.7 ～ 0.9 m、深さ 0.9 mを測る。埋土は単層でシルトブロックを多く含む極粗砂混シルト層である。遺物は土器、瓦、木製品の細片と陶器である。450 は備前焼擂鉢である。内面は摩耗が著しい。口径 28.8 ㎝、器高 14.5 ㎝を測る。

320 土坑（図 85・88・89、図版 28） 1D-3c 区に位置する。不整楕円形を呈し、長径 1.3m、短径 0.8 m、深さ 0.9 mを測り、328 土坑を切る。埋土は５層で中間層の３・４層を除いてシルトブロックを含

むシルトや極細砂層が堆積する。遺物は陶器の細片と、451 漆器椀が出土した。高い高台をもち、内彎しながら上方へ立ち上がる体部をもつ。内外面とも黒漆を塗る。見込みには赤漆で雁金の文様を描き、高台見付には「T」字形に刻書を施す。

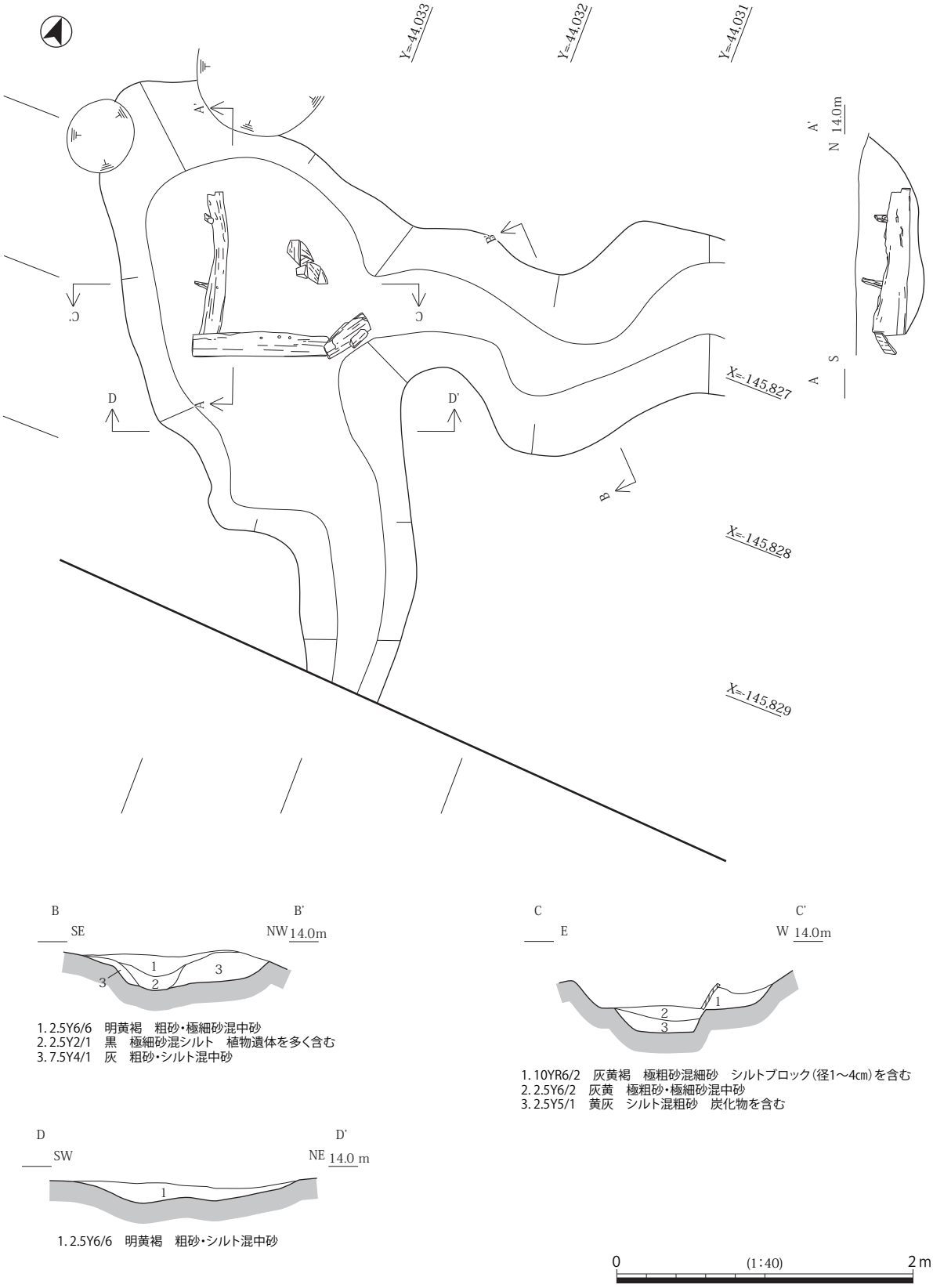


図 94　8f 層上面　327 溝平・立・断面図

328 土坑（図 85・88、図版 28） 1D-3c 区に位置する。320 土坑によって遺構の北半部を、攪乱および側溝によって東西端部を失うが、不整楕円形を呈する。長径 1.3 m以上、短径 0.6 m以上、深さ 0.9 mを測る。埋土は 4 層で、最上層を除いてシルトブロックを含む層によって埋積する。遺物は出土しなかった。

286 溝（図 85・92・93、図版 29・42） 1D-6c 区に位置する。一段目と二段目の間の斜面裾部を円弧状にはしる溝である。幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.2 mを測る。埋土は単層で極粗砂・粗砂混シルトである。遺物は舟形および板状木製品の細片であった。467 は舟形木製品である。一木を刳り抜いて造られる。艫は一部が欠損する。舵を装着するための抉りが表現されている。舷側は内彎しながら立ち上がる。また、舷側上部中央に 1 カ所、幅 1.2 ㎝、深さ 0.7 ㎝の方形の切込みが入る。底部は平らに仕上げる。舳先も丁寧に削り出す。規模は全長 36.8 ㎝、幅 10.6 ㎝、高さ 7.1 ㎝を測る。

327 溝（図 85・94・95、図版 25・41・42） 1D-3c・4c 区に位置する「コ」字状に巡る溝である。溝の北西角には「L」字状に横矢板を設ける。幅 0.6 ～ 1.7 m、深さ 0.15 ～ 0.3 mを測るが、横矢板

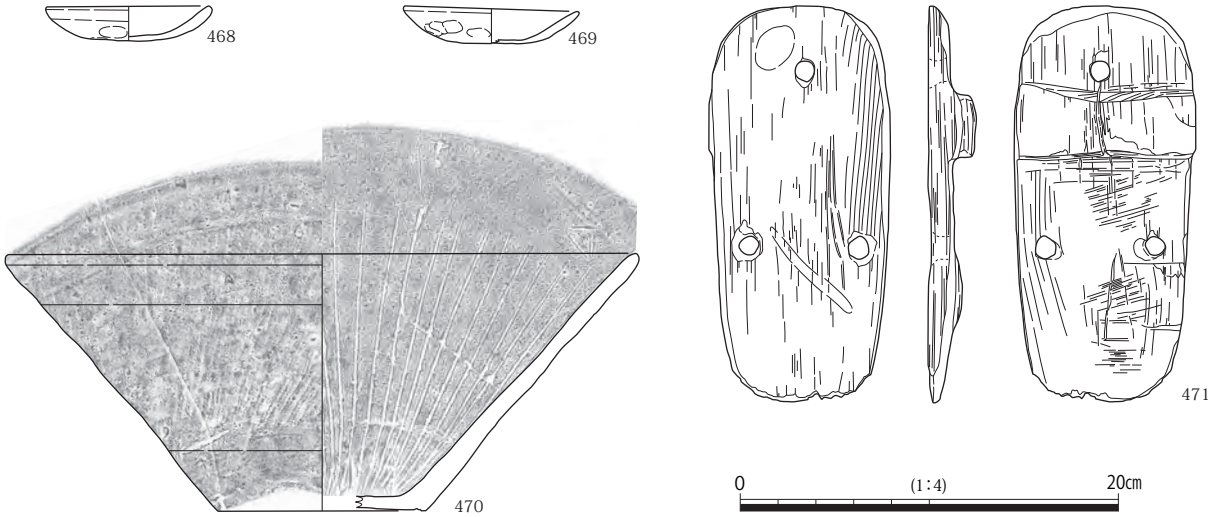


図 95　8f 層上面　327 溝出土遺物

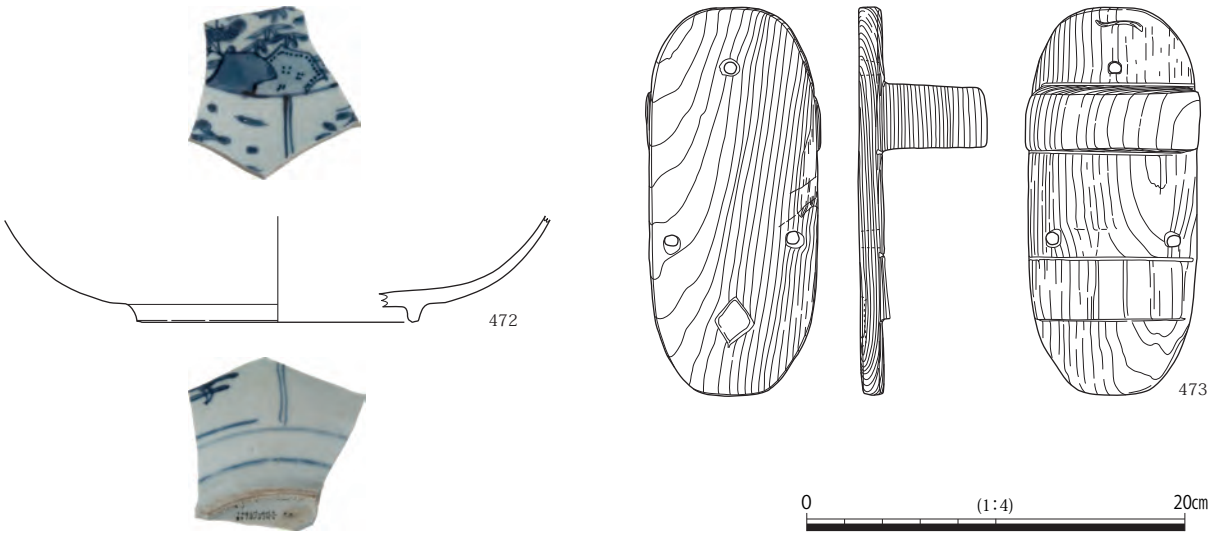


図 96　8f 層出土遺物

を設置した部分は土坑状に落ち込み、深さは 0.5 mを測る。遺物は土器、陶器、瓦片、木製品などである。468・469 は土師器皿である。468 は口径 8.5 ㎝、器高 1.9 ㎝、469 は口径 9.6 ㎝、器高 2.0 ㎝を測る。470 は丹波焼の擂鉢である。体部外面はハケメ調整の後粗いナデを施す。内面は一本引きの擂目を施す。また、片口付近に三角形のヘラ記号を描く。口径 33.1 ㎝、器高 18.6 ㎝を測る。16 世紀後半の所産である。471 は連歯下駄である。台表には斜めに一本焼印が入る。前後歯ともに磨滅するが特に後歯が顕著である。全長 21.0 ㎝、幅 9.6 ㎝を測る。Ⅰ 1a2 類である。

8f 層出土遺物（図 96、図版 42） 8f 層から土器、陶器、瓦の細片と青花、木製品などが出土した。472 は青花鉢である。畳付は露胎し離れ砂が残る。外面に花文、内面には草花文を配す。漳州窯の産である。473 は連歯下駄である。後歯を欠損する。台表の台尻付近に菱形の焼印があるが、中央部は剥離しているため文様は不明である。台裏の前顎付近には「一」字を刻書する。全長 20.5 ㎝、幅 8.9 ㎝を測る。また、前歯が長いタイプで下駄の高さは 6.8 ㎝である。Ⅰ 1a1 類である。

8g 層上面（図 97、図版 29） 8f 層を除去した際、最終遺構面である 11 層上面を検出したが、1D-2b・2c ～ 4c 区を中心に 2 層の堆積が認められたため、それぞれ 8g 層、8h 層として調査を行った。8g 層上面で検出した遺構は、ピット 1 基であった。

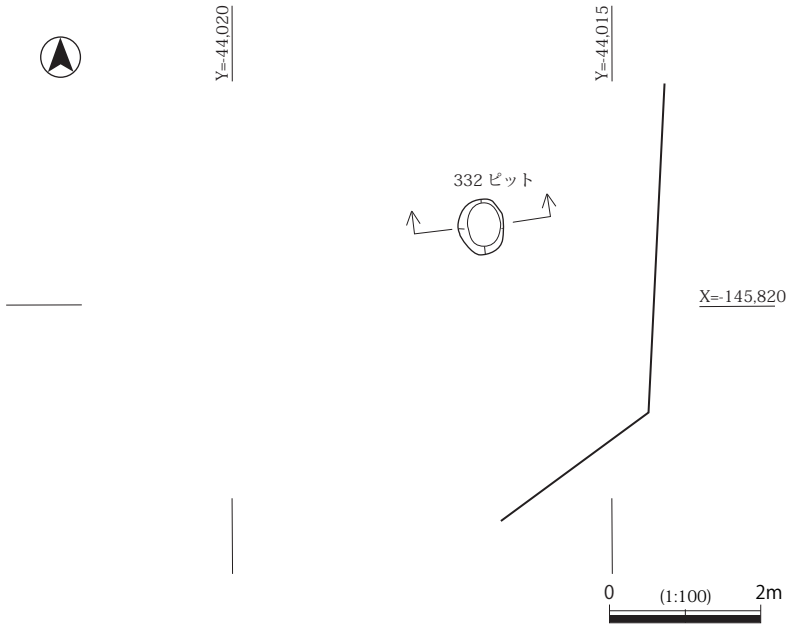


図 97　8g 層上面　平面図

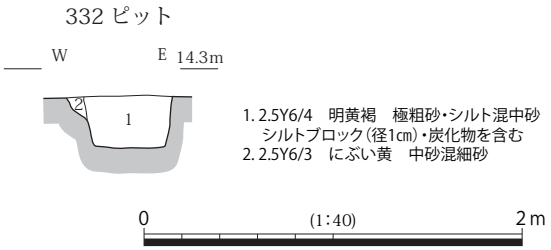


図 98　8g 層上面　332 ピット断面図

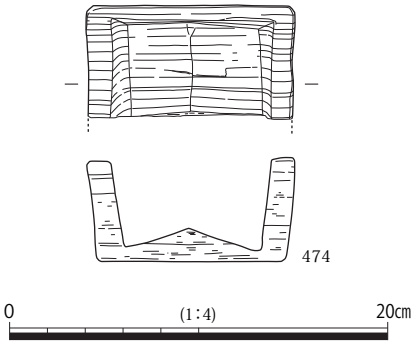


図 99　8g 層出土遺物

332 ピット（図 97・98） 1D-2b 区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径 0.7 m、短径 0.6 m、深さ 0.3 mを測る。埋土は２層であったが、シルトブロックおよび炭化物を含む極粗砂・シルト混中砂層が中心であった。青花、瓦、木製品の細片が出土したが、図示し得るものはなかった。

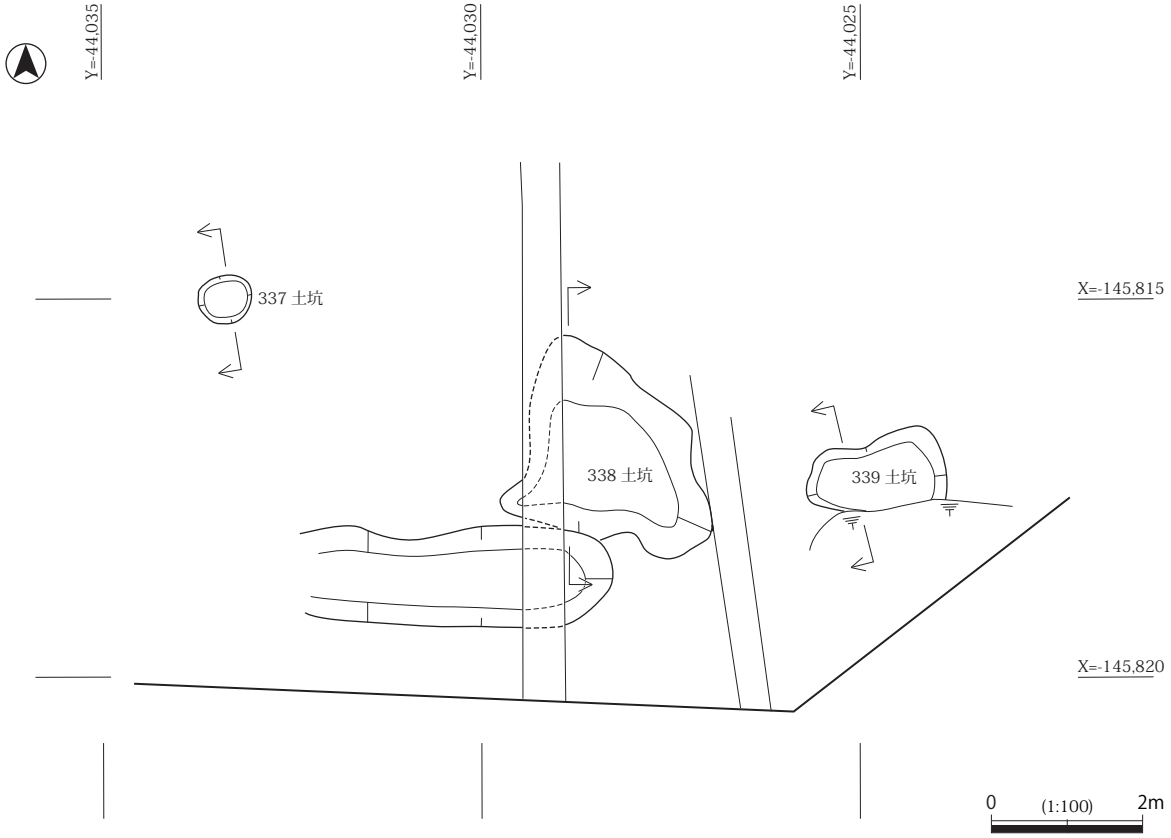


図 100　8h 層上面　平面図

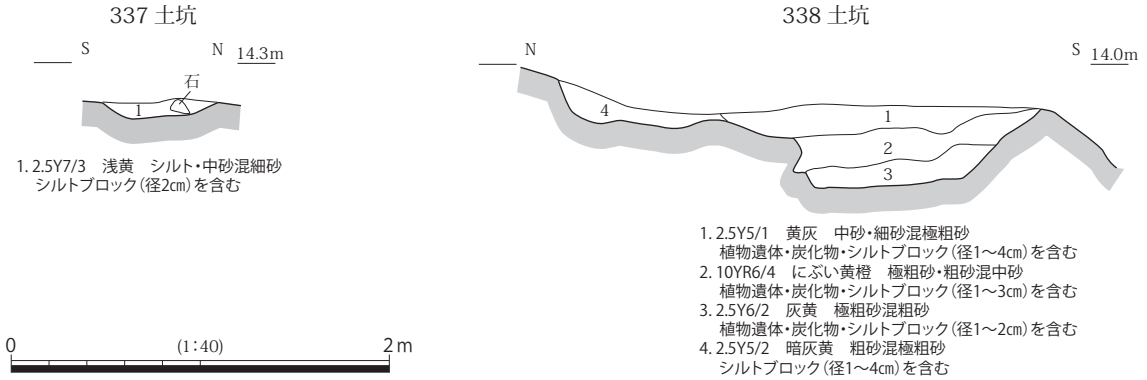


図 101　8h 層上面　337・338 土坑断面図

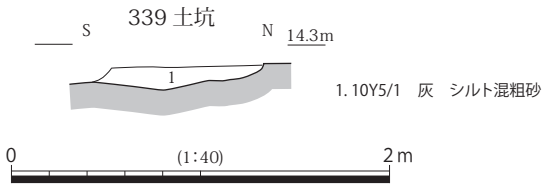


図 102　8h 層上面　339 土坑断面図

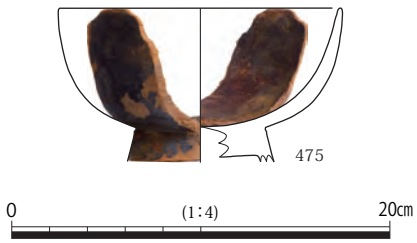


図 103　8h 層上面　339 土坑出土遺物

8g 層出土遺物（図 99、図版 42） 土器、陶器、青花、瓦、木製品などの細片が出土したため、図示出来たのは 474 木製品のみであった。474 は不明木製品である。一木を刳り抜いた枡状を呈するが、内面を山形に刳り抜く。体部はやや広がり気味に外上方に立ち上がる。半分欠損するため規模は不明であるが、残存長 6.0 ㎝、幅 11.0 ㎝、高さ 5.6 ㎝を測る。

8h 層上面（図 100、図版 29） 8g 層を除去して検出した。8h 層の分布範囲は 1D-3c・4c 区であった。

337 土坑（図 100・101） 1D-4c 区に位置する。不整円形の土坑で直径 0.6 m、深さ 0.1 mを測る。

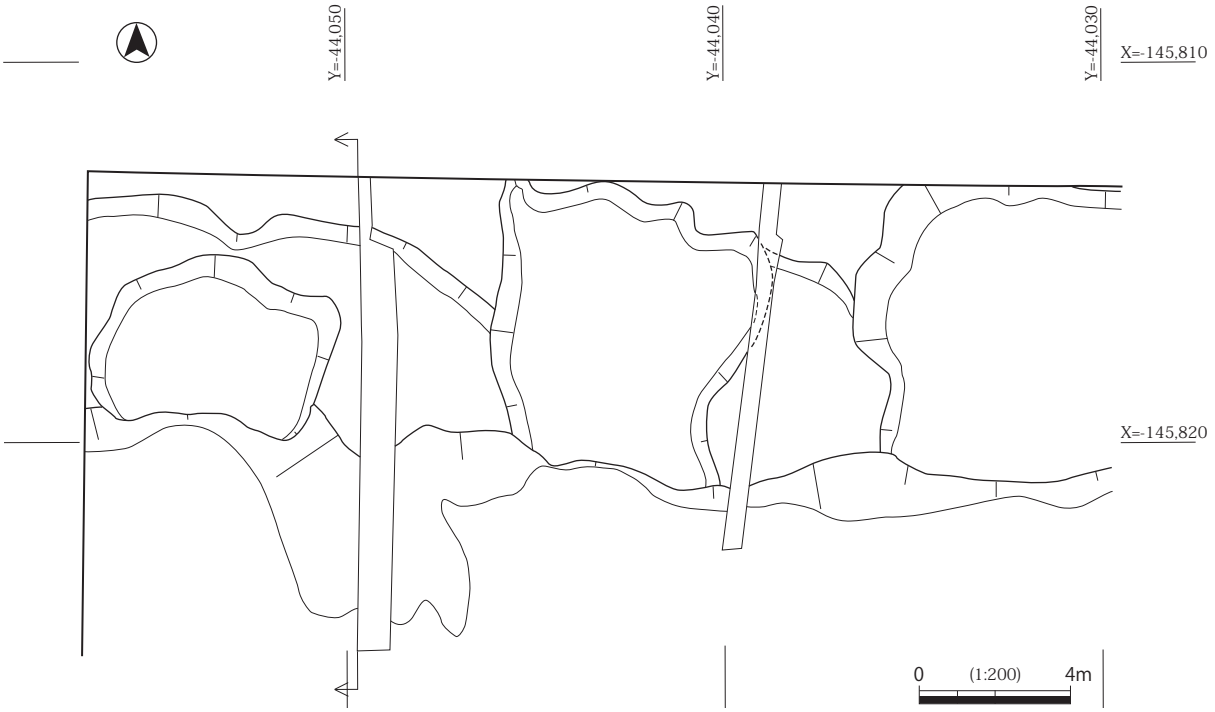


図 104　9 層上面　平面図

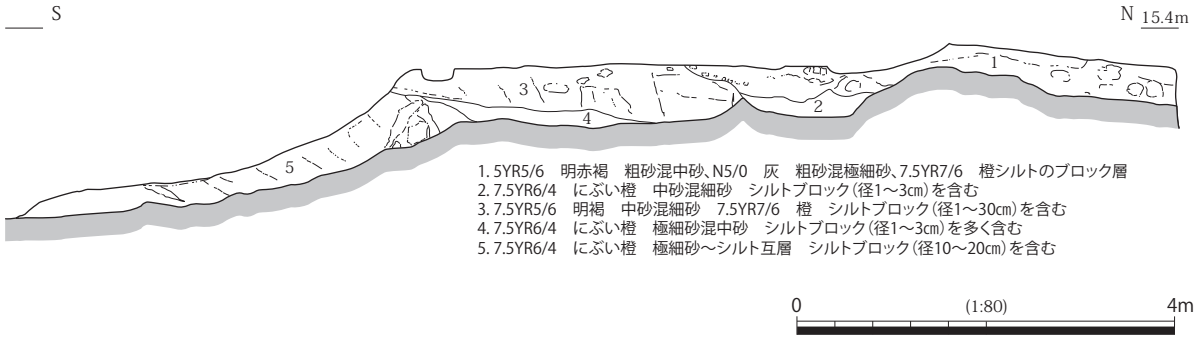


図 105　9 層上面　地滑り痕断面図（Y=-44,050 ライン）

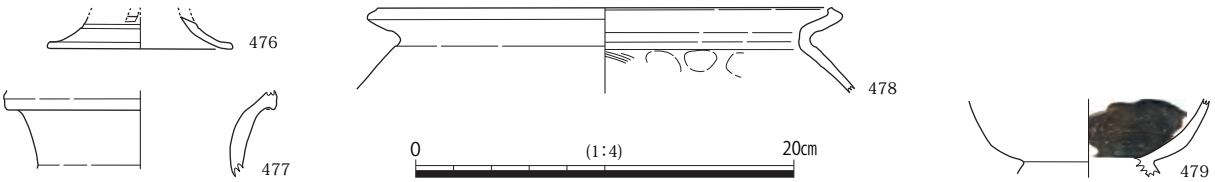


図 106　9 層出土遺物

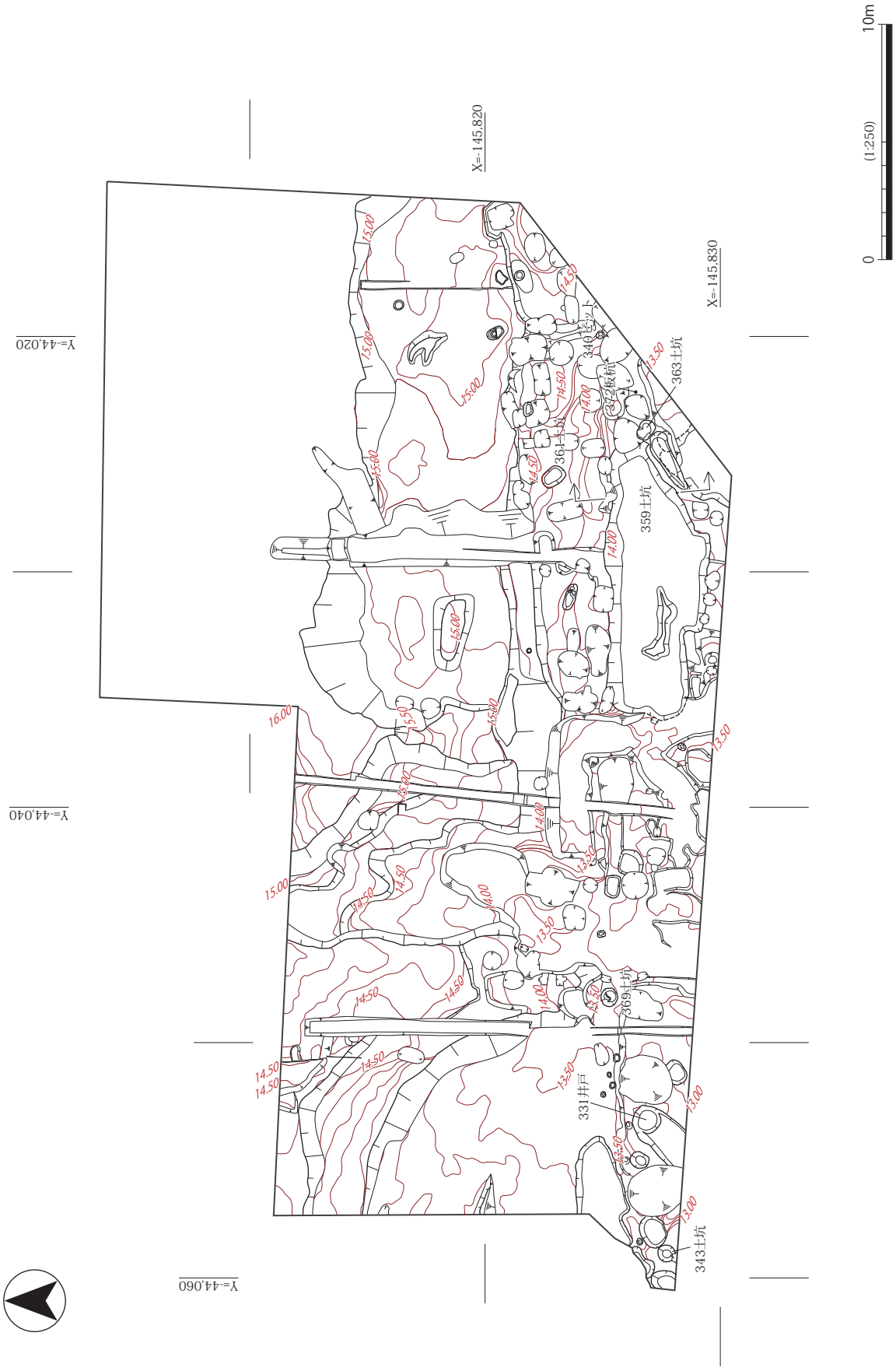


図 107　11 層上面　平面図

埋土は単層でシルトブロックを含んだシルト・中砂混細砂層であった。遺物の出土はなかった。

338 土坑（図 100・101） 1D-3c 区に位置する。平面形は不整三角形を呈し、一辺 2.6 m、深さ 0.5 mを測る。埋土は 4 層ですべてシルトブロックを含んだ極粗砂～中砂層であった。遺物の出土はなかった。

339 土坑（図 100・102・103） 1D-3c 区に位置する。平面形は不整楕円形を呈すが、遺構の南半部は後世の遺構によって切られる。長径 2.6 m、短径 0.9 m以上、深さ 0.1 mを測る。埋土は単層でシルト混粗砂層であった。遺物は 475 漆器椀が出土した。475 は内彎しながら上外方に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。高台の高いタイプであるが、端部は欠損する。内外面とも黒漆を塗るが、口縁端部内面に圏線状に一本赤漆を引く。

9 層上面・9 層（図 104 ～ 106、図版 30） 8f 層を除去して検出した。1D-4b ～ 4d 区に分布する地滑りによる堆積がみられる遺構面である。開析谷の北崖面が幅 10 m程度の円弧状に、北東－南西方向に向かって地滑りを起こしたことが看取できたが、遺構面上で遺構は検出されなかった。地滑りを起こした土砂の層厚は調査区北西隅で最も厚く 1.5 mを測る。土層断面の観察を行った結果、11 層が巨大な偽礫として堆積する隙間に旧表土と思われる黒色粗砂混シルト層が入り込み、このシルト層中から少量ではあるが須恵器、土師器、漆器椀といった遺物が出土した。476 は須恵器の高杯もしくは台付鉢の脚部である。復元底径 9.8 ㎝を測る。古墳時代後期の所産か。477 は須恵器壺の口頸部である。478 は土師器の甕で、9 世紀末～ 10 世紀の所産か。479 は漆器椀である。内外面ともに黒漆を塗り、内面には赤漆で文様を描く。上記の遺物は 479 漆器椀を除いて混入と考えられる。また、この層から出土した種実と木材片を使用して放射性炭素年代測定（AMS 法）を行った（第 8 章　第 2 節）が、その結果、地滑りは 15 世紀後半から 16 世紀前半に起きたと考えられる。

11 層上面（図 107、図版 31） 8f 層、8h 層および 9 層を除去して検出した最終遺構面である。標高は一段目の平坦面で 15.0 ～ 13.6 m、二段目の平坦面で 14.8 ～ 13.2 mを測り、いずれも東から西に向かって傾斜する。遺構はピット、土坑、井戸、溝などで、そのほとんどが二段目の平坦面上で検出された。

340 ピット（図 107 ～ 109） 1D-2c・3c 区に位置する。直径 0.6 m、深さ 0.12 mを測る。埋土は単層でシルトブロックを含む粗砂混シルト層である。遺物は青花や木製品が出土した。482 は青花碗底部である。高台および高台内は露胎する。体部外面および見込み部は圏線と草花文を描く。底径 4.9 ㎝を測る。

343 土坑（図 107 ～ 109、図版 42） 1D-6c 区に位置する。鋼矢板打設の際に土坑の南半部は失われる。直径 0.7 m、深さ 0.3 mを測り、土坑内は湊焼の甕（485）を埋甕として据えるが、削平を受けて底部のみが残る。糞尿溜に使用されたと考えられる。485 は湊焼の甕底部である。土師質土器で底部は型造りで凸レンズ状に突出し、底部内面には指頭圧痕が残る。内外面ともにハケ目調整を行う。底径は 36.5 ㎝を測る。9 段階に属すると考えられる。

359 土坑（図 107 ～ 109、図版 32） 1D-3c・4c 区に位置する。不整長方形を呈すが、東西両端を欠く。長辺 11.5 m以上、短辺 4.5 m、深さ 0.8 mを測る。遺物は土器、須恵器、青花、白磁、瓦、木製品などが出土した。480 は土師器皿である。483 は土師器甕で、混入と考えられる。491 は漆塗り折

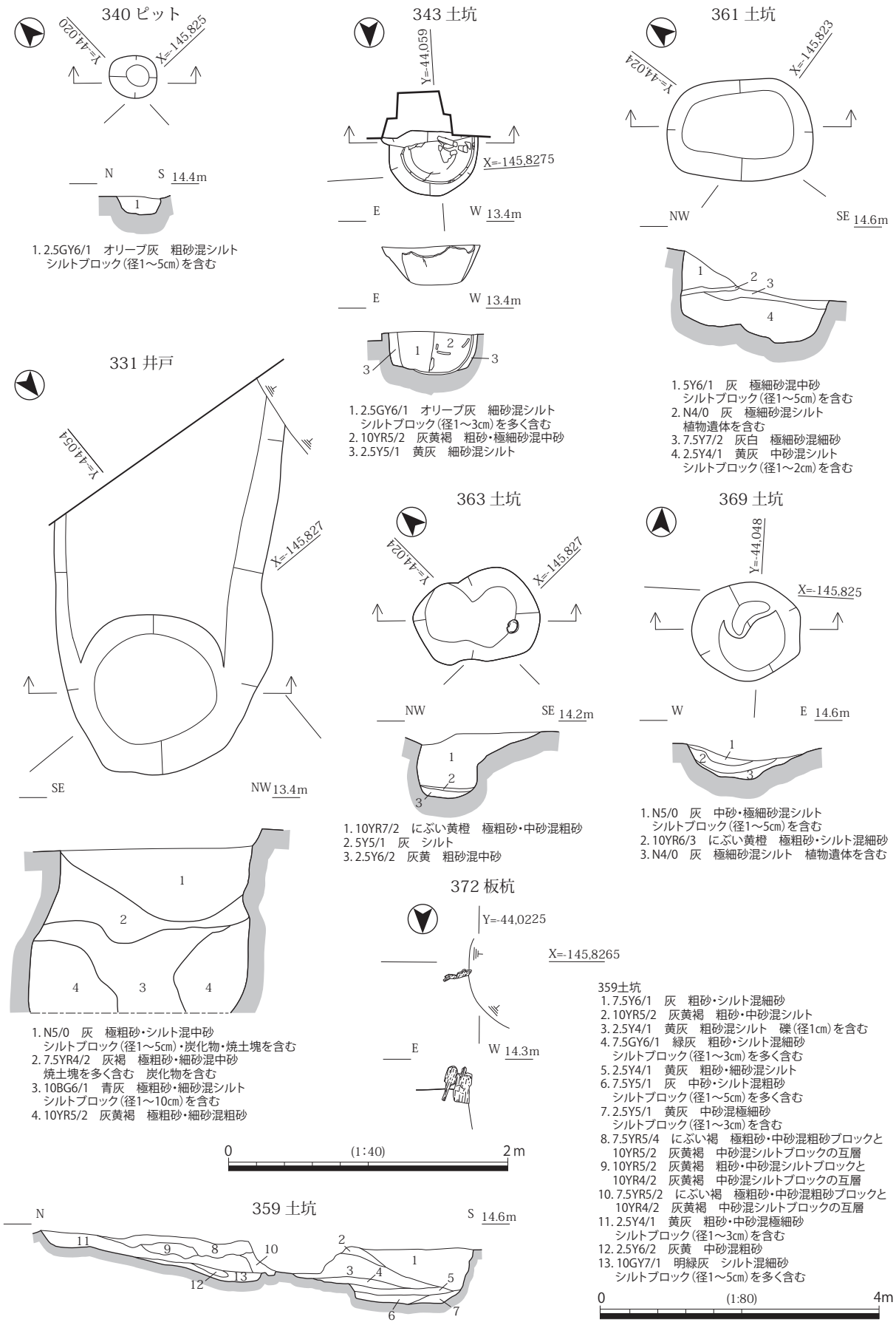
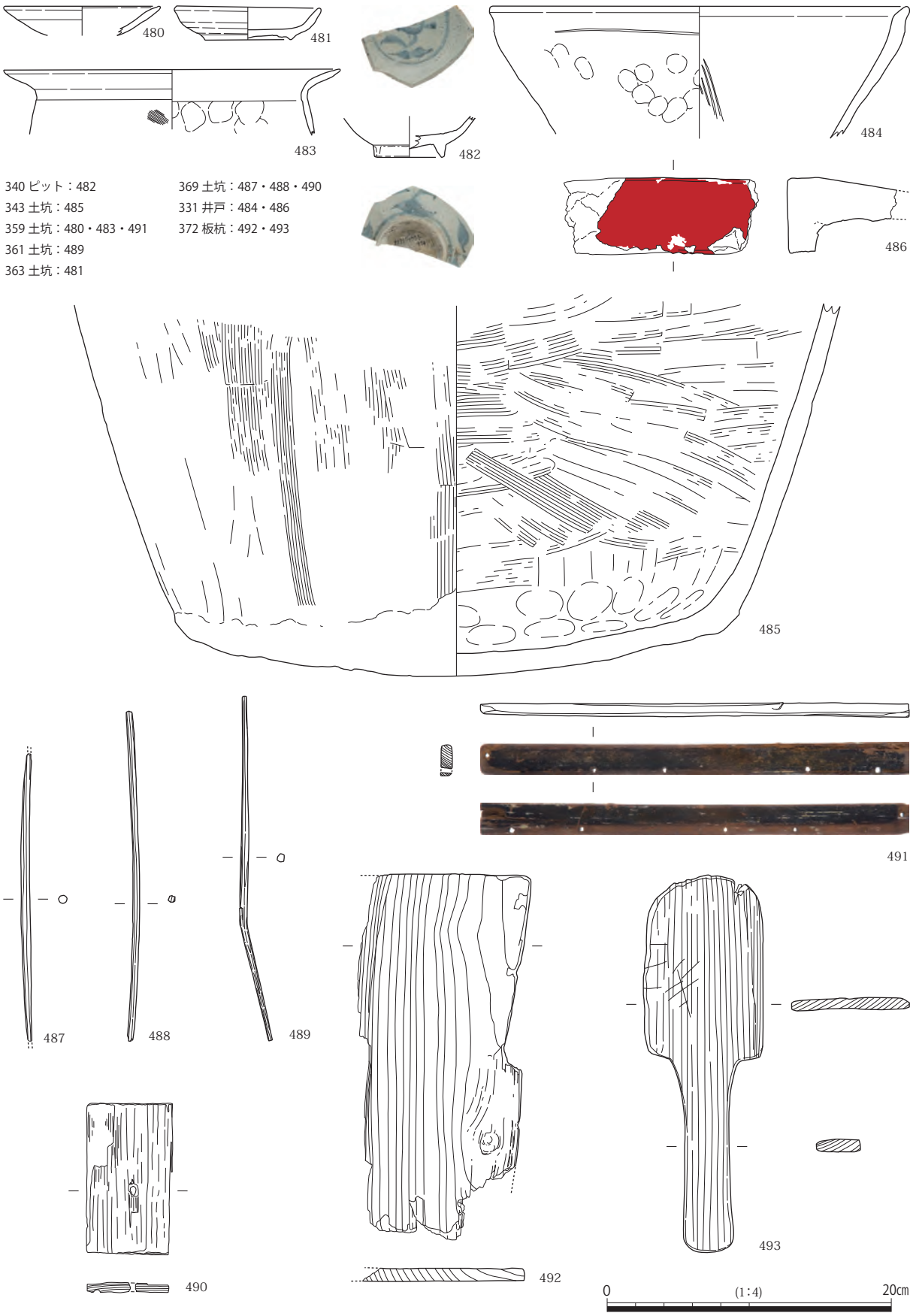


図 108　11 層上面　340 ピット、343・359・361・363・369 土坑、331 井戸、372 板杭平・断面図



340 ピット：482
343 土坑：485
359 土坑：480・483・491
361 土坑：489
363 土坑：481
369 土坑：487・488・490
331 井戸：484・486
372 板杭：492・493

図 109　11 層上面　340 ピット、343・359・361・363・369 土坑、331 井戸、372 板杭出土遺物

敷の側板である。側面と上面に黒漆を塗るが、上面の漆は剥離していた。底板および他の側板とは木釘で接合するが、底板との接合は5㎝間隔に木釘を打つ。長さ30.2㎝、高さ2.2㎝、幅0.7㎝を測る。

361 土坑（図107～109） 1D-3c区に位置する。隅丸長方形を呈し、長辺1.1 m、短辺0.7 m、深さ0.7 mを測る。埋土は4層で、最上層と最下層の埋土にはシルトブロックを含む。遺物は陶器片と瓦片、木製品が出土した。489は箸である。全長24.3㎝、直径0.5㎝を測る。

363 土坑（図107～109、図版32・42） 1D-3c区で、359土坑の東に位置する。不整楕円形を呈し、長径0.9 m、短径0.7 m、深さ0.5 mを測る。遺物は瓦片、木製品の細片とともに481瀬戸・美濃焼灰釉皿が出土した。481は口径10.3㎝、器高2.4㎝を測る。高台内に重ね焼きの痕跡が残る。

369 土坑（図107～109） 1D-5c区に位置する円形の土坑である。規模は直径0.8 m、深さ0.3 mを測る。埋土は3層で上層はシルトブロックを含むシルト層であるが、最下層は植物遺体を含むシルト層が堆積する。遺物は木製品が出土した。487・488は箸で、487は両端が欠損する。488は長さ23.2㎝、490は桶の側板で全長10.4㎝、幅6.0㎝、厚さ0.7㎝を測る。板の中央部に直径0.4㎝の穿孔をもつ。

331 井戸（図107～109、図版42） 1D-6c区に位置する。平面形は楕円形を呈し、遺構の南半部は調査区外に延びる。当初、楕円形の土坑として掘削したが、途中検出面から深さ1.4 mで土坑の南側が平坦面となり、土坑の北側が井戸本体として検出できた。土坑の規模は全長2.9 m以上、幅1.3 m、井戸の規模は、直径1.4 m、深さ1.3 m以上を測るが、掘削限界のため井戸の底を確認することはできなかった。また、土層断面観察の結果、直径約0.5 mの井筒があったと考えられるが残存していなかった。遺物は陶器、瓦質土器、瓦、木製品が出土した。484は瓦質土器の擂鉢である。口縁部はヨコナデを施し、体部外面は指頭圧痕が残る。486は金箔隅木蓋瓦か。瓦当面の金箔は剥離していたが、赤漆が残っていた。

372 板杭（図107～109、図版31・42） 杓子と不明板状木製品が東西方向に並んだ状態で出土した。掘方はなく、刺し込まれたものと考えられるが、性格は不明である。492は不明板状木製品である。一方に刳り込みが入る。残存長25.7㎝、残存幅11.5㎝、厚さ0.9㎝を測る。493は杓子である。表面に不定方向の刃物傷が残る。全長26.5㎝、幅8.4㎝、厚さ0.9㎝を測る。

第８章　自然科学分析

第１節　分析の目的と概要

今回の調査および整理作業において、残石の石材産地同定、大型植物遺体同定分析、放射性炭素年代測定を行った。以下にそれぞれの分析の目的と概要を記す。

大坂城跡出土の花崗岩片について（第２節）

江戸時代（第４層上面）の遺構面で検出した 46 堀は、18 世紀後半に埋め戻された堀であるが、堀の中から 26 点の花崗岩が出土した。これらの花崗岩は大坂夏の陣後に徳川氏の命により、西国大名が中心となって大坂城を再築した際に、豊後国岡藩中川久盛によって集められた石垣材の残石と考えられ、矢穴や矢穴痕列、さらに刻印が刻まれたものが多くみられた。大坂城再築に際して集められた石材は、東六甲山麓をはじめ瀬戸内の島々や生駒山、遠くは九州から運ばれてきたことが分かっている。また、文献資料では、中川久盛が小豆島で石を調達した記録も残されている。しかし、出土した残石の岩相を肉眼観察した限りにおいても、数種類の岩相が確認できたことから、自然科学分析の手法による石材の産地同定を行う必要性が生じた。

そこで、花崗岩に含まれる帯磁率および色指数の違いから石材の産地同定分析を行って実績のある、兵庫県立大学大学院の先山　徹准教授に分析を依頼して実施した。

大坂城跡 69 土坑から出土した大型植物遺体（第３節）

大坂夏の陣後、徳川氏による大坂城再築前の遺構面では、畠跡が検出された。その畠跡付近で検出された 69 土坑は木製の桶が据えられた土坑で、桶の中から多量の大型植物遺体がみつかった。調査段階からこの 69 土坑が畠跡と有機的に関連付けられることが推測された。

そこで、出土した大型植物遺体の同定分析を行うことによって、69 土坑の性格や当時の植生、さらには食生活を明らかにするために同定分析を実施した。

放射性炭素年代測定（第４節）

今回の調査で検出した第９層と呼称した地層では、谷の北壁部分において大規模な地滑り痕跡が認められた。この地滑り痕の下層で遺構は検出されなかった。また、第９層の中から自然木片などが出土したが、土器や陶器など時期を決定する遺物は出土しなかった。

そこで、地滑りが発生した時期を明らかにするとともに、調査地における地滑り後の土地利用の開始時期を探ることを目的に、出土した自然木片を試料として放射性炭素年代測定を実施した。

第２節　大坂城跡出土の花崗岩片について

先山　徹（兵庫県立大学大学院）

今回の大坂城跡発掘調査において 46 堀から出土した花崗岩（残石）26 点のうち、11 点について、岩石記載、帯磁率測定、色指数の測定をおこなった。

１．花崗岩片の岩相

岩石の岩相は主に鉱物量比、カリ長石の色、有色鉱物の産状、粒度などにより、大きく以下の５つの岩相に分けられる。

岩相Ａ：中～粗粒の黒雲母花崗岩で、カリ長石が白色を呈する。黒雲母は自形性が強く点在し、集合体を作りにくい。No.22、No.23、No.26。

岩相Ｂ:中～粗粒の黒雲母花崗岩でカリ長石は淡桃色を呈する。黒雲母は独立して点在する傾向がある。No.16、No.18。

岩相Ｃ:粗粒黒雲母花崗岩。５～８㎜半自形～自形の濃桃色カリ長石に富む。黒雲母は独立して点在し、また黒色鉱物の集合が間隙充填状に産する。No.21。

岩相Ｄ：中粒黒雲母花崗閃緑岩。細粒有色鉱物が集合する傾向があり、角閃石を含む可能性がある。また、有色鉱物の配列が見られることもある。カリ長石白色。No.17、No.19、No.20、No.25。

岩相Ｅ：アプライト質花崗岩。微細な黒雲母が点在。カリ長石に富み、全体に灰～淡い桃色。No.24。

２．有色鉱物の量

花崗岩の分類は通常、石英・斜長石・カリ長石の量比によっておこなわれる。これらの鉱物量比を定量的に測定するためには薄片を作成して顕微鏡で観察するか、長石を染色するなどの処理が必要とされるが、これらは非破壊での調査には向かない。そこで、この調査では岩石を写真撮影し、画像ソフト上で有色鉱物の量比のみを測定することとした。実際には画像ソフトに取り込んだ写真に２㎜間隔のグリッドを重ね合わせ、その交点に位置した鉱物の量を計測することとした。このように測定した有色鉱物の容量％を色指数と呼ぶ。一般に日本の花崗岩では色指数が多いものほどカリ長石が少なく斜長石に富む傾向がある。

３．帯磁率

各岩石について帯磁率を測定した。物質に磁場を与えると、与えられた物質は多かれ少なかれ磁石の性質を持つ。これを磁化といい、その程度を示したものが帯磁率（または磁化率）である。つまり外部から与えられた磁場の強さをＨ、それによって物質に生じた磁気の程度をＭとした場合、両者は $M=\chi H$ の関係にあり、その比例定数 χ が帯磁率となる。帯磁率は無次元量で単位系とは無関係であるが、一般に SI で表される。

物質が磁化する場合、その磁場に反発する方向に磁化するものを反磁性体、与えられた磁場と同じ方向に磁化するものを常磁性体、常磁性体と同様に同じ方向に磁化し、磁場を取り除いた後も磁性を維持するものを強磁性体という。通常の岩石に含まれる鉱物のうち磁鉄鉱、磁赤鉄鉱、磁硫鉄鉱などが強磁性体の鉱物として知られ、磁性鉱物と呼ばれている。岩石の帯磁率は反磁性・常磁性・強磁性それぞれの鉱物の総和として得られるが、実際にはほとんど磁性鉱物（特に磁鉄鉱）の量によって左右される。

磁鉄鉱は鉄の酸化鉱物（Fe3O4）であり、そのため岩石中の鉄が多いほど磁鉄鉱の量が多くなる傾向がある。言い換えると色指数が多いほど多くなる。一方で、そのマグマの酸化状態によっても異なり、マグマが酸化すると増加し、還元状態にあると低下する。したがって帯磁率はマグマの化学組成と形成時の参加状態両方を反映する。

4．結果と考察

それぞれの試料の岩相・帯磁率・色指数を表1にまとめた。また、それぞれの岩石における有色鉱物の量と帯磁率の関係を岩相ごとに図110に示した。

岩相Aはカリ長石が白色の花崗岩で、色指数・帯磁率ともに低い値を示す。岩相Cはそれらと似た色指数・帯磁率であるが、岩相Aに対して粗粒で、カリ長石の桃色が濃い点で異なる。岩相Bは岩相A・Cと同等の色指数であるが、カリ長石が淡桃色で帯磁率が高い点が異なる。これらに対して岩相Dは花崗閃緑岩で色指数が高い点で大きく異なる。また、色指数が高いにも関わらず帯磁率が低い点が特徴的である。

図111に瀬戸内各地の主要な石材について測定された帯磁率および色指数と大坂城跡出土残石とを比較した。大坂城では六甲山地から多くの花崗岩が供出されたことが知られているが、六甲山地の花崗岩は帯磁率の高いものが多く、今回の残石とは大きく異なる。

小豆島・北木島・倉橋島の花崗岩は一般に低い帯磁率と色指数を示し、大坂城跡出土残石の岩相AおよびCのものに近い。このうち小豆島のものは白色のカリ長石が特徴的な黒雲母花崗岩であり、見かけからはもっとも岩相Aの石材に近いようである。北木島のものもカリ長石が白色を呈するが、より細粒である点が異なる。これらに対して倉橋島のものは粒度が粗くカリ長石が桃色を呈することから、岩相Cと類似している。

生駒山の岩石と岩相Dは、いずれも花崗閃緑岩で似た見かけの岩石で、色指数・帯磁率ともに同様の範囲に入る。

岩相Bと似た色指数・帯磁率を示しているものに与島の岩石があるが、見かけ上与島のものはカリ長石が白色であること、有色鉱物が細粒で全体に散在することなどから見て異なる。したがって、これに当てはまる岩石は今回の調査に関する限り見当たらない。

岩相Eはアプライト質のものであり、一般に花崗岩体中の細脈として産し大きな岩体を構成することは少ないので産地を同定することは難しいが、岩相Bに伴って産出したものである可能性は高い。

以上のことから、今回の大坂城跡出土残石の産地候補地としては、小豆島・倉橋島・生駒山があげられる。

5．今後の問題

今回提供された岩石は長辺が5㎝以下で薄いものが多い。帯磁率の測定にはある程度の面積と厚みが必要であり、今回測定したもののいくつかは通常の大きさ（各辺10㎝以上）の岩片であれば、もっと高い帯磁率を示した可能性がある。

色指数の測定には岩石表面の有色鉱物の量を計測するのであるが、黒色の鉱物が石英などの透明鉱物の内部にある場合、内側のものが透過されて見えるため、実際の鉱物量より多く計測してしまう可能性がある。また、粗粒な岩石の場合、色指数の測定にも帯磁率と同様に大きな面積を要するが、そのための資料としては不十分な大きさであった。これらのことを考えたとき、特に岩相Bの岩石は六甲山の花崗岩と同様の領域になる可能性は否定できない。

瀬戸内地域には、さらに多くの産地と考えられる地域があり、また、一つの産地の中でも岩相に変化があるので、帯磁率や有色鉱物の量にも変化がある。上記の問題も踏まえ、さらに多くのデータを蓄積することが必要である。

表１　大坂城跡出土残石岩相一覧

番号	岩石記載	帯磁率（$\times 10^{-3}$SI）	色指数	岩相タイプ
No.16	中粒黒雲母花崗岩。黒雲母は点在。カリ長石：桃色、１～２㎜、少量。	1.290	5.5	B
No.17	中粒黒雲母花崗閃緑岩。角閃石含有？細粒有色鉱物の集合体。　カリ長石白色。	0.230	10.8	D
No.18	粗粒黒雲母花崗岩。３～５㎜半自形の淡桃色カリ長石に富む。黒雲母は独立して点在。	0.800	5.3	B
No.19	中粒黒雲母花崗閃緑岩。風化が著しい。	0.034	―	D
No.20 No.25	中粒黒雲母花崗閃緑岩。細粒の黒雲母の葉片状集合物が配列。	0.017	13.9	D
No.21	粗粒黒雲母花崗岩。５～８㎜半自形～自形の濃桃色カリ長石に富む。黒雲母は独立して点在。黒色鉱物の集合が間隙充填状。	0.189	6.5	C
No.22	中～粗粒黒雲母花崗岩。２㎜程度の自形～半自形黒雲母が点在。一部集合。カリ長石は白色。球状の石英。	0.027	6.5	A
No.23	中粒黒雲母花崗岩。黒雲母は点在。カリ長石：淡桃色～白色。	0.213	5.4	A
No.24	アプライト質花崗岩。微細な黒雲母が点在。カリ長石に富み、全体に灰～淡い桃色。	0.798	4.7	E
No.26	中粒黒雲母花崗岩。細粒の黒雲母が点在。カリ長石は白色で最大１cm。	0.014	3.6	A

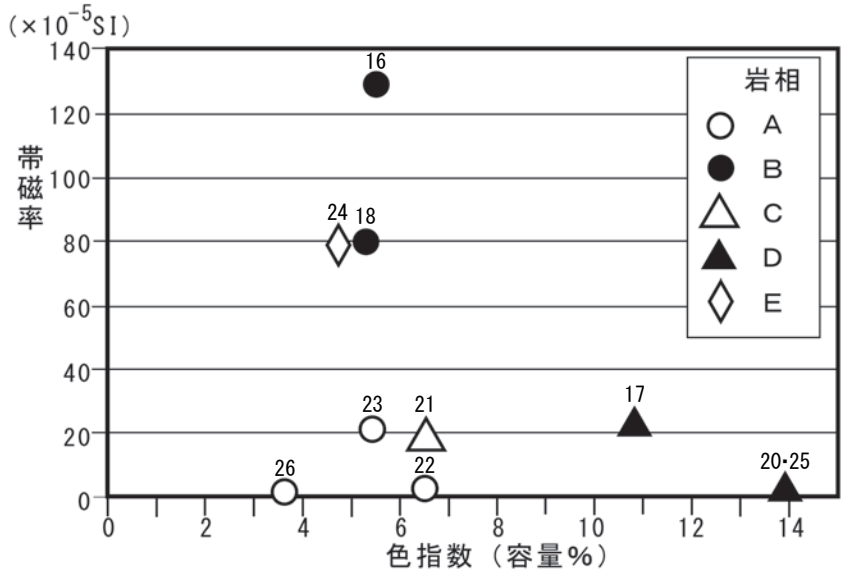


図 110　大坂城跡出土残石の帯磁率および色指数

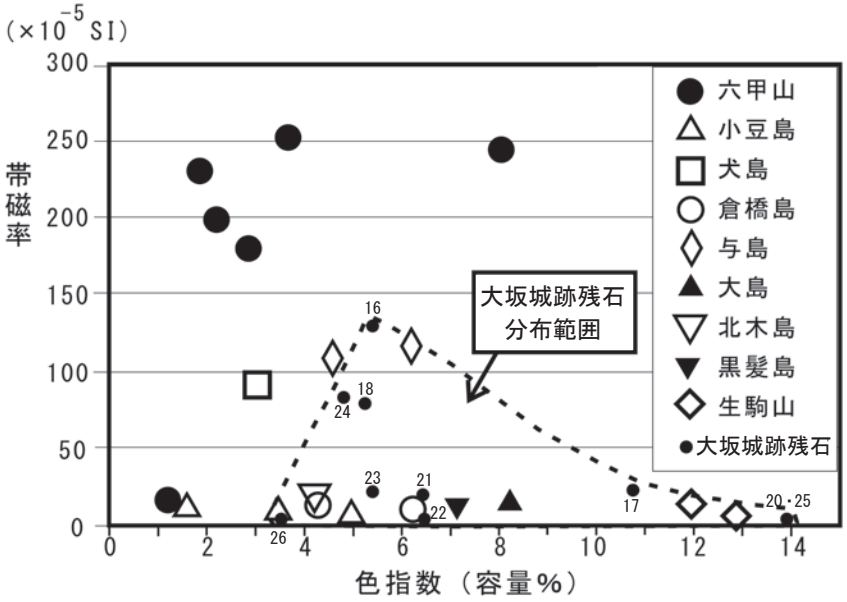


図 111　瀬戸内各地の花崗岩類の帯磁率および色指数

第 3 節　大坂城跡 69 土坑から出土した大型植物遺体

1. はじめに

今回分析に充てる 69 土坑を検出した 6b 層上面は開析谷内に認められた大坂夏の陣後の遺構面で、2 層に大別できた下層部分にあたる（図 112・113）。6b 層上面西側では畠跡を検出したが、畠跡の南端で 69 土坑を検出した。69 土坑の規模は長径 0.95m、短径 0.75m、深さ 0.6m を測る。土坑には木製の桶が据えられており、その中から土器片の他に多量の大型植物遺体 (種実) が出土した。そこで出土した大型植物遺体 (種実) を同定することにより当時の環境や食生活の復原を試みる。

2. 分析方法と同定結果

遺構から採取した堆積物は担当者により水洗されていた。処理量については不明である。これらから 1 試料に付き 100 粒以上で解析に十分な個数を無作為に抽出し分類群と出土部位ごとに同定・計数した。同定に充てた試料は 3 試料である。また、栽培植物は少数でも分類群が出土することが重要であるため、残渣をさらに観察して栽培種は全て同定した。観察は肉眼および実体顕微鏡で行った。同定結果は表 2 に示されている。出土分類群は、針葉樹はモミ属、広葉樹はヤマモモ、クリ、ウメ、スモモ、サンショウ、ヤマボウシで木本は 7 分類群、草本単子葉類はイネ、アワ、ヒエ、ヒエ属、キビ、ホタルイ属、スゲ属の 7 分類群、草本双子葉類はソバ、ハナタデまたはネバリタデ、ヤナギタデ、イヌタデ属ミチヤナギ節、ギシギシ属、ミドリハコベ近似種、アカザ属、ヒユ属、スベリヒユ、ササゲ属アズキ亜属、アブラナ属、キュウリ属メロン仲間、アカネ属、トウダイグサ、ナス近似種、ベニバナ近似種の 16 分類群が同定された。また、不明種実 3 タイプ及び蘚類の葉付き枝が確認された。以下に特筆すべき分類群の形態記載をおこなう。

a. 栽培・利用植物

イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属

図 112　6b 層上面遺構平面図

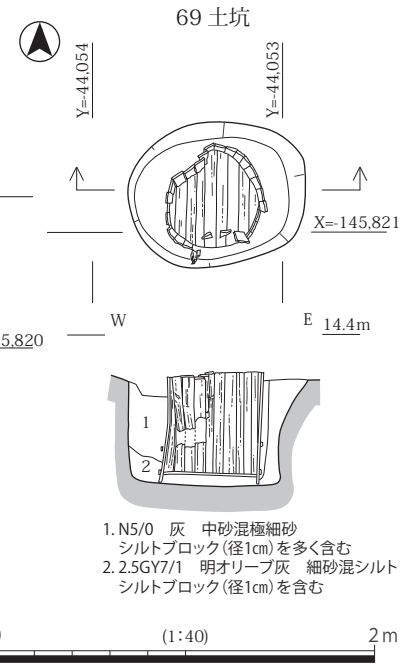


図 113　69 土坑平・断面図

本試料では穎を出土した。穎は高さ 7 ㎜前後の長卵形で縦方向に明瞭な 2 本の稜があり、表面には細かい葺瓦状の網目が規則的に並んでいる。

アワ (Setaria italica (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

穎は球形上下が突出し穎表面にかなり明瞭な波状のおうとつ模様がある。エノコログサ属の他の野生種と比較すると幅がかなり広く厚みが幅と同じくらいある。出土した穎は上半が裂けている。

ヒエとヒエ属 (Echinochloa esculenta (A.Braun) H.Scholz) イネ科

本遺跡では穎を出土した。穎は高さ 3.5 ㎜前後の紡錘形で背面にやや明瞭な筋が数本ある。出土した穎はいずれも先端が裂けており、利用後と推測される。出土した穎の内比較的厚みがあり幅が広いものをヒエとし、幅が狭い紡錘形のものをヒエ属と同定した。現在でもヒエの栽培地と雑草生育場所が隣接する畑ではヒエとヒエ属の中間雑種が存在するので雑種が含まれる可能性もある。

キビ (Panicum miliaceum L.) イネ科キビ属

表 2　大坂城跡 69 土坑出土種実

	番号		239
	地区割		13-2(1 区)
	層位		6-2 層上面
分類群	出土部位 / 遺構		69 土坑
栽培植物・利用植物			
ヤマモモ		核	8
クリ		果皮破片	1
スモモ		核	6
ウメ		核	1
サンショウ		内果皮	1
イネ		穎	12
アワ		穎破片	1
ヒエ		穎先端裂け	2
キビ		穎破片	1
ソバ		果皮	1
ヒユ属		種子完形	16
		種子つぶれ	4
アブラナ属		種子	1
メロン仲間		種子	310
ナス近似種		種子	13
ベニバナ近似種		果皮破片	1
湿性植物			
ホタルイ属		果実	1
ヤナギタデ		果実	1
その他木本			
モミ属		葉	1
ヤマボウシ		種子	1
その他草本			
ヒエ属		穎	3
スゲ属		果実	1
ハナタデまたはネバリタデ		果実	1
イヌタデ属ミチヤナギ節		果実	1
ギシギシ属		苞	1
		果実	1
ミドリハコベ近似種		種子	1
スベリヒユ		種子	1
アカザ属		種子	1
ササゲ属アズキ亜属		炭化種子半分	1
アカネ属		種子	1
トウダイグサ		種子	1
その他			
蘚類		葉	1
不明 A			1
不明 B			1
不明 C			1

表 3　大坂城跡 69 土坑出土メロン仲間種子計測値

長さ	幅	長さ	幅	長さ	幅
7.18	3.82	7.27	3.07	7.29	3.02
7.28	3.22	6.07	2.95	7.03	2.82
6.28	3.05	4.30	2.40	7.08	3.12
7.06	3.19	7.25	2.97	6.87	2.75
7.10	3.16	6.41	3.10	7.20	3.41
7.87	3.40	6.86	2.71	6.82	3.24
5.83	2.76	6.46	3.15	5.73	2.32
6.91	2.67	5.52	2.30	7.38	3.03
6.98	3.04	8.57	3.57	6.77	3.17
7.27	3.17	6.88	3.08	6.94	3.18
6.54	3.28	5.34	3.03	6.35	2.85
5.86	3.11	6.59	2.75	5.75	2.69
6.50	2.99	6.53	3.17	7.75	3.34
7.05	3.25	7.23	2.72	8.22	3.49
6.24	2.41	8.25	3.67	5.74	2.55
6.54	2.87	6.10	2.06	6.88	2.92
6.82	3.07	5.07	2.31	7.17	3.03
7.01	3.28	7.07	3.38	9.30	4.25
7.86	2.82	7.08	3.35	7.40	3.19
6.85	2.74	7.76	2.97	6.87	3.12
6.50	2.93	6.74	2.24	6.73	3.03
7.32	3.39	5.99	2.85	6.46	3.36
7.96	3.38	6.96	3.02	6.15	2.96
5.04	2.39	7.55	3.58	6.19	3.00
5.40	2.99	7.52	3.08	7.15	2.95
6.49	2.88	6.95	3.04	7.55	3.06
7.02	3.44	6.71	3.05	7.19	3.16
7.33	3.76	6.66	2.68	6.52	2.72
6.32	3.17	7.12	3.20	6.99	3.09
6.75	3.36	6.28	3.20	6.69	3.41
6.65	3.15	6.82	3.02	7.07	3.01
6.52	3.18	7.01	3.09	7.46	3.03
8.22	3.62	6.53	2.97	7.12	3.19
7.01	3.00				

最大値	9.30	4.25
最小値	4.30	2.06
平均値	6.83	3.05

単位：mm

腹面部が裂けた穎を出土した。穎はほぼ球形で黄色みが強い褐色で背面腹面ともに比較的強い光沢がありアワやヒエと比較すると壁が固い。

ソバ (Fagopyrum esculentum Moench) タデ科ソバ属

試料からは 2 枚の果皮が付着したものと 1 枚の果皮を出土したが、もとは 1 個の三面形の果実だったと思われる。果皮は薄くやや固く、果皮一面の中央から左右対称に縁辺に向かって上方向に筋が密布し、この筋に沿って濃褐色と薄褐色の斑模様がある。

ヒユ属 (Amaranthus) ヒユ科

種子は円形で扁平、黒色で強い光沢があり一端に唇状の基部がある。表面に細いすじ状の網目が見えることがある。潰れた種子が出土したことから利用植物とした。

アブラナ属 (Brassica) アブラナ科

種子は球形で一端に少し突出した筋状のへそがあり、表面にはやや細かい四角の網目が全面を覆っている。径は 1.7 ㎜でアブラナ属の栽培種の可能性が高い。アブラナ属にはアブラナ、カラシナなど葉菜を中心に多種類あるが種子による区別は困難を極める。

キュウリ属メロン仲間 (Cucumis melo L.) ウリ科

種子は淡黄色で水滴型で扁平、種皮表面の網目は短い長方形ないし正方形である。キュウリと比較すると基部がやや丸く正方形に近い網目がほとんどである。試料から多量の出土があったので種子 100 粒についてサイズ計測を行い、計測値を表 3 に示した。サイズの平均値は長さ 6.83 ㎜、幅 3.05 ㎜であった。

クリ (Castanea crenata Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

試料からは小さい破片を出土した。果皮は褐色で縦方向に筋状の構造があり、線状の境界部を介してクリ基部特有の小さく不規則な丘状突起が確認できる。

ウメ (Armeniaca mume (Siebold et Zucc.) de Vriese) バラ科ウメ属

核は丸い紡錘形で高さ 18 ㎜前後で厚みがあり、表面はごく浅い溝があるかほとんどなく、小さいくぼみと穴が多数ある。

スモモ (Prunus salicina Lindl.) バラ科サクラ属

核は卵形で上下端が尖り高さ 14 ㎜前後、やや厚みがあり表面はざらつくが突起はなく平滑である。

サンショウ (Zanthoxylum piperitum (L.) DC.) ミカン科サンショウ属

内果皮は 4 ㎜ほどの楕円形で一端にあるへそは切り形で細長い溝状、表面は黒色で平滑、浅くやや細かく比較的大きさが揃った網目模様がある。

ナス近似種 (Solanum melongena L.) ナス科ナス属

種子は径 4 ㎜前後で円形で扁平な膜状で柔らかく黄褐色、種子表面は鎖状の網目を密に分布し中心部では偏円から偏四角形で種子縁に近づくと畝状に見える。

ベニバナ近似種 (Carthamus tinctorius L.) キク科ベニバナ属

出土した果皮は 3 分の 2 程度の破片で長さ 5.3 ㎜、稜が 2 本あり外面はやや光沢をおびて平滑で、内面は楕円形の種子型痕があり褐色で平滑である。残存する基部の一部が円形で少し突出していることと、果皮が光沢をおびる白褐色ということからベニバナ近似種と同定した。

b. 湿性植物

ホタルイ属 (Scirpus) カヤツリグサ科

果実は 2 ～ 2.2 ㎜程度の広卵形で扁平、頂部と基部は細く締まり、黒くやや光沢があり細かいしわが見られるものもある。抽水植物である。

ヤナギタデ (Persicaria hydropiper (L.) Delarbre) タデ科イヌタデ属

果実は 2.7 ㎜で卵形、2 面で黒褐色、細かい多角形の網目が全面に分布する。河川や湿地などに生育する。

c. その他

ササゲ属アズキ亜属 (Vigna subgen. Ceratotropis) マメ科

炭化種子は楕円形で割れ面は平滑で中央がややへこみ外面に一部種皮が残るがへそ部分は欠落している。割れた内面には子葉縁に平行に湾曲した初生葉痕が子葉長半分くらいまで確認でき、このことから完熟したアズキ亜属種子とした。炭化子葉長さは 3.5 ㎜と非常に小さいため、栽培種ではなくヤブツルアズキなどの野生種と考えられる。

ヤマボウシ (Cornus kousa Buerger ex Hance subsp. kousa) ミズキ科ミズキ属

種子は長さ 4.3 ㎜で不定球形で不規則で大きいおうとつがありへそは一文字状で、壁表面は黄褐色で平滑でやや光沢がある。

3. 考察

69 土坑からは可食植物のキュウリ属メロン仲間種子を大変多く出土し、ヤマモモ、スモモ、ナス近似種などのほか、利用植物として口にしたと考えられるヒユ属種子も出土した。一方で可食部以外のイネ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、アブラナ属、ベニバナ近似種も出土している。もっとも多く出土しているメロン仲間は果実ごと住居に持ち込まれ消費されるという利用形態を考慮すると、果実種子の直接堆積ではなく食料利用後の残渣を廃棄した、もしくは排泄物を土坑に持ち込んだ可能性が考えられる。木本由来のモミ属の葉やヤマボウシ、利用植物以外の草本であるギシギシ属やミチヤナギ節、スベリヒユ、トウダイグサなどは周辺に生育していたと考えられる。

近世のゴミ穴は、本調査区に近い難波宮 (旧大阪市中央体育館敷地内) の江戸時代後半と時代はやや下るが、武家屋敷において 6 土坑の分析例があり、わずかであるが食用のメロン仲間、イネ、キビ、ヒエ、サンショウや利用後と考えられるつぶれたヒユ属とともに雑草のギシギシ属やハコベ属などを出土している (古代の森研究舎 2000)。屋敷内のゴミ穴でもっとも多く出土したのはカボチャ種子であるが、本土坑ではメロン仲間種子が多く出土したという点が大きく異なる。これは屋敷内ゴミ穴と畠に付随する土坑という違いとみられ、カボチャは調理前に種をあらかじめ取り除くがメロン仲間は種子ごと食用とすることがあると言う点で廃棄残渣の処理行程が異なることに由来すると考えられる。畠に付随する土坑としては井戸や肥溜めが考えられるが、本調査区の 69 土坑からは井戸廃絶にともなうヒョウタンの果実種子を出土しないことや停滞水に起因する水生植物由来の種子、胞子や葉が出土しないことから、本土坑においては水利施設として利用された痕跡が認められず、排泄物貯蔵目的の土坑として掘削された可能性が高いと考えられる。

引用文献

古代の森研究舎．2000．第 4 節　前期難波宮水利施設に係わる古環境分析．難波宮址の研究　第十一．財団法人大阪市文化財協会．217-224

文責　吉川純子 (古代の森研究舎)

写真１　大坂城跡 69 土坑から出土した種実

1. ヤマモモ、核 2. クリ、果皮破片 3. スモモ、核 4. ウメ、核 5. サンショウ、内果皮 6. イネ、穎 7. アワ、穎 8. キビ、穎 9. ヒエ、穎 10. ソバ、果実 11. ヒユ属、種子 12. メロン仲間、種子 13. アブラナ属、種子 14. ナス、種子 15. ベニバナ近似種、果実破片 16. ホタルイ属、果実 17. ヤナギタデ、果実 18. スゲ属、果実 19. ミチヤナギ節、果実 20. ハナタデまたはネバリタデ、果実 21. ヤマボウシ、種子 22. モミ属、葉 23. ミドリハコベ、種子 24. スベリヒユ、種子 25. アカザ属、種子 26. ギシギシ属、苞 27. ギシギシ属、果実 28. ササゲ属アズキ亜属、炭化種子半分 29. アカネ属、種子 30. トウダイグサ、種子 31. 蘚類、葉 32. 不明 A 33. 不明 B 34. 不明 C　　スケールは 1 ㎜

第４節　放射性炭素年代測定

１．分析の目的

今回の調査地内で豊臣前期の遺構面である８層上面の基盤層を除去して９層上面（図 114）を検出した。この９層は開析谷肩部の地滑りによって堆積した地層で、調査区南西部に認められる。断面観察の結果などから円弧状に複数回地滑りが起きたことが看取できた。地滑りを起こした地層は基盤層である上町層であるが、地滑りによってできた空隙に暗灰色粗砂混細砂層が堆積しており、その中から漆器椀片や土器の細片が出土したが、地滑りが起きた時期を特定するには至らなかった。

そこで、調査地の環境復原を行う一助とすべく、今回は地滑りによる堆積層（9 層）に含まれる木片や種実の放射性炭素年代測定を行い、地滑りの年代を推定する手がかりを得た。

２．試料と方法

試料は、調査区 1D-6b の９層から出土した生の種実１点（Ｓ３：PLD-26598）と生材２点（Ｓ６：PLD-26599、Ｓ８：PLD-26600）の、計３点である。生材２点はいずれも自然木で、最終形成年輪が残っている。なお、Ｓ６は散孔材の根材であった。測定試料の情報、調製データは表４のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

３．結果

表５に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図 115 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値

図 114　９層上面サンプリング位置図

表４　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-26598	調査区：１D‐６b 層位：９層 遺物番号：S３	種類：生の種実 試料の性状：種実 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-26599	調査区：１D‐６b 層位：９層 遺物番号：S６	種類：生材（散孔材の根材） 試料の性状：最終形成年輪 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-26600	調査区：１D‐６b 層位：９層 遺物番号：S８	種類：生材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、 標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ:IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

調査区 1D-6b の９層から出土したＳ３（PLD-26598）は、２σ暦年代範囲（確率 95.4％）において 1495-1602 cal AD（75.6%）および 1616-1643 cal AD（19.8%）で、15 世紀末～ 17 世紀中頃の暦年

表５　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP± 1 σ)	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-26598 遺物番号S３	-27.48±0.18	319±17	320±15	1522AD(49.5%)1577AD 1583AD(6.2%)1591AD 1622AD(12.5%)1636AD	1495AD(75.6%)1602AD 1616AD(19.8%)1643AD
PLD-26599 遺物番号S６	-14.42±0.23	399±16	400±15	1448AD(68.2%)1475AD	1443AD(90.1%)1494AD 1602AD(5.3%)1612AD
PLD-26600 遺物番号S８	-24.24±0.23	374±16	375±15	1458AD(49.7%)1495AD 1602AD(18.5%)1616AD	1450AD(70.6%)1521AD 1591AD(24.8%)1620AD
		較正年代の結合結果		1470AD(59.4%)1496AD 1605AD(8.8%)1611AD	1464AD(77.3%)1514AD 1600AD(18.1%)1618AD

代を示した。なお、Ｓ３（PLD-26598）は種実であり、測定結果は種実が結実した年代を示している。同じく９層から出土したＳ６（PLD-26599）は２σ暦年代範囲において 1443-1494 cal AD（90.1%）および 1602-1612 cal AD（5.3%）、Ｓ８（PLD-26600）は２σ暦年代範囲において 1450-1521 cal AD（70.6%）および 1591-1620 cal AD（24.8%）で、15 世紀中頃～ 17 世紀前半の暦年代を示した。なお、自然木であるＳ６（PLD-26599）とＳ８（PLD-26600）は最終形成年輪が残っており、測定結果は伐採および枯死年代を示している。

９層は開析谷肩部の地滑りで堆積した層であり、測定結果は地滑りの発生時期に近い年代を示していると考えられる。したがって、各試料の暦年代範囲は近い時期を示すと予想されるため、各試料の較正年代を結合し、重複している箇所を抽出した。計算には、暦年較正用ソフト OxCal に付属する Combine の機能を用いた。結合の結果は、２σ暦年代範囲において 1464-1514 cal AD（77.3%）および 1600-1618 cal AD（18.1%）で、15 世紀後半～ 16 世紀前半および 16 世紀末～ 17 世紀前半の年代を示した。

９層は豊臣前期の遺構面である８層上面の基盤層の下の層であるため、地滑りは豊臣前期以前に発生したと考えられている。較正年代のうち、16 世紀末～ 17 世紀前半の暦年代範囲は豊臣前期以降を示しており、層序に対して矛盾する。よって、９層の地滑りは 15 世紀後半～ 16 世紀前半に発生した可能性が高いと考えられる。

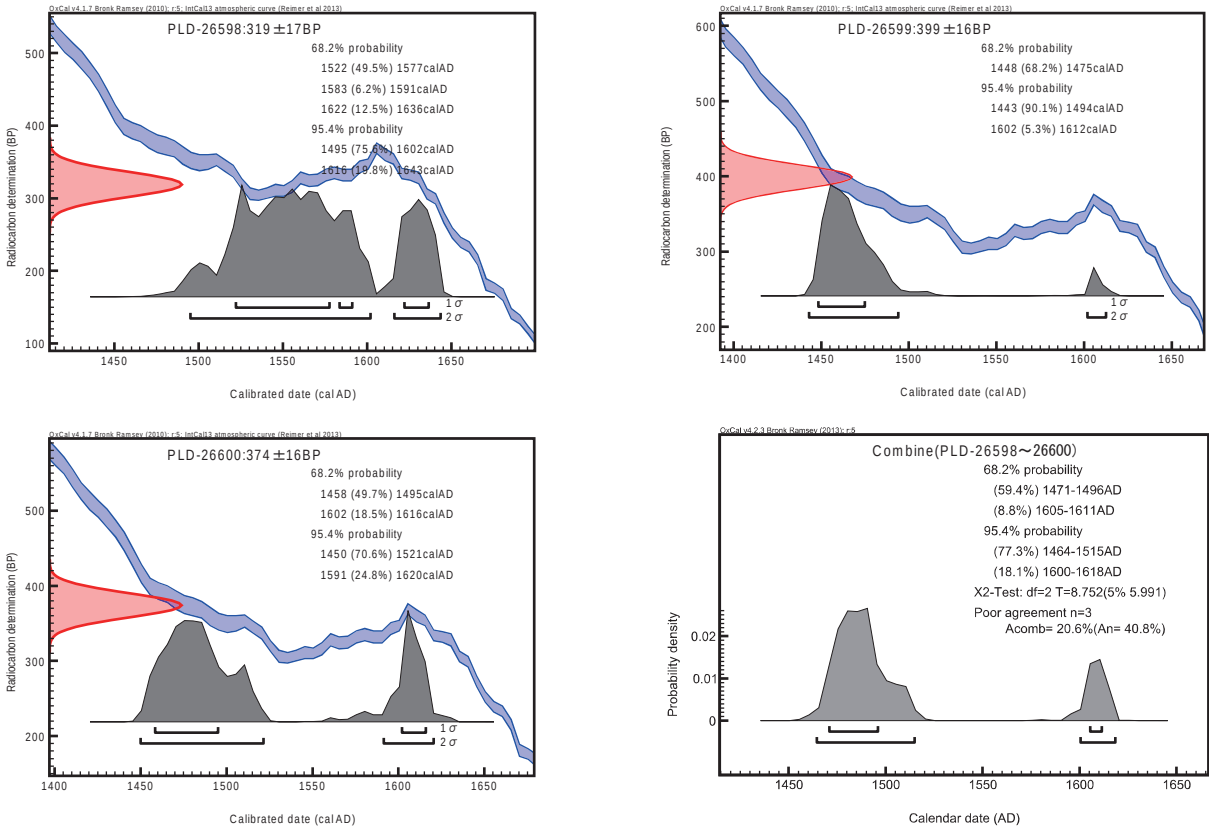


図 115　暦年較正結果

文責　パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・小林克也

第９章　46 堀出土残石について

１．はじめに

４層上面で検出した 46 堀の中から、26 点の花崗岩が出土した。これらの花崗岩は矢穴や矢穴痕列、刻印などが刻まれており、その特徴から徳川氏による大坂城再築時に集められた石材の残石と考えられる。

26 点のうち矢穴や矢穴痕列が認められたものは 21 点、刻印が刻まれたものは 19 点であった。また、今回出土した石の特徴として、自然面が残る石が多く、中には全くの自然石（残石 19）も見受けられた（表６）。

２．出土した残石について

次に、出土した残石の特徴について記述を行う。矢穴の分類に関しては森岡・藤川分類（森岡・藤川 2008）に準拠した。また、「△」の刻印については後述するが、ａ類とｂ類に分類した。

残石１（図 116、図版 43）　自然面が残る扁平な割石である。縦 73 ㎝、横 138 ㎝、高さ 48 ㎝を測る。矢穴による割面を１面もち、その割面に穿孔途中の矢穴１個と「△」ａ類の刻印を刻む。さらに小口部にあたる場所にも「△」ｂ類の刻印が刻まれる。矢穴痕列は１列で、その類型はＡタイプである。

残石２（図 116、図版 43）　自然面が残る不整形な角石で、縦 60 ㎝、横 73 ㎝、高さ 51 ㎝を測る。

表６　残石一覧表

番　号	縦	横	高　さ	自然面	矢穴痕・矢穴列痕	矢穴・矢穴列	刻　印
1	73	138	48	○	○	○	○
2	60	73	51	○	×	×	○
3	64	80	46	○	×	×	○
4	35	90	35	○	○	×	○
5	63	74	50	○	○	×	○
6	56	79	40	○	○	×	○
7	70	74	42	○	○	×	○
8	64	91	46	○	○	○	○
9	55	88	42	○	○	×	○
10	76	120	55	○	×	○	○
11	46	91	36	○	○	○	○
12	73	157	57	○	○	×	×
13	78	163	50	○	○	×	○
14	70	160	66	○	○	×	×
15	68	126	66	○	○	×	×
16	65	80	43	○	○	○	×
17	62	73	48	○	×	×	○
18	62	118	57	○	○	×	○
19	54	77	44	○	×	×	×
20・25	48	268	44	×	○	×	○
21	55	154	43	○	○	×	○
22	90	169	75	○	○	×	○
23	52	90	44	○	○	×	○
24	85	104	60	○	○	×	○
26	45	120	32	×	○	×	×

矢穴痕はなく、「△」a 類の刻印が刻まれる。

残石 3（図 116、図版 43） 扁平な丸石の自然石で、縦 64 ㎝、横 80 ㎝、高さ 46 ㎝を測る。矢穴痕はない。玉ねぎ状風化によって剥離した面を利用して「△」a 類の刻印を刻む。

残石 4（図 117、図版 43） 自然面が残る扁平な割石で、縦 35 ㎝、横 90 ㎝、高さ 35 ㎝を測る。Ａタイプの矢穴痕列が一列残る。刻印は割面に刻まれるが、石割りのための矢穴により欠損しており図形は不明である。

残石 5（図 117、図版 44） 自然面が残る不整な立方体の割石で、縦 63 ㎝、横 74 ㎝、高さ 50 ㎝を測る。矢穴痕列は２カ所で同一面の両辺に残る。両列ともＡタイプである。割面に「⊖」の刻印が刻まれる。

残石 6（図 117、図版 44） 自然面が残る不整な立方体の割石で、縦 56 ㎝、横 79 ㎝、高さ 40 ㎝を測る。合計４カ所にある矢穴痕・矢穴痕列のうち、小口部３方向に入れられた矢穴痕・矢穴痕列は古Ａタイプで、横方向から入れられた１列はＡタイプであった。刻印は矢穴痕・矢穴痕列が刻まれた自然面に「△」b 類の刻印が、割面に「△」a 類の刻印がそれぞれ刻まれる。

残石 7（図 118、図版 44） 自然面が残る割石で、縦 70 ㎝、横 74 ㎝、高さ 42 ㎝を測る。同一面に２カ所の矢穴痕列が残る。両列ともＡタイプである。ｲ-３の矢穴痕には墨書で「ロ」字を書く。また、割面に「△」b 類の刻印が刻まれる。

残石 8（図 118、図版 45） 円錐形を縦に４分割した割石で自然面が残る。縦 64 ㎝、横 91 ㎝、高さ 46 ㎝を測る。二面の割面にはＡタイプの矢穴および矢穴列が残る。一方、自然面には「△」a 類の刻印が刻まれる。

残石 9（図 118、図版 45） 自然面が残る扁平な割石で、縦 55 ㎝、横 88 ㎝、高さ 42 ㎝を測る。矢穴や矢穴痕はなく、２面の自然面に頂部を欠損した「△」の刻印と「⊖」の刻印が刻まれる。

残石 10（図 119、図版 45） 扁平な自然石で、縦 76 ㎝、横 120 ㎝、高さ 55 ㎝を測る。13.1 ㎝とやや間隔の広い二個のＡタイプの矢穴を穿つ。他の自然面には「△」a 類の刻印を１個と、「卐」と「中」を組み合わせた刻印が３カ所刻まれる。

残石 11（図 119、図版 46） 円錐形を縦に４分割した割石で自然面が残る。縦 46 ㎝、横 91 ㎝、高さ 36 ㎝を測る。同一割面の両辺にＡタイプの矢穴痕および矢孔痕列が残る。刻印は矢穴痕によって欠損しており図形は不明であるが、「△」の可能性が高い。

残石 12（図 119、図版 48） 自然面が残る四角錐形の割石で、縦 73 ㎝、横 157 ㎝、高さ 57 ㎝を測る。自然面から３方向にＡタイプの矢穴痕列が残る。今回出土した残石の中で、石垣材として利用することが可能と考えられる数少ない石のひとつである。

残石 13（図 120、図版 46） 自然面が残る扁平な割石で、縦 78 ㎝、横 163 ㎝、高さ 50 ㎝を測る。矢穴痕列はＡタイプで２カ所あり、自然面から同一面に向かって２方向から切り出されたことが分かる。さらに割面の裏側の自然面に「△」b 類の刻印が刻まれる。

残石 14（図 120、図版 48） 自然面が残る扁平な割石で、縦 70 ㎝、横 160 ㎝、高さ 66 ㎝を測る。矢穴痕列で２カ所あり、自然面から同一面に向かって２方向から切り出されたことが分かる。

残石 15（図 120、図版 48） 自然面が残る割石で、縦 68 ㎝、横 126 ㎝、高さ 66 ㎝を測る。矢穴痕列は、掬い取り技法による石材採取の残骸と推察できる位置に２カ所残る。どちらもＡタイプである。刻印はなかった。

残石 16（図 121、図版 48） 自然面が残る扁平な割石で、縦 65 ㎝、横 80 ㎝、高さ 43 ㎝を測る。同

一自然面に「L」字状に２方向Ａタイプの矢穴痕列が残る。またその自然面には矢穴が１個残る。刻印はなかった。

残石 17（図 121、図版 46）　自然面が残る角石で、縦 62 ㎝、横 73 ㎝、高さ 48 ㎝を測る。矢穴や矢穴痕はなく、割面に「△」a 類の刻印が刻まれる。

残石 18（図 121、図版 46）　自然面が残る割石で、縦 62 ㎝、横 118 ㎝、高さ 57 ㎝を測る。同一自然面に「L」字状に２方向Ａタイプの矢穴痕列が残る。別の自然面に「△」b 類の刻印が刻まれる。

残石 19（図版 48）　扁平な丸石の自然石で、縦 54 ㎝、横 77 ㎝、高さ 44 ㎝を測る。出土した残石の中で、唯一矢穴や刻印などの加工がなされなかった石である。

残石 20・25（図 122、図版 47）　自然面が残らない棒状の割石で、縦 48 ㎝、横 268 ㎝、高さ 44 ㎝を測る。残石 20 と残石 25 は別々に出土したが、接合することができた。対角辺に２列の矢穴痕列が残るが、一方はＡタイプ、もう一方はＣタイプである。小口部に「△」の刻印が刻まれるが、Ｃタイプの矢穴痕列に起因する石割りの際に欠損しており類型は不明である。これらのことから、この残石 20・25 は後世に再利用された残石と考えられる。

残石 21（図 122、図版 47）　自然面が残る扁平な割石で、縦 55 ㎝、横 154 ㎝、高さ 43 ㎝を測る。矢穴痕列は２カ所認められるが、ア列の矢穴で石を割った後、イ列の矢穴で面取りを行う。刻印は自然面に「△」b 類の刻印が刻まれる。

残石 22（図 122、図版 47）　自然面が残る割石で、縦 90 ㎝、横 169 ㎝、高さ 75 ㎝を測る。長辺にＡタイプの矢穴痕列が残る。小口部に「⊐」の図形の刻印を刻む。

表７　「△」刻印一覧表

石番号 / 刻印番号	縦	横	類　型	刻印位置
1 －①	22.0	25.5	a	割
1 －②	19.3	21.6	b	自
2 －①	21.7	24.1	a	割
3 －①	22.2	25.2	a	割
5 －②	16.0	16.2	b	自
6 －①	23.3	26.0	a	割
6 －②	16.4	22.1	b	自
7 －①	20.0	21.5	b	割
8 －①	21.7	24.0	a	自
8 －②	17	7.5 ＋	b	自
9 －①	18.5 ＋	25.0	―	自
10 －①	22.2	23.8	a	割
11 －①	18.1 ＋	8.5 ＋	―	自
13 －①	17.0	16.6	b	自
17 －①	21.5	24.0	a	割
18 －①	14.7	15.8	b	割
20・25 －①	14.7	9.0 ＋	―	割
21 －①	14.2	15.0	b	自
23 －①	16.8	17.3	b	自
24 －①	22.1	23.0	a	割

a 類・・・縦 21.5 ～ 23.3 ㎝、横 23.0 ～ 26.0 ㎝、三角形の頂部が尖る
b 類・・・縦 14.2 ～ 20.0 ㎝、横 15.0 ～ 22.1 ㎝、三角形の頂部が丸い

割・・・割れ面
自・・・自然面

残石 23（図 123、図版 47）　自然面が残る割石で、縦 52 ㎝、横 90 ㎝、高さ 44 ㎝を測る。割面に穿たれたＡタイプの矢穴痕列が１列残る。自然面に「△」b 類の刻印が刻まれる。

残石 24（図 123、図版 48）　自然面が残る扁平な割石で、縦 85 ㎝、横 104 ㎝、高さ 32 ㎝を測る。自然面には「⊖」の刻印を２カ所に刻む。また、１カ所には「廿二」の刻書と鑿による削り痕が認められた。また、同一面に穿たれたＡタイプの矢穴痕列が１列あり、この矢穴痕列によって生じた割面に「△」a 類の刻印が刻まれる。

残石 26（図 123、図版 48）　不整形な割石で、縦 45 ㎝、横 120 ㎝、高さ 32 ㎝を測る。自然面はなく、矢穴痕列が１列残るが、刻印なかった。

3．矢穴・矢穴痕・矢穴痕列

今回出土した26残石のうち矢穴もしくは矢穴痕・矢穴痕列が残されていたものは21点（80.7％）であった（表８・９）。21点の残石に残された矢穴の型式は、19点が森岡・藤川分類（森岡・藤川2008）の元和・寛永期に広く普及したＡタイプで最も多く、それ以外には残石６に穿たれた古Ａタイプと、残石20・25にはＣタイプの矢穴痕列が残る。残石６に関しては、元和・寛永期以前に切り出された石材が持ち込まれた可能性があり、残石20・25は大坂城再築後、石置場に保管されていた石の一部が切り出された残石と考えられる。このように矢穴および矢穴痕からみれば、今回出土した19点の矢穴および矢穴痕をもつ残石の殆どが大坂城再築に使用するため新たに切り出されて運び込まれた石材といえる。

4．刻印

残石26点のうち刻印が刻まれていたのは19点で、その比率は73％と高い割合を示す。刻印は５種類の図形がみられた。中でも「△」は最も多く、可能性があるものも含めて17点の石に刻まれていた。次いで多かったのは「⊖」で残石５・９・24の３点であったが、３点全てに「△」も刻まれていた。残石10は「卐」と「中」が組み合わさった刻印が３カ所に認められたが、この石も「△」が刻まれていた。また、残石４には不明刻印が、残石22には「卍」が刻まれていたが、この２点については他の刻印は刻まれていなかった。

ここで、最も多く刻まれた「△」について検討してみる（表７）。「△」の図形は２種類あり、それぞれａ類、ｂ類と分類した。ａ類は縦21.5～23.3㎝、横23.0～26.0㎝を測り、三角形の頂点が鋭く尖るタイプである。一方、ｂ類は縦14.2～20.0㎝、横15.0～22.1㎝を測り、ａ類に比して小振りである。さらに三角形の頂点を丸く収めるタイプである。刻まれた場所はどちらも自然面や割面に刻まれていたため相違点は認められず、２種類の図形は工人の違いによるものか、または刻まれた場所や時期の違いによるものかは不明である。

これまで「△」の図形は豊後国岡藩中川家（内膳正久盛・７万４百石）に係る刻印とされてきた。『中川史料集』によると元和５（1619）年に江戸幕府より大坂城再築の普請を命じられ、元和７（1621）年９月10日の条に「明年大坂城御普請あるべき由に付、御手当として御人数差登せらる。」とあり、続く注の中に「大坂城御普請石割のもの六十人差出。差配草刈九郎右衛門、小原九右衛門、山岸次郎左衛門。石割奉行三宅平右衛門。小豆島詰右田右衛門。」とある。「△」はこの中に記載される石割奉行三宅平右衛門にまつわる図形といわれている。小豆島の北部にある目風呂石切丁場跡は中川家の丁場とされており、小豆島に残る『笠井家文書』の「小豆嶋石之目録」には「一、大部　弐拾弐本　中川山城守　内　壱本　中角　弐拾壱本　平石」とあり、村が中川家のために調達した石の総数と内訳が具体的に記載されている。また、小豆島小海村庄屋の三宅家に残る『三宅家文書』の「小豆嶋小海村石数之覚」には「一、弐拾弐本　めぶろ　中川殿分」とあり、中川家の石切丁場が「めぶろ」にあったことが記載されている。そして、香川県小豆郡土庄町小海に所在する目風呂石切丁場跡の大石には中川家の刻印とされる「△」が刻まれており、文書の記載を裏付けるかたちとなった。

なお、既往の調査（鋤柄2002）においても「△」の刻印石が１点出土している。

5．まとめ

以上のことから、今回出土した残石群は徳川氏の命令によって元和６（1620）年から寛永７（1630）年まで行われた大坂城再築にあたって、豊後国岡藩中川内膳正久盛によって集められた石垣材の一部と

考えられる。

さらに、この残石群は自然面を残す石が多いことや、自然石そのものが含まれていたこと、さらにその自然石にまで刻印が刻まれていたことなどから、石切場から切り出されて持ち込まれた石垣材をこの近くで必要な石材を切り取った後の残石、もしくは石垣の表面に使用する目的ではなく、石垣の裏込めや石垣以外の部材として集められた石垣材の残石の可能性などが考えられる。

そして、石垣材として使用されなかった石が残石としてこの周辺で管理されていたものが、18 世紀後半に 46 堀が埋め戻される際に廃棄されたものであろう。

今回出土した石材の産地について兵庫県立大学大学院の先山　徹氏に分析を依頼したところ、サンプル量の不足といった悪条件であったにもかかわらず、今回出土した残石群が大きく 3 グループに分けられ、それが小豆島や与島といった瀬戸内の島から切り出された石以外に、生駒にもその産地を求めることができるとの多大な成果を得た（第 8 章第 1 節）。今後は残石の管理方法やその体制を究明することや、廃棄に至った経緯などを探っていく必要がある。

表８　矢穴・矢穴痕列測定表（１）

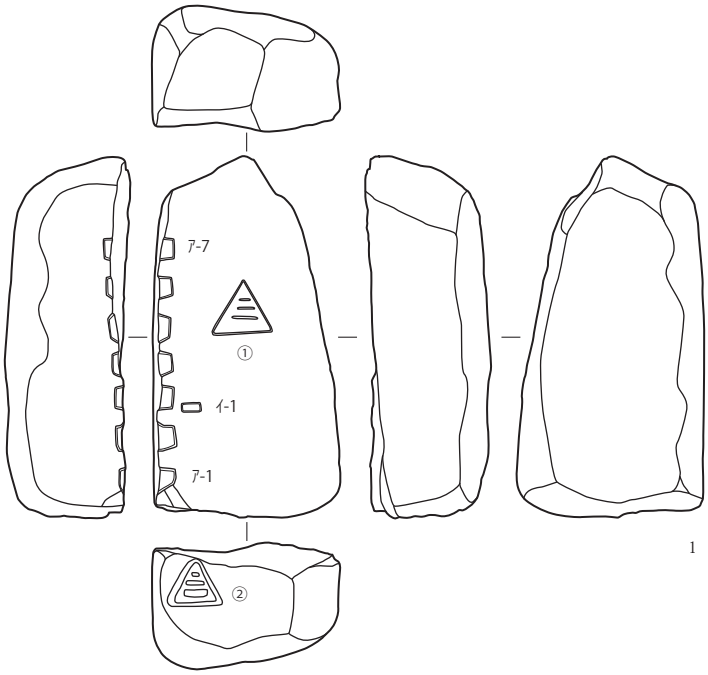
番号	列－矢穴痕番号	タテ (a 寸法)	ヨコ (b 寸法)	深さ (c 寸法)	矢穴間隔 (d 寸法)	矢穴型式
1	ア－１	9.5	3.2+	7.5		A
					4.4	
	ア－２	8.2	2.4+	8		
					6.4	
	ア－３	9.3	2.3+	6.3		
					4.9	
	ア－４	9.6	2.4+	7.1		
					4.5	
	ア－５	9.8	3.4+	8.1		
					5.4	
	ア－６	11.2	2.4+	7.2		
					5.4	
	ア－７	9.5	1.9+	6.4		
	イ－１	8.3	4	1.2	—	A
4	ア－１	10.5	1.2+	8		A
					8.5	
	ア－２	10.6	3.5+	7.6		
					10.7	
	ア－３	8	2.4+	5.6		
5	ア－１	6.0+	2.3+	8.2		A
					4.8	
	ア－２	10.1	2.3+	6		
					5	
	ア－３	9.5	1.3+	8		
					5.3	
	ア－４	9.7	2.3+	6.7		
					7.5	
	ア－５	8.2+	1.9+	7.2		
	イ－１	10.3	3.2+	8.8		A
					7	
	イ－２	10.5	2.7+	10.7		
					3.9	
	イ－３	10.3	3.1+	9.5		
6	ア－１	6.5+	0.5+	5.8		古 A
					3.5	
	ア－２	8.9	1.3+	6.6		
					5.5	
	ア－３	8.7	2.3+	6.8		
	イ－１	8.9	1.2+	6.5		古 A
					4.3	
	イ－２	7.7	1.3+	6.6		
	ウ－１	8.6+	1.6+	8.2	—	古 A
	エ－１	9.2	2.3+	5.2		古 A
					14.6	
	エ－２	8.9	2.1+	5.6		
7	ア－１	8.5	0.9+	7		A
					2.2	
	ア－２	9.5	1.8+	8		
					2.6	
	ア－３	9.7	2.3+	11		
					2.9	
	ア－４	9.7	1.0+	8.3		
					3.6	
	ア－５	9.6	1.3+	6		
					3.2	
	ア－６	3.5+	0.8+	5.1+		
	イ－１	9.6	3.2+	9.1		A
					2.3	
	イ－２	9.5	1.3+	9.5		
					4.1	
	イ－３	9.3	1.3+	10.2		
					4	
	イ－４	9.5	0.5+	9		
	ウ－１	8.5	3.0+	7.5		A
					17.4	
	ウ－２	8.0+	2.2+	8.0+		
8	ア－１	11.5	4.6	5.2		A
					6.3	
	ア－２	14.2	5.6	6.6		
	イ－１	11.5	2.0+	6		A
					10.3	
	イ－２	11.4	2.6+	6.7		
	ウ－１	11	1.5	4.5	—	A

番号	列－矢穴痕番号	タテ (a 寸法)	ヨコ (b 寸法)	深さ (c 寸法)	矢穴間隔 (d 寸法)	矢穴型式
9	ア－１	11.1	1.2	6.2		A
					7.2	
	ア－２	9.3	2.3	5.8		
10	ア－１	9.4	5.5	7.3		A
					13.1	
	ア－２	9.5	4.2	6.1		
11	ア－１	10	1.0+	9.7		A
					2.8	
	ア－２	10	2.2+	10.3		
					3.7	
	ア－３	9.4	2.3+	9.8		
					5.2	
	ア－４	8.7	2.6+	10		
					3.4	
	ア－５	9.6	2.1+	10.6		
					2.4	
	ア－６	8.5+	2.2+	8.4		
	イ－１	8.2	4.5+	8.2	—	A
12	ア－１	8	1.0+	6.5		A
					6.5	
	ア－２	6.7	0.6+	7		
					5.3	
	ア－３	7	0.3+	5.1		
					6.7	
	ア－４	8.8	0.5+	6.7		
					9.5	
	ア－５	10	0.9+	7.7		
					13	
	ア－６	8.6	0.2+	8		
					5.2	
	ア－７	8.2	2.5+	7.5		
	イ－１	9	3.2+	5.9		A
					4.6	
	イ－２	6.7	0.6+	5.5		
					5.1	
	イ－３	9	1.0+	4.5		
					4.3	
	イ－４	8.8	2.7+	6.7		
	ウ－１	5.5	1.5+	8.4		A
					8.6	
	ウ－２	6.8	2.4+	8.2		
					11.6	
	ウ－３	6.5	1.8+	6.1		
					7.3	
	ウ－４	6.9	0.8+	5.0+		
					7.4	
	ウ－５	8.4	2.0+	5.5		
					6	
	ウ－６	5.7	1.8+	6.5		
					7.2	
	ウ－７	5.2	1.0+	5.5		
					7.2	
	ウ－８	8	1.8+	6.7		
13	ア－１	8.7	2.4+	8.8		A
					2.1	
	ア－２	8.2+	2.2+	10.7		
	イ－１	8.5	2.1+	10.4		A
					3	
	イ－２	9.6	1.6+	10.9		
					3.5	
	イ－３	6.7+	1.0+	10.5		
					11.2+	
	イ－４	8.9	1.5+	11.2		
					4.2	
	イ－５	7.7+	1.8+	7.4		
14	ア－１	9	2.5+	11.6		A
					3.8	
	ア－２	10	2.3+	12		
					6.8	
	ア－３	9.6	0.8+	9.2		
					6.3	
	ア－４	10.1	2.2+	11		
					10.5	
	ア－５	10.6	1.0+	7.2+		
					2	
	ア－６	7.0+	0.8+	5.5+		

表９　矢穴・矢穴痕列測定表（２）

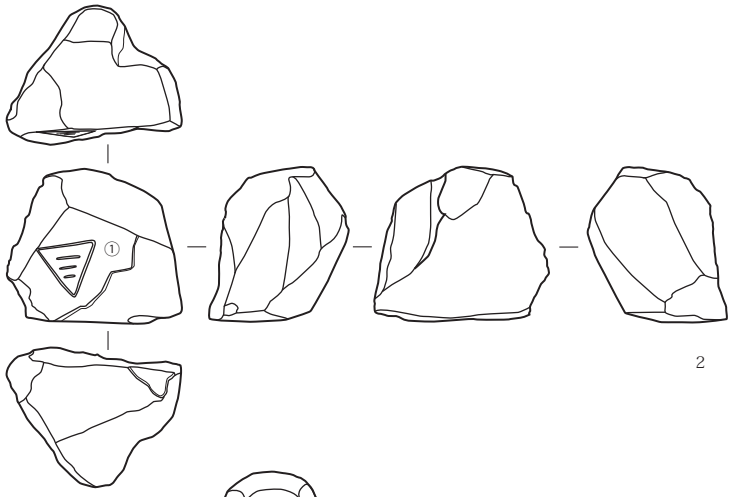
番号	列－矢穴痕番号	タテ (a 寸法)	ヨコ (b 寸法)	深さ (c 寸法)	矢穴間隔 (d 寸法)	矢穴型式
14	イ－１	8.5+	1.4+	10.3		A
					3	
	イ－２	8.5+	0.8+	10.2		
15	ア－１	10.1	0.9+	5.5		A
					8	
	ア－２	10.3	0.8+	6		
					25	
	ア－３	10.6	2.1+	6.5		
					5.1	
	ア－４	10.4	1.8+	6.8		
					5.2	
	ア－５	11.5	0.8+	5.5		
	イ－１	9.1	0.8+	8.5		A
					4.9	
	イ－２	10.6	1.3+	7.5		
					5.1	
	イ－３	9	2.1+	9.1		
16	ア－１	10.5	0.7+	9		A
					4.5	
	ア－２	10	1.2+	10		
					7.2	
	ア－３	10.5	1.0+	8		
	イ－１	6.5+	1.0+	5		A
					3.5	
	イ－２	8.5	0.9+	7.2		
					3.8	
	イ－３	8.5	2.0+	5.2		
	ウ－１	12.1	4.6	2.1	—	A
18	ア－１	10.9	2.6+	12.2		A
					3.2	
	ア－２	10.1	1.9+	10.6		
					4.5	
	ア－３	9.4	1.9+	11.1		
					5.6	
	ア－４	9.1	0.5+	7.9		
					3.6	
	ア－５	9.7	1.6+	7.9		
					3.7	
	ア－６	10.7	1.7+	10.2		
					5.7	
	ア－７	10.3	2.6+	10.2		
					7.2	
	ア－８	3.3+	2.4+	8.3		
	イ－１	6.7	0.8+	8.2		A
					8.7	
	イ－２	9.1	3.2+	10.6		
					11.2	
	イ－３	7.1	3.9+	11.5		
					11.7	
	イ－４	1.9+	2.1+	6.1+		
20・25	ア－１	9.2	2.2+	5.7		C
					10.5	
	ア－２	8.8	1.6+	6.9		
					15.2	
	ア－３	8.8	0.3+	6.1		
					11.7	
	ア－４	8.3	2.7+	8.4		
					16.1	
	ア－５	8.3	2.1+	5.9		
					7	
	ア－６	8.1	2.3+	7.1		
					13.2	
	ア－７	7.2	2.4+	7.2		
					11.2	
	ア－８	7.6	0.9+	6.3		
					13.2	
	ア－９	9.4	1.9+	7.4		
					12.4	
	ア－10	8.4	2.2+	5.8		
					11.9	
	ア－11	7.9	2.6+	6.4		
					5.6	
	ア－12	7.9	1.4+	5.6		

番号	列－矢穴痕番号	タテ (a 寸法)	ヨコ (b 寸法)	深さ (c 寸法)	矢穴間隔 (d 寸法)	矢穴型式
20・25	イ－１	11.5	2.1+	10.2		A
					9.3	
	イ－２	10.3	1.9+	10.6		
					4.6	
	イ－３	8.9	1.3+	8.5		
					4.1	
	イ－４	8.8	1.4+	9.1		
					4.3	
	イ－５	10.3	1.8+	10.1		
					8.9	
	イ－６	10.7	1.3+	9.8		
					12.1	
	イ－７	10.2	0.7+	9.8		
					7.2	
	イ－８	8.3+	0.9+	8.2		
					6.1	
	イ－９	11.6	0.6+	9.5		
					3.8	
	イ－10	9.4	1.9+	9.4		
					5.2	
	イ－11	9.2	2.1+	8.4		
					9.2	
	イ－12	10.7	1.1+	9.1		
21	ア－１	7.2	0.3+	5.6		A
					4.3	
	ア－２	7.3	0.5+	8.5		
					5.2	
	ア－３	6.7	0.4+	7.6		
					3.3	
	ア－４	8.7	0.3+	7.4		
					4.4	
	ア－５	8.3	0.9+	6.6		
					5.8	
	ア－６	6.9	1.4+	7.4		
					4.1	
	ア－７	9.9	1.6+	7.9		
					4.6	
	ア－８	9.2	2.3+	8.5		
	イ－１	9.4	4.3+	13		A
					15.9	
	イ－２	10.4	2.3+	10.2		
					49.3	
	イ－３	9.4	2.2+	11.4		
					14.8	
	イ－４	10.2	3.0+	9.5		
22	ア－１	6.8+	2.9+	8.2		A
					8.3	
	ア－２	8.5	3.9+	8.7		
					6	
	ア－３	9.2	4.2+	6.7		
					5.5	
	ア－４	9.2	4.5+	7.5		
					4	
	ア－５	9.5	5.0+	8.2		
					5.6	
	ア－６	9.6	3.1+	7.2		
					10.7	
	ア－７	10.1	3.3+	7.8		
					10.4	
	ア－８	9.4	3.2+	7.7		
					5.3	
	ア－９	9.5	2.5+	7.4		
					7.5	
	ア－10	9.4	2.6+	8.2		
23	ア－１	12.1	2.3+	8.8		A
					6.2	
	ア－２	10.2	2.8+	7.8		
	イ－１	11.3	2.1+	6.4		A
					9.2	
	イ－２	11.4	4.7+	6.2		
24	ア－１	8.5	2.3+	5.4		A
					14.7	
	ア－２	8.9	0.4+	6.5		
					16.3	
	ア－３	10.2	2.2+	7.1		
26	ア－１	8.2	1.2+	6.3+		A
					8.1	
	ア－２	8.8	2.2+	9.7		
					14.5	
	ア－３	7.2	3.9+	8.2		
					5.6	
	ア－４	7.7	3.4+	5.9		

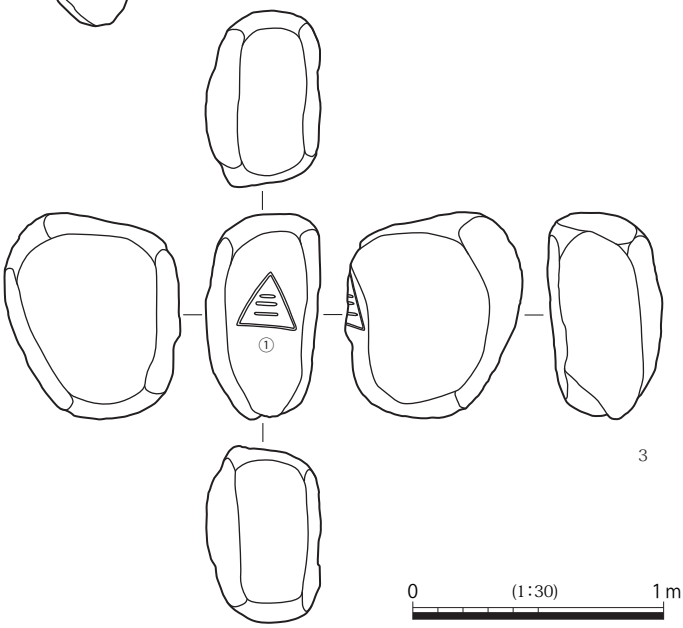


1-①

1-②



2-①



3-①

0 (1:8) 20cm

拓　本

図 116　残石 1・2・3

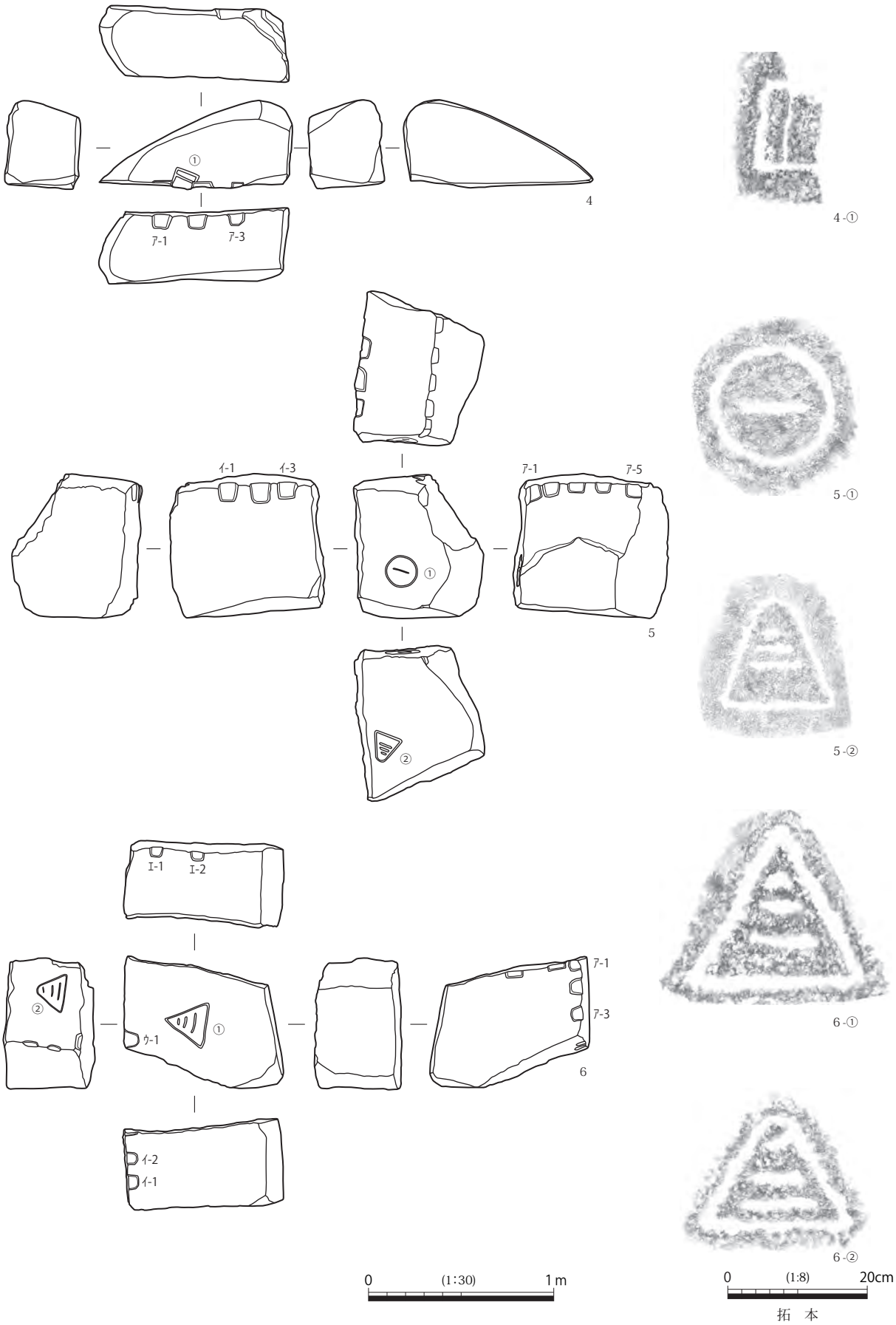

①
ア-1
ア-3
4
4-①
イ-1
イ-3
ア-1
ア-5
①
5
5-①
②
5-②
I-1
I-2
②
①
ウ-1
ア-1
ア-3
6
6-①
イ-2
イ-1
6-②
0
(1:30)
1m
0
(1:8)
20cm
拓　本

図117　残石4・5・6

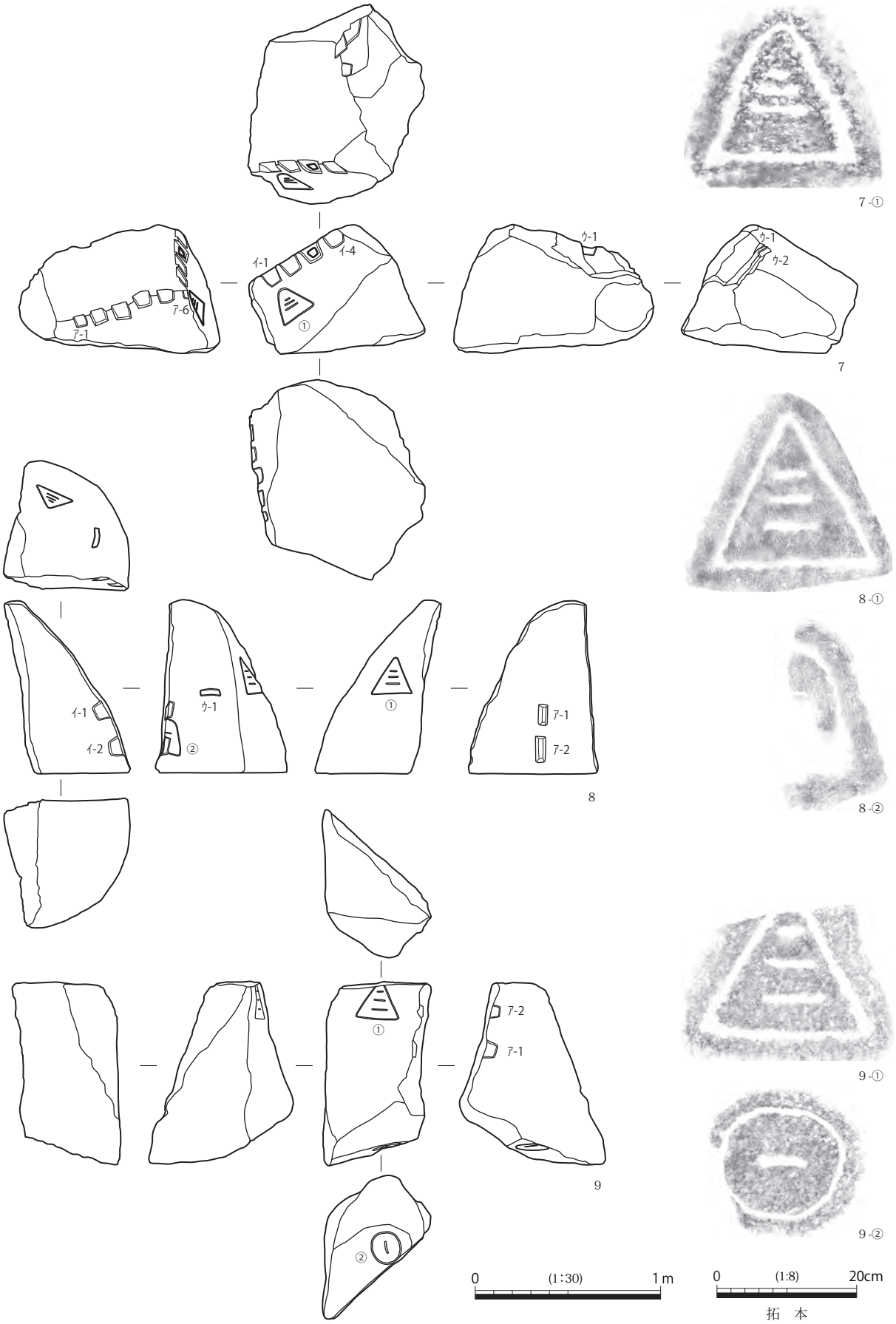

7-①
ウ-1
ウ-1
ウ-2
イ-1
イ-4
ア-6
ア-1
①
7
8-①
イ-1
イ-2
ウ-1
②
①
ア-1
ア-2
8
8-②
①
ア-2
ア-1
9
9-①
②
9-②
0
(1:30)
1m
0
(1:8)
20cm
拓 本

図118　残石7・8・9

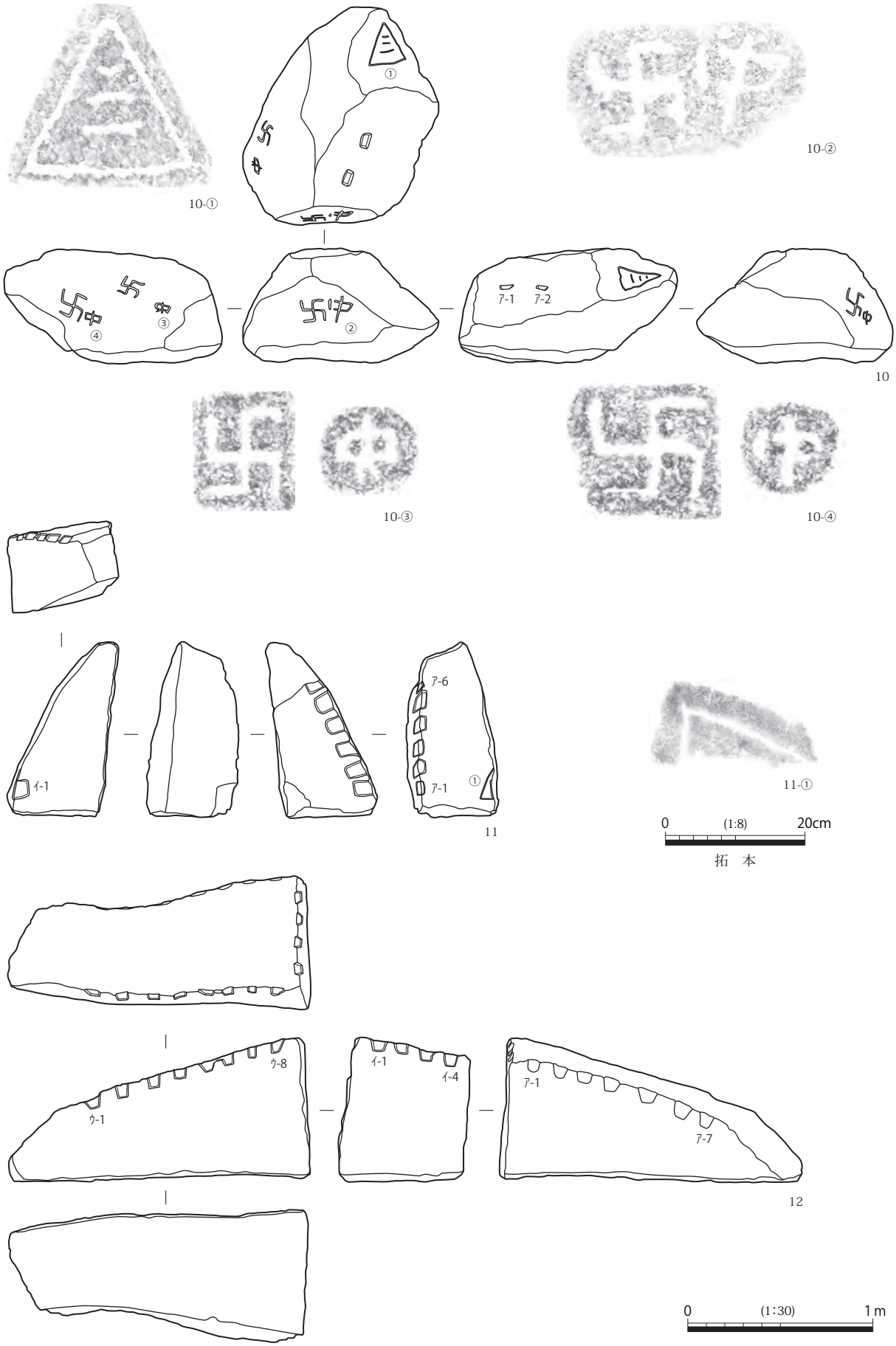


図 119　残石 10・11・12

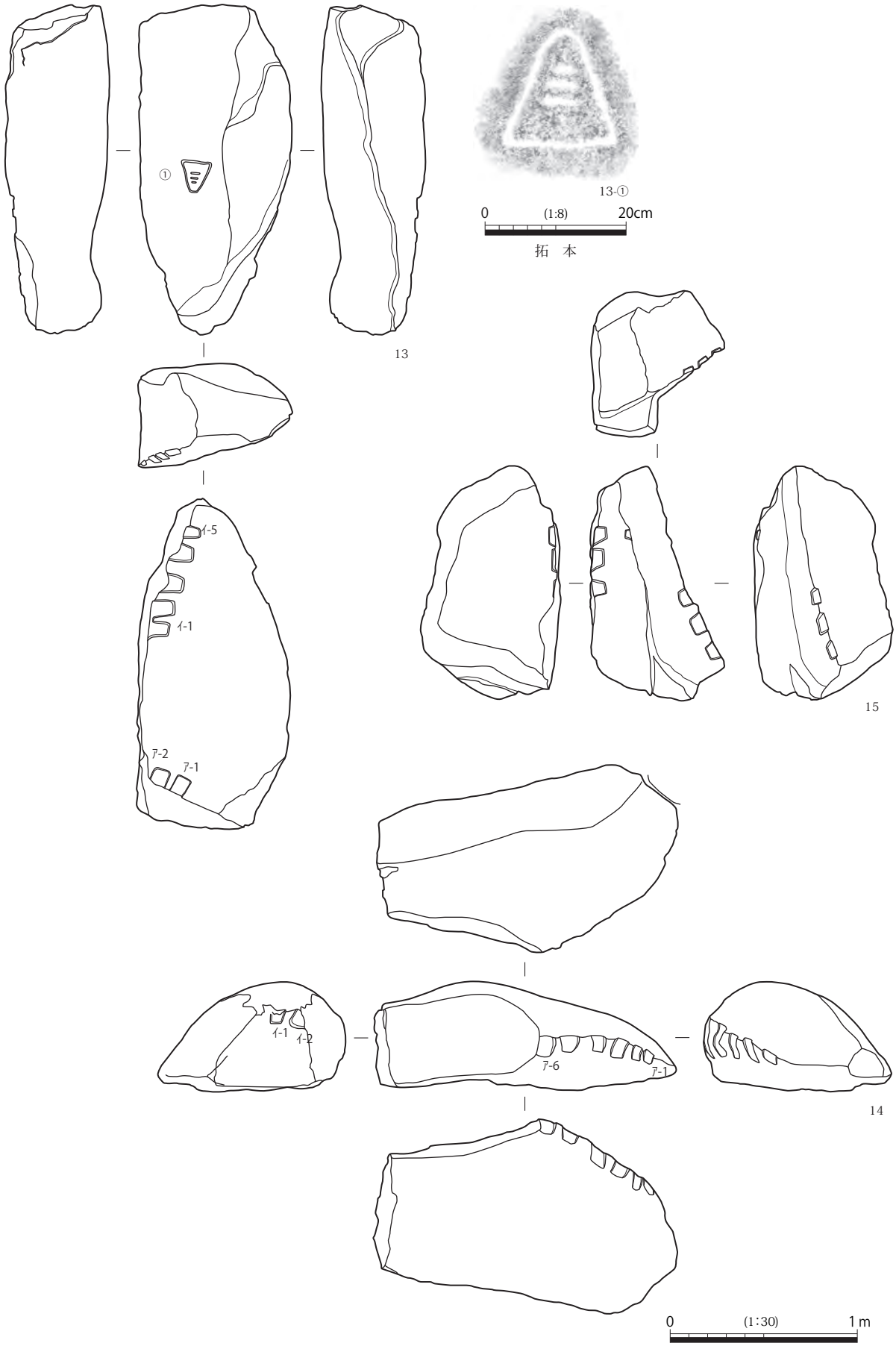
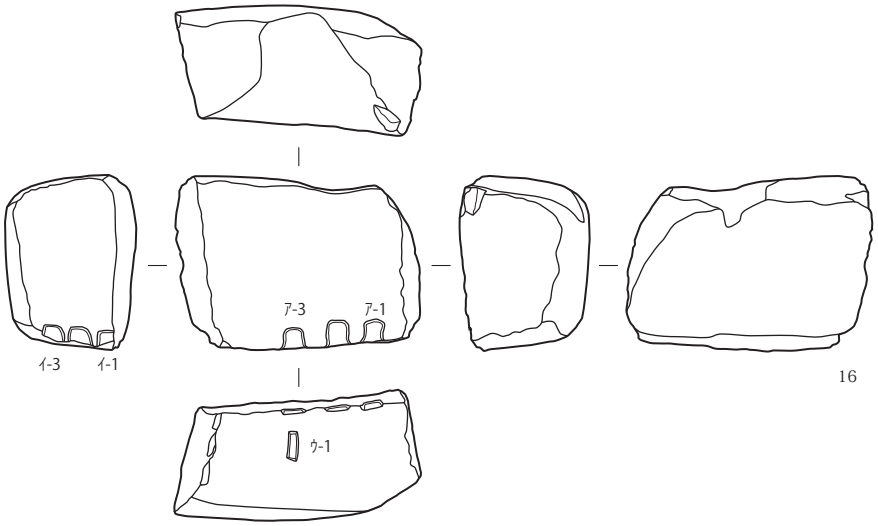
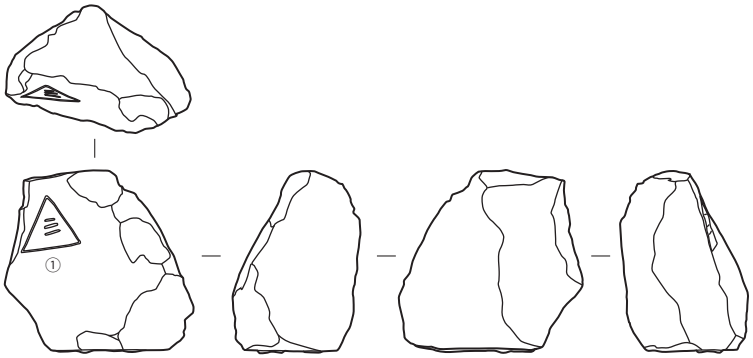
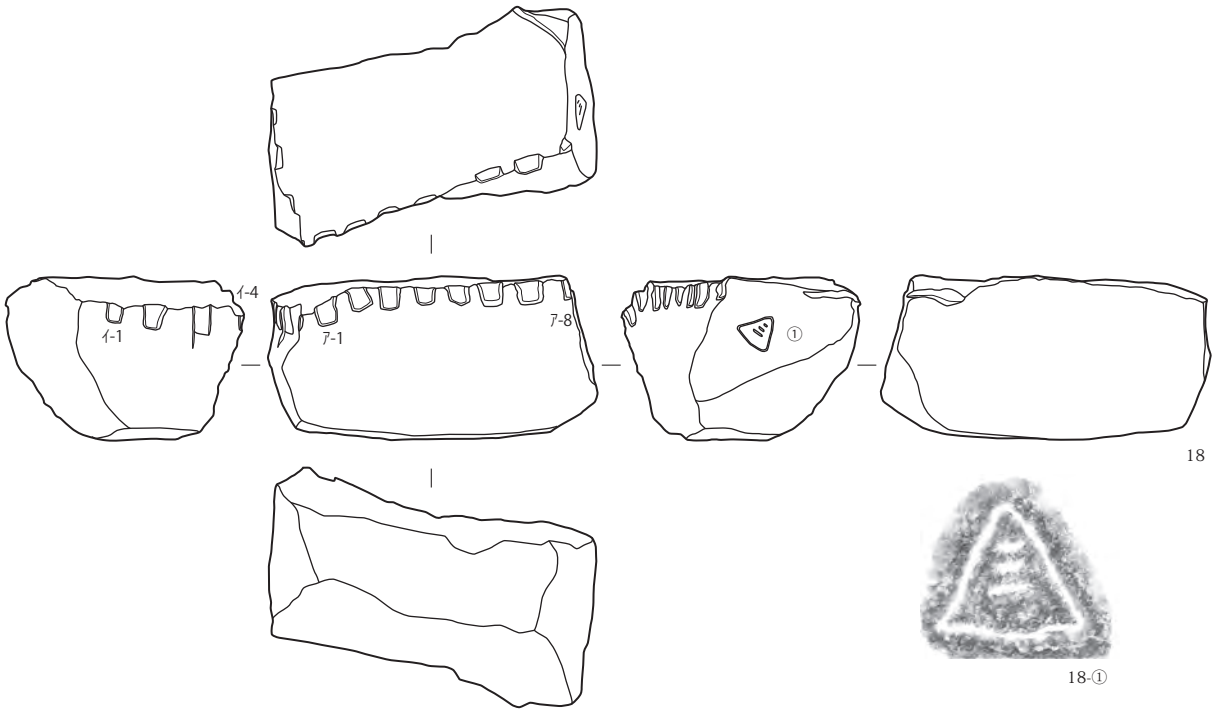


図 120　残石 13・14・15







0 (1:30) 1 m

0 (1:8) 20cm

拓　本

図 121　残石 16・17・18

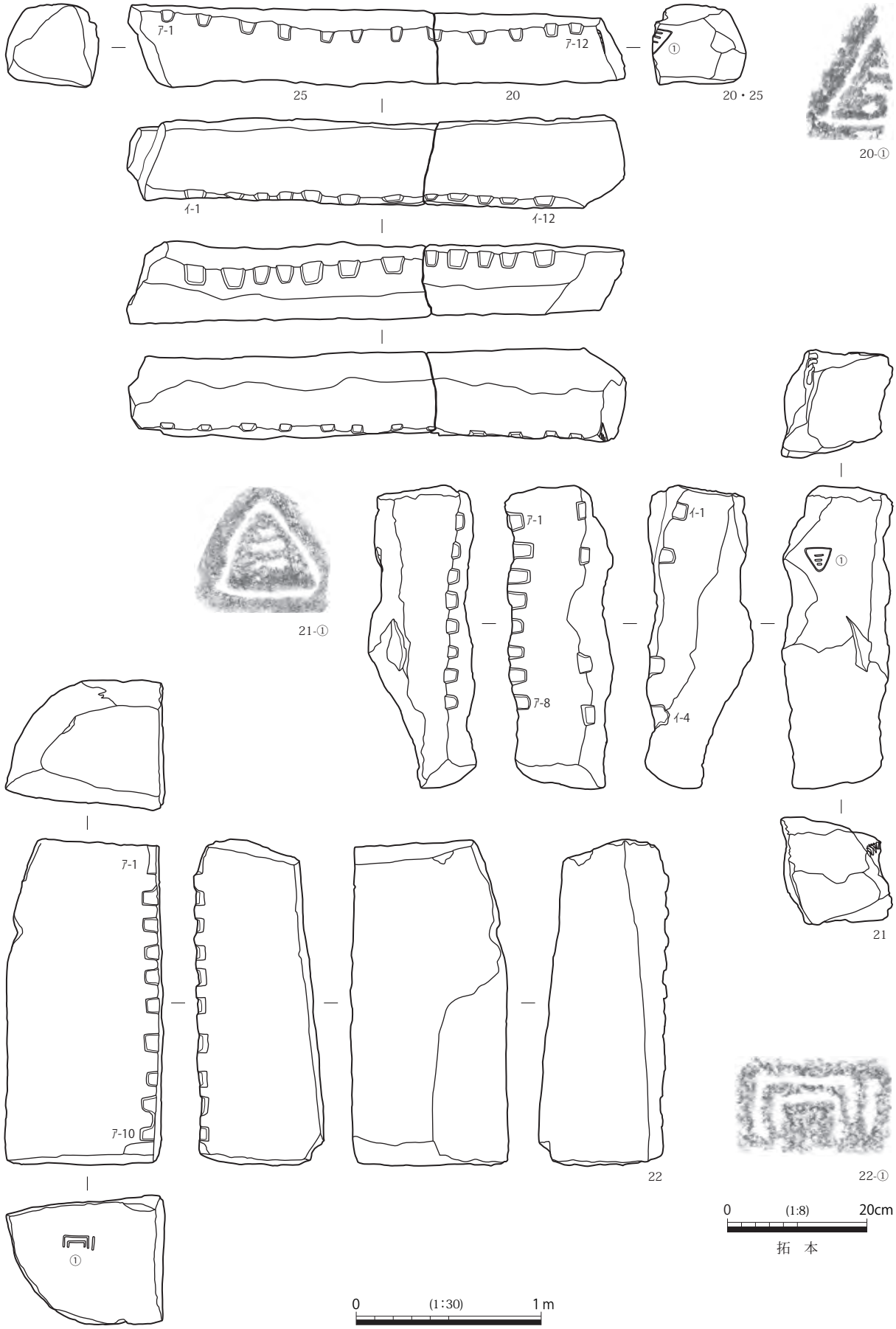


図 122　残石 20・25・21・22

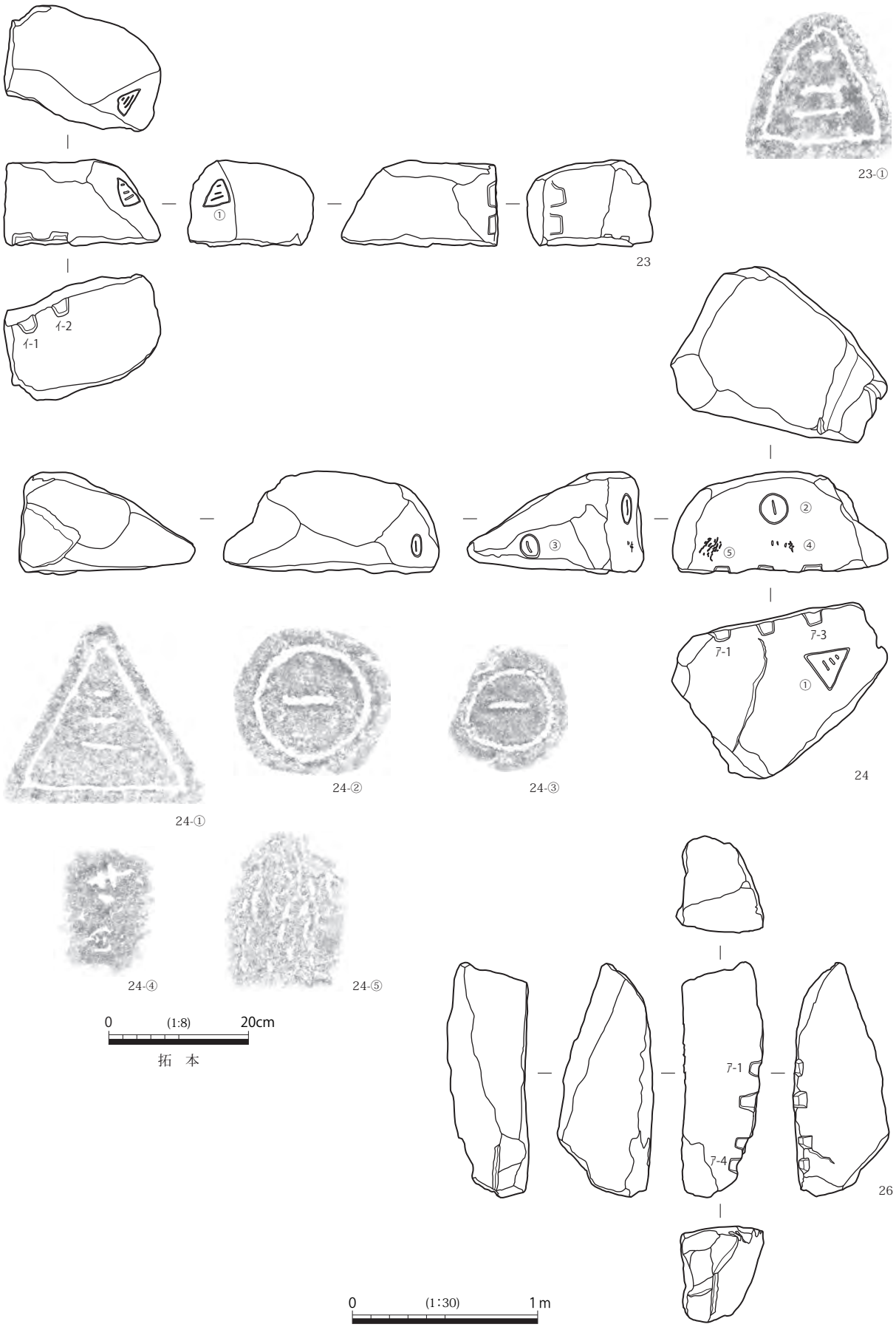


図 123　残石 23・24・26

第 10 章　まとめ

今回の調査では、上町台地の台地上と東西方向にはしる開析谷の北壁および谷底に跨って調査を行い、豊臣前期から江戸時代までの遺構・遺物を検出することができた。

豊臣前期の遺構面は、谷底部で一部整地層の重なりが認められた他、土取りのためと考えられる土坑や井戸、溝などとともに導水施設を検出した。これらの遺構は、既往の調査において谷底部で鍛冶関連遺構や整然と配された屋敷や路地などがみつかっていることなどから、調査区の南側にあたる谷の中心部に展開するそれらの遺構との関連を強く窺わせるが、今回の調査においてその性格を確定できる資料を示すことはできなかったため、今後の資料の蓄積を待ちたい。また、遺物については土師器や国産陶器、さらに青花などの土器類の他に、金箔瓦も 2 点出土した。木製品も漆器椀、箸、折敷、柄杓、桶、鞘、下駄、さらに人形や舟形などが、金属器は小刀柄や銭貨、釘など、石製品は硯や砥石が出土したが、その多くは土坑や井戸に廃棄されたものであった。

豊臣後期と位置づけられる三の丸築造以降から大坂夏の陣で大坂城が落城するまでの期間は、既往の調査成果から佐竹氏の屋敷地があった場所と推定されているが、今回の調査においても既往の調査成果から続く屋敷地の北辺を示す柵列を検出しており、屋敷地の広がりを追うことができた。また、一部ではあるが整地面の広がりがみられ、被熱した礎石や湊焼の甕を据えた埋甕などを検出した。しかしながら、残念なことに柱列が検出されたのが調査区の南端部であったことから、柵列の南側に展開する屋敷地の実態については不明である。陶磁器類や瓦の他に出土遺物で特筆すべきものとしては箆や刷毛などの道具類や笄の未成品、さらに椀形滓といった鍛冶遺構に伴う遺物があり、調査区の周辺に出土した道具や品を扱う人々が存在したことが窺える。

大坂夏の陣後の遺構面は 2 面検出した。下層の遺構面（6b 層上面）では畠の畝立こそ検出できなかったが、桶を埋設した 69 土坑の中からメロン仲間の種子をはじめとする多量の大型植物遺体が出土しており、排泄物貯蔵施設（肥溜め）として利用されたことが窺える。また、調査区の南端部では東西方向にはしる 68 溝とその両岸に築かれた 64・102 畦畔状高まりを検出した。畦畔状高まりのうち 64 畦畔状高まりは豊臣後期の柵列が築かれた場所の上層に位置しており、柵列に伴う高まりが利用されたものである。一方、上層の遺構面（6a 層上面）では畠跡と畦畔状高まりを検出した。下層の遺構面で検出した 64 畦畔状高まりの南にあった 68 溝を埋積する際、竹を敷き並べた敷粗朶工法を採って地盤沈下を防ぐ工夫がみられた。このように、大坂夏の陣によって焦土と化した調査地周辺では、大坂夏の陣直後から復興に向けた人々の力強い活動の痕跡を垣間見ることができる。

その後、徳川氏による大坂城再築に伴って開析谷は完全に埋積されてしまい、平坦面が広がる。江戸時代の絵図にも当調査区周辺は空閑地として表現されており、今回の調査においても遺構の検出は希薄であった。しかし、18 世紀後半になると、東西方向に延びる 46 堀が掘削される。この堀は上幅 10.8 m、深さ 0.8 ～ 2.6 mを測る立派なものであった。特筆すべきはこの堀の中から 26 点の花崗岩が出土したことである。この花崗岩は徳川氏による大坂城再築の際に集積された石垣材の残石と考えられるもので、これらの残石 26 点の中で矢穴や矢穴痕の残る石は 21 点、刻印が刻まれた石は 19 点であった。特に、刻印石 19 点のうち 17 点に「 △ 」の刻印が刻まれていたことは興味深い。この文様は豊後国岡藩中川家の石割奉行三宅平右衛門所縁の図形とされており、大坂城南外濠の石垣にもみられる。これらの残

石が 18 世紀後半に開削された堀に廃棄されていたことは、17 世紀前半に大坂城再築のために集められた石垣材の残石が、18 世紀後半まで大きく散逸することなく石置場で管理されていたことを示すもので、江戸時代における残石の管理方法を探る手がかりとなるといえよう。

一方、46 堀が埋め戻された後の遺構面から、18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけて多量の陶磁器や瓦が廃棄された土坑や溝といった遺構が検出された。さらに、明治時代に入ると調査地周辺は軍の施設として利用されるようになり、煉瓦造りの建物の基礎の一部を検出したが、近代以降の削平が著しく詳細については不明である。

以上のように、今回の調査において豊臣前期から江戸時代にかけての遺構・遺物が検出されたが、15 世紀後半から 16 世紀前半にかけて起きた地滑り痕や、上町台地を構成する土層には生物擾乱の痕跡が多くみられる海成層（上町層）が確認できたことも付け加えておきたい。

【引用・参考文献】

市川　創ほか 2011「古環境と人間活動の関係把握に向けて－大阪市上町台地北部を題材として－」『大阪文化財研究所　研究紀要』第 13 号　財団法人　大阪文化財研究所

江浦　洋編 2002『大坂城址Ⅱ』財団法人　大阪府文化財調査研究センター

江浦　洋編 2006『大坂城址Ⅲ』財団法人　大阪府文化財センター

江浦　洋 2009「近世溲瓶小考」『大阪文化財研究』第 35 号　財団法人　大阪府文化財センター

江戸遺跡研究会編 2001『図説　江戸考古学研究事典』柏書房

大阪市史編纂所 1984『御用瓦師寺島家文書』大阪市史史料第 13 輯

新修大阪市史編纂委員会 1989『新修　大阪市史』第３巻

新修大阪市史編纂委員会 2007『新修　大阪市史史料編』第６巻

財団法人　大阪市文化財協会 1988『大坂城跡Ⅲ』

財団法人　大阪市文化財協会 1999『大坂城跡Ⅳ』

財団法人　大阪市文化財協会 2003『広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅰ』

財団法人　大阪市文化財協会 2004『広島藩大坂蔵屋敷跡Ⅱ』

大阪城天守閣編 2002『特別展　大坂再生　―徳川幕府の大坂城再築と都市の復興―』大阪城天守閣特別事業委員会

大阪城天守閣編 2008『テーマ展　描かれた大坂城・写された大阪城』大阪城天守閣特別事業委員会

大阪歴史博物館 2014『特別展　大阪遺産　難波宮－遺跡を読み解くキーワード－』

大澤研一 2012「徳川大坂城普請後に残された石垣石について―城下町“大坂”の一断面―」『なにわ歴博講座資料』公益財団法人　大阪市博物館協会　大阪歴史博物館

大橋康二 1988「18 世紀における肥前磁器の銘款について」『青山考古』第６号　青山考古学会

大橋康二 1994『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』理工学社

大庭重信・清水和明 2010「徳川初期の大坂城・城下町出土陶磁器の現状と課題」『関西近世考古学研究』18　関西近世考古学研究会

大庭重信 2011「大坂城南部で豊臣期の鍛冶工房を発見！」『葦火』154 号　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所

岡本良一編 1982『日本城郭史研究叢書　大坂城の諸研究』第８巻　名著出版

小田木富慈美 2011「尿瓶の花生」『葦火』155 号　財団法人　大阪市博物館協会　大阪文化財研究所

加藤真司 2010「美濃窯における近世初頭の陶器生産と年代観」『関西近世考古学研究』18　関西近世考古学研究会　関西陶磁史研究会 2001『近世信楽焼をめぐって』

北村清士校注 1969『中川史料集』株式会社　新人物往来社

木原溥幸 1984「小豆島大坂城石丁場関係文書」『香川大学一般教育研究』第 26 巻　香川大学一般教育学部　九州近世陶磁学会事務局編 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

九州近世陶磁学会 2007『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通　中国・四国・関西編』

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 2004『平安京左京北辺四坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 22 冊

先山　徹 2005「近畿地方西部～中国地方東部における白亜紀～古第三紀火成岩類の帯磁率―帯状配列の検討と歴史学への適用―」『人と自然』第 15 号　兵庫県立人と自然の博物館

先山　徹 2013「花崗岩の識別と帯磁率による産地同定」市村高男編『御影石と中世の流通　石材識別と石造物の形態・分布』高志書院

佐藤　隆 2000「実年代資料　大坂」『近世の実年代資料』第 12 回関西近世考古学研究会大会　関西近世考古学研究会

小豆島　石のシンポジウム実行委員会 2010『歴史を動かす～石のＤＮＡ～　大坂城石垣残石の歴史』織豊期城郭研究会 2014「織豊期城郭の石切場」『織豊期城郭研究会 2014 年度金沢研究集会　織豊期城郭資料集成Ⅲ』

白神典之 1988「第５章　堺摺鉢について」『堺環濠都市遺跡 (SKT79) 発掘調査報告　堺市文化財調査報告』第 37 集　堺市教育委員会

白神典之 1992「堺摺鉢考」『東洋陶磁』19　東洋陶磁学会

鋤柄俊夫・森　毅 1999「豊臣期大坂城跡における三の丸築造以前の基準資料」『大阪市文化財協会　研究紀要』第２号　財団法人大阪市文化財協会

鋤柄俊夫編 2002『大坂城跡発掘調査報告Ⅰ』財団法人　大阪府文化財センター

積山　洋 1999「大坂の土師質土器」『関西近世考古学研究』Ⅶ　関西近世考古学研究会

財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター 2002『江戸時代の瀬戸窯』

財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター 2003『江戸時代の美濃窯』

財団法人　瀬戸市埋蔵文化財センター 2004『江戸時代の瀬戸・美濃窯』

財団法人　瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの―生産と流通―』

全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 2005『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

寺井　誠 2004「難波宮成立期における土地開発」『難波宮址の研究』第 12　財団法人　大阪市文化財協会

土岐市美濃陶磁歴史館編 1994『大坂出土の桃山陶器Ⅱ』財団法人　大阪市文化財協会

土岐市美濃陶磁歴史館 2002『特別展　美濃桃山陶　意匠と魅力』

土岐市美濃陶磁歴史館 2008『特別展　桃山時代の茶陶生産』

中井　均 2008「近世城郭の石切場」『季刊考古学　近世城郭と城下町』第 103 号　雄山閣

中村剛彰・橋本久和 1997「高槻城三ノ丸跡の調査」『平成７年度　高槻市文化財年報』高槻市教育委員会

中村博司 1985「大坂城南外濠々底に眠る石垣遺構について」『大阪城天守閣紀要』第 13 号　大阪城天守閣

中村博司 1986「徳川時代大坂城普請参加大名の編成について」『大阪城天守閣紀要』第 14 号　大阪城天守閣

難波洋三 1992「第６節　徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究』第９　財団法人　大阪市文化財協会

野田芳正 1984「第３章　結語」『堺市文化財調査報告』第 20 集　堺市教育委員会

乗岡　実 2002「第３節　近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会

長谷川　眞 2000「近世丹波系擂鉢の変遷とその系譜関係」『関西近世考古学研究』Ⅷ　関西近世考古学研究会

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 1992『下相野窯址―近畿自動車道舞鶴線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ』兵庫県教育委員会

藤井重夫 1967「摂津　大坂城（一）―石垣のふるさと小豆島―」『城と陣屋』22 号　日本城郭協会近畿支部研究会

藤井重夫 1969「摂津　大坂城（三）―大坂城修築について―」『城と陣屋』35 号　日本古城友の会

藤井重夫 1970「大阪城の石切場」『大坂城今昔』日本城郭資料館出版会

藤井重夫 1983「摂津　大坂城（七）―生駒山系の石切場について―」『城と陣屋』154 号　日本古城友の会

村川行弘 2002『大坂城の謎』学生社

森　毅 2000「豊臣期の美濃桃山陶」『特別展　大坂城出土の桃山陶器　豊臣期のやきもの』土岐市美濃陶磁歴史館

森　毅 2000「秀吉期城郭出土の土器・陶磁器の編年―大坂における信長・秀吉・秀頼期の陶磁器―」『織豊城郭』第７号　織豊期城郭研究会

森岡秀人・坂田典彦 2005「Ｖまとめと今後の課題」『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ　岩ヶ平石切丁場跡―宅地造成工事に伴う埋蔵文

化財事前調査の記録と成果―』芦屋市文化財調査報告第 60 集　芦屋市教育委員会

森岡秀人 2005「六甲花崗岩巨石の大量利用と徳川期大坂城の再築をめぐって」『関西近世考古学研究』ⅩⅢ　関西近世考古学研究会

森岡秀人・藤川祐作 2008「矢穴の型式学」『古代学研究』180 号　古代学研究会

森岡秀人 2008「築城石・石切場と切石規格化をめぐる一試考」『橿原考古学研究所論集』第 15　奈良県立橿原考古学研究所

森岡秀人 2008「大坂城石切場跡」『月刊考古学ジャーナル』No.574　ニューサイエンス社

森岡秀人・天羽育子 2009「丁場類型よりみたる花崗岩の石切場」『考古学の視点　兵庫発信の考古学　間壁葭子先生喜寿記念論文集〔献呈編〕』間壁葭子先生喜寿記念論文集刊行会

森岡秀人 2014「大坂城・伏見城の石切場　―「豊徳」期段階における石垣材調達方式の変化と画期―」『織豊期城郭研究会 2014 年度金沢研究集会　織豊期城郭の石切場』

矢部良明編 2002『日本陶磁大辞典』角川書店

山崎信二 2008「第 17 章　近世大坂の瓦」『奈良文化財研究所学報　近世瓦の研究』第 78 冊　奈良文化財研究所

写　真　図　版

１．４・５層断面（上層）　Y=-44,030 ライン（北東から）

２．４・５層断面（下層）　Y=-44,030 ライン（北東から）

３．４～７層断面　Y=-44,030 ライン（東から）

４．７～ 11 層断面　Y=-44,030 ライン（北東から）

５．７～ 11 層断面アップ１　Y=-44,030 ライン（東から）

６．７～ 11 層断面アップ２　Y=-44,030 ライン（東から）

図版２

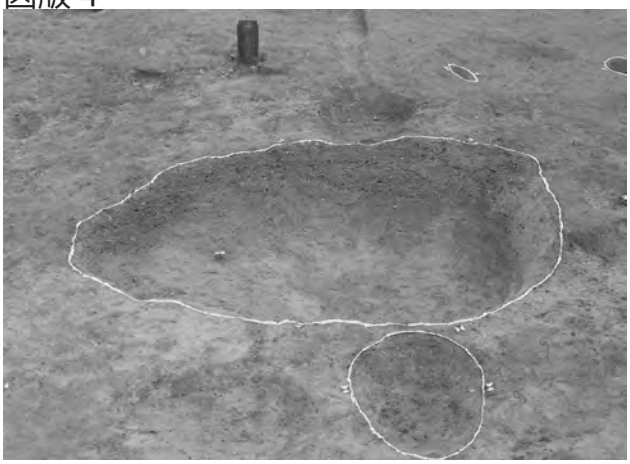
１．４層上面　１区全景（西から）

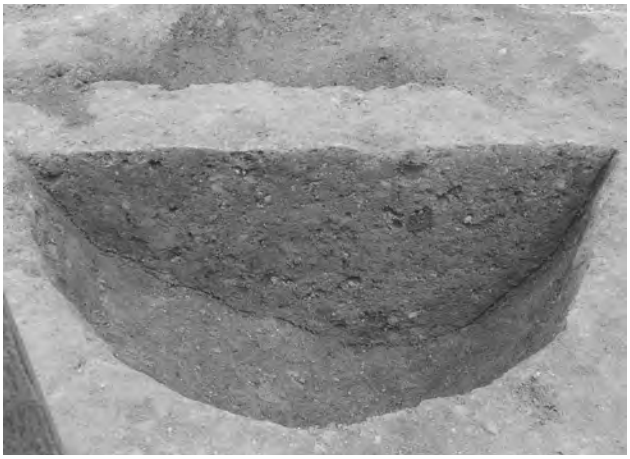
２．４層上面　１区全景（北東から）

１．４層上面　２区全景（北から）

２．４層上面　２区全景（西から）

図版４



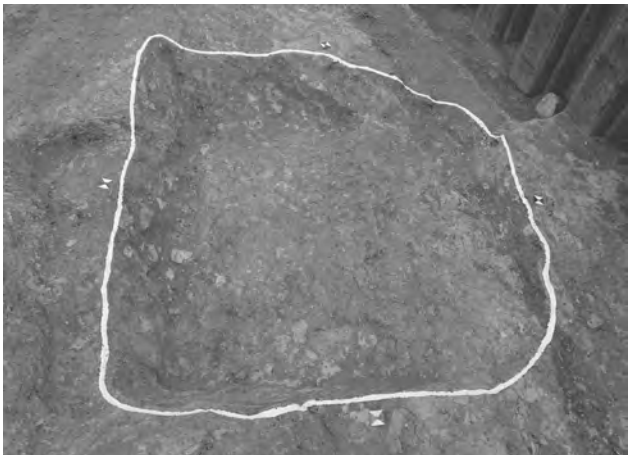


１．４層上面　１区 30 土坑（南から）

２．４層上面　１区 30 土坑断面（西から）

３．４層上面　１区 27 土坑断面（西から）

４．４層上面　１区 42 土坑断面（南から）



５．４層上面　２区 1004 土坑（南から）

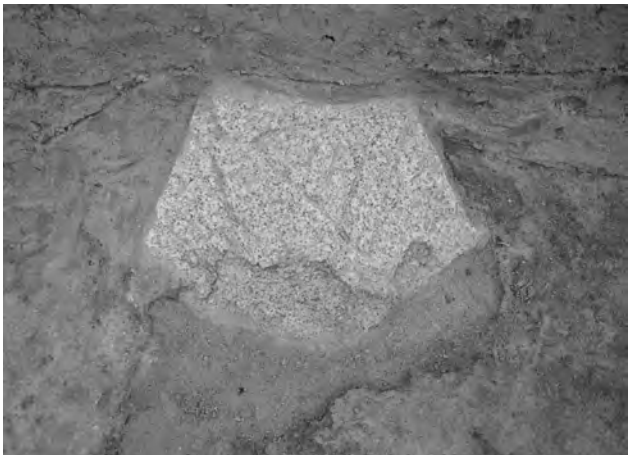
６．４層上面　２区 1005 土坑（東から）

７．４層上面　２区 1008 土坑（南から）

８．４層上面　２区 1012 土坑（南東から）

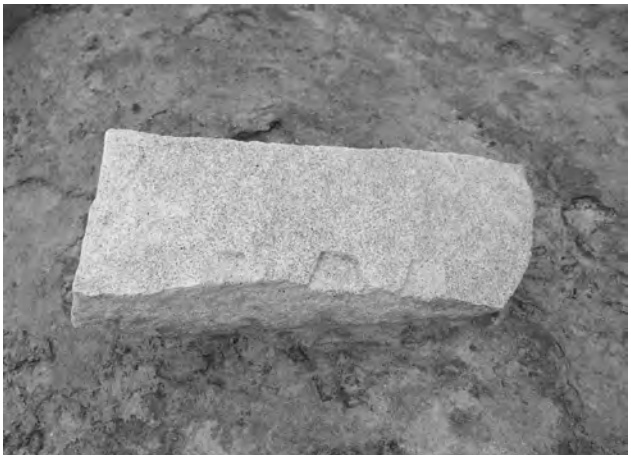
1．4 層上面　1 区 46 堀断面（東から）

2．4 層上面　1 区 46 堀出土残石 1（北から）



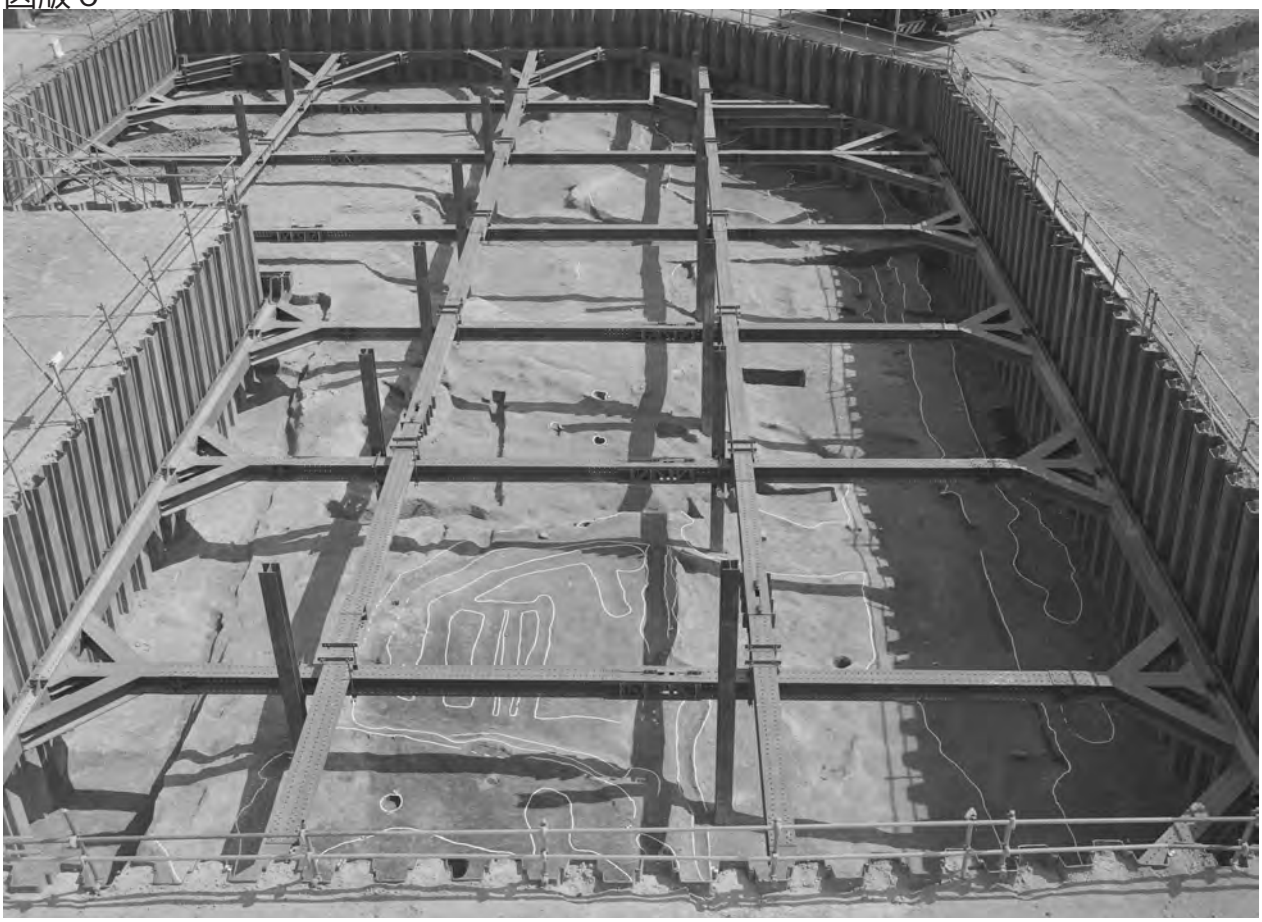
3．4 層上面　1 区 46 堀出土残石 2（東から）

4．4 層上面　1 区 46 堀出土残石 3（南西から）

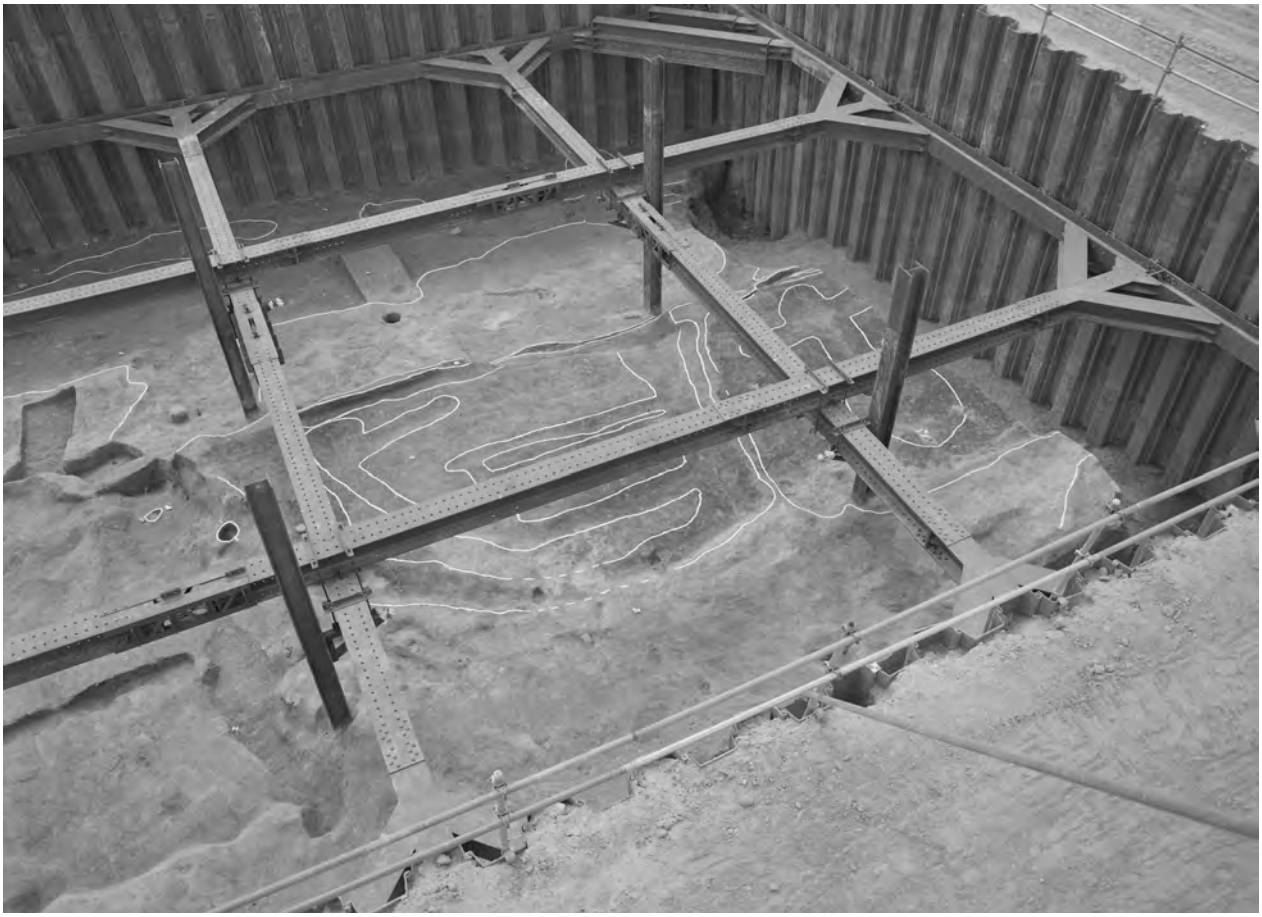


5．4 層上面　1 区 46 堀出土残石 4（北西から）

図版６



１．6a 層上面　全景（西から）



２．6a 層上面　畠跡（北東から）

１．6a 層上面　64 畦畔
状高まり　（西から）

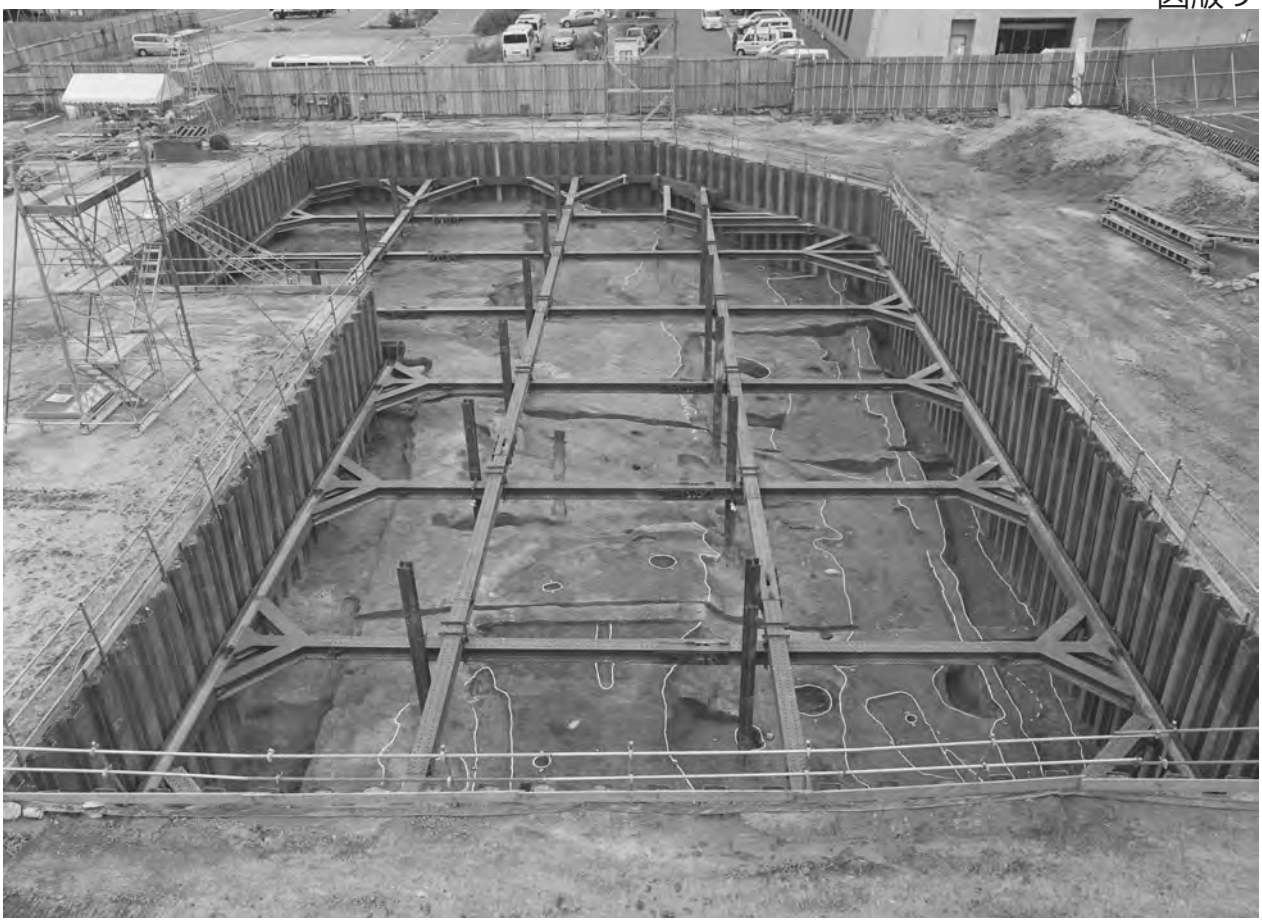
２．6a 層上面　畠跡
（南から）

３．6a 層上面　調査区東半部
（北東から）

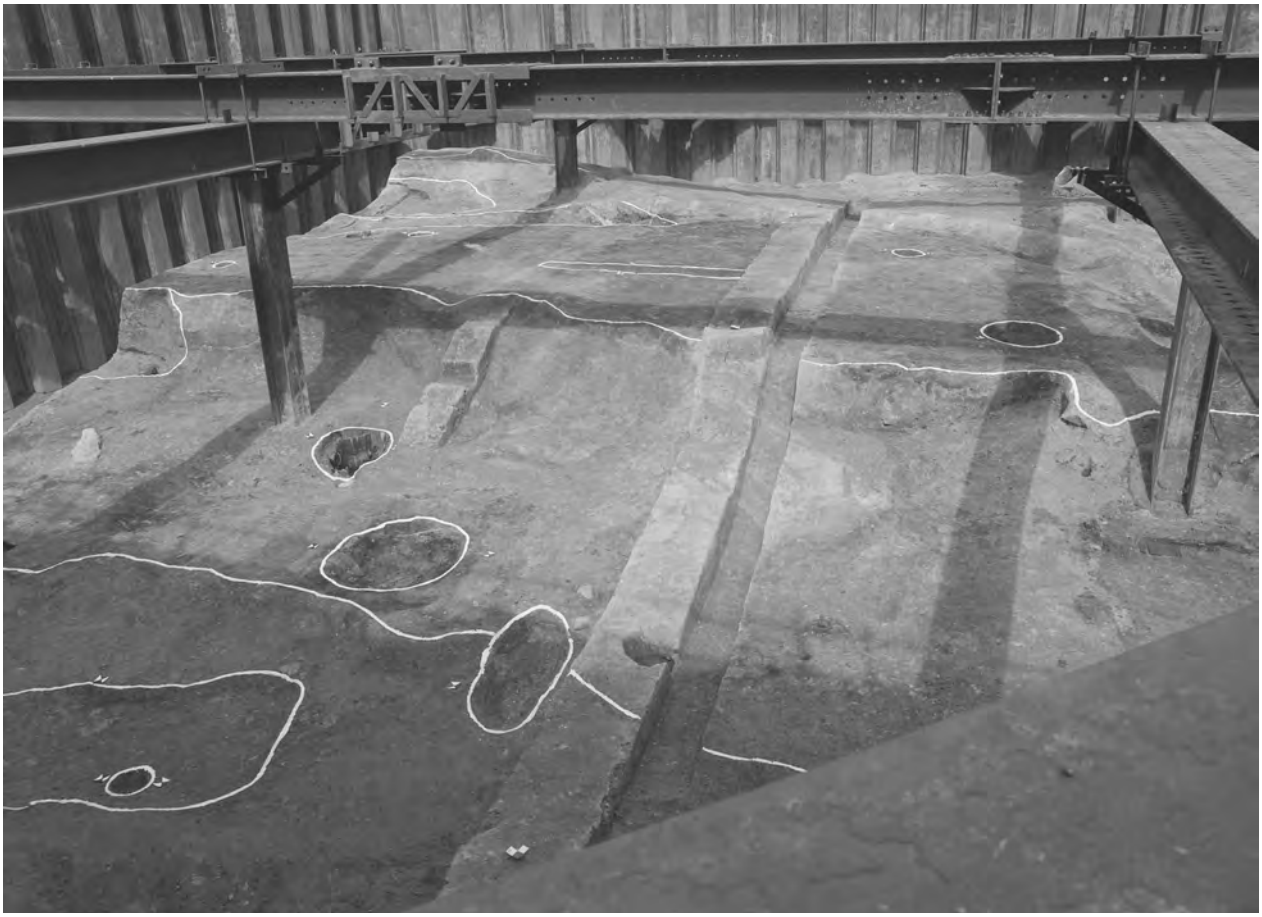
図版８

１．6a 層上面　61 竹敷き（西から）

２．6a 層上面　61 竹敷き（北から）

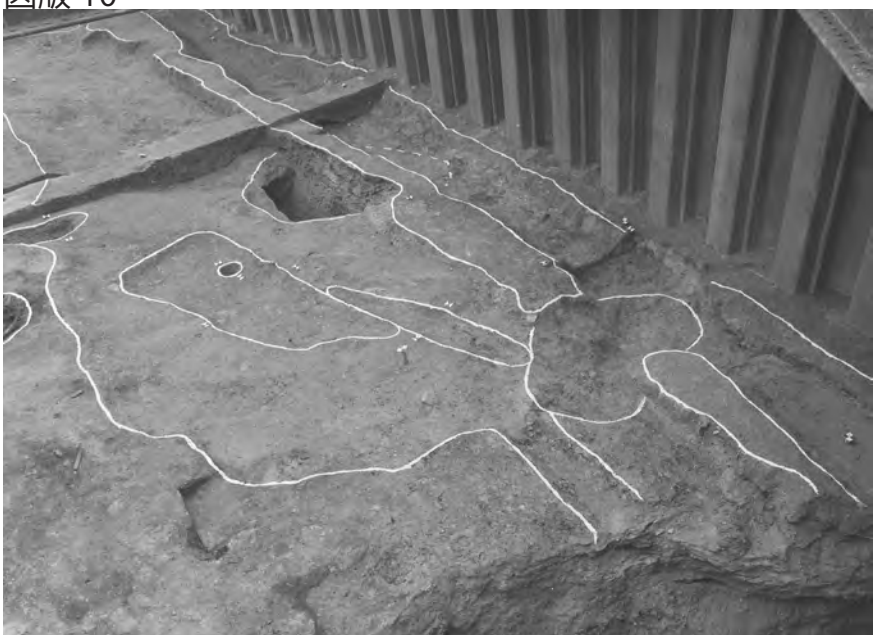


１．6b 層上面　全景（西から）



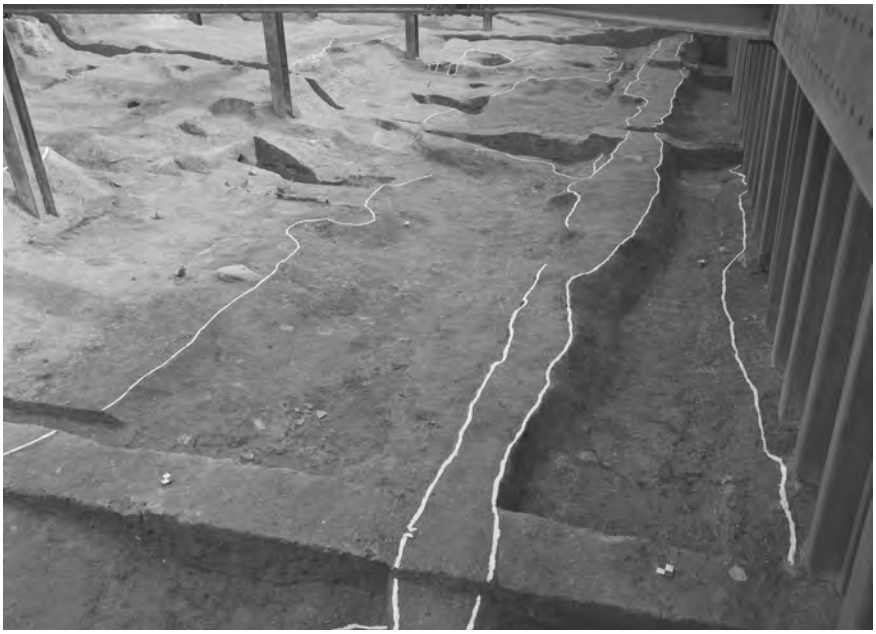
２．6b 層上面　調査区西半部（南から）

図版 10



1．6b 層上面　調査区南西部
（北西から）

2．6b 層上面　調査区中央部
（南西から）



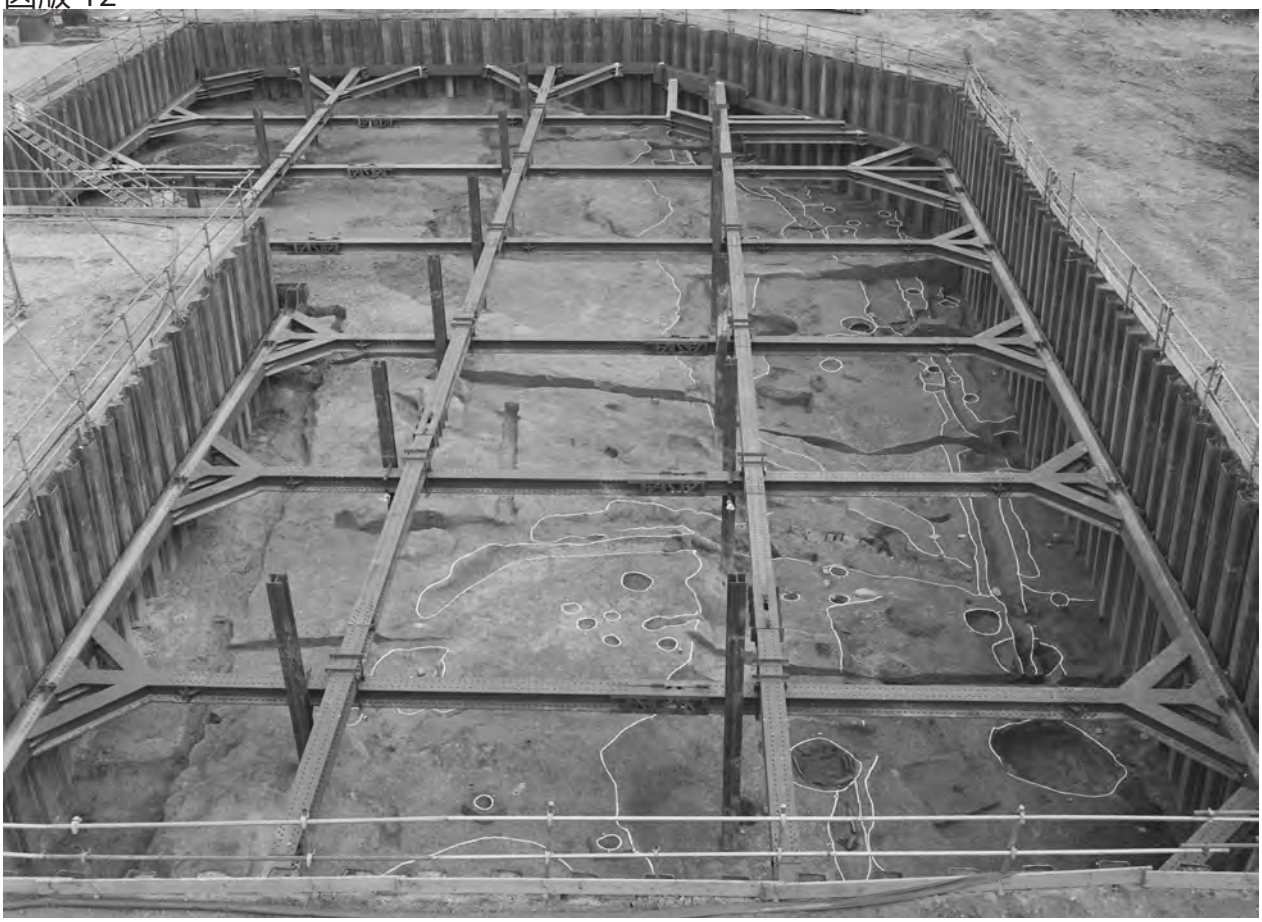
3．6b 層上面
68 溝、64・102 畦畔状高まり
（西から）

1．6b 層上面　69 土坑
（南西から）

2．6b 層上面　85 井戸
（南から）

3．6b 層上面　93 ピット断面
（北から）

図版 12



1．7層上面　全景（西から）

2．7層上面　全景（東から）

1．7層上面　整地面
（北西から）

2．7層上面　被熱した 175 礎石
（南西から）

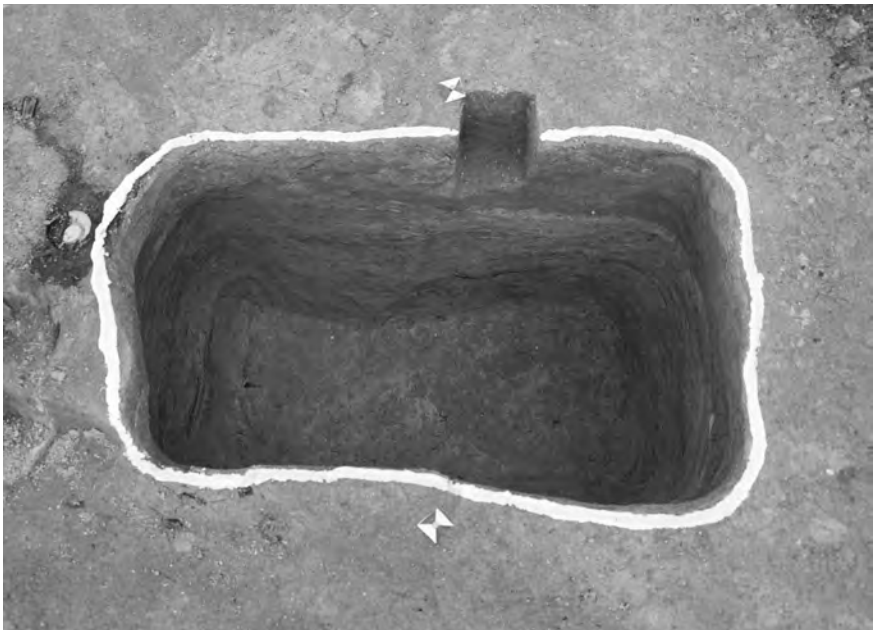
3．7層上面　148 埋甕検出状況
（北から）

4．7層上面　148 埋甕
口縁部アップ（東から）

5．7層上面　148 埋甕（北から）

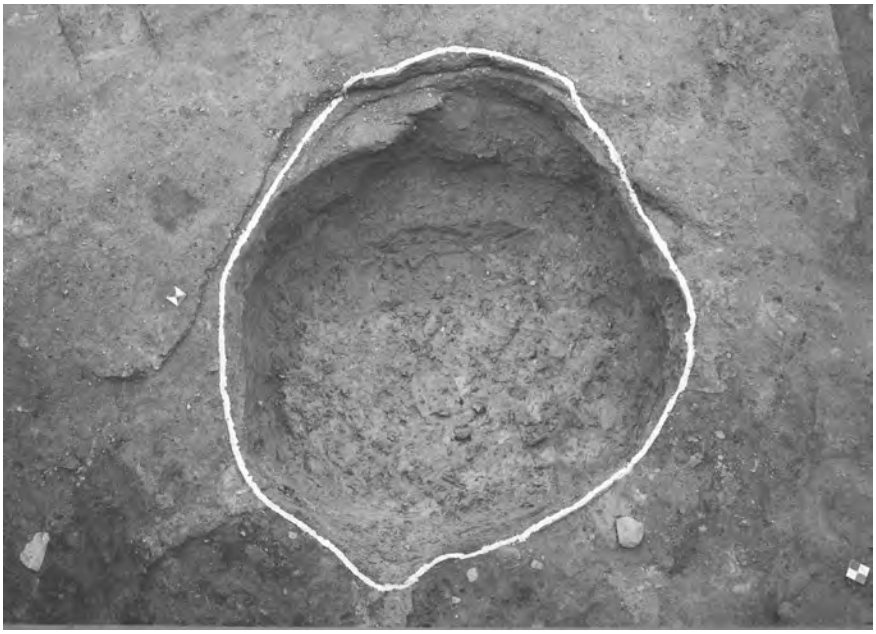
図版 14

1．7 層上面　柵列 1（北西から）



2．7 層上面　153 土坑（西から）

3．7 層上面　153 土坑断面
（南から）



4．7 層上面　89 井戸（南から）

1．7層上面　105 井戸（南から）

2．7層上面　105 井戸断面（北から）

3．7層上面　171 井戸（南西から）

4．7層上面　172 井戸（南から）

5．7層上面　172 井戸断面（北から）

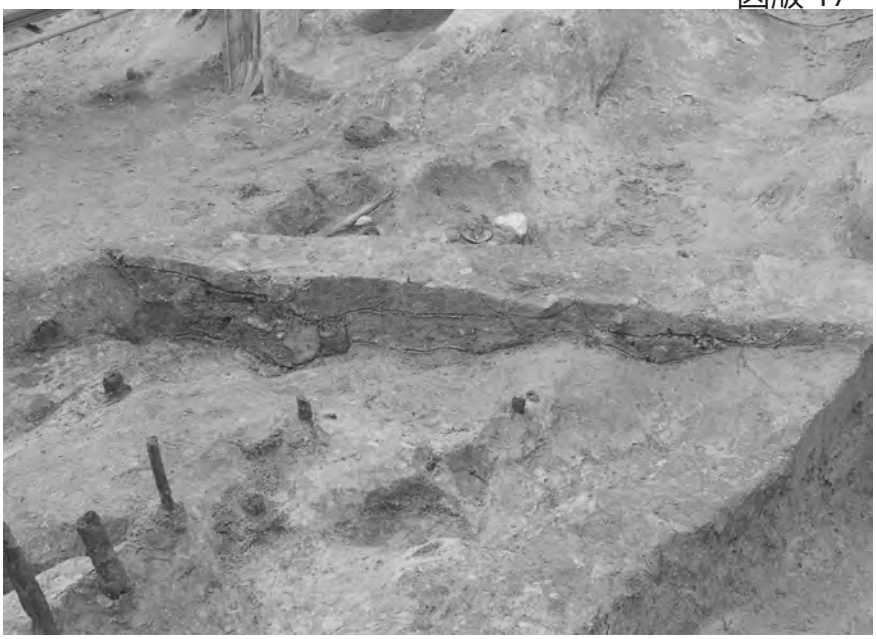
図版 16

1．7 層上面　104 炉（西から）

2．7 層上面　166・178 溝、
179・180 畦畔状高まり
（東から）

3．7 層上面
178 溝、179 畦畔状高まり断面
（東から）

4．7 層上面　169 石列（西から）



1．7層上面　137 溝（南から）

2．7層上面　137 溝出土遺物（北西から）

3．7層上面　136 落込み（西から）

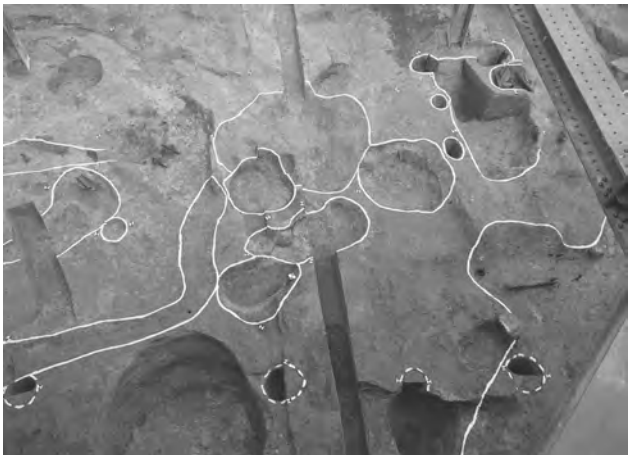
4．7層上面　136 落込み 331 舟形木製品出土状況（南から）

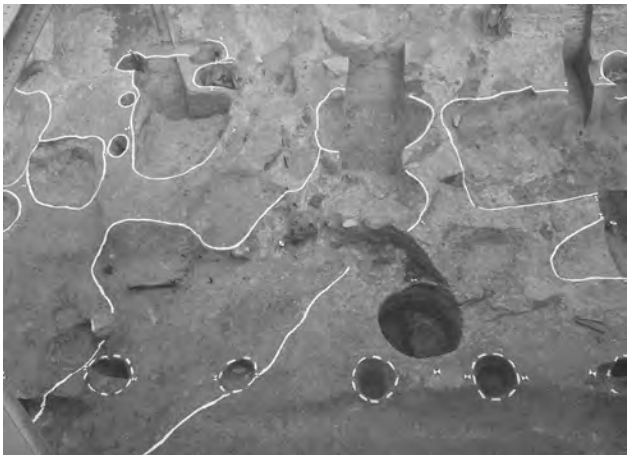
5．7層上面　168 溝断面（東から）

6．7層　344 笄出土状況（東から）

図版 18

1．8a 層上面　全景（西から）



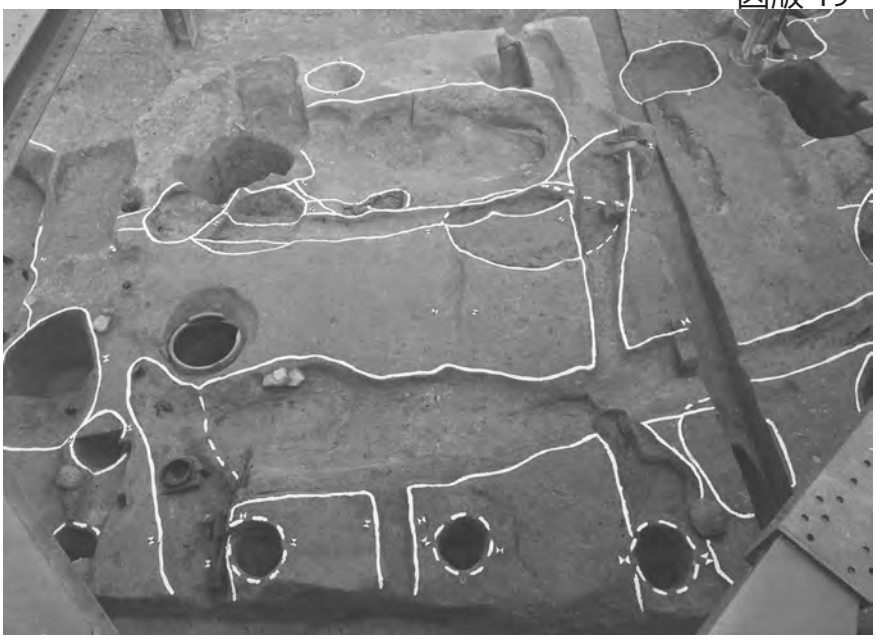


2．8a 層上面　調査区南西部（西から）

3．8a 層上面　調査区西部（南から）

4．8a 層上面　216 溝（南から）

5．8a 層上面　214 土坑（南から）



1．8a 層上面　調査区中央部
（南から）

2．8a 層上面　調査区東部
（南から）

3．8a 層上面　調査区東南部
（北から）

図版 20

1．8a 層上面　239 土坑断面（北西から）

2．8a 層上面　240 土坑断面（東から）

3．8a 層上面　213 土坑断面（南から）

4．8a 層上面　237 土坑断面（西から）

5．8a 層上面　246 土坑断面（西から）

6．8a 層上面　256 土坑断面（東から）

7．8a 層上面　273 土坑（東から）

8．8a 層上面　234 土坑断面（北から）

1．8a 層上面　214 土坑（南から）

2．8a 層上面　292 暗渠（導水施設２）（北から）

3．8a 層上面　238 土坑（南東から）

4．8a 層上面　221 土坑（南東から）

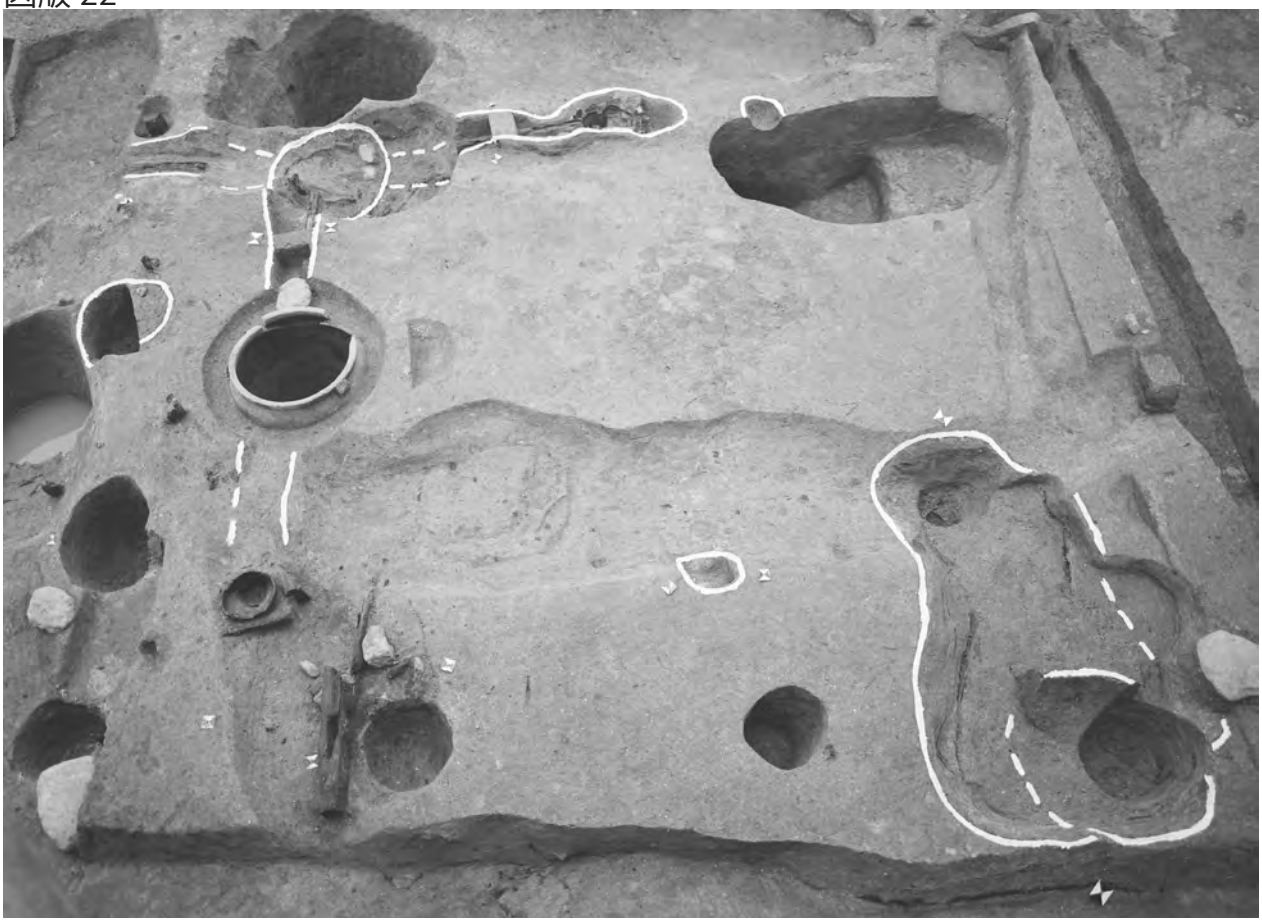
5．8a 層上面　212 土坑（北から）

6．8a 層上面　220 溝（西から）

7．8a 層上面　232 溝（南から）

8．8a 層上面　252 暗渠（導水施設１）（北西から）

図版 22



1．8b 層上面　全景（南から）

2．8b 層上面　274 埋桶（導水施設３）（西から）

3．8b 層上面　281 埋桶（導水施設３）（東から）

4．8b 層上面　291 埋桶（導水施設３）（北から）

5．8b 層上面　275 暗渠（導水施設３）（西から）

1．8c 層上面　礎石群出土状況
（南西から）

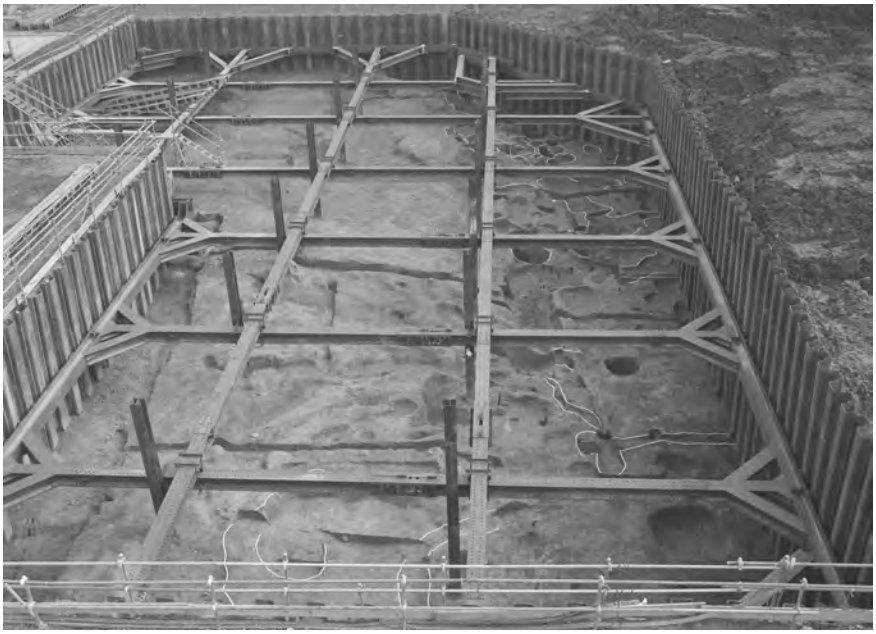
2．8c 層上面　全景（西から）

3．8d 層上面　全景（西から）

図版 24

1．8e 層上面　全景（西から）

2．8e 層上面　321 ピット断面
（東から）



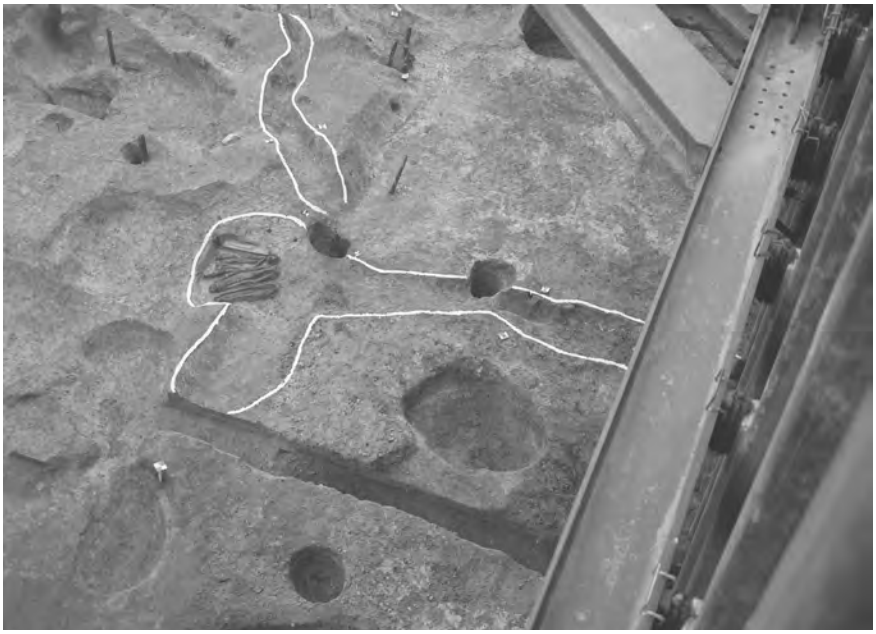
3．8f 層上面　全景（西から）

4．8f 層上面　調査区東半部
（西から）

1．8f 層上面　調査区東半部
土坑群（南西から）

2．8f 層上面　327 溝（南から）

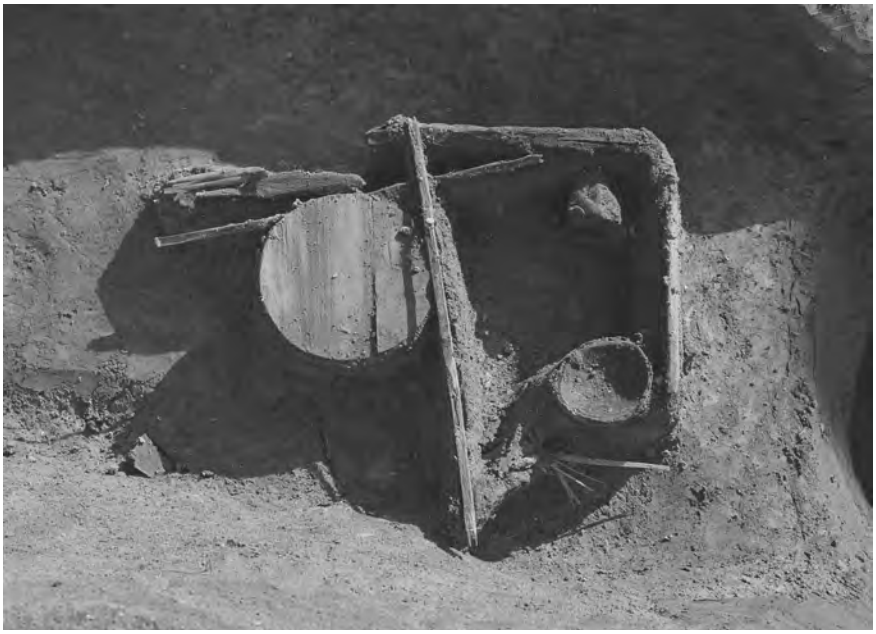
3．8f 層上面　327 溝
遺物出土状況（東から）



4．8f 層上面　調査区西半部
（南西から）

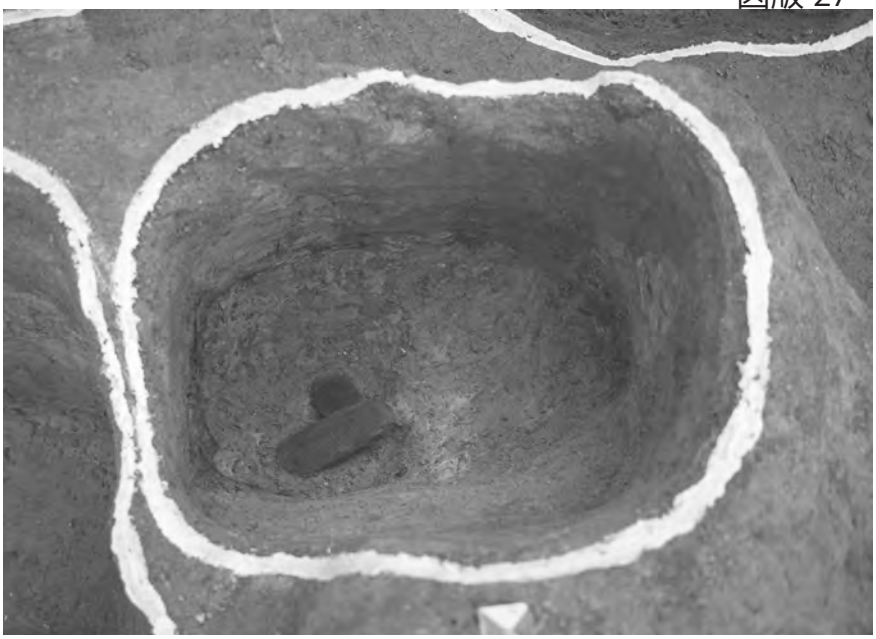
図版 26

1．8f 層上面　282 土坑（東から）



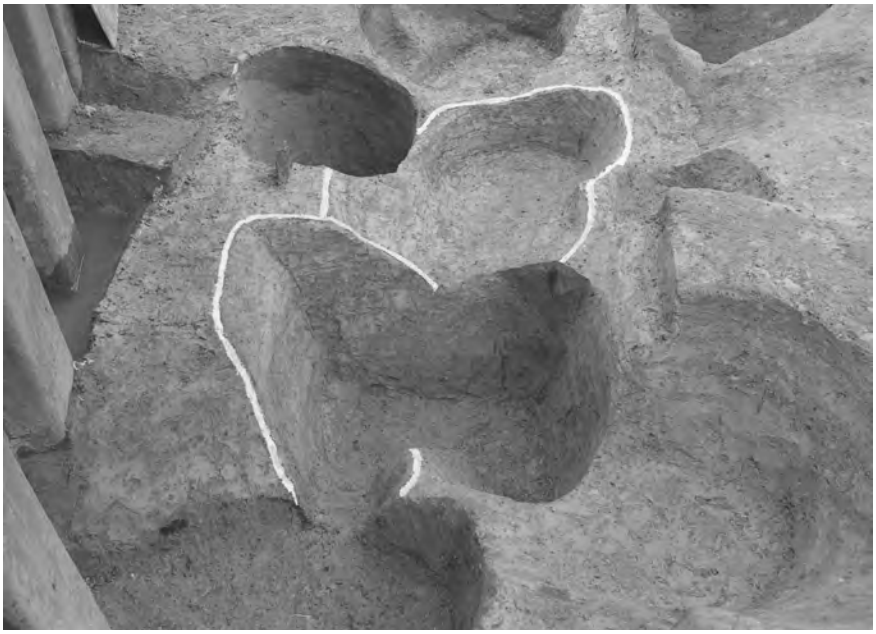
2．8f 層上面
282 土坑西半部遺物出土状況
（南から）

3．8f 層上面
282 土坑東半部遺物出土状況
（南から）



1．8f 層上面　293 土坑（北から）

2．8f 層上面　304 土坑（東から）



3．8f 層上面　319 土坑（東から）

図版 28

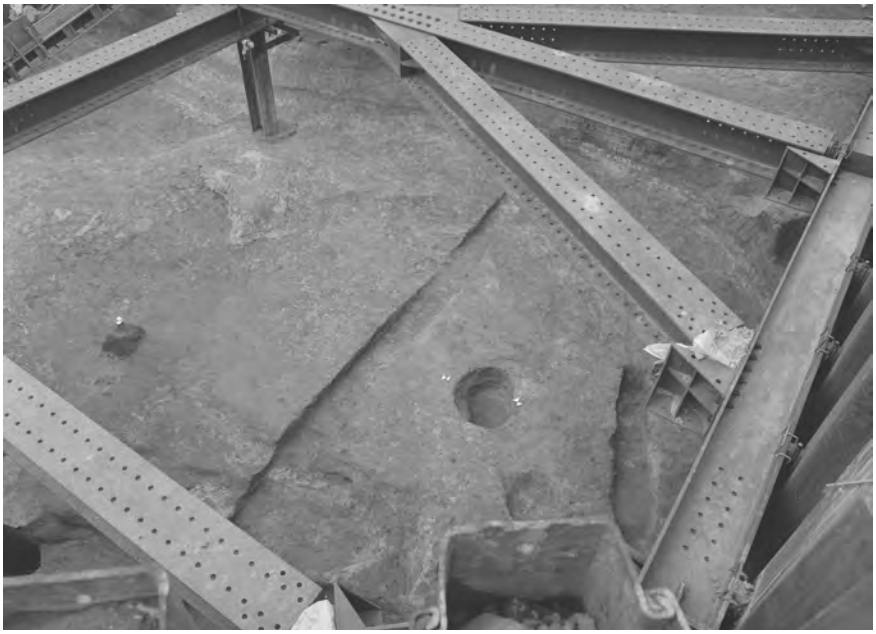
1．8f 層上面　300 土坑（南西から）

2．8f 層上面　320・328 土坑断面
（東から）

3．8f 層上面
320 土坑出土漆器椀（451）
（北西から）

1．8f 層上面　286 溝（西から）

2．8f 層上面　286 溝
470 舟形木製品出土状況
（南から）

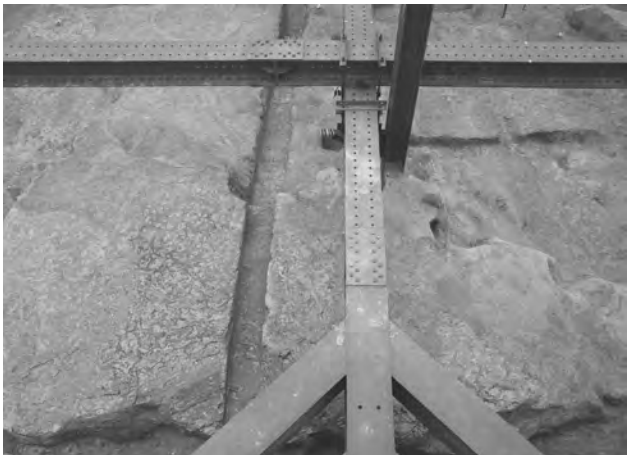


3．8g 層上面　全景（南東から）

4．8h 層上面　全景（西から）

図版 30

1．9層上面　全景（西から）

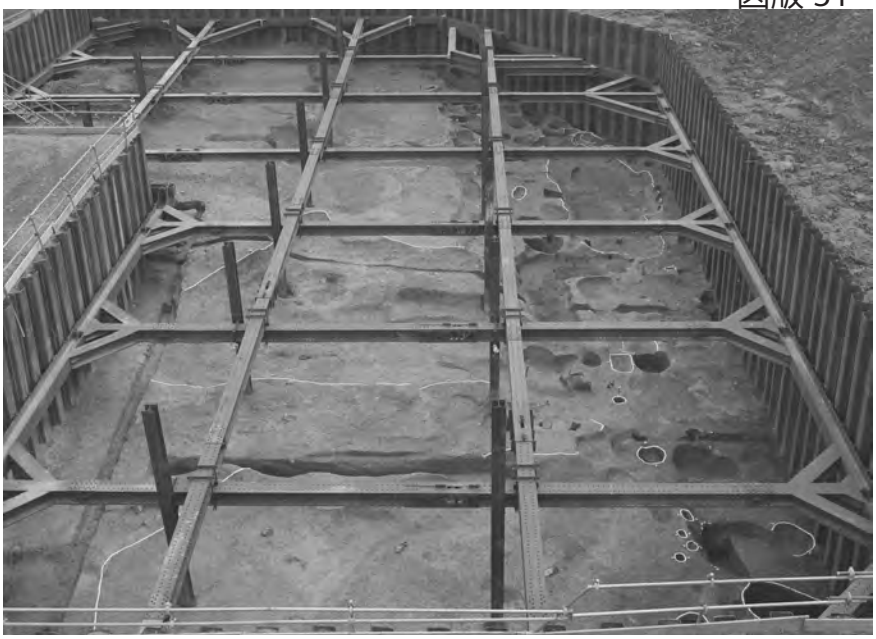


2．9層上面　地滑り痕跡検出状況（北から）

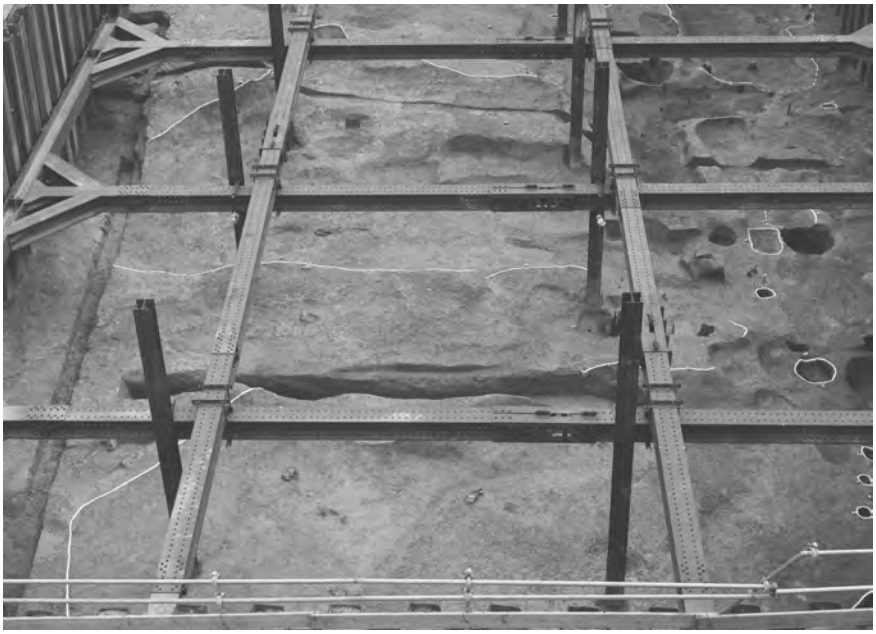
3．9層上面　地滑り痕跡検出状況アップ（北から）

4．9層～ 11 層断面　調査区西壁（西から）

5．9 ～ 11 層断面　Y=-44,050 ライン（北東から）



1．11 層上面　全景（西から）



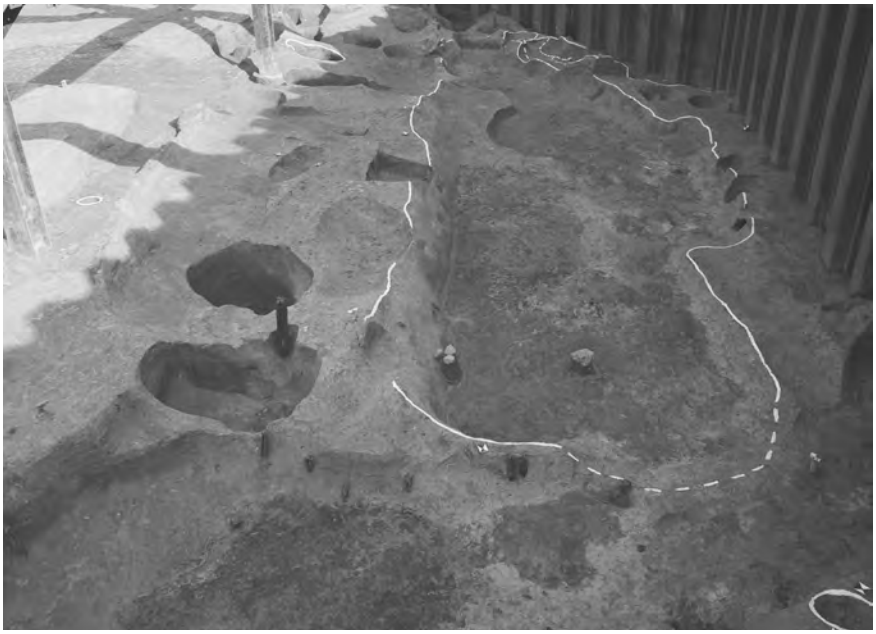
2．11 層上面　調査区北西部
（西から）

3．11 層上面　調査区南東部
（西から）

4．11 層上面　372 板杭（北から）

図版 32

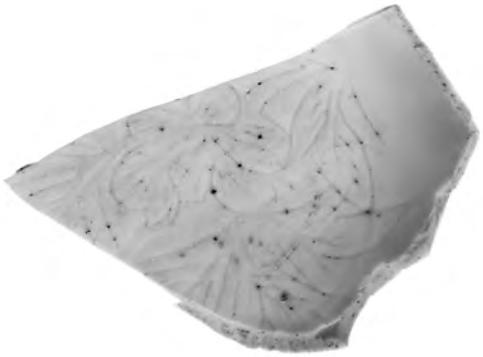
1．11 層上面　調査区南西部
（東から）



2．11 層上面　359 土坑（西から）

3．11 層上面　363 土坑（北から）
4．11 層上面　363 土坑
481 皿出土状況（北から）

図版 33　出土遺物　４層上面



4

52

31

53

29

102

32

115

112

図版 34　出土遺物　４層上面

154

8

8'

7

7'

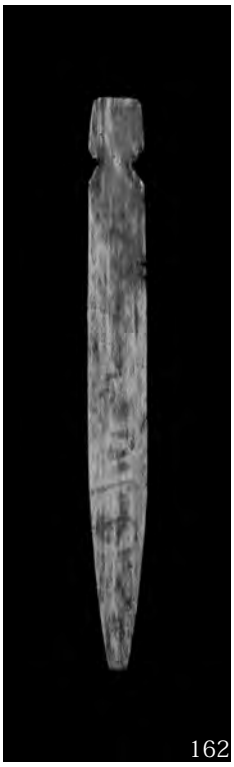
14

17

168　172　173　174

171　169　170

図版 35　出土遺物　4 層・6a 層上面・6a 層・6b 層上面


162

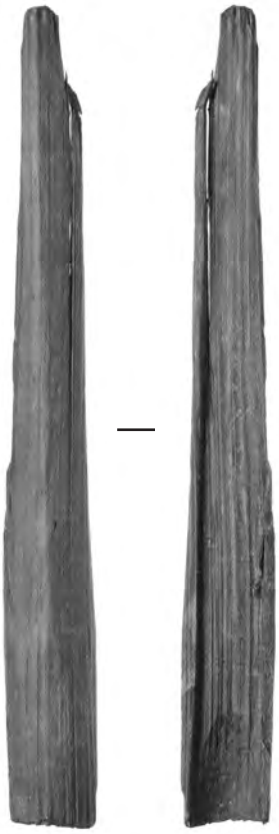
165

167

206

184

494


201

235

198

図版 36　出土遺物　6b 層・7 層上面

234

237

236

233

247

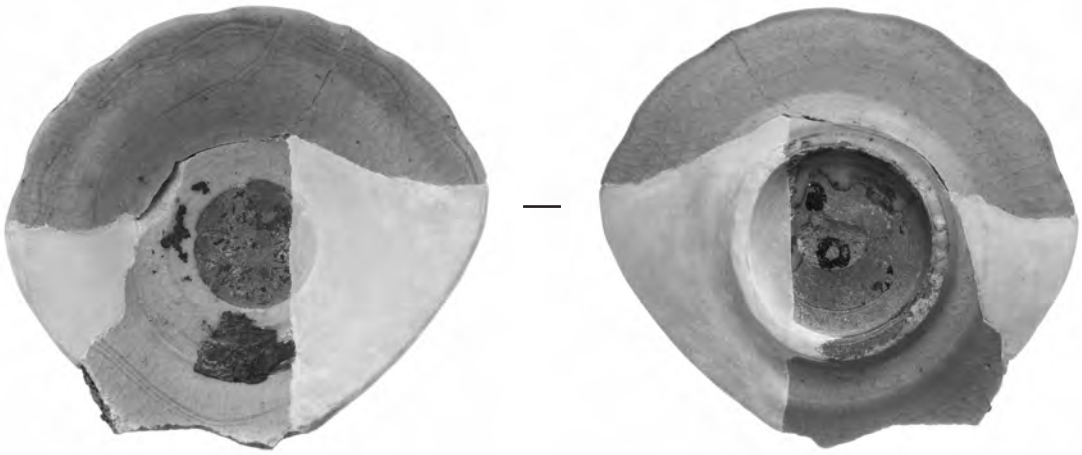
283

241

296

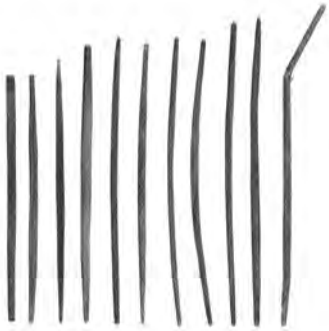
298

348



282

336



267　269　271　273　275　279
268　270　272　274　276

262

258

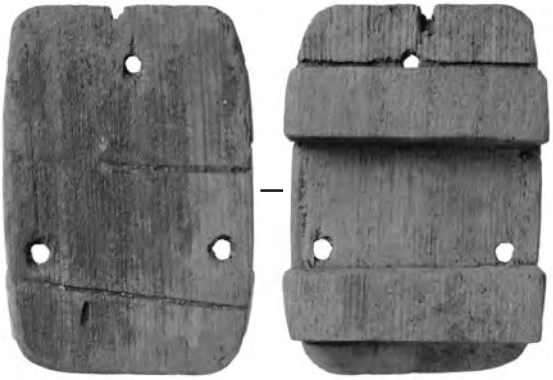
図版 38　出土遺物　７層上面

349

308

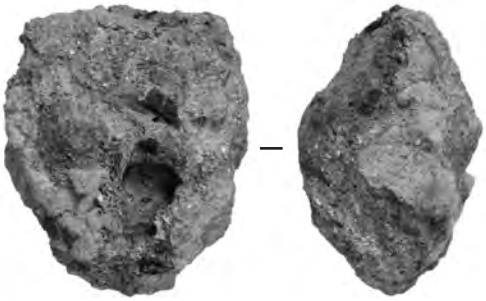
306

310



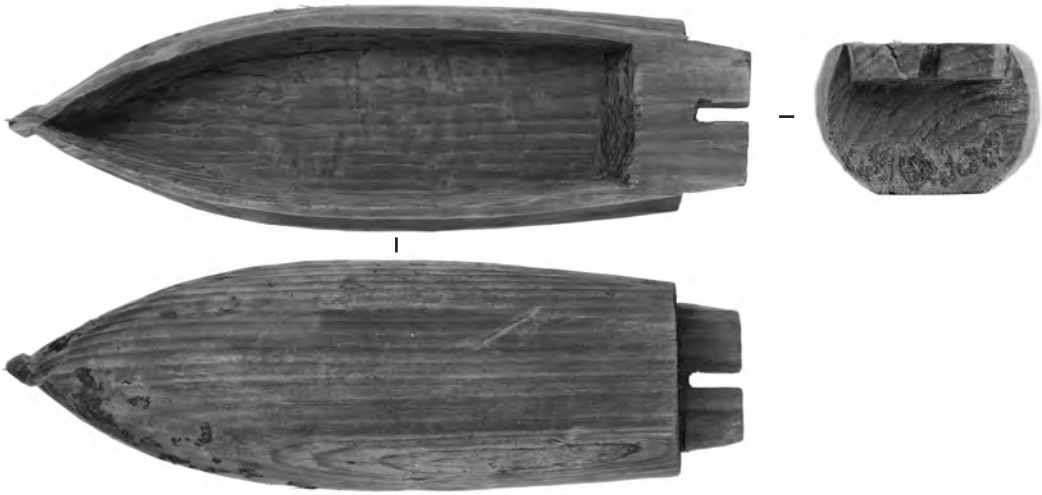
322

309



324

311

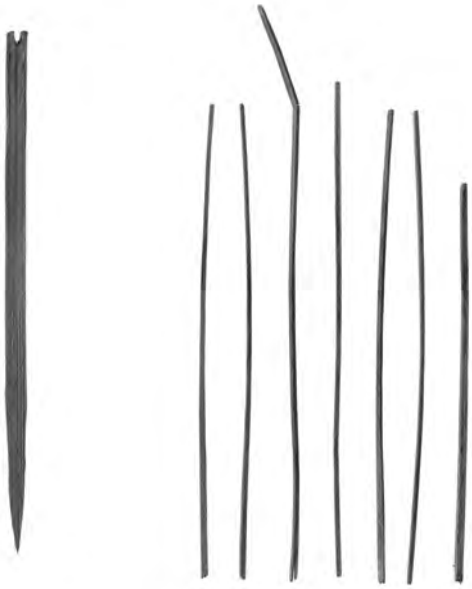


331

344

335

359

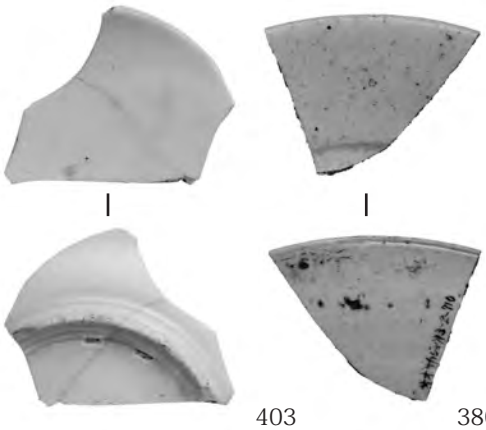


347　257

362

410

343

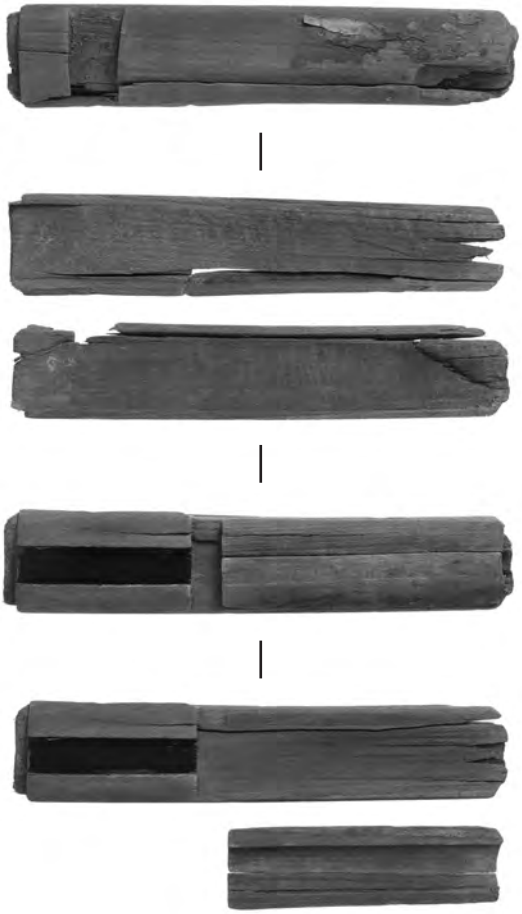


403　380

360

図版 40　出土遺物　8a 層上面・8b 層上面・8f 層上面

383



396

426

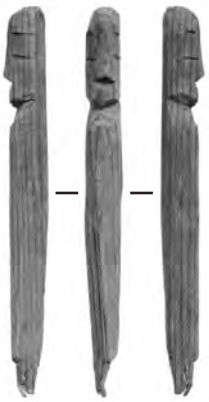
396'

401

422

366

400



429

434

452

図版 41　出土遺物　8f 層上面

441

442

443

454

450

453

464

461

465

468

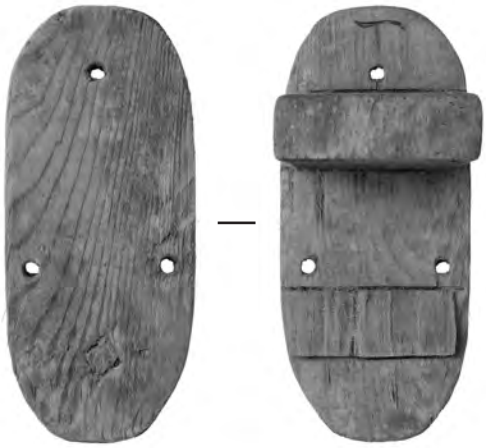
470

図版 42　出土遺物　8f 層上面・8g 層・11 層上面

471

449

448



473

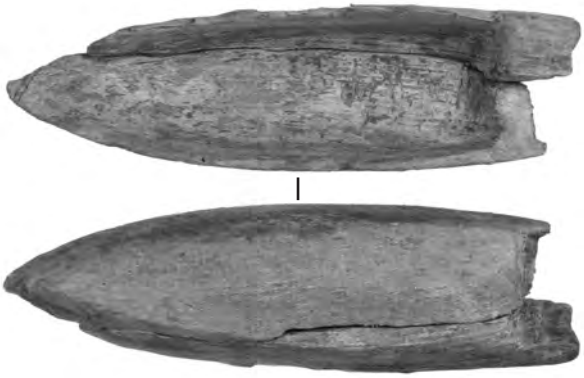
481

486

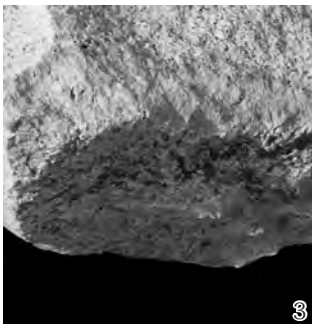
474

485

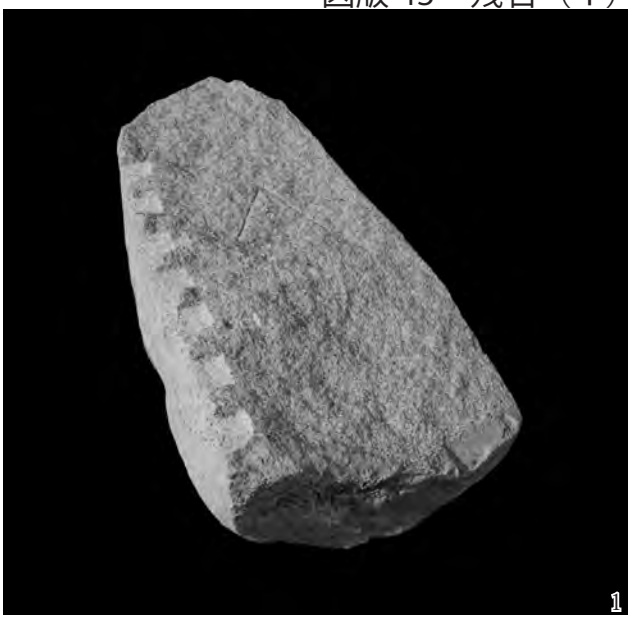
493

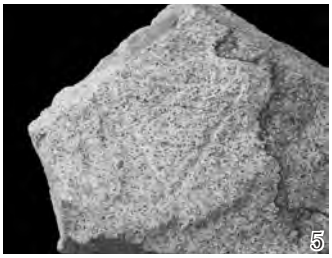


467



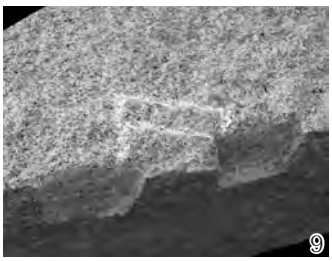
1．残石１
2．刻印１－①
3．刻印１－②



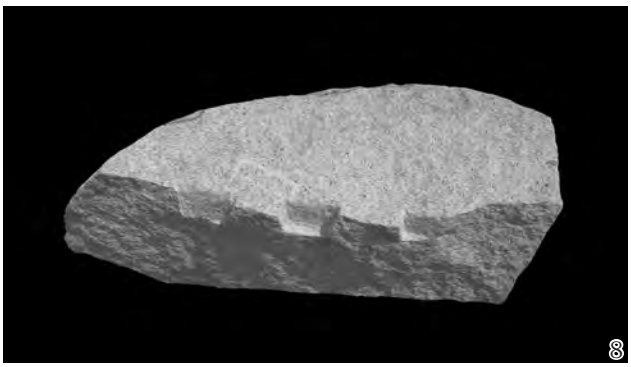


4．残石２
5．刻印２－①

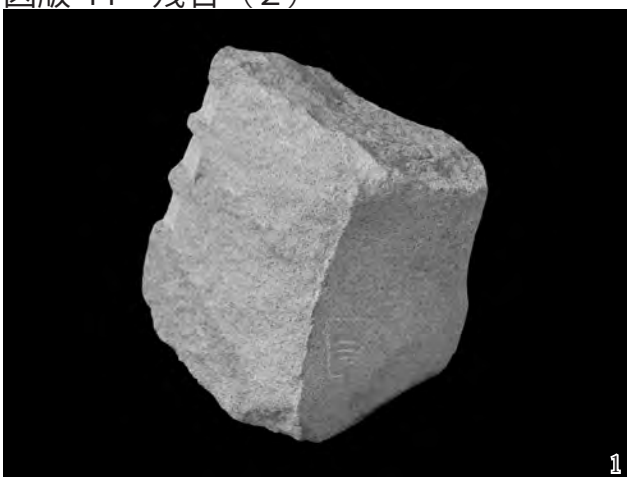
6．残石３
7．刻印３－①

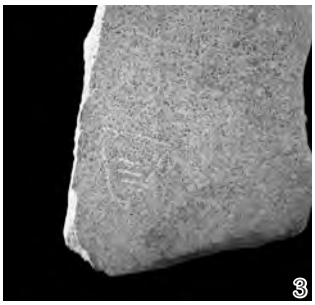


8．残石４
9．刻印４－①

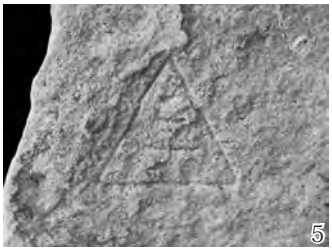


図版 44　残石（2）

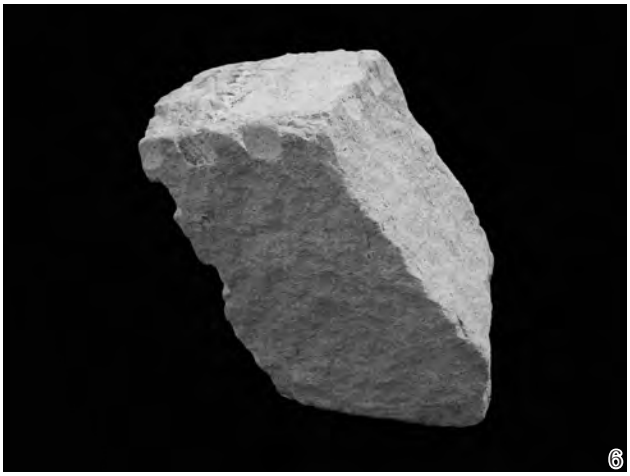




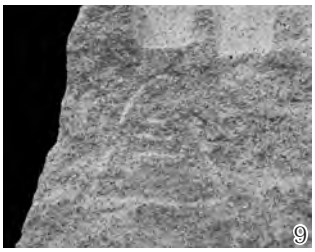
1．残石５
2．刻印５－①
3．刻印５－②

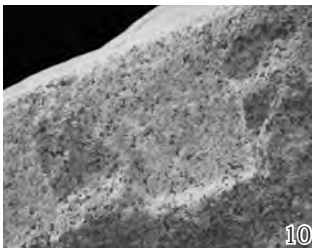


4．残石６－１
5．残石６－①

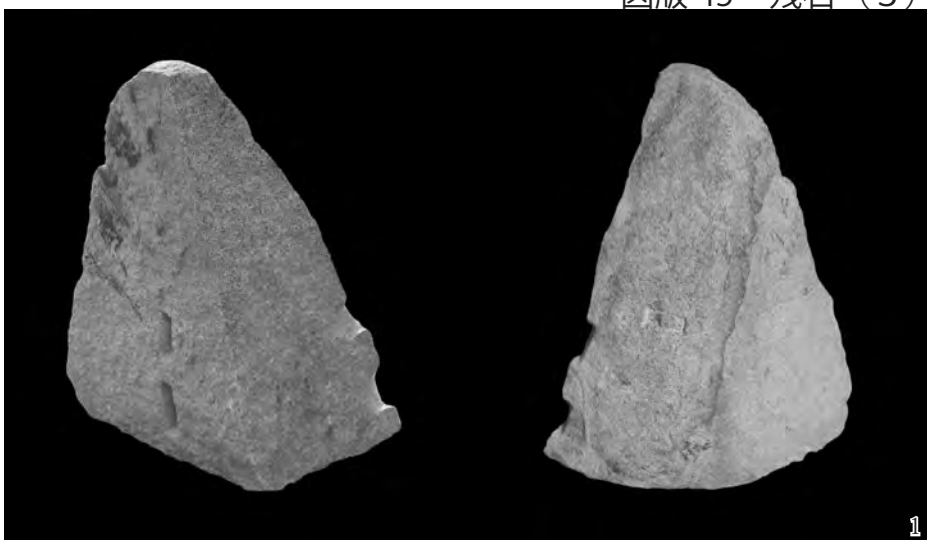


6．刻印６－２
7．刻印６－②

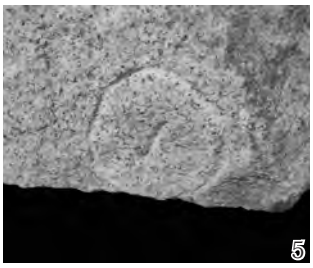




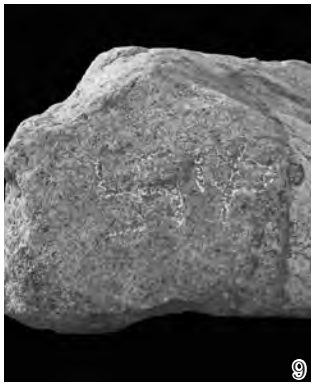
8．残石７
9．刻印７－①
10．墨書「口」



1．残石８
2．刻印８－①

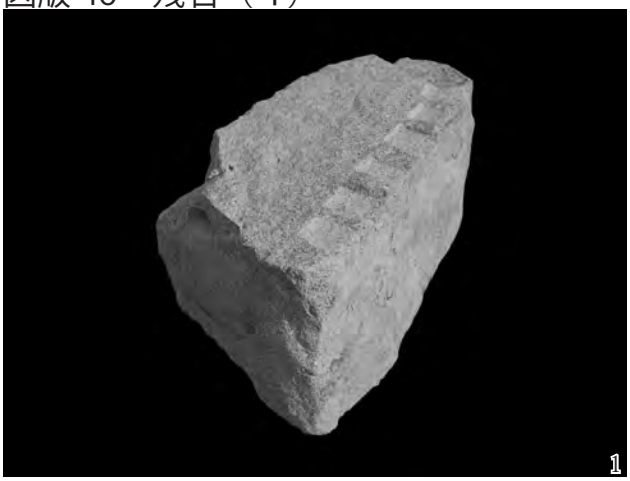


3．残石９
4．刻印９－①
5．刻印９－②



6．残石 10
7．刻印 10 －③・④
8．刻印 10 －①
9．刻印 10 －②

図版 46　残石（4）



1．残石 11

2．刻印 11 －①

3．残石 13

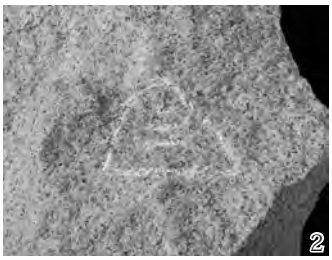
4．刻印 13 －①

5．残石 17

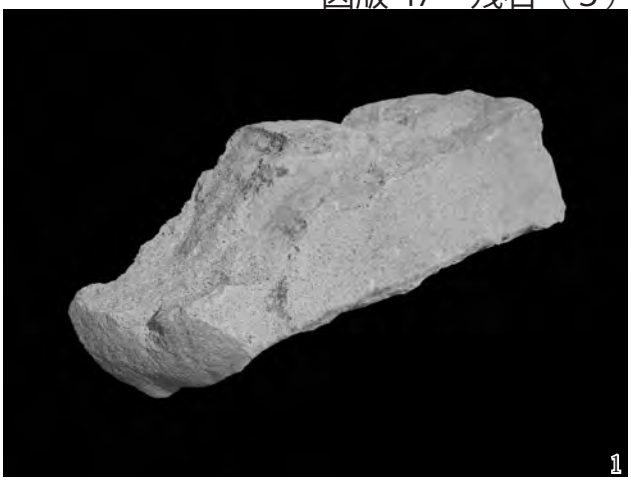
6．刻印 17 －①

7．残石 18

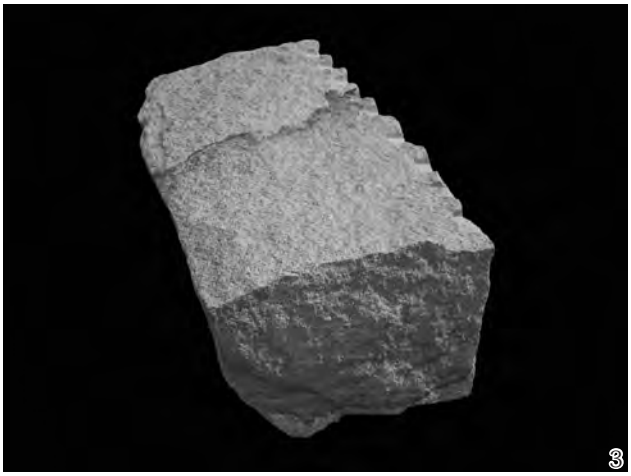
8．刻印 18 －①

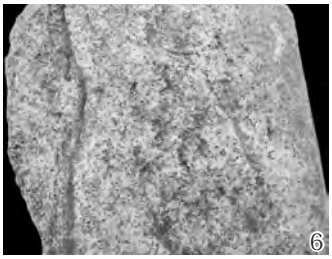


1．残石 21
2．刻印 21 －①



3．残石 22
4．刻印 22 －①

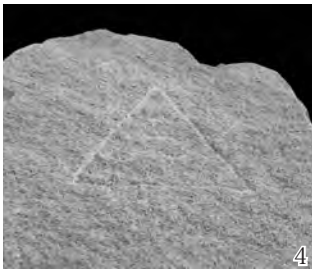


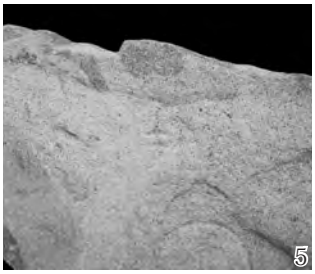


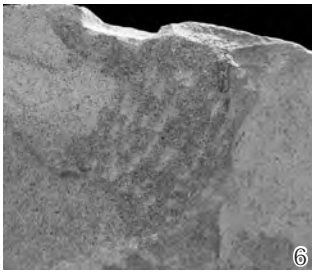
5．残石 23
6．刻印 23 －①

7．残石 20・25
8．刻印 20 －①

図版 48　残石（6）







1．残石 24 －1　2．残石 24 －2　3．刻印 24 －②　4．刻印 24 －①　5．刻印 24 －③　6．残石 24　鑿痕跡

7．残石 12

8．残石 14

9．残石 15

10．残石 16

11．残石 19

12．残石 26

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおさかじょうあと４
書名	大 坂 城 跡 4
副書名	大阪府立成人病センター整備事業に伴う大坂城跡発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第253集
編著者名	後藤信義(編)　三好孝一・先山　徹ほか
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　　TEL072(299)8791
発行年月日	2015年１月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おおさかじょうあと 大坂城跡 なにわのみやあと 難波宮跡	おおさかふ おおさかし 大阪府大阪市 ちゅうおうくおおてまえ 中央区大手前 ３ちょうめ ちない ３丁目地内	27128	24 27	34° 41′ 05″	135° 31′ 10″	2013.7.1 ～ 2014.2.28	1622	大阪府立成人病センター整備事業

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
大坂城跡	城郭	安土・桃山時代	礎石・小穴・土坑 井戸・埋甕・溝	国産陶器・青花・青磁・白磁・土師質土器・瓦質土器・土製品・瓦・石製品・木製品・金属製品	豊臣前期の土取り穴や導水施設、豊臣後期の大名屋敷の北辺を示す柵列と整地面。
	城郭	江戸時代	小穴・土坑・溝・堀	近世陶磁器・土人形・瓦・木簡・木製品・銭貨	近世の廃棄土坑と堀、大坂城再築の際に切り出された石垣材の残石。

要　約

今回の調査地は大坂城三の丸跡にあたり、上町台地上と西に開口する開析谷の北辺部に位置する。豊臣前期の遺構面は開析谷の北辺部で粘土取り穴や、調査区の南に展開すると考えられる集落域に関連する導水施設を検出した。豊臣後期の遺構面では大名屋敷の北辺を示す柵列や、埋甕を伴う整地面を検出した。また、遺物は国産陶器や青花、青白磁をはじめ多数の土器や瓦、漆器椀や箸、下駄などの木製品、石製硯や石臼、さらに小刀柄や笄といった金属製品など多岐にわたる。

近世には、徳川氏による大坂城の再築が行われ、開析谷は完全に埋められて平坦面となり、調査地周辺は空閑地として利用されていたが、18 世紀後半に属する東西方向にはしる堀や、多量の陶磁器類が捨てられた土坑などを検出した。特筆すべき点として、堀の中から大坂城再築に伴い豊後国岡藩中川久盛によって集められた刻印石 19 点を含む石垣材の残石 26 点が、調査地周辺で保管された後、18 世紀後半に堀を埋め戻す際に廃棄されたことが挙げられる。

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 253 集

大坂城跡 4

大阪府立成人病センター整備事業に伴う
大坂城跡発掘調査報告書

発行年月日　/　2015 年 1 月 30 日

編集・発行　/　公益財団法人　大阪府文化財センター
〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号
印刷・製本　/　株式会社　中島弘文堂印刷所
〒537-0002　大阪市東成区深江南 2 丁目 6 番 8 号